平成八年六月二十日発行（第二号）恵迪寮同窓会

恵迪



第二号



◇札幌農学校から発した世界の土木技術者・広井　勇

◇私と恵迪寮＝寮歌をめぐって＝同期・同窓

◇特集　”阪神・淡路大震災“（現地ＯＢの報告）

◇創作「入れ歯―告知、尊厳死そして安楽死―」（七十枚）

◇恵迪寮生の生活と意見〔現寮生座談会〕



営業種目

◎原子力発電所工事
◎火力・水力発電所工事
◎産業機械据付工事
◎製罐・配管工事
◎建設機械整備・改造
◎水処理設備据付工事
◎昇降機・立体駐車設備工事
◎変電所工事
◎動力・制御・計装電気工事
◎一般電気工事

株式会社 繁富工務店

代表取締役会長　繁富一雄　(機械10期)
代表取締役社長　繁富文承　(機II修士1期 工博)
取締役副社長　繁富佳行　(機械44期 工博)

本社　札幌市中央区南12条西6丁目1番28号　☎札幌(011)代表511－3428
江別出張所　江別市緑町西3丁目10番6号　☎江別(011)382－2994
苫小牧出張所　苫小牧市字勇払157番地の2　☎苫小牧(0144)56－0711
旭川出張所　旭川市パルプ町505番地　☎旭川(0166)22－5434
岩内出張所　岩内郡岩内町字大浜40番地の5　☎岩内(0135)62－6784
札幌工場　札幌市西区発寒11条12丁目2番5号　☎札幌(011)661－3588
旭川工場　旭川市永山3条9丁目1番5号　☎旭川(0166)48－2660

魔神の呪（大正六年）

佐藤惣之助君作歌

一、魔神の呪アルペンの　白雪永久（とは）に清からず　見よ永劫と誓ひけん
平和の春は短くて　吹く凋落の秋風に　正義の光影くらし

二、されど儼然東洋に　その義と侠を胸にして　燦たる北斗北陲の
強と仰がれ誇矜（ほこ）りつゝ　自治を精神（いのち）の我が寮は　映華（はえ）ある歴史十二年

三、嗚呼北海の荒吹雪　白箭肩（はだ）を擘（うんざ）くも　胸の狂瀾青春の
血潮に如何で比す可ぞ　力の緒琴高鳴りて　紅燃ゆる悶えあり

四、殘陽西に茜（あかね）して　今日も暮れ行く手稻山　雲の五彩を眺めては
思は遠く渺茫の　彼の海を越え山を越え　雄圖千里ぞ驅り行く

五、平和の流れ豐平の　狹霞罩めたる朝ぼらけ　東し指して流れ行く
淙々の音を我聽けば　瀬々の河波聲（かはなみ）あげ　唱ふ「自由」の二字の曲

六、今宵楡影に團欒して　月影に酌む自治の宴　廻る盃夜も更けて
北斗傾く玻璃の窓　いざ我友よ熟睡（うまぬ）せん　明日は人生の旅なれば

※大正12年発刊の寮歌集より転写





恵迪

KEITEKI

第二号●目次

〔カラーグラビア〕『平成八年春・北海道大学』…写真・文…井口　光雄（昭和二十八年入寮）　7

寄稿『北大は今』…北海道大学総長…丹保　憲仁…16

■北大・恵迪・人脈■

札幌農学校から発した
世界の土木技術者・広井勇…高橋　陽一（昭和三十年入寮）…24

明治時代の畜産と恵迪寮の食卓…白井　俊三（昭和二十七年入寮）…28

木原均先生の研究をめぐって（Ⅱ）…辻山　昌佑（昭和二十六年入寮）…35

恵迪寮の野球部の先輩たち（その二）…河合　正恭（昭和九年入寮）…38

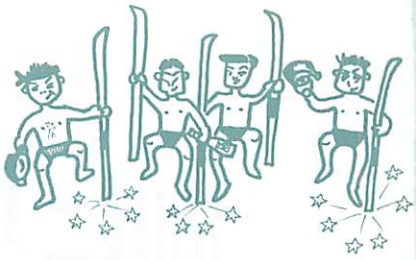
八郎伯父のこと…伊藤　雅夫（昭和十一年入寮）…45

天衣無縫　―河　晴彦氏、南西諸島沖にて特攻死す―…竹内　茂雄（昭和十九年入寮）…46

アラビア太郎さんはナンバーワンです…田村　甯弘（昭和二十九年入寮）…50

▼主張▲









現恵迪寮生の論理・倫理感について―最後の学生部長を務めて― 深澤 和三（昭和二十三年入寮）…19
私の主張「無駄使いをやめよう―世界に平和を！―」 小林 善樹（昭和二十七年入寮）…58

特集

阪神大震災を体験して

阪神・淡路大震災の教訓 吉野 生壮（昭和二十三年入寮）…82
阪神大震災のお見舞へのお礼 辻山 昌佑（昭和二十六年入寮）…87
小久保隆正（昭和二十六年入寮）…62

◆◆◆◆◆◆私と恵迪寮◆◆◆◆◆◆

老夫雑感 青田 義雄（昭和八年入寮）…92
私の想い出にある恵迪寮 高安 一郎（昭和十二年入寮）…94
寮生活を思い出すままに 肥田 昇（昭和十三年入寮）…98
寮生活落第生の回想 竹内伸太郎（昭和十五年入寮）…100
霜降の学生服 仲村 参郎（昭和十六年入寮）…103
寮生活の思い出 柴田松太郎（昭和十九年入寮）…104
第三十九回記念祭（旧生日記より） 中村 勝美（昭和二十年入寮）…106
雪虫 井上 祐司（昭和二十一年入寮）…108
恵水会の頃 高島 巖（昭和二十二年入寮）…109
恵迪の友情 田中 哲夫（昭和二十五年入寮）…112
一冊のノート 工藤 信彦（昭和二十五年入寮）…115
恵迪寮新制度に移りし頃 吉井 誠（昭和二十六年入寮）…116
北大―寮生活とラグビー部の四年間― 萩原 昇（昭和三十六年入寮）…120
「ぬぐう」ことなど 石村 義典（昭和四十年入寮）…124
新寮移行の頃―月寒学寮最後の一年― 佐々木欣也（昭和五十五年入寮）…125

湖に星の散るなり

どこまでも透明で
深い水
去にし日の若人の
心を抱く水
深淵のエメラルド・グリーンから
聞こえて来る　恵迪寮のうた



恵迪寮入寮同期会のお世話をした
実績を誇りにしています。

コープさっぽろ直営

支笏湖レイクサイドホテル

北海道千歳市支笏湖温泉
TEL 0123-25-2216

和食〈みやま〉22F

みやま

ご昼食 11:30AM～ 2:30PM
ご夕食 5:00AM～10:00PM

広大な北大キャンパスを見おろしながら、ご昼食から本格会席料理までお楽しみいただけます。



晴れた日には、遠く石狩の海を見渡す。

京王プラザホテル札幌
〒060 札幌市中央区北5条西7丁目
☎(011)271-0111(代)

自然主義水理学の先駆者が現代に甦る!
流水の科学者 岡崎文吉
浅田 英祖 著　菊判・13390円

森林を美的対象として観察した不朽の古典. 大正7年刊
森林美学[覆刻版]
新島 善直・村山 醸造 著　菊判・9785円

北海道が世界に誇るボタニカル・アートの最高峰
北海道主要樹木図譜[普及版]
宮部金吾・工藤祐舜著/須崎忠助画　B5判・4944円

寮歌のこころを壮大に歌い上げた決定盤をCD化!
CD 北大寮歌
水野 一・川越 守 校訂　2884円

広大なキャンパスに学び研究する全貌を映像で紹介
ビデオテープ **HOKKAIDO UNIVERSITY**
企画　北海道大学　VHS・27分・2884円

北大キャンパスを手描きの立体イラストでガイドする
北大マップ 絵で見る北海道大学
伊藤太郎・岩沢健蔵　A2判 和文・英文 各515円

(価格は税込)

北海道大学図書刊行会
札幌市北区北9条西8丁目 北大構内
☎011(747)2308・振替02730-1-17011

北大の四季
高嶋 英雄 著　北大の自然をこよなく愛する著者が、40年にわたり撮り続けてきた珠玉の写真集。四季それぞれに織りなす北大の美しさを50のシーンで紹介する。
AB判・二〇六〇円

北大構内スケッチ
八鍬 利郎 著　長らく黒百合会の顧問を務めた著者が描き続けてきた、北大キャンパスの風景・建物、そして植物園や今はなき旧学生寮等を集録した画文集。
A5判・一八五四円

北大歴史散歩
岩沢 健蔵 著　年老いた建物や樹々たちが過ぎた日々の出来事を囁き、地面や石塊の表には古い物語が彫られている—建物や史跡などを通じて語る北大の歴史。
四六判・一四四二円











【寮歌をめぐって】

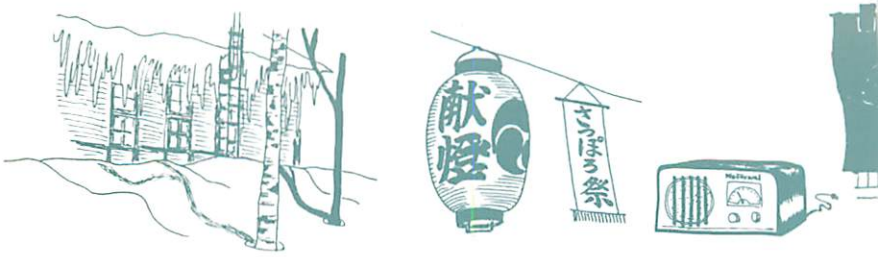
閉寮記念歌『別離の歌』はいつ作られたか …… 吉井　周雄（昭和八年入寮） 128
僕と寮歌 …… 村山　正郎（昭和十六年入寮） 130
寮歌随想二題 …… 水庭　久尚（昭和二十六年入寮） 132
記念館と寮歌と …… 河原　克美（昭和二十六年入寮） 134

同窓・同期交流

戦後五十年・援農先を訪ねて …… 中西　三郎（昭和十九年入寮） 146
恵迪寮々舎とお別れの火祭り …… 番場　猛夫（昭和十六年入寮） 153
昭和二十七年入寮組の一端 …… 村上　啓司（昭和二十七年入寮） 157
恵迪旧懐 …… 桜庭　慎吾（昭和三十一年入寮） 158
室蘭恵迪会 …… 芝垣　美男（昭和三十九年入寮） 160
長源院と第二東名（恵迪寮静岡同窓会有志の風流行事顛末） …… 加藤　秀弘（昭和四十六年入寮） 161

紀行・海外便り・ルポ

中国東北地方の旅 …… 繁富　一雄（昭和六年入寮） 170
チベット印象記 …… 高橋　邦臣（昭和二十八年入寮） 178
ニュージーランド便り …… 河内　洋佑（昭和二十七年入寮） 188
カンボジア国・三題 …… 大島　久（昭和二十四年入寮） 195
適塾―死霊の棲む所― …… 青山　和嗣（昭和二十六年入寮） 198



創作・エッセー・俳句

「瓔珞みがく」―インターネット― …… 神野　善司（昭和二十六年入寮） 200
延齢草 …… 徳尾　政治（昭和五年入寮） 204
始めよければすべて良し …… 中岡　章（昭和十年入寮） 207
俳句（肝癌再手術のため…） …… 鈴木　信夫（昭和十七年入寮） 145
俳句〝朝涼し〟 …… 小沢　久弥（昭和十七年入寮） 57
寮と私 …… 角幡　春雄（昭和十九年入寮） 210
恵迪館について …… 多田　邦雄（昭和二十年入寮） 214
「帝国軍艦咸臨丸乗組員」の写真 …… 佐山　峻（昭和二十五年入寮） 217
芥川賞女史からの宿題 …… 近藤　智雄（昭和二十九年入寮） 219
俳句〝スキー履き〟 …… 青木　秀夫（昭和二十八年入寮） 206
自作「男の金字塔」　ススキノ有線曲第二弾 …… 田中　信義（昭和三十二年入寮） 165
入れ歯（告知、尊厳死そして安楽死） …… 中瀬　篤信（昭和二十六年入寮） 221
『現寮生座談会』
恵迪寮生の生活と意見 …… 245
＝コンクリートの中からの青春讃歌＝
編集を終えて …… 258
題字　初代北大総長　佐藤昌介（明治九年入舎）■表紙・目次・扉・本文カット　河辺　傑（昭和二十八年入寮）

魔神の呪

は調 $\frac{2}{4}$

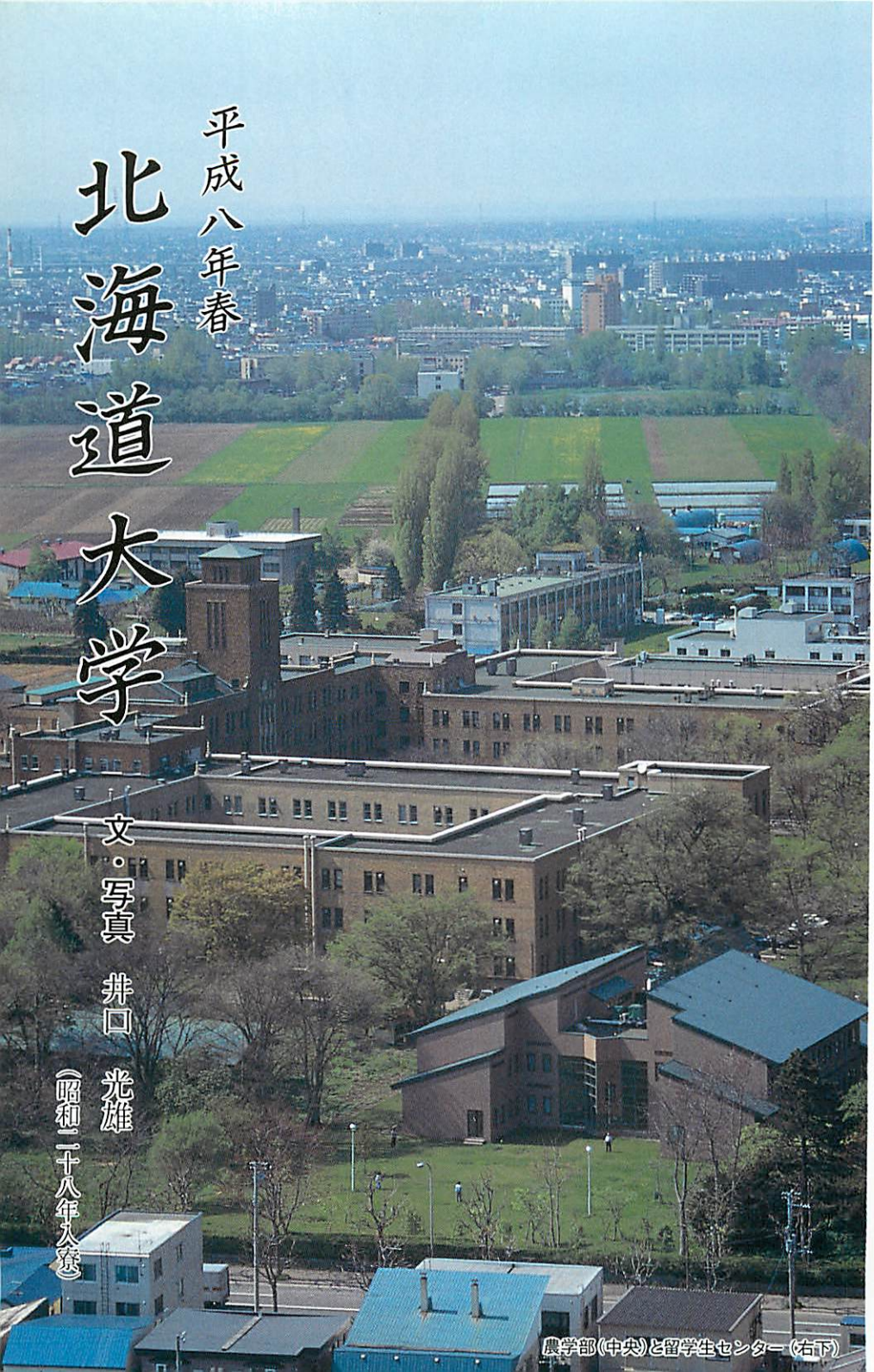
植村泰二君作曲

1. 3 5. 3	6. 5 1.	1. 2 3. 6	5. 0
マ ジ ン ノ	ノ ロ ヒ	ア ル ベ ン	ノ
3. 5 6. 5	1. 6 5	3. 3 2. 2	1. 0
ハ ク セ ツ	ト ハ ニ	キ ヨ カ ラ	ズ
2. 2 5. 2	3. 5 6	2. 1	6. 4 5
ミ ヨ エ イ	ゴ ウ ト	チ カ	エ ケ ン
6. 6 5. 5	1. 2 3	1. 2 6. 1	5. 0
ヘ イ ヅ ノ	ハ ル ハ	ミ ジ カ ク	テ
1. 2 3. 2	6. 6 5	3. 5 6. 5	1 0
フ ク チョウ	ラ ク ノ	ア キ カ ゼ	ニ
6. 5 6. 2	1. 6 5	2. 5 2. 3	1. 0
セ イ ギ ノ	ヒ カ リ	カ グ ク ラ	シ

平成八年春

北海道大学

文・写真　井口　光雄
（昭和二十八年入寮）



農学部（中央）と留学生センター（右下）





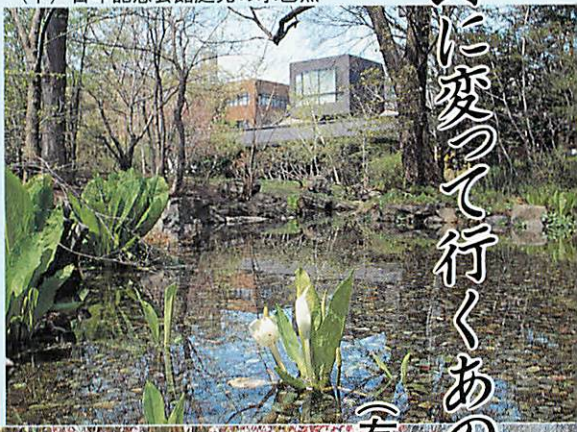


旧恵迪寮南側の原始林に咲く
（上）オオバナノエンレイソウ
（中）エゾエンゴサク
（下）キバナノアマナ



（上）原始林に立つ恵迪寮記念碑

（下）百年記念会館庭先の水芭蕉



"見る見る若草の野に変って行くあの華々しい変化…"
（有島武郎「北海道の春」より）

（下）桜咲く中央ローン







旧恵迪寮の南側にあった原始林は、今も昔の面影を残している。ポツンと林の中に立つ記念碑の辺りも、四月から五月にかけて若葉色を増し、草花が次々と咲く。寮の紋章となっているオオバナノエンレイソウもちゃんとある。

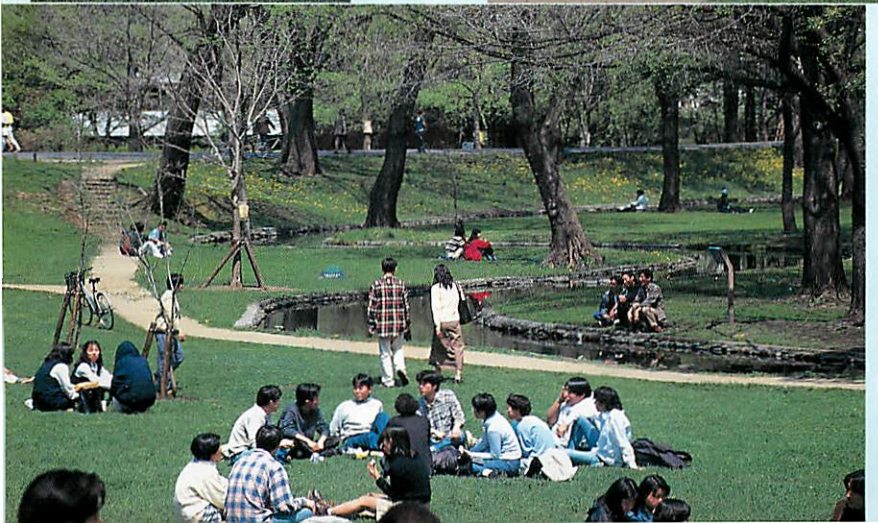
この頃、大学の構内は急速に若やぐ。四月に入ったばかりの学生も、もう何年も大学にいるかのような格好で濶歩している、いや、今は自転車に乗ってすいすいと構内を走り回っている。











学ぶ大学から創る大学へ
北大は今、変ろうとしている



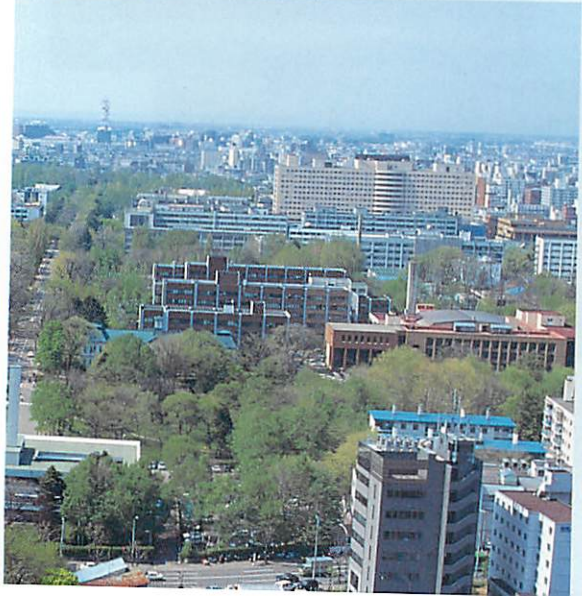
（上）北海道大学正門と本部庁舎

（下）旧低温科学研究所跡の人工雪誕生記念碑とモダンなレストラン





（上）北海道大学総長
丹保憲仁先生
（平成７年４月就任）



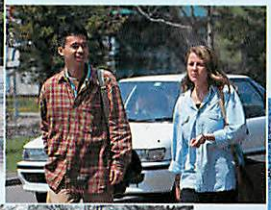


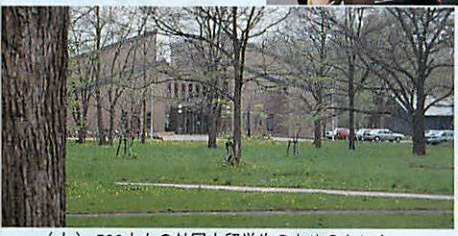
（上）高等教育機能開発総合センターと改称された旧教養部の建物











（上）500人もの外国人留学生のためのセンター

北大は今、〝大学院重点化大学へ構造変革中〟と丹保総長は語る。そこには戦前の予科や戦後の教養部はない。〝入学してからゆっくり専攻を考えよう〟などといったかつてのタイマン寮生哲学はもはや通用しない。大学院地球環境科学研究科の戸倉教授（科長）の「これまでの学部、学科の垣根は確実にこわされていく。ここの大学院生の七十％は他の大学から来ている」という言葉が、今の北大の一端を物語る。



（上）医学部付属病院は大変ぼう



変り行く恵迪寮
―男女寮生共存の自然性―



女子寮生も加わっている266期委員会





（上）２人が立候補した267期
委員長選ポスター

（右上）委員長選投票風景
（宮野晃一郎君が当選）

（右）選挙報道でも活躍する
メディア管理委員会







（左）雑誌恵迪委員会

（左下）現代版“恵迪”の名称は
「ダイナマイト」、月刊毎
号150部を発刊している．



かつて恵迪寮は女人禁制であった。この寮に女子寮生が誕生したのが二年前、先日、久しぶりに寮を訪れた私の関心の一つもそこにあった。結論を先に言えば、〝女子寮生はもはや特異の存在ではなくなっていた〟。

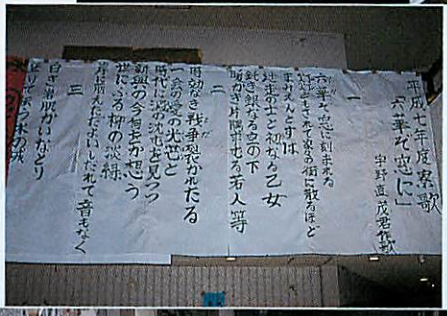
「男女混住の方が学生が精神的に安定」とは、ニュージーランドの学生寮を紹介した河内洋佑氏の一文だが、私には年に一回だけ女性を寮に迎え入れた往時の寮祭部屋デコ当日のことが、妙に新鮮に思い出された。











（上）カレーライス用のカレーは一杯分100円で販売

（上中）食事の用意も共同で（混住ブロック）

（上下）女子ブロックでの食事風景

（右上）ロビーにピアノ曲流れて

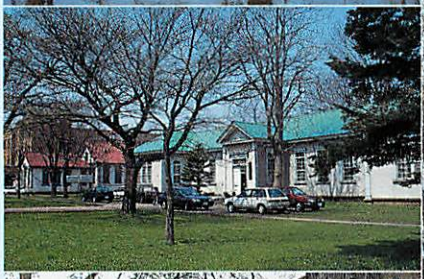
（右中）平成７年度寮歌決る

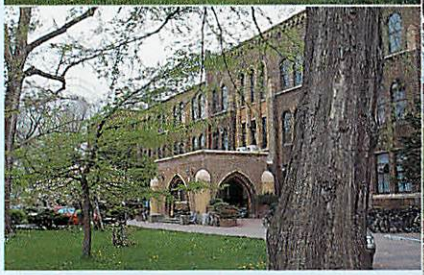
（右下）寮歌普及委員会の面々











そして八月、北大は創基百二十年を迎える



（上）模範家畜房（モデルバーン明治11年）
（上中）旧昆虫・養蚕学教室（右）と
旧図書館（左）（明治36年）
（上下）将来、北大博物館となる理学部本館
（昭和４年）

（下）学生や観光客でにぎわう左・古河記念講堂（明治43年）
と右・クラーク像（大正15年、昭和23年再建）



恵迪

KEITEKI

第 2 号

1996・6・20



北大は今

北海道大学総長　丹保憲仁

北大はこの平成八年に創基一二〇年を迎えます。十月七日に祝賀の式典を各同窓会のご支援をも頂いて催したいと思っております。また、それに先立つ週末に四〇年ぶりで全学の研究室の公開を行ない、市民・先輩・在学の皆さんに大学を見ていただきたいと思っています。学生と教職員が一緒になって大学の今の姿を知って貰うようにしたいと思っています。

北大は毎年二、五〇〇人あまりの新入生を迎えています。総勢では、学部学生が約一一、〇〇〇人、大学院学生が約四、七〇〇人で研究生等を加えますと総学生数は約一六、〇〇〇人になります。内、留学生は約五〇〇人、女子学生は全学生数の二十五%強です。ほかに、医療短期大学生が六三〇人います。教官が約二、一〇〇人、職員が約二、一五〇人です。北大の人口は総てでほぼ二一、〇〇〇人と言うことに成ります。

国内では旧七帝を中心とする大学が、大学院重点化大学として研究大学になるべく構造改革中です。東大・京大が薬学部を除いて転換をほぼ終えました。北大も理学・地球環境科学・獣医学が研究科への転換を終わり、大きな学部である工学部は四年計画で3/4を転換しました。目下、農学部・医学部・文学部が転換に挑戦しようとしておりますがなかなかに難しいところもあります。創立一二〇年を期に工学部に続く重点化された研究科がでてくるように努力をしております。重点化すると、大学の組織の主体は学部ではなく大学院研究科になり、学部はその付属になり、研究大学(Graduate Research University)として創造的な人材の育成と研究成果を国際的に問うことを目的の大き

なものとすることにもなります。学部教育の基礎化が進められ、四年かかって深い教養と専門の基礎をがっちりと身につけて貰います。

なぜ、今までの伝統的なシステムから一歩踏み出すことになったかを考えてみましょう。二〇〇年続いた人類の大増殖と快適追求の近代が今まさに終わろうとしています。この近代の閉塞を抜け出ようとするときに使える道具として、近代を作った科学の基礎しかないという困難をどう切り開くかが問われています。産業分類別のような定食メニュー型の学科別のカリキュラムでは、次の五〇年に日本を背負っていく若人を育てることはおぼつかないと思います。学部四年間で汎用的な基礎と職業的な倫理をしっかり身に付けて、大学院では世界に通用する先端の勉強をしっかりして、外国と創造的な情報発信についてのインバランスにおちいることなく、国際的な共生に耐えうる人を育てねばならないと思います。

学部間の、そして学科間の垣根をいかに低くできるか、が今問われています。そして学ぶ大学から、創る大学への転換が始まろうとしております。受け身で情報を貰うのではなく、自ら発信する大学にしたいと思います。また、北海道の自然に育まれて日々暮らしうる幸いを享受したいと思いますが、生き馬の目を抜くような世界や日本の高密度地帯との間の情報の格差に甘んじて我慢しているつもりはありません。幸いコンピュータネットワークと言う時間と空間を一挙に解消するすばらしい仕掛けが、北大ではもうマルチメディア対応として、全学の隈ずみまで使えるようになりました。来年くらいから全新入生に情報処理教育を必修化し、E-mailのアドレスを与えて、勉学と研究の強力な補助手段としたいと思っています。一二〇周年記念事業の一環として、インターネットのホームページを大学・学部・学科のレベルまで開き、何処からでも、誰でも、何時でも、北大は今どの様になっていて、何をしようとしているかを瞬時に解るようにしたいと思っています。主要な部分は十月の式典までに出来ると思っています。

話は変わりますが、豊かだった北大キャンパスの自然にも衰えが目立つ様になりました。川に水がなくなって、葦がなくなりました。従ってヨシキリが飛んでこなくなり、其処に郭公が卵を生めなくなって、ここ暫く大学の庭で郭公が鳴かなくなってしまいました。川を再生し郭公を呼び戻したいと思っています。今農学部の阿部教授（農業生物）

に御願いして蝦夷栗鼠を北大の庭に走らせるプロジェクトを始めました。乞うご期待です。北大の緑の現状では十つがい位が精々とのことなので、緑の増強も並行して必要と考えて居ます。北大には新渡戸先生の記念になる物は何もないので、顕彰の像を制作してはという意見が、古い先輩の方等から有り、堂垣内元北海道知事を代表とした各同窓会の手で着々と募金が進み、十月の式典の折りに序幕をして頂けそうです。

近年の学生は、「こうゆうことをしてはいけない」とばかり言われて育てられてきたように思います。そうではなくて、何をすべきかを学生自身で考えるようにして貰いたいと思っています。Be Gentlemanとはより高みを求め続けることだと思います。

恵迪寮にここ暫く不祥事が続き過ぎているように思えます。自治・自立の形骸化と生活の惰性化が気になります。留年率が寮外の一般学生に比べてはるかに高いのはそのひとつであろうかと思われます。自ら律する能力の欠如した大衆になっては大変です。学部寮ですから代表は低学年生ではなくて、経験の深い十分の指導力のあるより上級生であったら良いなと学生部長を務めていた頃思ったものです。しかも六ヵ月で交代で執行部が変わっては大学ときちっとした話が継続的に出来ません。昔の予科寮ではないのですから、新しい知性と習慣を求めて大人の寮としての伝統を作ってほしいものです。きちっと自らを律す事のできる北大の核となる集団になってほしいと思います。

入学選抜も、様々な素質を持った、自ら学ぶ意思のある学生を求める選考に向かって進化させていきたいと思っています。先輩の業績をただ単になぞるのではなく、自らの手で新しいより高いものを作っていく事が今求められています。

主張

現恵迪寮生の論理・倫理感について－最後の学生部長を務めて

深澤和三（昭和二十三年入寮）

二年間の学生部長を終えて平成七年春、停年退官したところです。学寮問題だけでなく、いろいろな仕事がありました。一番大きな仕事は、学生部から学務部への組織替えの問題でした。この平成七年度から北大は、教養部の廃止、すなわち学部一貫教育実施にともなって大きな変革をいたしました。教育制度の転換に伴い、なじみ深い学生部も消滅し、従来の学生課・厚生課に、新たに入試課・留学生課・教務課を加えた一大事務組織となりました。入学から卒業まで、さらに卒業後の生涯学習までの、学生に関するあらゆるサービスをモットーにした事務部局の一つとなります。

学務部長は事務官で、直接には事務局長のラインの下にあります。従来教官であった学生部長・教養部長は無くなり、新たに副学長が二名設けられました。この職務は大学の中枢にあって総長を助け、大学の重要問題の企画並びに部局間の連絡調整などに当たります。学務部長は事務官でありますが、学生サービスの専門官として、日常的な業務を統括し、副学長と密接に連絡し、教育的な問題については副学長と学生委員会の判断を仰ぐことになります。

副学長は現在の学生部長が持っている事務権限と責任というライン的な関係は、学務部に対して持っておりません。しかし厚生補導担当の副学長は、学寮その他厚生施設の責任者として、学務部長とライン的な権限を持ちますし、教務担当の副学長は、高等教育機能開発総合センター長として、また全学教育部長として学務部とライン的な関連を持ちます。

現在学生部委員会が協議していた学生問題の事項は基本的に変わりませんし、この文章が印刷される頃は、丹保新総長は、中村・保原副学長とともに、新しい学務部の業務遂行にあたって発生する諸問題について、学内のコンセンサンスの下に、強

力なリーダーシップを発揮し、この大きな変革を成し遂げていっていることでしょう。

さて学寮問題ですが、二年前丹保前学生部長の話し合い路線を引き継ぎをしてから、残念ながら成功しているとはいえません。第一小委員会を通して話し合いの項目と、学生部からみた問題点を明らかにしてきました。しかしこのような主題のほかに、寮生をめぐる突発的な不祥事・事故があまりにも多く、話し合いを邪魔してきました。カウボーイ店における万引き事件、寮敷地内の露天風呂建設事件、薄野の全裸事件、飲酒運転による追突などの交通傷害事件、小火事件、F棟大学院生とのトラブルなどです。

二回の学生部長交渉は、団体交渉であり、お互いの不信感を増大させるようなもので、建設的なものではありませんでした。団体交渉にある種の思いを発散するという、一種のセレモニーとも感じられるようなもので、お互いに信頼感を持つという話し合いの根本的条件が欠如していると思います。

その中で、女子の入寮問題や、駐車場問題は基本的に合意をもてるようになりました。いままで同じ学生でありながら、恵迪寮と霜星寮とでは入寮出来る経済的条件が大きく異なってきました。女子学生は、いまや全学生の四分の一となりました。男子学生と同じ入寮条件を与えることが、公平であると思います。恵迪寮の女子入寮が出来るようになったことは、この公平の要請に一歩近づいたことになります。

大学院生・留学生も同じであり、恵迪寮に常時空き室がある限り、これらの学生に開放すべきであるという要求は常にあり、それに対する大学側の責任を伝えています。女子寮等の新設要求は、空き室がある限り難しく、困窮条件が全学生で等しく整われることが条件となります。

入寮選考は決定前に寮生の意見を聞くという現行の方式の定着を願っています。この方式は順次改良されていっていますが、その実態については寮生全体に周知されていないのではないかという事を、学生部長交渉の時に感じました。寮自治会のリーダーシップをもっと発揮していただきたいと思います。女子寮ではこの現行方式を全面的に肯定してくれました。そのうえで学生部の選考に任せるということになりました。さらに空き室の有るときは、登録学生に対して随時入寮を許可するという提案も、認めてくれるようになりました。彼女らの自治と自由は乱されておりません。

入寮選考についてはいつも堂々めぐりとなるのですが、自治活動と入寮選考はべつに存在すると考えています。学生部の入寮選考に関する見解は、学生部長が責任を全うできる入寮選考でなければいけないということです。ただし実際の選考にあたって、責任主体と実施主体を分離しないけれど、実施主体の構成を学生部のみに限定しないということです。寮生の主張する責任主体と実施主体を分離し、寮生が選考して学生部長が事後承認するというやりかたは、責任の譲渡であり、制度的にとれ

るものではありません。この形態はすでに現実化して実行しているのですが、さらによりよいやり方が無いかという追求を含めて、この方法の定着を願っています。

寮生が自主的に行う事業は、生活案内などいろいろあり、自主入選は、寮の生活自治の論理と倫理の範囲を越えていると思います。たとえば入寮人数の上限枠の設定（経済基準）は、自主入選では得られない弊害としてあげているが、これを撤廃すると、寮の設置目的に沿わない選考が行われる恐れがあることを、示しています。

寮生は学生部長の責任は何だと言います。なんべん説明しても解ってくれません。言うまでもなく、その責任とは国有財産管理者としての法的責任であり、国民の税金を使っている国立大学として、また国民としての倫理観に基づく社会的責任であり、さらに大事な事は、北海道大学の現状と将来をみつめた、全学生の生活に対する責任であります。

憲法の精神のもとに、学部生一万一千人、大学院生四千人、医療短大生六〇〇人（うち女子三千人）、さらに留学生四五〇名の平等なる厚生補導施設の設備充実を考えなければいけません。現状は恵迪寮五八〇（教養二五〇、学部二二〇、院五〇、留学生四〇）、女子（霜星寮七〇、留学生一五、恵迪二〇）であり、単純に計算すると、学部全学生への宿舎提供率は四・九％です。これを学生の種類別にみると、男子学生に対しては五・五％、女子学生に対しては三・〇％、大学院生となると一・二％に低下します。大学院学生に対しては本来は専用が望ましいとも考えますが、留学生については混住の方がよいという考え方もあります。

全学生への期待される宿舎の提供と、快適な居住空間の整備、さらに学生の生命の安全を図ることが大学の責任であります。それらの責任はすべて学生部長の責任です。そのなかで学生部長の裁量権といえば、社会的、教育的配慮のもとに如何に規則を運用するかということになると思います。旧寮時代は、それぞれの歴史を引きずったものであり、確かに自主的に入寮選考が行われてきました。その権利の剥奪と寮生は主張していますが、今の新寮は六〇〇人の規模での、大学唯一の学生宿舎（女子寮を除く）であり、昔とは違います。その点をよく知っていただきたいと思います。

寮生と話し合いをして一番不愉快なことは、学生部長や、第一小委員会の先生方を教官としてみず、当局側の代表として始めから対立の構造を呈していることです。私の時代の北大予科の恵迪寮とは根本から異なっています。相互信頼のうえでの、実質的な話し合いがなされることを祈っています。都合の悪いことは先送りにするということのないように、否定される事を恐れずに話し合いを持つことが大事であり、それが前学生部長の言う「前提なき話し合い」であると思いますが、都合のよい解釈をつけた言葉だけが一人歩きをしているようにも感じられます。

先に書きましたが、寮生の不祥事は全く寮生の倫理観と社会的責任感の欠如と考えられるもので、許すことの出来ないものです。寮生にとって触れられるのは嫌でしょうが、少し振り返ってみましょう。

平成六年九月末の水産生追い出しコンパにおいて、コンパ終了後痛ましい事故が三件発生しました。すなわち酒酔い運転により、寮生の乗用車が構内のロータリーに激突、一人が大怪我、泥酔運転のバイクが医学部前で停車中の乗用車に激突し、大怪我。さらに桑園駅から帰寮途中の寮生がタクシーにはねられ、救急車で病院にかつぎこまれました。構内の事故は、消防車や警察が出動するなど大騒ぎであったという。酔っ払った寮生が、水産生を駅に送るために構内を走行したと思われ、いっぺんに三人の重傷者を出したことは、報告を受け、慄然とする思いでした。一昨年の水産生追い出しコンパの時は、JR札幌駅で見送りの寮生が騒ぎ、周囲の人に迷惑をかけるとして、助役に注意された事に対し、寮生が暴行を加え、傷害罪の一歩手前までいきました。そういうことに対してあらかじめ注意を、与えて居りました。

飲酒のうえの不祥事としては、薄野における全裸事件があります。酔っ払った何人かの寮生が、全裸になってストームをし、市民の通報によって警察に突き出され、一人は逃げたが後の全員は捕まってしまった。昔のように稚気愛すべきと許してくれません。その限度をわきまえてくれなければいけません。このようなことが続いている中で、さらに本年卒業予定の寮生二人が飲酒運転を行い、追突事故を起こし、同乗していたガールフレンドに大怪我をさせています。

窃盗としてはカウボーイにおける万引き事件がありました。バイキングレストランで食べるほかに、袋に詰めて持ち帰ろうとしたものです。すぐ弁償しましたが、それではすみませんでした。常習的なものとみなされたからです。さらにバイク紛失事件があります。学生のバイクが無くなり、警察に届ける前に、寮へ行って探したところ、あったものです。

新聞沙汰になった露天風呂事件は、大学祭を目的にしたものです。この事で寮に行き、交渉をいたしましたが、気になったことは住んでいるのは自分達だから何をしてもよいという論理です。借家人としての責任、まして国有財産を使っているという一般常識の欠如していることです。そこには大家である大学への要求という考えもありません。さらに交渉の最中に不法に在寮している者も見つかりました。

小火を起こし、報告せず、消防査察でそのことを指摘されたこともありました。安全のため廊下に物を置かない、避難口を確保するという基本的なルールや、消防訓練も、再三の申し入れにかかわらず、実行されません。会計検査院の寮への立ち入り査察も抵抗されました。この時の会計検査院の指摘は、国民の税金による建物を使っている立場から、学生宿舎にもいろいろあるのに、寄宿料が一律であるのはどんなものか、経済の困

窮者として奨学金を受領している者に比率はどのくらいか、大学内・大学間で不公平さは無いかというものでした。

恵迪寮には留学生と大学院生が入っているF棟があります。寮の自治会には入っていません。院生の一人が寮自治会に対し、生活のための闘争を行っており、学生部長への嘆願書、警察や法務局の人権擁護局に訴えなどをしております。騒音・汚さ、その他もろもろの生活・勉学環境への不満です。調停をしているのですが、いっこうに埒があきません。

このような現実暴露は汚いと言われるかも知れません。しかしこの二年間でおきた学生の不祥事の大半は寮生が関与したものであり、学生部長は三回も寮自治会委員長に対し、文書による厳重注意を行っています。これは異常なことだと思います。恵迪寮の名誉と誇りはどこへいったのでしょうか。寮の名誉を汚す者は退寮処分というのが、我々の時代の自治でした。現在学生自身による退寮処分などは存在しません。学生部長は退寮処分をすることが出来ますが、このようなことは寮自治会がなすものと考えています。

北大における学生の破廉恥罪に関しての処分は、記録によると一〇年前には窃盗・万引きなど破廉恥行為には退学処分が行われています。しかしここ一〇年ほどは行われてはいません。各学部におけるせいぜい二・三年来の前例を大事にして、文書による厳重注意で終わっているからです。

今年からは教養部は無くなり、カンニングを含め、各学部での処分の公平化が望まれます。このことについて学生部にワーキンググループを作り、検討しました。一般学生、サークル団体、寮生、特定集団の不祥事・不法行為、全学教育科目試験の不正行為の五つについての措置の手順についてのフォーマットを作成し、全学の同意を得ました。

強い処分を目的とした規制の強化ではありません。学生個々の自制と責任を要求するものと考えています。現恵迪寮生と対立する学生部長の立場から述べてみました。悪口に過ぎるかも知れません。しかし先輩として恵迪寮を愛する心は変わりません。古きよき伝統を残すと共に、時代の変革も受け入れ、謙虚に生きることが必要です。

退官後まもない時、問題が私の心の中で風化しないうちにと筆をとりました。今後新しい副学長と学生委員会との間で、どのように変わっていくか分かりませんが、最後の学生部長の言葉として残しておきます。

（一九九五年四月二〇日、前北海道大学学生部長）



札幌農学校から発した世界の土木技術者…広井　勇

高　橋　陽　一
（三十年入寮）





写真－1
広井　勇博士と自筆サイン

北大工学部土木工学科では毎年卒業時に成績最優秀者に対して広井賞というのが授与される。この賞は札幌農学校第二期生で土木工学者の広井勇博士の偉業を永く称える意味がある。

広井博士は高知県佐川町の出身で、札幌農学校を明治十四年（一八八一年、二十才）に卒業した。広井等第二期生はクラーク博士に会ってはいないが、間接的にクラーク博士の開学の精神を受けた内村鑑三、新渡戸稲造、広井勇、宮部金吾など明治後期のわが国の社会基盤作りと国際化の為に活躍した先輩達を生み出した。彼等は皆農学士として卒業したが、その後は思想家、植物学者、土木工学者、英文学者、地域計画者等それぞれ独自の分野を拓いて行った。広井はクラークの後を引き継いだ技術者ホイラー教頭（数学、土木工学教授）の影響を強く受けて土木工学の分野に入って行った。彼等第二期生のその後の活動を見ると、わが国の国土開発を通じて社会全体へ寄与しようとする国家的目標達成の為にひたむきに、真摯に立ち向かう燃えるような情熱が伝わって来るのである。

広井は農学校卒業後、官費学生の条件として開拓使鉄道課（札幌）に勤務する（月給は三十円）。ここで彼は北海道で最初の、わが国では三番目の鉄道として前年に手宮～札幌間が供用されていた手宮～幌内線の内、札幌から幌内間の工事を担当させられる。その翌年（明治十五年）に開拓使が廃止された為、工部省（東京）に配置換えになったが、彼は直ちに当時社会基盤整備事業を大幅に展開していたアメリカへ自費で渡り、土木事業実施の実務を学んでいる。広井が二十二歳から四年間のことで

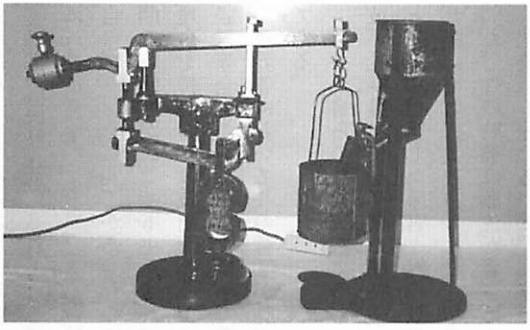
ある。この間に彼は現地で橋梁架設、鉄道敷設、河川改修などの施工会社に勤務しながら大型土木事業の施工法を中心に勉強した。この時の成果は彼の最初の英語論文『Plate Girder Construction（『板桁構造』）一八八六（明治十九）年』と言う論文になっている。後に広井は『The Statically Indeterminate Stresses in Frames Commonly used for Bridges（『橋梁構造物の不静定応力』一九〇五（明治三十八）年）』をニューヨークで出版しているが、この両書は当時の世界の橋梁工学、構造力学の分野に大きな功績を残し、国際的にも高く評価された教科書である。

広井は札幌農学校に工学科が設置されるため助教授を命じられて帰国するが、その直後今度は当時橋梁工学の中心であったドイツへ二年間留学（現在のシュツッツガルト工科大学）し、「バウ・インゲニエール」の称号を得て帰国する。再帰国後は札幌農学校教授になるが、併せて道庁の技師を兼務して黎明期の北海道の社会基盤づくりに重要な働きをしている。中でも空知太（現在の滝川）と旭川間の鉄道建設、及び函館港や小樽築港建設における彼の活躍は誠に大きなものであった。

彼は一八八九（明治三十二）年に工学博士の学位を受けると東大教授を命じられるが、道庁技師としての職務はそのまま継続されることになった。

広井の土木技術者としての全国的な活躍はここから始まる。北海道から四国、九州及びかっての満州（現中国北東部）までの各地の港湾や橋梁の建設のついて技術上の助言、指導を行っている。橋梁では関門鉄道橋、六郷橋梁等の調査・設計及び施工に関係した。広井の港湾建設に関する明快な技術的理論は現在でも高く評価されている所である。特に小樽築港（現重要港湾小樽港）の建設（一八九七～一九〇八）は若き日の広井の入魂の大事業であった。この築港の工事中は、事務所長と言う現場の最高責任者であった彼は誰よりも早く現場に赴き、自らコンクリートの試験練りをし配合を決定していた。そして一〇〇年の後までコンクリートの強度試験が出来るように夥しい数の試験体を作製した。そのテストピースをもって現在でも定期的に当時のコンクリートの強度が計測され続けている。このことは近年のコンクリート関係の国際会議においても常に話題になっている所である。

その強度試験方法



写真－2
当時のコンクリート強度試験機

は近年のものと比較すると極めてユニークなものであり、瓢箪型テストピースの引っ張り強度を梃（てこ）とバラストを使って測定するものであった（写真－2）。

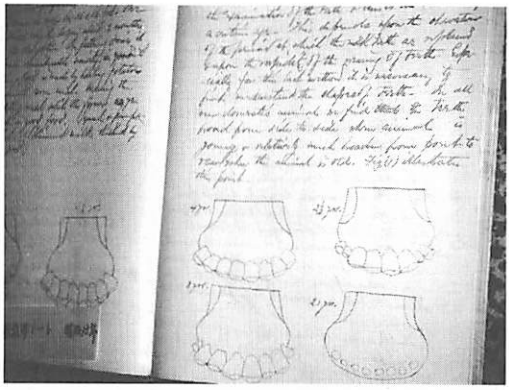
このように広井の業績は北海道を中心にした港湾建設事業が有名であるが、彼はこの他・明治末期にあって、国際会議などではその実務経験に基づく土木工学の実践的識見を持って提言し常にリーダー役を勤めている。

一例であるが、広井が一九二一年の「上海港改良技術会議」へ日本代表委員（七か国代表の一人）として出席した折、彼の技術上のデータに準拠した見解によって会議の方針が大きく変更されている。また米国土木学会関東大震災火災調査委員長の他、関東大震災に関しての帝都復興院評議員、帝国経済会議議員などを任命され、国際的国家的問題解決の為にしばしば有益な提案を行なった。広井は工学の応用に当って、常に実践性を重視することを旨としていた。『机上で設計だけ出来る人は幾らでもおりそれ程難しいことではないが、設計よりは施工、工程管理などのまとめ方の方が大切だ』『技術者として自分の実力を常に練磨して文明の基礎づくりに努力すべきだ』と言うのが彼の基本的座標であり、また安全な構造物を効率的に作り上げる方法を先ず尊重すると言う技術観に徹していた。私が土木技術者の一人として広井博士の思想で最も惹かれるのは実にこの点である。

防波堤の設計に必要な波浪力の計算式に広井式と言う実用公式がある。これは式の形は簡単ではあるが実用性が高く現在でも港湾の設計で活用されている。つまり彼の技術観の中には常に〝技術哲学〟（と言って大袈裟ならば、安全と実践性への独自のプリンシプル）があったのである。クラーク博士の言う学問の実践性がここでも生かされている。このような実践重視の理念を持つことは技術面のみではなく政治、経済、地域計画、経営等全ての面において極めて重要なことでる。昨今、主として政界等においてこの哲学が脆弱なのが多いのは嘆かわしい所である。

広井が自らの技術実践についての責任感を示す逸話がある。彼が札幌農学校を卒業し開拓使に奉職間もない頃、最初に設計・施工を担当した手宮～幌内鉄道の中の一つの鉄道橋が完成した後（今の岩見沢辺りか）、列車の試運転が行われることになった。この時彼は顔色が青ざめ全身が震えて、周囲の人はとても見兼ねる程であった。列車が無事通過した後は何事もなかったように平静に戻ったと言う。彼の技術的良心の一端を見る思いである。土木技術者の一人として、広井の感情は良くわかるのである。

広井博士は一九二八（昭和三）年十月一日に東京で没した。同年十月四日、告別式における、札幌農学校同期生であった内村鑑三の弔辞が彼の人となりを良く示している。以下はその一部。『広井君存りて明治大正の日本は清きエンジニアを持ちました。日本の工学界に広井君ありと聞いて、私共はその将来に

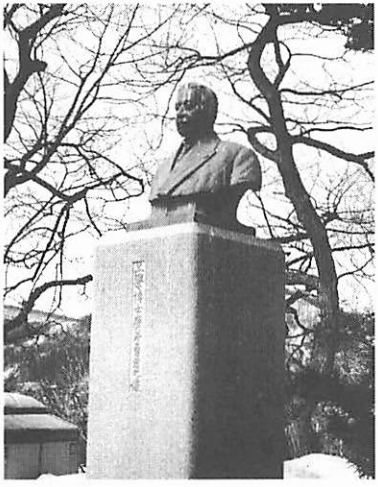


写真－3 広井君の学生時代のノート

つき希望を懐いて可なりと信じます。広井勇君にその事業の初めより鋭い工学的良心があったのであります。そしてその良心が君の全生涯を通して強く働いたのであります。わが作りし橋、わが築きし防波堤がすべての抵抗に堪え得るや、その深い心配がつねにあり、その良心、その心配が君の工学をして世の多くの工学の上に一頭地を抽んでしめたのであります。君の工学は君自身を益せずして国家と社会と民衆とを永久に益したのであります。しかしながら、人は事業ではありません、性格であります。広井君が工学に成功したのは君の天与の才能を利用したにすぎません。しかしながら、いかなる精神を以て才能を利用せしか、人の価値はこれによって定まるのであります。広井君は君の人となりを君の天与の才能なる工学を以て現したのであります。君の事業の貴きゆえんもまたここにあるのであります。事業のための事業にあらず、「この貧乏国の民に教を伝うる前にまず食物を与えん」との精神のもとに始められた事業でありました。それがゆえに異彩を放ち、一種独特の永久性のある事業であったのであります。』（『旧友広井勇君を葬るの記』より）

広井博士は我が北大の源流から発した国家的かつ国際的な土木工学者と言うべき人である。

広井の胸像（二代目、昭和二十八年再建）は現在、自ら設計、実験、施工を担当した小樽港北防波堤が見える小樽公園の高台に建っている（文中、敬称を略しました）。



写真－4
広井　勇博士の胸像（小樽公園）

明治時代の畜産と恵迪寮の食卓

白井俊三（昭和二十七年入寮）

今でこそ牛乳は、日本人の食生活に定着したといわれているが、これも昭和三十年代以降のことで、全国でも消費量が多いといわれる札幌でも、一日の消費量は一人百cc満たない水準である。

昨年の北海道に於ける生乳生産量は、三百二十七万トンだが、このうち道内の飲用消費向けは、発酵乳向けを入れても二十万トンで、六%程度となっている。こうした統計から見ると、いまだに牛乳は食卓の上ではアルファ要素に過ぎないのかもしれない。

この牛乳だが、今は「酪農王国」といわれる北海道に、どのように根付き、札幌農学校との関わりはどのようなものであったのだろうか。北海道開拓の明治時代について、記してみる。

牛乳はまず飲用から

牛乳が近世で登場するのは、安政五年（一八五八）の仮通商条約を締結し、五港（長崎、兵庫、横浜、新潟、函館）の開港による外国人居留地を設けたことに始まる。

北海道では、この前年の安政四年四月、米国貿易事務官ライスが箱館駐在となり、箱館奉行に願い出て牝牛二頭を飼育し、搾乳したのが始まりである。これは恐らくライスの自家用として、箱館奉行が搾乳してライスに与えたものであろう。同じように横浜などの居留地でも、当初、駐在員持参の煉乳で補っていたが、到底間に合わず、本国より乳用牛を取り寄せて自家用の搾乳を行い、これを近隣に融通して飲用に供したと伝えられている。そのエピソードの一つとして伝えられている中で、唐人お吉にふれたものがある。

安政三年、ハリスが伊豆国（静岡県）下田へ上陸、玉泉寺に星条旗を掲げ、日本初の領事館を開く。ここで牛乳飲用を幕府に申し入れるが、「牛乳は一切国民が食用としていない。牛は耕作、運送用のもので牛乳をとる目的ではない。子牛が飲むものである。従って、牛乳はいっさい給じがたくお断りする」と拒絶されている。このため唐人お吉は、下田近郊の農家を訪ね、妙薬の製造に使用する名目で牛乳一合を搾ってもらい、ハリス

に与えたという。その時に支払った牛乳代金は、十五日間で九合七勺、一両三分八十八文と記録されている。当時の米の価格は、三厘二毛である。

この時期の牛乳は、日本人の食するものではなかったようで、牛乳を飲むようになった契機は、「病者が在留外国医師の勧めにより需要するに至ったもので、其の初めは殆ど薬と同視した」と『北海道拓殖誌』に記されている。全国で牛乳が普及したのは、この理由によるものであろう。この頃北海道では、慶応年間に軍川（大沼）で牧場を営む肝付七之丞が、箱館で販売した価格は、四合壜入りで金一分であったと伝えられている。

札幌では明治十年、札幌農学校が希望者に実費払い下げを始め「農園は始めて金五十四圓六銭五厘の牛乳を販売した」とブルックス報告書にあるが、それ以前に「明治六年十月、旧会津藩士松田一芥、札幌病院御用達として牛乳を病院に納入し、余乳を市内に販売。明治七年五月小樽に進出し、両地区での牛乳販売の元祖となる」と記録されている。開拓使公文録（明治八年）には次の文書がある。

大判官　　物産局
七等出仕　　会計局
　　処務局

牛乳製造人　松田一芥儀、先般拝借之病牛返納致度段願出候処、右ハ拝借之節冬飼御手當金相被下候末ニ而今更返納致候ハ甚不都合之次第ニ付厳敷相達候処、今般別紙ヲ以嘆願申出候実情無余儀相聞得候間、牧牛之義ハ盛大ニ人民共江勧誘致度場合ニモ有之候間此度限リ御聞届相、爾来飼方尚一層注意為致候様相達候而可然哉、此段相伺候也

御指令案

願之趣此度限リ聴届候条尚一層飼方勉励可致候事

八年三月十九日

奉嘆願候書付

一、牝牛　五頭　子牝牛　三頭
一、牡牛　弐頭　子牡牛　壱頭
合　拾壱頭

右之通一昨六年十一月中為蕃殖御貸渡相成難有拝借牧牛、追々盛大ニ仕度志願ニ御座候故南部表ニ而英人之手附漁業罷在候悴　直次郎茂昨二月中御當地江呼寄其他家族共追々呼寄、私儀ハ昨年五月ヨリ高島郡色内町江牛六頭転赴牧牛致シ居候処、双方ニ而追々出産六頭相増猶又懐妊之牛當年中ニハ五頭蕃殖可致事ニ付家内一同大悦仕居弥以盛大ニ蕃殖為致度、種々勘定仕候処、小樽郡之内余市川上ニ當リ壱里半四方程之笹

芳原有之候由承リ候ニ付　雪消次第実地見分之上其御筋江奉願、御差支無御座候時ハ右場所ニ而家族一同打懸リ牧牛仕度志願ニ御座候処　豈図ランヤ當年寒気一入厳重全躰難産之生立ニ付本月ニ至リ子牛弐頭死去仕、其段御届申上候処余ノ飼方不行届故、右様之義モ可有之旨、且其他病牛之義ニ付而モ不調法之次第モ有之ニ付、拝借牛不残返納候様被仰聞重々奉恐入候、然ル処彼是願立候モ重々奉恐入候得共、今更御引上ニ相成而ハ家内一同生活之途之失ヒ難渋至極且又前願之通行末盛大ニ仕度　此願ニ御座候間厚御憐憫ヲ以不調法之段御容免被成下是迄之通拝借被仰付置被下候様、奉願上度、若シ不残拝借不相叶候時ハ色内村江持参リ居候分斗ニ而モ拝借被仰付置被下度、此段、伏而奉嘆願候　以上

明治八年三月十九日

牛乳所　松田一芥
惣　代　渡辺新助
開拓大判官　松本十郎殿

前書之通願出候ニ付
奥印仕候也

副区長　高木宗三郎
戸　長　菅野　宜静

松田一芥は会津戦争で奮戦、不具者となった剛毅な人格者で、開拓使に勧められ牛二頭の貸与から牛飼いを始めている。この頃の牛は恐らく南部牛で、搾乳量も野草を利用していたので僅かであり、しかも牛飼いに慣れておらず、苦労したであろうことが嘆願書からも伺うことができる。また、病院への納入から始まっているから、やはり牛乳は薬と同視されていたのである。この牛乳所は渡島通百八番地と記されており、現在の南二条西三丁目あたりである。明治十九年の統計によれば年間の搾乳量は二十四石とあるから、換算すれば四、四四〇キロで一日当たり約十二キロ、六十四合に過ぎず、価格は一合二十銭。その時の札幌区の人口は三、四一一戸、一四、九三五人、米一升十二、三銭であったから牛乳は相当に高価なものである。

また、真駒内牧牛場では、明治十五年に札幌区内に乳牛派出所を設けて販売を行っていた。真駒内牧牛場牧夫であった米澤雄一は「真駒内から札幌まで運ぶのに時間はかかるし、夏の間なら腐る心配もありました。そこで明治十五年に南二条西一丁目に乳牛派出所を設けられ、搾乳牛を連れてきてしぼった。乳しぼりをみせて、うんと飲んでもらおうという意図もあったわけです。」と語っている。この時代、庶民が牛乳を飲むなどは異端視されていたのであろう。これは今で言う消費拡大運動で、今日でも大掛かりに行っていることを考えれば、まだ牛乳が日本人に定着しているとは言えないのかもしれない。

恵迪寮の食生活

牛乳のことはひとまずおくことにして、恵迪寮の食生活と畜産について見てみよう。

明治六年十月、黒田長官は各支庁に達した施政方針の中で「食ヲ他道ニ仰グ　恐ラクハ恒久ノ道ニ非ズ。故ニ其土ノ出ス所ノ物ヲ用テ従来輸送ノ食ニ換ヘバ　之ヲ用ユレドモ尽ルコトナシ。其勉強如何ニ在ル耳」と述べて自給自足を促している。またケプロンはその報文の中で「余ハ常ニ北海道並ニ移民ノ書ニ就テ萬全ヲ画スルニ　先ツ第一ニ　方今蝟集スル移民ノ食物及ビ習慣ヲ変ズルヲ緊要トセリ。唯日本人ノ常食タル米ニ依頼シ強テ民ヲ移スハ拙策ニシテ島中ニ食料ヲ他ヘ輸出スル様ニ為サザレバ実効ナシ」と述べ、明治六年十一月の第二期報文でも「殖民上の要件は、海外より農作物、家畜、器械等を購入し、耕作の法を改良し、尚米を常食とする習慣を変じ、各種食物を用いしむるに在り」と記している。

これらの進言にもとずいて、パン食を奨励したものの至難であったらしく、札幌農学校に対しても「一日三度ノ内二回ハ必ズ北海道産出ノ麦粉、玉蜀黍、蕃薯ノ類適宜ニ調味シテ之ニ供シ候」よう致されたい。これには苦情もあろうが、これらの食物の栄養価の高いことはケプロン報文にも明白であると黒田長官は申し送っている。

恵迪寮史には『今其の頃の寮生生活の一端として、開校當時の食物に就いて見るに、晝を除いては総て洋食であった。此の洋食制度は開拓使雇外人ケプロン、アンチセル等の食物改良意見に依るものであって、彼等は本道気候の米作に適さざるを論じ、本道民は須く本道の産物を以て常食となすの方針に出づ可き事を極力主張した。ケプロンの改良論は次の如し。

「日本に於いて食料に充つべき物産を改良するの緊要なるは、殆んど疑を容れざるべし。何となれば日本第一の物産たる米は培養の費最も多く、其養分に至ては他の穀物に劣るを以てなり。小麦は米と養分等しくして其培養費米より少なきを二割五分とす。下略」（ケプロン第一報文）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

アンチセルも同様な改良論を唱えたので、食物改良意見は一の輿論となり、パンの常食論・肉食の奨励等となった。開拓使も此の食物改良の意見に賛同し、産業の方針も之に應じて施設した為、パン常食の実行を奨励しなければならなかった。先づ官吏學生等に着々此れを実施せしめ、札幌農學校・札幌女學校等はパン洋食を以て常食と定め、東京より札幌移転の時も男女學生分小麦粉七萬三千斤を用意し米はライスカレーの外には用ひるを禁じた位である。十年九月には全道に食物改良論達が發せられ其の實へと誘導したのである札幌農學校の寄宿舎に於ても一は試験的に一には學生が先導する意味に於て洋食実行が遂行されたのである寄宿舎に於ける食料の質は當時としては非常

に贅澤なものであったし、コックも相當な腕ききだった。しかし肉類としては鹿肉が大部分で、魚肉としては鮭・鰊・鱒なども攝ったが牛肉は皆無だった。此の鹿肉ぜめには寮生は随分悩ませられた。當時鹿は札幌近郊にも澤山棲息して居った。如何に鹿を多く利用したかは次の書類によっても明かとなろう。

「當校生徒用鹿肉火腿相製度候に付御地獲獵之品百脱程御周旋御贈送相成間敷哉御都合出來候はば一應概略之代價被申越度乍御手数此段及御依頼候也。

明治十年一月　札幌農學校

勇拂分署

大久保芳　殿　」

又ブルックスの要請書中に「美鮮なる鹿肉の供給極めて多くして二三銭を費やさば既に一斤を購ひ得る」ともある。鹿群が北海の野に満てる其の頃の光景が髣髴されるではないか。

普通寄宿舎の食事は朝は焼いたパン半斤にバター、それに何か肉類であったが、其の頃の人の談によると「分量は曾て食者の腹を満足せしめた事がない」と言ふ。晝食丈は和食であって、夕食はスープに魚或は獣肉と野菜のゴッタ煮であった。獣肉といふのは鹿肉が主で美々製の鹿罐詰、魚は主に石狩製の鮭を用いた。鹿肉の多過ぎた事に對しては少々不平の聲もあった様であるが、其の頃としては一般に贅澤な食事で一ヶ月一人分の食費も八圓あまりを要した。當初より十四年に至る間朝夕二食共洋食を用ひてゐたが明治十四年十一月二十六日より朝餐を和食に改め漸次全癈するに至った。此の洋食癈止には學生一同皆不平を鳴らし復修講堂に會して評議などした様である。』と記載されているので、黒田長官の申し送りが実践されていたことがわかる。この中には特に牛乳についてはふれていない。前述のように牛乳が潤沢ではない時代のことだから、食卓には上らなかったのではないかと推測される。

また、恵迪寮小史の中に第八期生藤田経信先輩の一文として「貸費は以前月二十圓であったが經費節減でこの時は十六圓となり、小遣は一圓六十銭であった。(三年生のときから十二圓と一圓にされた)十六圓では一日西洋料理が二回食卓にのぼった。西洋料理となると全く別世界に住む人の食糧と思われてゐたので皆の欣喜は想像に余る次第だ。札幌には早くから西洋人が多く棲んだ関係上今日考へても調理も案外よかった。ライスカレー、ビフテキ、フライ等が主食でその他に一品あった。厚い牛肉のビフテキは美味であった。遠足でもする時は賄に命じると必ずビフテキのサンドウヰチであったから時々遠足したものだ。」と紹介している。ここで牛肉と記されているが、当時の札幌では牛の数は少なく、その殆どが役牛で高価だから食卓に上ってはいないだろう。これは鹿肉であろうと思われる。

当時、鹿は重要農産物に指定されており、狩猟が制限されており、春の繁殖期には千歳の美々から豊平川の左岸、雁木方面

に渡ってきていたと伝えられ、山鼻村では被害に苦しんだと言われている。

恵迪寮の洋食廃止は、西洋料理の願望を封ずるものだけに、当然ながら学生の不平を買ったのだろう。

明治十年以来続いてきた一日二回の洋食を支えるものは、当然のことながら、北海道における畜産の振興に外ならない。このことについては、明治十年三月、クラーク教頭による札幌農学校第一年報の巻頭で次のように意見を述べている。

「……農業は実に国家繁栄の最も確実なる根柢をなす。この農業は民を養ひ、元素を変じて財産と化し、工業・運輸及び貿易の為に原料の大部分を供給す。凡そ一国の実業は国家の幸福に向って賢明に且つ熱心に努力する所の土着の人士に依って最も有利に遂行するを得べし、而して外国の侵略を受けたる暁防禦を依頼すべきはかかる人々を措いて他に求むべからず。是を以てなるべく速かに北海道の漂浪的漁夫を改めて永住的移民となさざるべからず。

日本の農業は大いに改良を必要とするものにして、農産物の収量をは急速力を以て増殖せさるべからず。之に對するに最も重要な手段は適当なる種類の家畜の普及を謀るにあり。これは種々の目的に向って必要なり。……科学的農業の使命は生産物の増加と共に地味の改善に存するものなるが、其の唯一の有力なる方法は肥料特に厩肥の施用を進むるにあり。……又牛馬を一般に使用するときは此等役畜を有する農家をして、旧式の場合よりも耕作面積を拡げ、且一層經済的に之を經営せしむるを得べし。

家畜の飼養法を改良するには玉蜀黍と牧草の栽培を盛ならしむる必要あり。……畜産所得は日本に於て殆ど閑却せられつつある今日、改良の余地多きこと容易に認むるを得べし。……畜産業成功上に於ける他の障碍は農家の貧困なると、建築物の不完全なるとに在り。最も収益を多く挙ぐる所の優良家畜は、本道住民が動物の為に足れりと信ずる如き矮屋内に於ては殆ど厳寒を凌ぐを得ず。故に動物・作物及び肥料をして気候の悪影響より免れしめんと欲せば良好なる畜舎を必要とする。……今や札幌市民は米国輸入の煉乳や、丁抹産の牛酪の消費を止め、北海道の農場所産の新鮮なる生産物を賞味し始むべきの時機なり。……」と述べ、早急なる畜産振興を唱えているが、開墾のための役牛が不足していたこともあり、家畜を飼う術を知らない開拓移民には、牧草を雑草としか見ることができず、理解を得るまでには至っていない。また米も府県より逆に入手しやすいという条件もあって、畜産振興は一頓挫をしていた。

前述した松田一芥の嘆願書にあるように住居すらままならない時代で、クラーク教頭の言う畜舎など及びもつかず、牛も厳寒に耐えられなかったことが記されている。こうした状況の中で行われた恵迪寮の食生活改善は、畜産振興を前提としているだけに、やはり無理があった。これが獣肉に頼らざるを得なか

ったと思われる。

また、ブルックスのいう「鹿肉の供給極めて多くして」も明治二十二年四月九日の官報に鹿獵禁止が掲載されている。

「　鹿獵禁止

本道ニ於テ冬期鹿獵多ク陸産中一ノ重要物産ナリシカ年々濫獲ノタメ該獣減少ノ虞アルヲ以テ去ル十一年中開拓使ニ於テ北海道鹿獵規則ヲ設ケ繁殖ヲ計リシモ同十二年春大雪ノタメ山野食盡キ過半斃死シ爾來大ニ其數ヲ減少シ今日之カ繁殖ヲ圖ラサレバ竟ニ麋鹿ノ跡ヲ絶ツヘキ景況ナラハ……」

この禁止令から推察されることは、恵迪寮の洋食が鹿肉に頼っており、その調達が困難になってきたため、漸次和食に変えざるを得なかったのであろう。

この時代、輸入された牛は役・肉牛ばかりで、乳牛としてエアシャー種が顔を出すのは明治十九年であり、現在の主流であるホルスタイン種が輸入されたのは明治二十二年のことである。元来ケプロンはアメリカ中部で肉牛の飼育を経験した人で、後年、畜産担当のエドウィン・ダンが「……何故肉用の羊は輸入したが毛をとるための羊は入れなかったのか、また同様に、何故肉用牛のみを輸入して優良種の乳牛を何頭でもいいから輸入しないのかと尋ねた。」が、その提案は全く無視されたと記している。

このケプロンの画く畜産振興策が、恵迪寮の食卓に影響を与えると共に、牛乳を主体とする酪農は振興されず、その後牛乳の需要がふえ生産が始まるのは、明治二十五年頃からであり、民間に次第に根づいていく。この酪農振興に多大な貢献をしたのは、エドウィン・ダンから直接指導を受けた第一期生の黒岩四方之進（新冠牧場長）と第二期生の町村金弥である。町村金弥はダンからアメリカ式の大農場経営と畜産技術を学び、当時の日本の農業政策と食生活からみて、まったく異質の問題に取り組むことになるが、これも恵迪寮の洋食生活が影を落としているとみていいのではなかろうか。また一方、畜産を支える牧草栽培に欠くことのできない種子については、明治二十五年二月に創業した東京興農園を営む第一期生の渡瀬寅次郎、この先輩に刺戟されて札幌興農園を設立した明治二十二年入学の小川二郎が活躍をはじめることで、酪農振興の基盤が整い始める。小川二郎は後に農機具の販売を含め五番館を経営するが、いづれも明治二十五、六年以降のことである。

これらの人々を触発したのは明治十四年十一月に『北海道農業ノ改良進歩ヲ図ル』目的で設立された勧農協会である。明治中期の酪農とそれを彩る人々については、機会をみて綴りたい。

木原均先生の研究をめぐって（その二）

辻山昌佑
（昭和二十六年入寮）

前号に亡父が「この辺りに木原先生の養蚕室があって仕事をしたのだがね」と話したことを小生が朧気に憶えていて、私事だがご存知の方は教えて頂ければ幸せと末尾に書きました所、早速平成七年一月末に昭和八年入寮の札幌の吉井周雄先輩から丁寧な手紙を頂戴いたしました。手紙には先輩の自己紹介のあと、先輩の学生の頃は木原先生のことは生々しくその研究振りが耳に入り尊敬されていた由。そして養蚕室については東南をポプラの大木で囲まれた平屋の木造で可成り古く蚕時期に多くの作業員がいて研究しており北大の北西隅には沢山の桑の木があったとの事。昭和四十年代に壊された様で今は食堂になっている。農業生物学科に養蚕講座があって友人の滝沢義郎名誉教授が昔の事を知っていると住所を知らせて戴き、養蚕室を示す先輩手描きの図を戴きました。

将に養蚕室は存在していたのです。吉井先輩は理学部化学科を昭和十四年に卒業され、昭和二十四年から北大工学部の教授をされ今は名誉教授をされております。関西で同期入寮の方々には渡辺、高久、永田の各先輩、そして吉田哲夫先輩とは親しくされた由。小生としては早速お訪ねし御礼申上げ更なる探究をすべき所でありますが懐と相談、札幌でこの年の九月に行われる恵迪寮同窓会と小生の農業経済学科卒業四十年同窓会の折りにお訪ねする事に致しました。九月十六日の恵迪寮同窓会の翌日曜、南一条西八丁目の御自宅を訪問。先輩はご年輩に拘わらず真に若々しくお元気、奥様もご同様生き生きとされていました。昭和七年当時の北大全景写真のコピーと養蚕室位置、北大百年史から養蚕講座説明箇所をコピーして小生を待っておられたのには全く恐縮しました。

吉井先輩の官舎が第一農場にあって廻りに桑があり、冬は積雪で大変であった由。桑は北大丈でなく周辺農地にもあった由。桑園の地名の始まりか？　北海道でも養蚕が行われていた事が察せられます。

さて養蚕と農業生物学科ですが、吉井先輩の百年史分析によると明治二十八年に植物病理学専攻生三名と農学専攻生で昆虫学を専門とした一名が卒業したのに端を発し、東北帝大農科大学となった明治四十年、農学科八講座の中に動物昆虫学養蚕学

第一、第二、第三講座と植物学講座が、翌四十一年植物学第二講座が新設され大正二年農学科三部制の施行に伴い第三講座は第一部に、残りの生物学系講座は第二部になり大正八年（一九一九）まで続いた。この間植物学第二講座は大野、郡場、伊藤が担任したとあります。木原先生は、植物生理学専攻教授郡場寛先生について一九一八年卒業し、卒論は「花粉に及ぼす低温の影響」を出し、引続き大学院へ進みますが、このときまで木原先生は全く小麦の研究に関係がなかった。一方当時院生であった坂村徹先生が小麦の染色体数決定という画期的な成果をあげておられましたが、京大に動物学科と植物学科が新設され郡場教授が京大理学部にということで外遊され、その後任に坂村先生がなることになり、木原先生に小麦の研究を引きつがれてこれ又外遊され、このことが木原先生が小麦の遺伝研究をなす発端となった訳です。

もう一つ遺伝学を志す動機となったのは、恵迪寮で毎学期開かれる開識社で坂村院生の行った〃遺伝物質の運搬者〃という講演であったと木原先生が書いておられます。一九二〇年（大正九）には木原先生は郡場教授の助手として京大に行かれますが、その後も毎夏札幌の圃場で小麦の実験をされていますが、動物、即ち蚕の事は全く出て参りません。小生の亡父は大正九年には北大農場にて撮した写真が残っておりますが、大正十一年には根室別海農試にいましたので、木原先生の院生時代に蚕以外の事で、何らかの関係があったのかも知れません。世界的な木原博士と若き日のある時に多少なりともご一緒させて頂いたという亡父の誇りであったのでしょう。

木原先生の資料を読んでいますとゲノムという言葉が出て参ります。NCヘテローシス核と細胞質との間の交雑という言葉も出て参ります。農経である小生は門外漢でありますが先生の研究の真髄はこれではないか、そして現今医学の分野で云われている〃人のゲノム分析〃とは少し異なる様に感じました。

現今のゲノムは分子的ミクロであり、核、染色体の各遺伝子の構造や働きを研究しているのに対して、先生のゲノムは、遺伝子のある一つのまとまり、ある固有の生物の特質、体をなすための有意の最小単位とその構成、そして単位と単位との組合わせでどうなるのかというミクロからマクロ、生物体としての研究ではないか。NCヘテローシスという核と細胞質との係わりや、雌雄との係わりによって変わるという研究がマクロ的であると。そして今後現今のゲノム研究のミクロをマクロにまとめて見たときどうなるのであろうか。植物の世界、動物の世界。農学と医学そして化学とそれを機械の分野へと応用発展していくのではないかと感じた次第です。

小生はフィリピンのIRIの米の新品種が世界の米の生産を飛躍的に増大させたグリーンリボリューションとしておりました。所が先生の書かれたものを見ますと、日本の江戸時代の農民が作ったダルマという矮性小麦の遺伝子によって「緑の革命」と呼ばれる世界の食糧事情を一変させる画期的な改革があっ

た。遺伝子は貴重であります。現時点で不要でも作物では系統的に栽培し、野生のものは保護し続けねば遺伝子は失われます。

先生はスウェーデン遺伝学会名誉会員、デンマーク王立学士院会員、国際遺伝学シンポジア議長などなど、国際的な学者との交際、学会活動を活発になされていますが、小麦という世界的作物研究とスポーツマンとしての性格、そして北大恵迪寮で培われた大らかさからきていると思われます。世界的学者との交際は一九二四年独米英への留学から始まっていますので、こんな若い時外人との交際は恵迪精神が大いに発露されたものと推察せざるを得ません。

木原生研訪問時、今一つ興味をひいたのものはメタセコイヤでしたが、前回記事で誤解を与えた所があります。木原生研のメタセコイヤが東本願寺と宝塚と日本で三ヶ所植えられたという下りです。その後、斎藤清明著で中公新書のメタセコイアを読みました。斎藤氏は一九六九年京大農林生物学科を卒業、七十一年毎日新聞社入社現在大阪本社科学部副部長をしておられます。その本によると一九四六年中国四川・湖北省で確認され、四七・四八年と種が米のハーバード大のアーノルド植物園に送られ、その中の四八年の種が東大理学部植物学科、原寛助教授に送られ四九年春播種し、僅か数本が発芽、東京文京区の東大小石川植物園に三本、東大懐徳館庭園に二本、東大植物学教室裏に一本、原の自宅に一本、共同研究者の黒沢和子宅に一本夫々植えられたそうだが、すべて実生か、その後の挿木繁殖によるものが混じっているか不明なれど、日本に蘇った最初のメタセコイアとあります。

一方、メタセコイアや古生物の権威であったカルフォルニヤ大のチェイニー博士は化石植物の現生を知り一九四八年外国人として初めて中国へ渡り種を持帰り、又アーノルド植物園のメルリ園長から種も送られてきていた。

四一年の論文で京大の三木茂博士が化石の研究からメタセコイアを確立していたことを知ったチェニー博士は、四九年十月二年生苗木一本と種子五〇〇粒をロンドン・リンネ協会名誉会員である生物学者の昭和天皇に献上、吹上御苑に植えられ、三木博士は十一月に皇居で拝見。木原博士を会長とする保存会の設立と共に五〇年二月実生育苗の一〇〇本が更に送られて来て、北は北大から南は宮崎大まで配布、チェニー博士も同年七月来日し、奈良、宝塚植物園に植樹、東本願寺には翌五一年秋に再来日し植樹したとあります。

木原生研の木は五七年頃植えられたものと「一粒舎主人」にあります。セコイアとはインディアンの名前でレッドウッドとブラックウッドがありカルフォルニヤに生育している樹高百米に達する杉科の木ですが、メタセコイアはこれ等と異なり落葉する杉科ですが、今日、日本各地で見ることができ、北大植物園にありますし、私の近くでは守口市の京阪デパートにも植えられています。

恵迪寮の野球部の先輩たち（其の二）

河合正恭（昭和九年入寮）

前号に於いて、野球は札幌農学校の開校初期から早くも寄宿舎生を中心に、最も盛んなスポーツとして培われ、明治二十五年に発足したベースボール会を経て、三十四年、文武会の設立と共に野球部が誕生し、更に、三十八年に初代恵迪寮の開寮となるや、多数の野球部員が続々と入寮、寮の自治発展にも多大の貢献をして来た所まで記述した。明治四十年は、寮が恵迪寮と命名された年でもあり、又、東北帝大が創設されて札幌農学校は其の農科大学となった年でもあった。

初代恵迪寮時代の初期（続）

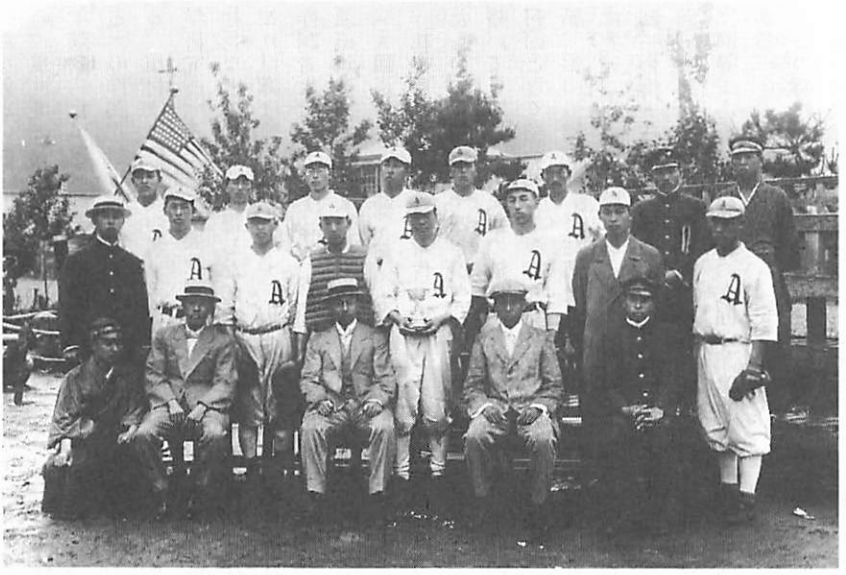
当時、道内に於ける野球チームとしては、中等学校のチーム位のもので、部員は髀肉の嘆を囲っていたが、明治四十年、函館に太洋倶楽部（通称オーシャン）の設立があり、四十四年の小樽高等商業学校の開校と同時に野球部の創設を見たので、翌四十五年五月には早くも第一回農大対高商野球戦が行われ21－0で農大が大勝。更に、新学期を迎えた其の年の秋十月（七月に明治天皇の崩御により年号は大正となる）、小樽に於いて第二回戦が挙行され、これまた、22－0と言う大差で連勝している。これが今日まで八十有余年に亘り連綿として続いて来た北大予科対小樽高商定期戦の始まりであり、戦後学制改革による北大対小樽商大野球定期戦の源である。この大正元年の夏には、農大グランドではダイヤモンドの位置変更と共にグリーンの色も鮮やかな固定ネット（バックネット）の建造が行われている。このネットの建造費は、当時の記録によると金七拾弐円六拾銭也と言うのは今日では一寸見当も附かない価格であるが、文武会報に依れば「このネットは、東都の早稲田・慶応のものに比しても遥かに立派で、その偉容は春夏秋冬、巍然として北海の空に美しく映ずるであろう」と。

この時代の部の立役者は、何んと言っても名投手稲田昌植（佐藤昌介学長の長男）であり、これに続いた渡瀬次郎（後の田中）、木原均であった。稲田は淡路島藩主の稲田家を継ぎ、男爵、貴族院議員拓務次官、東京外語、東京農大教授。戦後は食糧営団副総裁を務めたが、在学時代には荒木、柳沢（M43）、徳岡（M

44）等と共に北海道スキー界の草分けで、大正十四年発足の日本スキー連盟初代会長にも推されている。稲田が登板した試合には恐らく敗戦はなかった筈である。

斯くして、野球部の第一期黄金時代は、この明治末期から大正初期に入寮した先輩たちによって築かれた。即ち、稲田・渡瀬・徳岡・木原・熊谷の五代に亘るキャプテンの時代である。特に、大正六年、日本人造肥料函館工場長であった吉田守一（M38）の招きで徳岡主将以下、佐藤　清（佐藤学長の甥）、木原・岡見・熊谷など総勢十八名の錚々たる面々が高松監督（教授）に率られて函館に遠征、谷地頭球場新記録の観衆を集め、木原ー佐藤のバッテリーで道南の雄、太洋倶楽部に二連勝し米国領事キング氏寄贈のカップを授与された頃が其のピークであったと思惟される。この試合の模様は函館毎日新聞が連日一面を割いて農大の活躍振りを逐一報道していることでも、当時の一大ニュースであったことが窺える。

明治三十九年から四十五年までに入寮した野球部員名は前号に於いて記したが、殆んど全員が寮の委員として其の名を連ねている。特に、福羽、柳沢（M43）、樋口（M44）、木原（M45）、桜井（T3）は在寮中委員を二期務め、又、丸山（M40）の三期、一色（M45）に至っては委員四期（内一期は委員長）を務めるなど、寮に対する貢献は洵に顕著なるものがある。樋口、一色は共に名マネージャーであった。



函館のアメリカ領事主催の野球試合で優勝した北大野球部

この頃の部員で渡瀬次郎（後の田中）は、農学校の第一期生渡瀬寅次郎の二男で、そのキャプテン時代の激烈な猛練叱咤振りを見ていた札中生が鬼と呼んだので鬼渡瀬となり、向島木母寺境内にある伊藤博文揮毫の記念碑天下の糸平で有名な田中家の跡目を継ぎ、田中鉱業社長、東京エルム会長などで御存知のことと思う。樋口、木原に就いては改めて記述するまでもないが、在寮時代共に凍影社なる読書会のメンバーで、寮の機関誌辛夷の同人の文学青年でもあった。樋口は都ぞ弥生のテンポに厳しく、日本寮歌祭の開始以来その正調化に対する執念は全く畏敬の外なく、ミスター都ぞ弥生と呼ばれたのも宜なるかなである。木原は京大教授、文化勲章受章、二回に亘る冬季オリンピック団長、日本スキー連盟会長など寧ろスキーの方で余りにも有名であった。筆者の在学時代の京都遠征時には、何時も合宿の家を世話して貰ったり、練習グランドの借用をお願いしたり、又、練習時にノックをして戴いたりした外、部史編纂の時には全くお世話になり放しであった。福羽は、福羽いちごで有名な父君（連人・子爵・宮中顧問官）の跡を継ぎ新宿御苑に殆んど一生を捧げた。

寮歌に就いては前号で一寸触れたが、高松（M38）が寮歌第一号「一帯ゆるき」の作詞者と記したのは作曲者の誤りであるので訂正するが、当時の部員には仲々文才あり音楽的センスの豊かな者が多く、筆者の時代を顧みると全く忸怩たるものがある。柳沢秀雄（M43）は、明治四十三年寮歌「帝都を北に」の作曲を始め、四十四年の「藻岩の緑」、大正二年の木原均作詞の「幾世幾歳」の作曲をも行っている。又、樋口桜五は大正三年寮歌「我が運命こそ」の作詞、桜井芳次郎は五年の「荒潮繞る」の作詞、植村泰二（T5）は「魔神の呪」の作曲をしている。植村は一色の後の名マネージャーで、後にPCL（写真化学研究所）、東宝映画会社等を創立、戦中は日本映画配給会社社長など映画界で活躍した。野球部員で寮歌の作詞、作曲者はこれ以降は暫く途絶え、大正十四年の優勝歌「桑楡哺紅に」の作詞者木村英男（T12）、昭和四年の「黒潮鳴れる」の作詞者須田政美（S3）まで見当らない。須田は寮歌の外、名応援歌「大鵬巡る」、野球部々歌「大陸の雲」の作詞者でもある。

札幌農学校寄宿舎の時代の項に於いて記述せねばならなかったものに、明治三十四年から開始された開識社がある。寮史を繙いて見ると、大先輩の橋本左五郎、松村松年、半沢洵などは何回となく招かれて講演をしているが、第一回開識社の江刺家昂、影山滋樹以降、野球部員の在寮中に於ける講演回数の意外に多いことには驚嘆する。年次順に纏めてみると、江刺家の五回、影山・住友の各三回、高村の七回、素木の一回、米山の三回、安部・板倉・丸山・柳沢の各一回、一色・桜井・後藤の各二回等である。高村倹次の七回は開識社出演回数の最高記録である。

この時代の野球部員では大学卒業後、台湾に赴任、活躍した先輩が可成り多いのが目立つ。素木、一色、後藤は、野球部長

の松村松年の弟子となり昆虫学を修め、素木をトップバッターとして次々と台湾に送られ、台湾の昆虫界の権威として多大の貢献をし、後年の渋谷常紀と共に皆、台北帝大教授となっている。渋谷は戦後帰国し、北大教授となる。又、桜井、三宅（T5）、三浦も渡台し農業試験場等に於いて活躍している。

農大対小樽高商野球戦も、大正七年の北海道帝国大学の独立により、北大（本科・予科・実科）対高商野球戦となり、更に、大正九年九月には予科が桜星会野球部として本科（文武会）と分離したので、大正十年度からは北大予科対小樽高商戦となり、その第一回（春季）は12－1、第二回（秋季）も7－3で予科が勝利を納めている。桜星会野球部の独立に対しては、大正九年度の文武会野球部主任の広瀬国康（T5）の斡旋尽力が大きかったと言われている。因みに予科野球部独立までの対高商戦の成績は13勝2敗と圧倒的な勝数を誇っている。

初代恵迪寮時代（後期）

明治四十四年から始まった京大主催全国直轄学校野球大会は、大正十年から全国高専野球大会と名称が変わった。北大予科は此の大会から参加、緒戦に強豪六高と対戦し延長十五回、3－1で惜敗したが、延長戦の大会新記録を作り北大予科強しと其の名を揚げた。この試合は、緒方直光（T8）・渋谷のバッテリーの外、富安行雄（T7）、重松保彦・松川篤治（T8）、祖父江計、安達良之助、玉眞俊雄（T9）、建部忠一（T10）、本郷葉留樹、山尾三千雄（寮外生）等、前記広瀬を助けて予科野球部の独立に尽力した面々が出場している。富安、玉眞の寮の委員二期の外、皆、夫々委員一期を務めている。重松は医学部進入の第一号である。当時は大正七年の高等学校令公布により、所謂ナンバースクール以外の高等学校が地方にぽつぽつ開校し始めた頃で、新潟、松本、山口、松山高校が大正八年に、水戸、山形、佐賀高校が大正九年に開校したばかりであった。

緒方は神戸一中の名遊撃手で、北大予科へ入学後投手として大活躍をしたが、スキーも仲々の名手で大正十三年の全日本スキー大会のジャンプで優勝、翌十四年には、優勝は伴素彦（T11）に譲ったが、二位となるなどの万能選手で寮の炊務委員も務めている。伴は後日、日本製粉社長、冬季オリンピック団長、日本スキー連盟会長となっている。又、伴と同期の村本金彌も第一回のスキー複合競技に優勝している。当時の部員は、春夏秋は野球、冬はスキーと言った人が多く、野球部とスキー部との関係は非常に深いものがあった。

「恵迪寮史」によると、各運動部毎に纏って居住する部屋割制度は大正十五年頃から出来たものであると言う記述があるが、これは今少し早く桜星会が発足して間もない頃からのものと推定される。現に、大正十一年入寮の伴素彦、丸尾忠、龍田不二雄、青木信之、小林辰雄、村本金彌、山中幸次らは北寮二十六号室から二十八号室の野球部々屋に一挙に入室したと言っ

ている。この部屋割制度は当時の殆んどの高校の寮で採られていた方式であった。筆者の在寮時代（S9－S12）もこの制度がそのまま引継がれていたが、そろそろ此の制度に対する可否が討議され始めた頃でもあった。

大正十一年には、全国制覇の野望に燃え、六月中旬から早大出身の石井順一をコーチに招き、寮外に合宿して猛特訓を実施した。この特訓は洵に厳格熾烈を極め血尿を出す者まで生じたが、よくこれに耐え著しい成果を納めたが、終わって安達、祖父江、小林、建部が発熱した。有馬教授の診断は猩紅熱の疑いありと言うことで全員円山の避病院に運ばれてしまった。時あたかも摂政宮殿下（後の昭和天皇）の北海道御巡幸の前とて疑わしき病人は即刻隔離と言う当局の方針であったらしい。入院した患者の方は直ぐ熱も下がったが、病院の食事たるや重湯、卵と牛乳のみ、空腹やる方なく遂に残留部員の重松、伴、村本、丸尾は面会謝絶の病院の塀を乗り越えて食糧の密輸を決行したと言うエピソードと共に、これが期末試験の中止、全運動部の遠征取止めと言う事態にまで発展し、他の運動部員から喜ばれたり恨まれたりしたと言う珍事となった。これが所謂猩紅熱事件であるが、機会があったら今少し詳記してみたい。

大正十二年の入寮部員には、伊藤健夫、星野三郎（後の武智）、小野信次郎、新谷哲男、木村英男がいる。皆、寮長及び委員を一期づつやっている。星野は部員の中では工学部進入の第一号である。大正十三年の入寮部員は明白でない。大正十四年の入寮部員には、丸尾斉（後の宮原）、平間章、斉藤良作、斉藤八郎など医学部進入者の多い年で、森田昇、鳥尾勝一の工学部進入組、山本眞、大槻三郎の農学部進入組など多士済々であるが、殆んどの者は在寮期間が短く森田が購買部長をしたに過ぎない。鳥尾、丸尾は交替で投手と遊撃を守りチームの要であった。松田俊彦、榎本勇次（後の近）、濱田正太郎（T15）、石塚星郎、楠見正雄（後の東）（S2）等も寮の委員として活躍している。特に、松田は第八十八期委員会の炊務部長時代に同僚委員の軽部、木村と共に大奮闘の結果、昭和二年の炊務自治崩壊時の負債の返却六年計画を三年にして完済したことは、自炊制度の復活時期を早め、昭和八年には復活の実現が見られたので筆者らは其の恩恵に浴することが出来た。又、松田の図案になる延齢草の寮生章の設定もこの時であった。これらに就いては「恵迪の青春」に於いて松田自身が詳述している。

一方、当時の野球部の状態を見ると、大正十一年から昭和三年の間の対小樽高商戦の成績は二勝十敗と言う惨憺たるものである。尤も、大正十三年及び昭和三年には小樽高商は全国高専大会の東北地区大会に優勝し其の代表となるなど優れた戦力を有していたので、寧ろこの時代が小樽高商の全盛期であったと見るべきであろう。この敗戦続きに大正十五年には、高専大会出場を辞退し、その遠征費用を以って太洋倶楽部の久慈（早大出身、市議、巨人軍結成時の主将）をコーチに招き猛練習を行った。秋季高商戦は久慈の采配の下、小樽で戦い、六回を終わ

って5－4と、予科のリードで七回表を迎えたが、高商亦々二点を入れて逆転されたが、予科は苦心の延引作戦を採り日没のため六回コールド勝ちと言う珍しい一勝を得ることが出来た。ルールに暗い応援団は何方が勝ったか分らずグランドに雪崩込み、始め高商側が万歳、次に予科が万歳を叫び乱闘騒ぎ寸前の珍現象を呈したと言われている。伊藤、星野、平間、山本、森田、丸尾及び両斉藤などは、これが予科三年間の高商戦で味わった唯一の勝利であった。筆者の在学時代、平間、斉藤などは医局員であったが、高商戦勝利の夜は祝勝会の終了後、一升壜を下げて合宿に現れ、その喜びようは我々当事者以上のものがあった。

昭和三年には、大沼正夫、西川利通、飯泉文蔵、須田政美の入寮者及び地元の堀越義雄・長谷川誠ら多数の精鋭の入部があった。台北一中出身の大沼と札幌一中出身の堀越は共に中学時代の名捕手であったが、堀越が投手に転向したので、以降六年間、堀越－大沼はバッテリーを組むことになる。

この年の春は理学部の本館建設工事のため、グランドは後の第二代恵迪寮前に移ることとなり、これが完成する六月までの重要な時期に練習場を持たず、昨日は中島、今日は札幌二中、明日は苗穂（札鉄グランド）と練習場を求めてジプシー生活を行ったが、一日も欠かすことなく練習を続けた。それには主将榎本（後の近）、マネージャー大槻は毎日のグランド借用の交渉と全部員への伝達には言語に絶する苦心を要したと述懐している。近は後日郷里の新発田で医院を開き何期か市長も務めていた。

昭和四年には、増原恒、高田裕、内藤孝三郎、広森寿一が入寮。翌五年には宇田川徳雄、横地稔、曽我満義の入寮があった。昭和四年から十年に至る間の対高商戦の成績は十勝二敗の好成績で、第二期黄金時代の到来となった。大沼、堀越の入部した時には、内村祐之（医学部教授、鑑三の長男・一高時代に早慶を破り全国一となった名投手）が毎日昼休みに医学部のローンに二人を招き最新の投球術と投手の心構えを伝受したと言われている。特に、大沼は内村教授の折紙付きの闘志溢れる熱血漢で、後日、折に触れ「大沼君位の気概がなければ駄目ですぞ」とよく部員に言われたそうである。又、大沼と親友の田村貢応援団長との名コンビは、高商戦等に於いて遺憾なく発揮された由である。大沼は昭和五年の第九十期委員会では石塚と共に委員長の水永佼夫（S2・後の内田）の下に委員を務め、又、第九十二期の寮務部長の際には、コロンビア蓄音機からの都ぞ弥生のレコード吹込みの申出に対する接衝、並びに音楽部員を引率して上京し吹込を完了した経緯は、「恵迪の青春」に詳しく書かれている。大沼は卒業後、台湾総督府に勤務、戦中、台湾の水稲二期作の僅かな休閉期を利用して亜麻の作付奨励の際には、北海道の帝国製麻から製麻工場を誘致したが、奇しくも堀越が工場長として赴任して来たので、亦々、堀越－大沼のコンビで事業を推進した一時期もあったと言うことである。

楠見、大沼、増原の三代の主将時代の桜星会野球部長であった宇野親美（予科教授・後に予科長）は、「楠見は厳格細心の名主将」「大沼は母校のために激しい気概を以って戦った男」「増原は明朗闊達、驚く程放胆な打撃の持主」と評している。当時は高商に勝つのは当り前、祝勝会でも宇野自身、技巧的に勝利感をかき立てたとまで言っている。確かに、この時代の選手には個性豊かな豪傑肌揃いの感が深かった。

第二代恵迪寮時代（初期）

昭和六年には、塩沢清、浅野秀雄、鈴木武夫（後の本山）、羽田幸雄、高橋政治、鎌谷士、大野四郎（後の榛谷）、森芳夫らの入部があったが、寮は十八条の第二農場西南牧草地区に移転のため四月末に閉寮となったので十一月の第二代恵迪寮の開寮まで寮生活は出来なかった。この閉寮期間は野球部員にとって練習に試合に重要な時期であったが、各部員の宿舎や生活状況は詳でない。開寮後、入寮したのは前記新入部員の中、塩沢、浅野、鈴木、羽田で他は寮外生であった。後に、塩沢は委員長、他三人も委員を務めた。塩沢は馬力の権化且つ理論家で筆者の予科時代の監督であった。次いで、川村勇、渡辺光、井上琢司（S7）、古田土肇、関川礼三、鹿野達三、長島新、坂部英夫（S8）と寮外生の伊東正信、鈴木安夫、横田長光、井田豊秋らは筆者の一年先輩で共にグランドを駆け廻った仲間である。

昭和十年の春秋の高商戦の連勝と、此の年から開始された高校のみの大会、即ち明治神宮球場で行われた第一回全国高等学校野球大会では、高校屈指の伊東－古田土のバッテリーの活躍で優勝寸前まで進出する好成績を揚げ得た。この時分が第二期黄金時代の頂点であった。

増原、川村、古田土の三代の主将は、球運には恵まれたが増原は学部卒業を控えた昭和九年の夏、石狩海岸で遊泳指導中に不慮の死を遂げ、川村も亦、シーズン中に風邪をこじらせ、引続いた寮委員の無理が祟り、学部進入後間もなく休学し翌年夏に帰らぬ人となった。古田土も学部最終学年のシーズンまで本科野球部の主将として大活躍をしたが、卒業を目前にして病魔のため他界したことは全く惜しみても余りある痛ましい出来ごとであった。

これで、筆者の時代までの恵迪寮で過した野球部の先輩達に就いての記述も終ることとするが、冒頭で述べたように結局姓名の羅列に止まり興味薄いものとなって仕舞い、貴重な紙面を汚すことになったことをお詫びする次第である。

八郎伯父のこと

伊藤雅夫（昭和十一年入寮）

伯父、小松八郎の想い出などです。明治四十三年九月一五日―大正二年十二月一日恵迪寮生、第三十六期恵迪寮炊務購入委員、東北帝大農科大学獣医卒。母方の伯父で、福島県本宮町出身、満鉄の公主嶺農事試験場の場長を勤めました。私が中学生の頃（昭和ひと桁）出張の折々東京の家を訪ねて滞在し、私の父（陸士・旭川師団の山砲小隊長として奉天戦に従事即ち乃木第三軍の先峰）と歓談しておりました。私を北大に進める相談は出来たようで、私も納得しておりました。

さて、満州。父は日露の役後、奉天の西北の法庫門の守備隊長を勤め、その頃は鉄道沿線の治安も良かった由ですが、大正の軍縮期に入る頃には馬賊がはびこるようになりました。列車の襲撃は西部劇のようで、しかし必ず便衣の仲間が先乗りしており、打ち合せの地点で列車を停止させ、待受けていた馬賊がこれを襲うというやりかたでした。八郎伯父は大きくて恰幅が良く、馬賊の頭領にも一目置かれ、彼等の巣窟に招かれたこともあったと聞きました。馬賊の歌の流行った頃です。

八郎伯父は恵迪寮を想い、心の郷里と呼びました。農学校と農場を語りました。札幌に学び、満州に来れと説きました。私は北大工学部二年の夏（昭和十五年、ノモンハン事変の翌年）、興亜学生勤労報国隊・満州建設土木特技隊・北大学部及び土専隊の隊員として赤い夕陽の満州に居りました。当時二十三才。陸軍少尉の父が夕陽を見たのも二十三才の時でした。三十六年のタイムスリップです。

もう一人の叔父、小松多利松。大正六年九月十日―大正九年九月一日恵迪寮生、第五十九期恵迪寮購買庶務委員、東北帝大農科大学農学卒。母の弟で、各地学校の教官の後、割合若くしてなくなりました。

さて、八郎伯父、終戦、引揚。郷里の福島県で県庁に働きかけて安達太郎山の東麓に農場を開きました。三十五年後（昭和五十五年）此の地で没。開拓者の墓らしく野山を負います。本宮町の西にあたります。町の東側には阿武隈川が流れ、その畔りに石雲寺があり、父の墓所でもあります。私もやがて入れて貰います。「豊平の川盡きせぬ流れ」との校歌は、その歌曲は米国北軍の軍歌のもので、駐在武官を務めた父の愛唱するもの、

依て伯父と父との合唱が聞かれる思いです。

［追記］江端　清先輩のこと。大正十四年四月十四日ー昭和二年八月三十一日・恵迪寮生。昭和七年北大工学部鉱山卒。ノモンハン事変の生き証人です。ラグビー部の大先輩でもあり、毎月銀座で会います。私は恵迪寮に三年、ラグビー六年、この間、昭和十三年三学期寮委員長、陸軍五年、土木技師五十余年、皆様今后とも宜しく。

天衣無縫
―河晴彦氏、南西諸島沖にて特攻死す。―

竹内茂雄（昭和十九年入寮）

昭和二十年、それは未だ第二次世界大戦の最中と思っていた頃で、我々予科二年生は専ら勤労作業で軍事工場や農村に派遣されていて授業もたまに集中講義がある位の毎日を送っている頃であった。

そんなある日の朝、恵迪寮の朝食の時にたまたま帰寮していた我々に対して次の報告が為された。

その先輩のお名前を失念していたのだが、その方が「本未明、天衣無縫と書いた鉢巻を締めて出撃し、沖縄方面において特攻戦死した」という趣旨の電文が披露されたのである。

一瞬食堂を張り詰めた静寂が覆った。誰しもが黙々と箸を口へ運ぶだけであった。

その瞬間から小生にとってはこの時のことが胸の片隅に重く沈む鉛のような思いとなって今日まで折に触れては気になってならない出来事となった。

その時までは正に寸暇を割いて貪るように多くの書を読み、友や先輩とも議論を交して人生や、特に「死」なるものについて思索を深めた積りではあったが、その朝に聞いた報告によって、どんな哲学も宗教もなんの助けにもならないような具体的な姿を持った重苦しさを持って「死」なるものが目前に立ちはだかったのである。

平成七年、終戦から五〇年を迎えた節目の年としていろいろな行事や放送が行われるに及んで、小生も長年心の片隅に消えること無く秘めて来たその先輩への思いを、先ずはお名前を思い出すことから始めようと思って友人達に呼び掛けた。それは同年九月のことであった。

小生は、昔風に言っていわば隠居して以来、「楡子庵便り」なるものをほぼ毎月作成し、内容によって勝手に相手を選んでは、受け取る友人達の迷惑も顧ずに送り付けて楽しんでいるが、それを通して呼び掛けたのである。

その結果大勢の恵迪寮の先輩や友人達が様々な情報を届けて下さり、そのお蔭でお名前ばかりでなく、その方が戦死されるまでの詳細な経過が判明した。

その方を同窓各位にご紹介するのにはもっと適切な方々がおられると思うし、又青春を謳歌した楽しい懐古談や明るい話題の多い恵迪寮関係の紙誌にご披露するのは必ずしも適当とは思えないのだが、恵迪寮の伝統や歴史を語る時、同窓として決して忘れてはならないことの一つと考えるので、非礼を顧ず、調査に協力して下さった諸兄への謝意を込めて一端をご披露する。

その方のお名前は河晴彦様である。

河さんは、昭和十六年に予科、恵迪寮へ入学、入寮されたが、戦争開始から一年目の昭和十七年には学年がそれまでの三年から二年半に短縮されたばかりでなく、昭和十八年九月二十三日には理工科系以外の学生には、それまで学生にあった徴兵延期の制度が廃止された。

従って河さんは、昭和十八年の十月には農学部昆虫学科へ進まれたばかりでなく、その年に行われた、かの有名な学徒出陣によって昭和十八年十二月九日には舞鶴海兵団に二等水兵として入団され、海軍第十四期飛行予備学生に組み込まれて約三か月間飛行訓練を受けた後に土浦航空隊で約四か月間、基礎教育として激しい訓練を受けた。

昭和十九年五月からの九州出水航空隊における中間練習機教程を経た後、同年九月から筑波航空隊に配属されて特攻隊員としての速成猛訓練に入り、同年十二月二十五日には海軍少尉に任官したが、翌二十年四月二十五日には既に鹿屋基地に配属されて出撃の日を待ちながら訓練を続行。そして同年六月二十二日、遂に神風特別攻撃隊第一神雷爆戦隊員として出撃し、南西諸島方面において戦死された。

小生は当時富良野において級友と共に七名で農家に分散し、泊まり込みで米作りや畑仕事に精を出していたが、このように各自の勤労動員先で仕事に打ち込みながらも、暇をみては読書や寮歌放吟に明け暮れていたが、予科生達がこのような生活を送っていた時に、河さんは、特攻隊員として短期の、極めて密度の高い「死」への訓練に明け暮れておられたのである。

河さんは福井県小浜市のご出身であり、大正十二年二月十一日のお生まれである。従って享年二十二才。なんと言う若さで

壮絶な死を遂げられたことか。

恵迪寮時代は剣道部の主将であり、成績も常にトップであったとか、その優れたお人柄によって多くの友人達から愛され尊敬されており、小生達が在学当時生徒主事であった宇野親美先生が絶賛しておられた由。

ここで神雷特攻隊に触れる。詳しくは類書に譲るが、友人に教えられたのだが、今年の朝日新聞五月十三日号の神奈川特集「歴史の周辺」なる記事にも詳しく説明されている。

この隊の中心は「桜花」なる人間魚雷であり、目標の二〇キロ手前で母機である一式陸攻からから切り離され、一人の操縦で目標に激突する、文字通り人間爆弾である。この桜花の航続距離が短いためにそれを運ぶ陸攻が米空母の哨戒圏に入る必要があり、従って米軍機によって撃墜される可能性が極めて高い。そのためにこれを援護する必要があって河さんの所属する「戦闘第三〇六飛行隊」（零戦四十六機）が配属された。

しかし、沖縄が米軍によって徹底的に壊滅されたその最終日、軍上層部は最後の期待を寄せて初めて零戦も五〇〇キロ爆弾を提げて桜花と共に出撃し、沖縄沖に散ったのである。それは、昭和二十年六月二十一日から二十二日にかけて行われた菊水第十号作戦であった。この時の零戦が第一爆戦隊と呼ばれており、この中に河さんがおられた。そしてこれが神雷特攻隊の十度目にして最後の出撃であった。

四月に鹿屋基地に配属されてから僅かに二ヶ月。しかしこの間のお気持ちを考えると小生などは背筋の寒くなるような慄然とした思いに駆られる。

この当時の河さんのご心境については、平成七年六月に三十年振で復刊された「あゝ同期の桜・続」に多数掲載された書簡から窺い知ることが出来る。

河さんの幼い時に亡くなられた父上に対しては勿論、ご存命の母上、当時いずれも戦地にあった兄上二人に対する切々たる思いに胸が痛む。河さんは三人兄弟の末子であった。

同書に、母上河　家恵様の「像に捧ぐ」なる手記が掲載されている。ここでは東京駅前に立つ戦没学生の像に触れているのだが、その像に「愛」と「アガペー」（筆者註：ギリシャ語で、非打算的、自己犠牲的な愛を指す）とだけ記されていることに言及し、

「私は未熟にしてこの像の制作者がどういうお方であり如何なる意図の下にこの像を作られたのか、承知し得ないのである。けれどもアガペーの愛の一字は誠に若人達の生涯とその死の意味する所を表現して余す所がないものを私は感じる。烈々たる碧空に双手を伸べ、彼等は愛する同胞にアガペーの愛を訴え求めている。祖国日本の新しい建設と世界平和への祈りがそこにこめられていることを私は思う。」

そして、その傍らを全く無関心で像を仰ぎ見ることもなく過ぎて行く人達に嘆きの目を向けておられる。その後に続く文も生き残った我々に対して多くの示唆を与えてくれるが、最後に、

「次の世代の人々の力強い建国の槌音を雲流るる果まで響かせよう。それのみが唯一の手向けの幸として、大いなる愛に応えよう。感謝と希望とをもって、吾らも亦、後につづかねばならない。」

と結んでおられる。

この母上の言葉からも、河さんのご人格を窺い知ることが出来るように思う。

鎌倉の建長寺の塔頭の一つである正統院には一九六五年（昭和四十年）に設けられた（最初は木製であった由）神雷戦士之碑があり、そこには「桜花」の石碑と共に河晴彦様や同じく先輩でこの特攻隊で戦死された山崎幸雄様を含む八百二十九人に及ぶ戦死者のお名前がステンレス製の銘板に刻まれているが、それを拝する時、その死の重みに圧倒される思いがする。

五〇年余を経た今日、恵迪寮同窓の一人として心からお悼み申し上げる。

最後に様々な情報をお寄せ下さった方、特に大橋智様からは、河さん戦死当時の恵迪寮幹事長として、又同じ剣道部員として貴重な情報を頂いたし、河さんの友人であった小川周三様、その一年後輩に当る北澤薫様、この方々からの情報連絡に尽力してくれた同期の柴田松太郎、角幡春雄、畑島好古、中西三郎の諸兄、他北大関係者以外からも貴重な情報を頂いたが、これらの諸氏に心からお礼申し上げる。

（参考文献）「あゝ同期の桜」・海軍飛行予備学生第十四期会編（一九九五年五月光人社復刊）
「あゝ同期の桜・続」前同（同年六月同社復刊）
「陸攻と銀河」・伊沢保穂著（一九九五年一〇月朝日ソノラマ刊）
「特攻－外道の統率と人間の条件－」・森本忠夫著（一九九二年六月文芸春秋社刊）
「神風特別攻撃隊写真集」（一九九五年十一月モデルアート社刊）
「朝日新聞」一九九五年五月十三日号神奈川特集記事



アラビア太郎さんはナンバーワンです

田村甯弘
（昭和二十九年入寮）



戦前篇

経済界で活躍している同窓はごまんといる。しかし、数ある企業の中で創業者かつオーナーである著名人は、狭い私の知識の中では、スケールの大きい風雲児として、戦前、巷に人呼んで満州太郎、戦後はアラビア太郎と呼ばれた山下太郎氏。ほかにはキャノンを作った医学部出身の御手洗毅氏しか思い出せない。どちらも一部上場の会社で日本経済の発展に寄与しているのはご承知の通りである。この歴史的かつ伝説的な山下太郎大先輩に、就職の事で恵迪寮と進修学寮で一緒だった林産の里崎中君と小生は最終学年の三十二年に二度にわたり、お会いした。計二時間程の短い時間ではあったが、はからずも、見も知らない、ただ後輩と言うだけの若者達に貴重な時間をさいてくれ、示唆に富む味わい深い人生訓を頂だいし、また暖かい人柄にふれ、非常に感激をし、その後の折にふれての屈折した時の励ましとなっている。その出会いについては後に述べたい。

アラビア太郎と言っても昭和の後半や平成卒業の若い方々は

知らないと思うので簡単にご紹介したい。杉森久英氏の「アラビア太郎」と、中央公論「起業家五十人」を参考としている。尚先輩の敬称は省略する。

明治二十二年（一八八九年）、秋田で生れ、楠木正成の後裔と称した。小学途中で東京に移る。中学は慶応で、おしゃれ大好きで洋服、帽子、靴等は一流店の最高級品しか身につけなかったと言う。農学校ではキリスト教系の青年寄宿舎にいた。卒業成績は勉強をしなかったのでどんじりだった。卒業後、山下商会を作り、食品のオブラートを発明し大儲けをした。後に鉄、肥料、雑穀等を扱い、第一次世界大戦の好況もあって順風満帆と仕事をのばした。世界大戦も終結に近い大正七年秋、米の高騰で米騒動が起き、同年十一月に戦争は終った。遠く離れたヨーロッパでの戦争で火事泥的に儲けていた日本経済は反動で恐慌になった。山下商会も例外ではなかった。また米の暴騰時、中国米を満州鉄道に納める契約で、一部米を納入した時点で不景気で米価が暴落した。満鉄は中途で契約を破棄をし、山下は損害を蒙ったが損害賠償を満鉄に請求しなかった。この借りを恩に着ていた満鉄の松本副総裁は、満鉄の社宅五百戸を建設、大家となって運営をして貰いたいと依頼した。山下は生命保険事業団から金を借りて社宅を作った。

当時日本内地は不景気と頽廃的なムードであった。血の気の多い青年が夢に見る新天地は満州であった。広々とした大地に果てしもなく続く玉蜀黍と高粱畠に、小銃を肩に背負いモーゼルを腰にさげ、がっちりした不細工な蒙古馬にまたがり、大きな丸い夕日を背に駈けめぐり、五族共栄の理想の国を作ろう。こんな夢と理念に燃えた若者たちが、馬賊になりたいと思ったものだ。宮崎滔天作の「馬賊の歌」は若者の心をさらにかきたてた。おれも行くから君も行け、狭い日本にゃ住み飽いた。波の彼方に支那がある。支那にゃ四億の民が待つ。今から思えば、誠に日本人の身勝手な事を歌っているわけだが、当時の感覚では余り不自然な事でないのだから、時代の歴史的評価や視点は歴史の流れで大いに変わるという典型であろう。

昭和十五年には学生時代からの親友田所哲太郎北大教授の為に、生化学研究所別名山下研究所を北大に寄贈している。世間では山下を山師とか言う人もおったが、人との交際と仕事の基本理念は誠実一路をモットーとしていた。仕事はどんどん増えてゆき、誰がつけたか、満州太郎と言われた。終戦の時には満州と華北になんと日本一の五万軒の大家になっていた。仮りに一戸平均四千万円の現在価格に換算すると二兆円になる。この莫大な海外資産は敗戦と共に、風の中の羽根のように消えた。常に前向きで強気の山下も、落胆せざるをえなかった。

戦後編

初めてみる小型な車ジープが軽快に町を走り、背が高くスマートで血色のよい粋にユニフォームに身をかためたGIが、

口笛を吹き吹き陽気に町をかっ歩している時、日本の都市は焼土と廃墟の中で、夢も希望もなく貧しい衣服をまとい、栄養失調の身体に鞭を打ち食わんが為に皆な芋がゆをすゝりながら必死に働いていた。気の遠くなるほど莫大な財産を失ったが、泉岳寺の山手で、大名屋敷跡が並ぶ元明石藩下屋敷の芝高輪北町の大豪邸、四千坪は残った。ここが五十五年体制の保守連合の契機となる三木武吉、大野伴睦の会談に提供された。戦後は、はなばなしい経歴の中、どん底時代で、戦後三、四年は進駐軍関係のただ金の為の商売をしたり、闇商売のブローカ的な事までした。過去の栄光が輝かしいだけに、その落差はみじめだった。結局、過去の専門の住宅建設、またいろいろな会社の社宅建設を手がけ、朝鮮戦争特需景気で一息ついた。

戦後のエネルギー革命は黒ダイヤと言われた石炭から、安くて扱い易い石油に変わっていった。日本は太平洋戦争で総合力で敗れ、その原因の一つは石油不足であった。また国内では原油を殆んど産出しない事から石油開発に関心をもち、石油を掘りたいと思い日本輸出石油会社を作った。重役陣は石坂泰三、藤山愛一郎、桜田武、石橋正二郎、山本為三郎、平塚常次郎他の豪華メンバーである。

昭和三十一年のスエズ動乱もあり、米欧の巨大メジャーに支配されていた中近東が、石油資源の利権供与先分散を考えているとの情報をえ、石橋首相、岸外相の紹介状を貰い、サウジに飛び利権交渉開始の合意文書を取り交した。決定した以上、日本側は新会社を作り、多額の資本金を投入し、会社形態を整え、アクションを起さないとならない。石油採掘の成功率は業界常識として、三〇本に一本出ればよいと言う大変リスクの高いものになっている。この様な大きな国策的プロジェクトでリスクの高いものは、スタート時に政財界の強力なコンセンサスが必要な事は言うまでもない。そこで親友で経団連会長、財界総理の石坂泰三を会社発起人代表にすえ、一挙に正攻法の中央突破作戦をねらうが、いかに太っ腹の石坂も事の重大さにひるみ、何回も断わり、家族にも「今度は無一文になるかもしれない」と告げ渋々引き受けた。

この様な政財界の動きに対して、当時石油問題の学会の権威、脇村義太郎東大教授は「大変なリスクを冒して、貴重な外貨を使い、日本の企業が掘るよりも、安全確実なメジャーの原油を買うべし」と言う論文を発表して反対した。しかし岸内閣も大変重要な産業と言う位置づけから、国をあげてバック・アップすると声明、電力、ガス、鉄鋼、生損保、商社等の有力企業約四十社の参加によるアラビア石油が発足した。

採掘の調印迄アラ石の代表団と王族と妨害するメジャーとの交渉は駆け引とスパイもどきの情報収集、根気と我慢の連続で、言語に絶する困難があった。しかもサウジとクウェートの二つの関門を乗り込えての調印だ。その後両国の中立地帯の海上に油層を求めて、ひたすらに堀りすすんだ。昭和三十五年一月、深度一六七〇米に達した時、待望の原油が噴出した。試堀第一

号で商業ベースの大油田をあてると言う事は、石油開発史上でも珍しいラッキーな成功例と言われている。戦争中物資不足の日本軍は一発必中なんて哀れな事をいっていたが、アラ石は小説に出てくるような強運の夢男をトップにもち、この会社の前途が約束されたようなものである。山下が吉田茂元首相に発掘成功の報告をしたら「小林中君、石坂君、君と三人の首吊りが見られず、残念だなあ」と憎まれ口を叩き、喜びを表現した。

この壮絶な開発ドラマは日本人離れをした壮大な構想力とスケールで、長年山下が培って来た政界、経済界のトップ級との長い間の厚い人間関係、深い結びつきの賜だった。山下が頭を下げてお願いすれば、超一流の豪華応援体制が出来、また山下を取りまく役所、民間外人関係のサポーターが時、場所、機会に応じて手品師のごとく現われ、見事なパイプレイヤーの役割りを果たし舞台から消えている。山下直系の部下達も時には徹夜の仕事や、仕事には神経質な山下に怒鳴られながら、むつかしい仕事をやり遂げた。この事業を企画し、乗り出した時は齢い七十歳近い頃で、世間の一般常識から言うとご隠居さんの年であり、静かにじっと枯れて、わび、さびを楽しみ余生を送るのが常識と言うものだろう。所がこの年で日本にはなかった石油開発、多額な資金を要し、自己資金では出来ない大変リスキーな仕事を自ら旗を振り、勝利を確信し、一発勝負をかけたわけだ。勿論多くの有力な政治、経済界の友人を説得し協力を求めながら、邁進する。自ら炎熱、酷暑の砂漠の地で、回教の戒律故に羊肉料理のみを食べながら、長期にわたり、経済人の生命を賭け、絶対に負けられない立場と、交渉相手はお国柄、駆け引きの強い海千山千。粘りと我慢の連続、絶望と希望、よくぞあの年で頑張ったと、その精神力と怪物的馬力にはただ脱帽と敬意を表する以外ない。

山下の仕事の成功は先にも述べたように、時の政界、経済界の超一流の人達の支えがあった。満州時代は山本条太郎、松岡洋右、星野直樹、岸信介、東條英機。戦後は吉田茂、三木武吉、大野伴睦、鳩山一郎、石橋湛山、佐藤栄作等と親しかった。財界では松永安左衛門、石坂泰三、藤山愛一郎、井坂孝、津田信吾、小林中、永田雅一、稲山嘉寛、山本爲三郎、平塚常次郎、弘世現、桜田武、石橋正二郎、賀屋興宣、和田完二等々。政界で付き合っている仲間で三つ四つの内閣メンバーが出来、財界の元師、大将級の仲間は一個小隊以上と思われる。これ等の日本を代表するお歴々と対等に付き合うと言う事は本人自体も、そのレベルに当然あり、会合、宴会、電話、政治献金、慶弔等の頻繁の接触があって人間関係もスムーズにいくのは勿論で、その点天性とも言える気配りは、或る時は外交官、或る時は一流営業マンのように細かい所に気遣いをするので、山下の魔法にかかった山下のシンパサイザーは沢山おり、少々の無理なら、皆「山下の言う事だから」と通してくれた。昭和三十九年東京オリンピックが開催された時、アラビア石油は設立以来六年にわたる欠損をすべて精算し、一割の初配当をした。年間販売量

一千万キロリットル、日本の原油総輸入量の15%に当った。

この夏、北海道大学から講演の依頼を受けた。北大学長杉野目晴貞の紹介をうけ、壇上に立った山下は、数千の尊敬と好奇心で一杯のきらきら光る若い瞳の前で、若き日の自分の姿をダブらせながら、おもむろに語りかけた。「ご承知と思いますが、私は五十年あまり前、本学の前身である札幌農学校で学んだ者であります。本日ここに、私の後輩である若き諸君にまみえて、お話しする機会を得ましたことは、まことに痛快に堪えないのであります」。敗戦による満州での経済基盤の喪失、そして不死鳥の如く日本人のスケールを越えた大仕事を中近東に成功させた冒険家山下が、企業実績の裏付けの上に気分が高揚し、痛快そのものがぴったりだったのだろう。

昭和四十二年、七十八歳でこの世を去っている。しかしサフジの沖合では今日もフレア・スタックスが赤々と焔を吐いている。雑誌「ダイヤモンド」によると、昭和四十六年から五回程並みいる、歴史も規模も、数万人の従業員のいる新日鉄、トヨタ、日立、東電等の大会社をおさえ、日本人三百五十名、外人二千五百人のアラビア石油が日本一の収益会社になっている。この快挙を山下は勿論知らない。もし、生存中に、日本一を達成していたら、きっと、「痛快、痛快の極み」か「大痛快だ」と間違いなく言ったはずだ。「虎は死んで皮を残す」と言うが、これが、正に、適正、かつずばりの言葉だろう。

大先輩との出会い

私達が就職運動をした時は、日本も敗戦より十年一寸としか経っておらず、不景気を表す鍋底景気と言われた。大手の数と規模も今と比べれば小さく、全国卒業生も少なかったが、受け入れる企業も質、量共に小さく数が少なかったので、今同様に大変だったと思う。随分昔の事になり、記憶もあいまいな部分が多いのだが、月刊誌掲載の脇村東大教授の論文に北大出身の企業家、山下太郎氏がアラビアで、日の丸の旗の下で石油を掘る会社を作ろうとしている事を紹介していた。

この会社に入れば、海外で環境は厳しいだろうが、雄大でパイオニア的かつ男性的仕事が出来る。満州生まれで、型にはまった、風俗習慣と形式を尊重する堅苦しい日本的会社では、仮に勤めても長続きはしない事は初めから分かっていた。どうしてもこの会社を選ぶんだと本能的に感じた。恵迪寮、進修学寮ともに一緒で、やはり満州生まれで林産の里崎中君も、この会社は夢があると意気投合し、どうやったらこの会社に入れるかを考えた。それにはトップである先輩に面会し、入社したい心情と情熱を訴えるのが一番よいのではないだろうかとなった。

まず先輩の邸宅住所を調べ、東京に出て来た。朝七時、品川駅で里崎君と待ち合せ、高輪白金にあるお邸に向った。

一郭、一郭の邸がゆったり離れていて、緑の木々が鬱蒼とし如何にも昔の大名屋敷跡を彷彿させる環境だった。その中の一

郭を探し出し、ようやく目的地に到着し、やれやれと思った。生垣が道路沿いに整然と刈り込まれ、その生け垣の端から屋敷内へ入る道が二十米程続き、そこに時代劇に出てくる大きな武家門があり、扉が開かれていた。ここ迄くれば怖いものはない。若さで突撃だと、臆せず中に入り込む。

一瞬、植物園の中に入ったかと思うような、手入の行き届いた大きな庭園が広がる。しんと静かな庭の隅で木を切る音がした。これは植木の小父さんが仕事をしているのだなと思い、そこに近付き「お早うご座居ます。お仕事中、恐縮ですが、山下先生に大学の後輩が、挨拶に来させて戴きましたと、すみませんがお取りつぎ願えませんか」とお願いした。気持よく取りついでくれ、「間もなく外出するからその時に会おう」と伝えてくれた。ここの邸に来る迄の道々で、山下さんを社長、先輩、先生の呼称のうち何れをとるか、里崎君と話し合った。社長と呼ぶには未だ早い。先輩では軽過ぎて申し訳ない。中国流に先生が、尊敬の意味もあってよいのではないかと決めていた。

間もなく、小柄で温和そうだが、貫禄充分、頭はつるつるで、高級そうな背広に蝶ネクタイ、おしゃれな親父さんが出て来た。当方は自分を売り込むお見合いと同じだから精一杯良い声を出して「お早うご座居ます。大学の後輩の黒崎と田村です。今度先生が始められるアラビア石油に入れて戴きたく参りました。宜敷くお願いします。」と挨拶した。先輩はにこにこしながら「実はアラブから帰ったばかりで、土産を知人や料亭に届けようと思っている。その途中、車の中で話を聞こう。車に乗りなさい」と言われた。エンジンを始動していたキャデラックが主を待っていた。「はい」と素直に車の真中辺迄入ったら、今度は「先に乗るなよ」と注意を受けた。嫁に行った晩で「はい」と素直に降りた。その時は言われた意味が全く分からなかった。後に社会人になって、車の席順を言ってたものと理解をした。車中で、我々に色々人生談、財界人との交際等の話をしてくれ、「人は常に向上心をもたなければいけない。人生は修業です。それには本を読みなさい。一例としては吉川英治の宮本武蔵で、あれはバイブルです。あの中から何ものかを掴めるはずです」と力を込めて強調した。その間、知人宅や料亭に行くと七十近い親父さんが気軽に土産をもち挨拶してくる。こう言う細やかな気配りが、人の心を捕え、支持者を作るのだろう。

一回だけでは事たりなかったので、後日又山下邸を訪問した。二回目も前回同様、アポなしで黒崎君と出掛けたのだが、運良く居られ、「今朝は鳩山君の音羽御殿迄行くので車中で話をしよう」と言って、また車に同乗させて貰った。

「君達の熱心さは本物だ。君達を推薦する紹介状を貰って来なさい。その紹介状を事務局の石原君の方に届けてくれたまえ」「例えばどんな方の紹介状を貰えばよいのでしょうか?」「田所哲太郎学芸大学学長とか有名政治家とかだな」とヒントをくれた。また何を思ったのか。「家にも息子が居るのだが、もう一つ頼りにならなくてな。君達ほど馬力があればと思うよ。」

おだてとも、ぼやきともとれる意外な人間的子煩悩な事を口にする。後に中年になり、人生の機微が少し分った時、親父の立場は常に自分の子には自分以上の者になって欲しいと思う。息子の立場では家康と秀忠の関係で偉大な親父の二代目では普通人では落第、すごい事やって当り前、仲々つらいものだな、と同情する。「黒崎さん、田村さん、ここが音羽です。降りて下さい。」とさんづけで丁寧な表現をされ恐縮、感激をし、「有難うございました。」とお別れをした。若者にさえ、この様な優しい心遣いをする先輩に、四年前死んだ親父を思い出し、男が男に惚れる魅力とカリスマ性を感じた。

さて、黒崎君は衆議院議長の紹介状を貰った。私は大学の学生課長のご親切な奔走で田所学長の紹介状を戴き、喜び勇んで、東京大手町のビルにあった事務局に届けた。採用は九月以降になるとの事であった。学業の方は、自慢じゃないが低空飛行だったので一つ単位を落し、先生の自宅迄行って米つきバッタをして、レポートで勘弁して戴いた事を記憶している。私はつなぎに某財閥の金融機関に入ったのだが、今じゃ考えられぬ気狂い部落。月月火水木金金で朝は九時から夜十時迄の休みなし、二、三回大手町にはなんとか行ったが、途中で下宿を変わった事もあって、連絡不充分で幻の入社となってしまった。

その後、食品メーカーに入り、五年程ジャカルタとシンガポールの海外勤務をし、その後に独立した。細々と鶏頭と鶏尾をかねながら、名もなく貧しく生きている。龍の中の龍、キング・オブ・キングの先輩の旗の許で、もしも働いていたら、先輩の器量と運を分けて貰って、もう少しましな男になっていたか。それとも中東で、ベリー・ダンスで腰を鍛えられたレディの魅力の虜となり、回教徒に改宗して四人の妻を娶り、一ダース程の子供を作り、血縁のしがらみで身動きがとれず、ビルマの竪琴の水島上等兵の如く、サウジで「日本に戻りたい、だけど戻れない」とか言っているかも知れない。

先輩は生まれながらの社長で常に前向きの性格から、きっと天国でもじっとしておる事が出来ず、色々と大きな事業を企てているに、ちがいない。キャデラックは使えないだろうから、孫悟空を運転手にして筋斗雲を車替わりにし、雷の親父さん達を得意の社交術で友達にし、電気を電力会社に売ろうじゃないかとか。砂漠に雨を降らし、砂漠を緑で覆い、農業地帯にしようとか、或いは常温核融合の技術の完成を目指し、アインシュタインを初め多数のあの世の元科学者の知恵を借り工業化を計っているのではないかと思う。

雑誌「ダイヤモンド」によれば、我が同窓の社会的傾向は大器晩成であると言う。私のようなウルトラ晩成型は、どうもこの世では晩成を達成出来そうもない。自分でも承知であるが、組織人の時は我儘で、我が強くよい組織人ではなかったと思う。時も金も、喜怒哀楽もない片道切符のあの世で、先輩が頑張っているなら、今度こそ参加し、ウルトラ晩成を達成したい。

俳句

朝涼し

小沢久弥
（昭和十七年入寮）

春

白魚の桶の周りの少し濡れし
欄干に鳥の運びし春の泥
大阪の蛇屋の窓の春灯

夏

午後の海色濃くなりぬ百日紅
朝涼し船待つ人等皆新聞
打水の広き歩道の問屋街

秋

霧深き動物園の休園日
秋晴の運動会場に到着す
乗換えて支線に入れば柿の里

冬

午後急に風荒れて来し冬木立
障子貼る母の教えに従いて
肩掛けをして歳晩の占師

私の主張「無駄遣いをやめよう！世界に平和を！」

小林善樹
（昭和二十七年入寮）

「私の主張」と大上段に構えるほどのものではないが、田舎暮らしをやっている中で考えていることを述べさせていただくことにしたい。多くの方々、特に現役の方々には、だいぶ耳障りな点もあろうかと思うが、外野席からの意見もひとつの情報になろうかと思って、遠慮せずに書かせていただくことにする。

私はいま、兵庫県の農村で田舎暮らしをエンジョイしている。五十六才の時に会社勤めを切り上げて脱都会を果してから五年半になる。会社勤めを辞めたら、自前の土地で有機農法の家庭菜園を本格的にやりたい、という妻の希望もあって、もう一つ新たな人生をトライしようとした次第。年金暮らしで「農」の方は趣味でやっているのだから、気楽なもんだ、と言われても仕方ないが、手作りの新鮮な野菜のうまさは最高の贅沢だと思っている。

北海道で生まれ育って五十年を過ごした私たちにとって、関西での農作業は目新しいことの連続だった。冬の間も野菜が採れる、タマネギは秋蒔き初夏採り、etc. etc.明治時代の北海道開拓民の逆体験をしている訳だが、情報の乏しいあの時代の開拓民が事前にどこまで知っていたのだろうか、と当時の苦労に思いを致している。

一応は機械工学を学んだ私は四十年前に、熱力学の講義で「エントロピが最大値に達した時、地球文明は破滅する」ということを習ったのだが、当時は遠い未来の話だと思っていた。だが、高度成長の時代になって、浪費をうながす経済システムに疑問を抱くようになり、エントロピのことを思い出した。このままのシステムを続けて行ったならば人類文明は間違いなく破滅への道を辿ることになりそうだ、何とかしなくちゃならぬ、と環境保護の勉強を始めた次第。そうするといろいろなことが見えて来た。

わが家の庭の畑が四アールほど、その他に二・五アールの休耕田を借りて野菜などを作っていたが、昨年からさらに十三アールの休耕田の面倒を見てくれといわれ、合計すると約二十アールほどの田畑を耕作することになった。これだけの面積となると米をやらざるを得ないという訳で、昨年は生まれて初め

て米作りをやってみた。

苗作りから始め、肥料はレンゲ草とほんの少しの堆肥だけ、4日半もかけて手植え（一坪二五株という疎植）。除草剤も殺虫剤も使わなかったから、オタマジャクシやホウネンエビが無数にいたしカブトエビも何匹か見かけた。ツバメの飛び交うのもうちの田んぼの上が断然多かった。昔の除草機（手押し）を隣家から貰い、1度は使ったが、そのうちに草がどんどん大きくなってしまい、まわりからやいのやいのと言われて目立つところだけ一度草刈りをした程度で、辛い作業だと言われている草取りはやらずに済ませた。収穫作業だけは一式委託した。草取りを怠慢したため草にかなり吸い取られたらしく、収量は悪かったが、8アールの田んぼで夫婦二人のほぼ一年分にあたるだけの、意外にうまい米が採れた。人さまの分まで作るとなったらこうは行かぬだろうが、自分たちの食う分だけだからこそ気軽にやれる。昔ながらの鶏小屋でニワトリを五羽飼っている。ケージに押し込めて配合飼料により大量生産されている「工業卵」とは対極的な、黄身の盛り上がりがまったく違う「自然卵」だ。

夕方になると山のお寺の鐘が鳴る、という日本の原風景のような農村だが、農業従事者の老齢化、跡継ぎの農業離れの波がひたひたと押し寄せているのを目の当たりにしている。いま世界的には、今後数十年以内に食糧供給の危機が訪れ、売手市場になってしまうだろう、という警告が出されているというのにこれで良いのだろうか、と憂慮している。

全世界の穀物生産量がこの5年ほど停滞の兆しを見せて来たという。人口増が依然として続くなかで、これは実に重大な問題だ。Lester Brownはワールド・ウォッチ一九九五年十一、十二月号で、乳肉製品への課税などによって穀物消費を減らそうとか、農地を農業以外に転用することを国家的に制限できないか、などいくつかの具体的提案をしている。日本でもそのような取り組みを検討しなければならないのではないだろうか。その関係の方々にご一考をお願いしたい。そして皆さんには、健康のためにも食い過ぎは良くないですよ、食糧の無駄遣いをやめてください、と呼びかけたい。（参照記事：ワールド・ウォッチ一九九四年九、十月号、一九九五年十一、十二月号、Lester Brown/Hal Kane共著「飢餓の世紀」（ダイアモンド社）、朝日新聞一九九四八月十日、特集記事「飢えはやって来るのか」）。

小生、かって輸出産業の造船所に勤めていた頃は、米輸入賛成、国際分業論賛成と思っていた。しかし、田舎で自然とともに暮らして見ると、それはとんでもない思い違いだったことに気づいた。食物というものは地物でまかなうのが本来の姿なのだと思う。食物連鎖を考えると、その土地で生産されたものを、その土地にすむ生物（人間から微生物まで、植物も含めるべきだろう）が順番に消化して、最終的にその土地に戻す。これが自然との共生の大原則なのだろう。アイヌ民族やネィティヴ・

アメリカンあるいはアボリジニの生き方のように、必要最小限のものを自然から分けて貰う、というつつましいライフスタイルにもつながるのだが、身の回りで（化石燃料を使わずに運搬できる範囲で）生産されたもので衣食住をまかなうのが最も自然なのだろう。

だが、現代ではもう夢物語だ。私とて化石燃料により運搬された食糧を食い、ガソリンを燃やして自動車に乗り、畑を耕し、草を刈り、暖を取り（補助的熱源としてだが）、電気を使って薪を切っているのが実情で、大きなことは言えないのだが、できる限りミニマムにしようと努めてはいる。化石燃料に頼らない生活はもう考えられない、となれば化石燃料への依存度をミニマムにして「できる限り食い延ばそう」とするしかなかろう。話が飛ぶようだが、季節外れのキューリやトマトあるいは外国産の食品を敬遠することも、化石燃料消費の削減につながることにご留意いただきたい。

ここでわが家の下水処理を紹介すると、食物連鎖のひとつのリンクに過ぎない人間として、排泄物は土に返すべしという訳で、おがくずをまぶし酵素の作用で堆肥化する無臭トイレを探し出して採用した。生活排水の方は、バクテリヤによって浄化して畑に戻す新見式排水浄化法を採用している。

かって敗戦後に私たちが夢見た「アメリカンドリーム」をいま途上国の人々が夢見ている。しかし、その夢を全人類が果たすことは到底不可能、それほどの資源は地球上にはない。工業国の人々が現状のライフスタイルをエンジョイしながら、「君たちの分はもうないから我慢したまえ」と言えるのか。そんな権利がどこにあるのか、という重い問いかけがなされている。UNDPはHuman Development Report, 1994の中で「富める国の生活様式は、明らかに変えなければならないであろう」と明言している。先進国側の消費レベルを下げることが必要だ、と私は思う。

「資源は有限だ。食糧もエネルギも浪費してはならん！不要な物は買うな！節約を旨とすべし！」と主張すると、資本主義・商業主義が「内需拡大に差し障る、リストラができない、経済成長にかげりが出る」と反対する。どうも今の資本主義経済システムは、右肩上がりの成長を続けなければ成り立たないらしい。浪費を奨励しなければ成り立たない経済システムというのは、本質的に間違っていると私は考える。

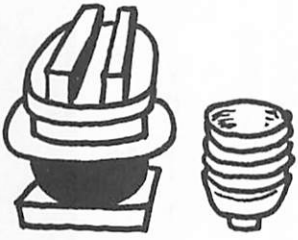
成長率がゼロあるいはマイナスであっても成り立つ経済システムはないのだろうか。そのようなシステムを探し出さなければ、あるいは、そのようなシステムに修正していかなければ、人類の未来はない、という難しい課題が突きつけられている。中央集権的な社会主義や共産主義のシステムがその任を果たし得ないことは立証されてしまった、と私は見る。（これは一昨年神戸で開かれたSustainable Society全国研究交流集会で論議された問題）。

さて一方、冷戦が終わってホッとしたのも束の間、次から次

へと続発する民族・宗教紛争に心を痛め、私は平和問題の市民運動に参加することにした。日本憲法の戦争放棄の理念の発案がアメリカ側からなのか、日本側からのなのか明確ではないが、いずれにしろあの当時の日本の民衆は心から歓迎して戦争放棄を受け入れた、と私は理解している。「憲法第九条と日米安全保障条約・自衛隊は共存することのできないものである。どちらもいい、と言うのは論理的な矛盾であって、二者択一しかないのだ」という法学者の指摘があるが、まったくその通りだと思っている。

昨年来注目を浴びている沖縄問題を根本的に解決するためには、日本憲法の前文と第九条に規定されている絶対平和主義の理念を高く掲げて、日米安全保障条約は廃棄し、アメリカを含む多国間の平和友好条約を目指すべきだと考えている。なお、戦争と軍備こそ、環境破壊の極み、無駄遣いの最たるものであり、「無駄遣いをやめよう」という環境保護運動は平和運動につながる。

最後になるが、中島正著「都市を滅ぼせ」（舞字社発行）という本を昨年読んだ。タイトルも内容も過激だが、都市機能が地球環境を破壊している。人類の滅亡を防ぐには都市を脱出して農を始めよ、一人当たり5アールあれば食える筈で、それだけの可耕地はまだ日本にある、と呼びかける一農民の本だ。警世の書として一読をおすすめしたい。なお、同氏著の「自然卵養鶏法」（農文協出版）は、わが家の養鶏の教科書である。



特集

阪神大震災を体験して

小久保　隆正
（昭和二十六年入寮）

昨年（一九九五年一月）の阪神淡路大震災の折りには、全国の北大同窓生、恵迪寮の寮友、及び、御家族の皆様からお見舞状や義援金を頂戴し、被災者の一人として、この誌上をお借りして厚く御礼申し上げます。私は自宅で就寝中、マグニチュード8の大地震に遭遇し、家屋の崩壊や死亡者数が、地区最大であった神戸市東灘区（追録の被害の状況表参照）に住んでいるものですから、今後の震災について、皆様のご参考になればと、敢えて筆を執らせて頂きました。

一、地震発生時のわが家

地震発生当時の、冬の朝の五時四十六分は、当地では、日の出まで、まだ一時間余もあって薄暗く、二階北側の寝室で、唯一人眠っていた私は、突然、ベッドの下から、突き上げるような激しい衝撃に、目を覚まし、とっさに、地震だと気付いたものの、これまで経験したこともないような、上下動が起こったかと思うと、急に横揺れに変わり、家具が倒れ、物が落ち、砕ける音に、一瞬、わが家が、崩れ、下敷きになるのではないかと、死の恐怖で、動けませんでした。その間の何秒間は、物凄く、長く感じ、気が付くと、寝室の西壁面に接していた整理箪笥は、北方に四、五十センチも横滑りし、北の出窓に置いたテレビや、キャビネットは、落下し、また、南壁面に設置していた飾棚や本棚は、倒れて、ガラス戸が、割れ、その中の陶磁器や、ガラス製の置物や、花瓶は、落ちて砕け、書物は、散乱し、ベッドの上も、床の上も、足の踏み場もない状態でした。

やがて激しい揺れも治まって、わが家は、崩壊を免れ、私も、命拾いをしたと感じましたが、それでも、何時また強い余震が起こるかと、神経は、ピリピリしていました。少し落ち着くと、寝室以外のわが家の被害や近所の様子、近くのマンションに住む母の世話に出かけた妻の安否が、気掛かりになりました。



近くにある筆者の兄の家

そこで私は、直ぐ起床し、ベッドの傍に置いた肌着に着替えると、ガラスの細片が、肌に刺さり、そのまま、着ていられないので、衣服を着なおし、足の裏を切らないように、スリッパを履いて外に出ようとすると、今度は、倒れた本棚が、出入口を塞いで、引戸が開かず、外に出られませんでした。それを取り除くために、床に散乱したガラスの破片を、書物ごと、手近の衣服で掻き寄せ、重い本棚を、少し動かしては、ドアの取手を引き寄せ、身体の通れる隙間を開けて、やっとの思いで、寝室から、外に出ました。

室外に出ると、洗面所から、水の勢いよく出ている音が聞こえ、駆けつけると、戸棚から、石鹸箱やタオルが落下して、水道のレバーコックを開いて水が吐出し、更に運悪く、落ちたタオルが、水盤の排出口を塞ぎ、水は、溢れて、廊下まで、流れ出ていました。水を止めて、二階の南のベランダから、神戸港の方を見下ろすと、御影浜から六甲道、三宮方面にかけて、数ヶ所で、火災が起こり、赤い炎と黒い煙が、立ち昇り、近くの公園では、激震に慄いた人達が、家から飛び出し、何か、叫んでいました。

階下に降りると、玄関に置いた姿見は、倒れて壊れ、応接に置かれたテレビは、コードが引きち切れて床に転び、椅子の腕が、折れ、また、キッチンでは、食器棚が、倒れて、日常食器の皿、鉢、グラス類は、すべて床に落ちて砕けて散乱し、惨憺たる有様でした。

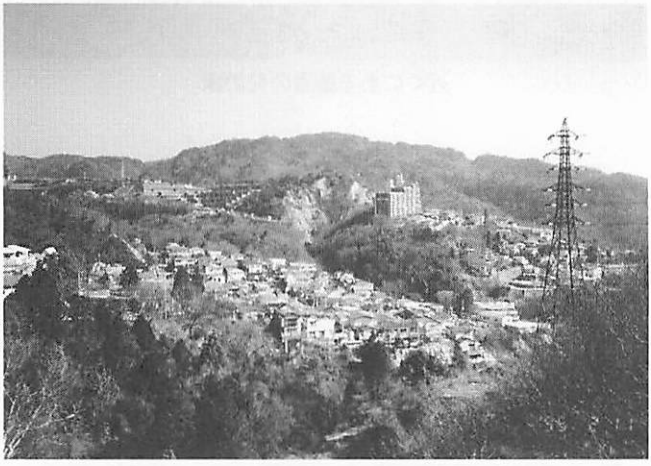
屋外に出ると、わが家の外壁に、何ヶ所もヒビ割れが起こり、門から玄関までの石段は、踊り場から下まで、両端に、裂け目ができて、石段全体が、ずり落ちていました。

夜明と共に、空には、新聞社のヘリコプターが、うるさく爆音をたてながら、此処彼所に旋回し、また、自衛隊の大型ヘリ

コプターが、数機、新神戸駅の方面に、飛んで行きました。何はさて置き、妻と母のいるマンションに駆けつけると、母のベッドの傍に、三重の重い箪笥が落下し、テレビも、ご多聞にもれずコードが引きちぎれ、落ちて壊れていましたが、妻や母は無事で、ほっとしました。

激震後、一時間半ばかり経って、海辺の魚崎南町に住む妻の姉が、わが家に駆け込んで来て、玄関に着くなり、蹲り、「私達の家が潰れちゃった。此方は、大丈夫だったのね。家は、潰れたけれど、私達は、夫婦共無事で、たいした怪我もなく、無事だったのよ。主人は、今、崩壊した家に留まって、火災や、盗難の見張りをしている。大切な通帳、印鑑、保険書、証書、貴重品を壊れた家の中から、取り出したいので、至急、救援に来てくれない?」と、緊急事態を、告げました。

そこで、私達は、マイカーに、ショベルや大工道具、手袋、ダンボール箱などを積み込み、妻は、水筒とおにぎりを、用意して、救援に出発しました。



二、震災直後の市街

震災直後は、電気、ガス、水道、電話、鉄道など、ライフラインの、すべてが、止まり、道路は、陥没や裂目が至る所で起こり、その上、倒壊家屋が通路を妨げ、通行止の箇所が多くて、とても出かけられる状態でなく、同じ神戸市であり乍ら、三宮、元町、神戸駅のビジネス街、繁華街や、周辺の工業地帯、神戸港湾、六甲山系の被災状況は、皆目知る由もありませんでした。翌十八日夜、電気だけが通電し、テレビ、ラジオが、使えるようになって、始めて、神戸の中心街の三宮地区のターミナルのそごうや新聞会館、阪急会館等の著名なビルが壊れ、阪神間の大動脈の国道43号線上を高架で走る高速道路3号神戸線が、東灘区深江付近で倒壊落下し、長田町のゴム靴工場地区が、全焼したのを知りました。

従って、震災直後の市街の被災状況は、直接出かけて、自分の目で確かめられた東灘区の被災状況を中心に述べる事に致します。阪神間の地理に詳しくない皆様は、添付の東灘区の見取図を参考に、被

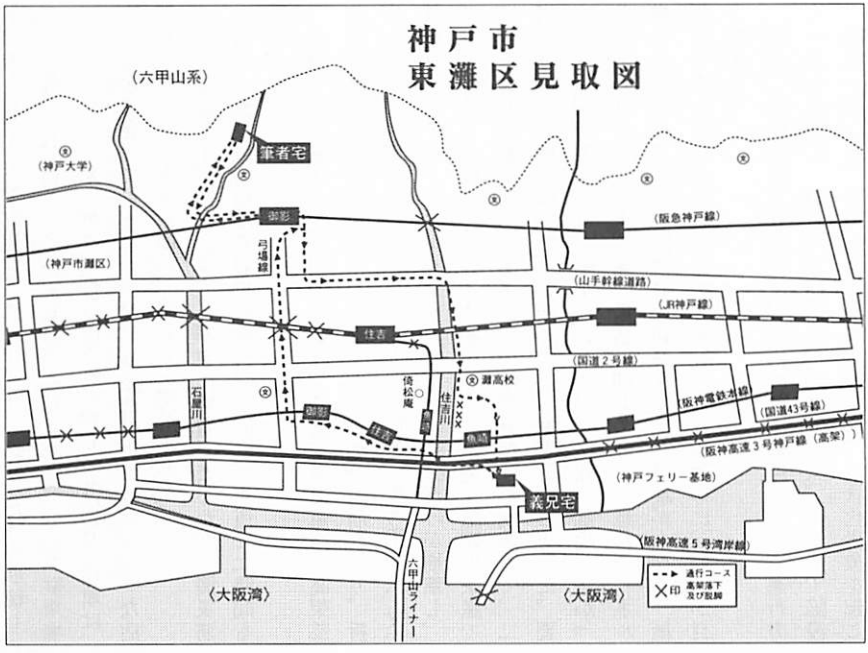
災写真で、ご理解頂きたいと思います。

神戸市は山が海に接近し、北側を海抜九百三十一米の六甲山を主峰とする六甲山系の山々が東西に連なり、南側は、瀬戸内海（大阪湾）に面し、これらに挟まれた東西に細長い地域で、これを南北に横切るように、大小の河川が、六甲山系から、大阪湾に注いでいます。

東灘区は、神戸市の東端にあり、東側は、芦屋市と、西側は、灘区と隣接し、神戸の中央区に連なっており、区内には、阪神間の主要鉄道、幹線道路が、東西に貫通しております。

わが家は、阪急電車御影駅西北の海抜百米位の御影山手にあります。震災直後、私達が、義兄の救援に行った時の市内の状況は次の様でした。（道順は見取図点線の通りです。）わが家から真直ぐ南下し、阪急電車の踏切に来ると、その先は、家屋が倒壊して、通行止となっていました。

私達は、急遽、阪急沿線に沿って東進した後、阪急御影駅から、バス通りを南下して山手幹線道路に入り、東進すると、山手幹線道路沿いの大きい寺や家屋は、此処彼所で崩壊し、まるで歯の抜けた櫛の様に、奥まで見通す事が出来ました。山手幹線道路と交差する住吉川の橋詰を、右折して、左岸の土手を南下し、ＪＲ神戸線を跨ぎ、国道2号線を越えると、この辺は、文豪谷崎潤一郎が、小説「細雪」の執筆の舞台となった倚松庵があり、松並木の美しい川辺ですが、この辺から道路は、進行方向に約百米にわたり裂目が走り、裂目の落差は、ひどい所で



約四十糎もあって、車は、立往生してしまいました。止むなく土手道を下り阪神電車の魚崎駅の北側を迂回して、南北線に来ると、家屋が全壊して、沿道沿いは遥か下手の国道43号線まで、真面な家は、殆ど一軒もありませんでした。その43号線も、その上を走る高速道路3号神戸線の橋桁や支柱が壊れ、車線は狭まっていました。43号線を越えて、義兄の家に着くと家屋は、取り囲まれたコンクリート塀を残して崩壊し、庭では、地割れによる液状化現象の泥土の湧出した跡が残っていました。

義兄の家で埋もれた品物の取り出しを手伝った後、帰路は、国道43号線を西に走り、住吉川を越えた付近で、路面は、深さ一米ばかり、陥没し、車は、大きく迂回しなければなりませんでした。

国道43号線から旧街道に入って、阪神住吉駅から阪神御影駅に向かう沿道では、古い家が倒壊して、道路の半分まではみ出していました。国道2号線まで来ると、沿道の高層マンションは、一階部分が崩壊し、上層部の全階が、一階づつ低くなっていました。そして信号燈の消えた交差点では、交通を整理する警官もいないので、車は、渋滞して動かず、交差点を越えるだけでも容易ではありませんでした。JRの高架は、至る所で、軒並みに落下し、南北幹線道路の弓場線以外通れませんでした。その弓場線すら、JRの高架の橋桁の片端が、道路上に落下して、その下を潜り抜ける時には、残りの橋桁が、何時落ちるか、気が気ではありませんでした。更に北上して山手幹線の交差点まで来ると、ここでも高層マンションの一階部分だけが崩壊し、ダルマ落としが起こっていました。このビルは、一階が駐車場になっていて、乗用車は、押し潰され、新しい外国製高級車は、哀れな姿を留めていました。又、交差点付近では、モダンな店舗やハイカラな家屋も壊れ、空しさを感じました。

この様にして、市内を巡りわが家に帰着しましたが、震災前には、十五分位で行ける義兄の家も、今回は、片道で二時間もかかりました。

今回、車で駆け巡って判った事は、鉄道や高速道路の高架部分は、橋桁の付根や足元のコンクリートの部分が崩れたり、折れたりしていました。コンクリートの電柱も、足元が崩れ、又、鉄筋コンクリートのマンションでは、一階部分だけが崩壊し、ダルマ落としが起こっている建物が多く、木造二階建の家屋では、全壊した家屋もありますが、一階部分だけが崩壊して、二階部分は、北側に傾いたまま残っている家も目立ちました。要するに今回の地震では、階下にいた人が、圧死の危険が多かったと思われます。一方、家の構造に関しては、新建材のパネル構造の枠組みで、軽い屋根葺の新築家屋は、倒壊が少なく、屋根瓦の重い古い建造物の屋敷、神社、寺、酒蔵等に、崩壊が目立ちました。

他方、道路の被災状況では、市内の総ての道路面に、進行方向を遮る方向に、裂目やひび割れが起こり、又、至る所で陥没や隆起が見られ、下町や海岸の埋立地では、液状化現象を起こ

















し、泥水の噴出した所が少なからずありました。

市内の交通事情については、幅六米以下の狭い道路では、倒壊した家屋の残骸が、道路上まで食み出し、自動車は通れず、小型のスクータや自転車が、被災地では、最も有効な乗物でした。市内では、総ての交通信号燈が消え、交通整理の警官もいないので、交叉点では、車が大渋滞し、車線変更や、右折は、容易に出来ませんでした。

三、震災情報と街の様子

地震発生直後、全市街は、停電し、真暗闇でした。地震の激しさから推測して、これは只事でなく、近隣の大阪や、京都も、大きな被害を受けているに違いないと思っていました。何しろ停電で、テレビやラジオのニュースを聞く事が出来ず、携帯ラジオも電池が放電して役立ちませんでした。又、電話も四六時中話中で何処ともつながりませんでした。勿論、新聞の配達もありません。

唯一の情報は、近所の人の口コミ情報でした。その人は、下町で営業しているコーヒー店の被害が気掛かりで、偵察に出かけ、見て来た状況を知らせてくれました。

地震発生の翌十八日には、御影浜に立ち並ぶLPガス製造施設の石油タンク群に、ガス漏れが、発見され、爆発の心配から、国道43号線より下手の住民八万人に対して、避難勧告が出されました。

これに応えて、沢山の避難者達が、リュックを背負い、鍋や大きな荷物のカートを引いて、蟻の如く、山手を目指して上って来るのを見ると、まるで、第二次大戦の終戦前後の空襲で、荷物を担いで避難し、又、海外から荷物を担いで引揚げてきたわれわれ日本人の姿そのものでした。

私は、地震直後に、震災見舞に来てくれた知人を、夜になって、JR芦屋駅まで、見送りに行きましたが、夜の街は、暗闇で国道2号線沿いの壊滅した家々の跡を、見つめると、何か異様で、胸が締め付けられる思いがして苦しく、これは、私だけの事かと思って、一緒に付合った私の娘達に問うと、娘達も同じ様に感じると云っていました。私は、科学的考えを持つ人間なので、亡霊の存在を信じませんが、沢山の人々が亡くなっている暗い街の廃墟に立つと、やはり沢山の亡霊が、彷徨っている様な気がしてなりませんでした。

四、救助活動と救援活動

今回の震災で、家の崩壊を免れた人も、大なり小なりの被害を受けていて、自分達の生活や、親族の救援だけで精一杯で、他人の救助や救援までする余裕はありませんでした。併し、近隣同士では、お互いの安否を気遣い助け合いました。被災地には、海外の救援隊や自衛隊、他府県の自治体や一般ボランティ

アの人が、救助応援に駆けつけてくれました。次に、これらの例を紹介します。

（1）JR六甲道駅付近の出来事ですが、駅周辺では、ビルが壊れ、家屋は総て崩壊して、道路を塞ぎ、土埃で覆われていました。又、高架の三階建の六甲道駅の駅舎そのものが、落下崩壊し、高架下の店舗は、押潰されて生埋めとなった人達が、何人かおられた模様で、国際ボランティアのスイス、フランス救助隊が、救助犬を連れて駆けつけ、この落下した駅下の空隙部に、救助犬を放し、埋もれた人を探しましたが、当時、日本政府の外国に対する救援要請が遅れたため、スイスやフランスの救助隊が到着したのは、地震発生後、三～四日後の事で、遺体が見つかっても、生存者が発見されたのは、皆無と云う事を聞きました。

（2）私が生前に御交誼を頂いていた恵迪寮の先輩の故増井幸雄（昭和十四年入寮）さんの奥様の場合では、増井さんが、胃癌で先立たれた後、奥様は、御影の居宅でお一人で、弓道を嗜み乍ら住んでおられましたが、今回の大震災で、家屋は、全壊し、圧死された事を、増井さんの同期の浜崎敏之（昭和十四年入寮、平成七年十月御逝去）さんから知らされました。それによりますと、増井さんの愛娘の史代さんが、阪神淡路大震災のニュースを聞いて、震災後の三日目に、千葉の市川から、駆けつけられましたが、実家に着くと、家は、既に全壊していました。

史代さんは、お母様が、家の下に埋もれている事を確信されて、お一人で瓦礫の下敷になっているお母様を掘出そうとされましたが、屋根や梁を取り除くのは、女手一人では困難で、道具すらなく、途方に暮れておられた時に、近くの公園でテントを張り、救援活動を続けている自衛隊員の一人が、傍を通られたので、事情を話し、道具を借りたいと頼まれた所、その隊員は、自分の任務を割いて、道具を持って引返して来て、黙々と重い倒木を、取除き、発掘作業をしてくれたそうです。お陰で、お母様の御遺体は、発見されました。

（3）私の娘の場合では、震災後、数日経って、娘が、婿と共に、沢山の救援物資を持って、埼玉より駆けつけてくれた時の事です。当時、新幹線、JR在来線、阪急、阪神の各鉄道は、阪神間で、全面又は、一部不通で、娘達は、鉄道を乗り継いで、阪急西宮北口駅から御影迄、十粁以上ある国道二号線上を、とぼとぼと芦屋市まで歩いて来た所、スクーターに乗った甲南大の学生さん達が、やって来て、自分達が、被災地で何か役にたつ事をしたいと、娘達を荷物諸共乗せて、御影迄、運んでくれたそうです。阪神間に住む神戸大、関学大、甲南大等の学生さん達は、震災で家族や仲間を亡くされていますが、自らの意志で、ボランティア活動を買って出られ、色んな場所で、色々の手伝をされました。

自衛隊の皆様には、前日の増井さんの奥様の御遺体の発掘作業や、姉の邸跡で、倒壊家屋の中から、家財の取出しを手伝っ

て頂いたり、被災者のために、御飯や味噌汁の炊出しや、給水車による飲料水の配給等、私共も、大変お世話になり感謝しております。

今回の震災に際して、ボランティア活動を積極的に買って出た若者の態度をみて、年配者の皆さんは、これ迄若者に対して懐いていたイメージを、見なおす、お互いによい機会になりました。

五、死亡者、負傷者の状況と医療体制

阪神淡路大震災で、死亡された方は、これまで公式には、五千五百人との発表がありましたが、その後、震災後遺症で亡くなる人が、後を絶たず、累積で、六千人を越えています。

震災で負傷した人のその内容は、破砕したガラス、陶磁器その他で、手足を切ったり、就寝中、箪笥その他の重量物が、身体の上に倒れたり、落ちたりして、顔や手足の打撲、骨折が多く、最悪の場合、亡くなられたと聞いています。死亡者の大部分は、崩壊家屋の下敷きとなって圧死された方が多く、中には、兄の医師会仲間の先生で、全壊家屋に挟まれた儘、火災が発生し、焼死された方もおられます。当時の医療体制として、治療側の開業医院も、御多分に洩れず、災害を受け、看護婦さん自身も被災して診療治療が出来ない状態でした。又、重症患者を救うための、設備の整った神戸市の救急大病院は。海上埋立島のポートアイランドや、六甲アイランドにあって、病院に、大きな被害もなく、救護態勢が整っていたにも拘わらず、埋立島に渡る橋が外れて救急車が渡る事が出来ず、「救急ヘリコプターの基地があれば、助かったのに……」と云う声がある一方で、崩壊家屋の瓦礫の下から、必死に助けを求める声が、被災地の上空を舞う複数の新聞社のヘリコプターのうるさい音に打ち消され、救助出来なかった人もいると聞いています。

六、生活関連施設と交通の被災と復旧

地震発生後、市内では、電気、ガス、水道のライフラインは、総て止まり、電話、交通も麻痺しましたが、復旧は、同じ地域でも、バラバラでした。被災地の中で、、復旧の最も早かった私共の地区の被災状況と復旧は、次の通りです。

(1) 電気

地震発生と同時に、停電しましたが、電気の復旧は、不思議に早く、地震発生の翌一月十八日の夜には、通電し、全壊地区が、まだ暗闇が続く中で、点燈し、気分も明るくなりました。お蔭様で、テレビのニュースを見聞し、三宮や、長田の被災状況を、身近に知る事が、出来ました。又、電気ポットや、電子レンジは、有効に使える様になりましたが、電気炊飯器は、肝心の飲料水の入手が、困難で、御飯を炊くまでには、至りませんでした。全市に電燈が灯るようになったのは、一月二十三日

の事でした。

（2）水道

水道は、地震発生後、直ぐに止まった地区もありますが、同じ御影山手地区でも、私共の狭い地域では、二日目迄は、蛇口からまだ水が勢いよく吐出し、三日目になって、吐出が悪くなり、四日目には、完全に止まってしまいました。その後は、飲料水に不自由しましたが、私共の地区では、岡山水道局や、倉敷水道局及び、自衛隊の給水タンク車が、毎日水を運んで来てくれたので、私達は、バケツやポリタンクを持って指定場所に水を貰いに行きました。兵庫県の断水家庭は、公式発表では、九十五万世帯と云われ、水道の復旧は、私共の地区では、他所より早く、震災後、十八日目の事でした。

（3）都市ガス

都市ガスは、震災後直ぐに止まり、電気、水道と異なり、仲々復旧が進まず、一番早く復旧した私共の地区でも、四十日以上かかりました。ガス停止家庭は、兵庫県内で、八十五万世帯で、地元の大阪ガスは、地方のガス会社にも、応援を頼み、私共の地区では、四国ガスや、東邦ガス（名古屋）が、地下埋設ガス管のジョイントの取替作業をしていました。工事が、水道より大巾に遅れたのは、震災後火災の一因にもなったガス漏れの有無を、一軒づつ、確認すると共に、水道管と併設されているガス管内に、水道水が流れ込んで、ガスを通す事が出来ない事が、大きな原因でした。

（4）電話

地震直後、当地から、同じ東灘区渦森台に住む兄に通じましたが、それ以後、電話回線は、麻痺して何処とも通じなくなりました。それ以後電話が通じるようになったのは、十日以上経てからの事で、それも、被災地区の、芦屋、西宮、宝塚地区等とは不通で、遠距離の局に限られていました。併し、相手が、コイン式公衆電話から架けると、通じました。又、深夜から早朝にかけては、度々通話する事が出来ました。

（5）交通機関

（イ）道路

阪神間の国道2号線、国道43号線とその上を高架で走る阪神高速道路及び、京神間の国道171号線は、阪神間の輸送の動脈であると共に、阪神間の衛星都市を結ぶ日常の生活用道路でしたが、震災で、阪神高速道路阪神線は、倒壊により全面不通、その下の国道43号線は、片道四車線が二車線に減少し、国道171号線は、阪急今津線を跨ぐ陸橋が落下し一部不通で、国道2号線と国道43号線は、昼間は復興や救援に必要な緊急車輛以外の一般車輛は、通行禁止になり今日に及んでいます。併し被災地の生活者の不便を考慮して、八月から日曜、祝祭日の休日に限って、通行を許可されています。

（ロ）鉄道

阪神間の鉄道は、震災時、高架の橋桁が落下して、新幹線は、新大阪－明石間で不通、ＪＲ神戸線は、甲子園口以西が不通、

一月二十五日に甲子園口－芦屋間が開通、二月八日に芦屋－住吉間の開通によって、やっとわが家から大阪まで、行けるようになりました。併し、阪急線で通っていた時に比して、二十分余計歩く事になりました。阪急神戸線は、西宮北口以西は不通でしたが、六月十二日に、全線開通し、今迄通り御影から三宮や、大阪へ行けるようになりました。阪神電車は、甲子園以西が不通、一月二十六日に甲子園－青木間が開通、六月二十六日に、全線復旧しました。

七、震災地の生活

震災当時、家が潰れた人達は、忽ち、寝る所と食物の心配をしなくてはならず、路頭に迷った人達の為に、学校は、避難所として開放され、全国に自治体、ボランティア、会社、各種団体は、食物や毛布の救援物資を、届けてくれました。又、自衛隊による御飯や味噌汁の炊き出しも行われました。その様な中で、親戚や知人を頼って、一時避難したり、他所に移転した人達は別として、避難所生活や、公園やグランドで、テント生活を続ける人達と、家は多少壊れても、被災地のわが家に、留まっている人の生活は、当然異なります。ここでは、私達が、震災後、わが家で過ごした日常生活の模様を述べてみたいと思います。

(1) 食料と食事

地震発生後、神戸に本拠店のある灘神戸生協や、ダイエー店を始め、市内の食料品店の多くが、壊滅し、又、倒壊しなかった店も、店内の片付けで、一週間ばかり閉鎖されていました。わが家の冷蔵庫には、震災前に買った肉や野菜は、貯えられていましたが、水やガスが出ないため、調理はできず、幾日間は、救援物資のお弁当、おにぎり、味付けパンの配給の列に並び、頂いたレトルト食品を、電子レンジで温めて、食べていました。併し被災後二週間以上も経つと、毎日同じ献立では、飽きて食欲もなくなりました。この頃、食料品もボツボツ開店し、生協も、駐車場に仮店舗を開き始めたので、私共も、千葉や埼玉にいる娘達から送ってくれた簡易コンロと、カセットボンベを使って、調理する様になりました。

(2) 生活用水と利用

水は、生活用水として、飲料水、調理、使用食器の洗滌、洗面、洗濯、風呂、トイレ用水等として、最も貴重な存在でした。

飲料水は、既述の如く、震災断水後、給水車まで貰いに行きましたが、又、千葉や埼玉にいる娘達が、豊中の姪の家を経由して送ってくれたペットボトル入りの天然水を、国道の混まない深夜に姪は、車で届けてくれました。

次にその使用状況を述べます。

(イ) 飲料水

断水が、何時まで続くかわからず、飲料水は、貴重で、ペットボトルの水は、主にお茶や調理用に使用しました。

（ロ）食器洗滌

給水車から運んで来た水は、食器洗滌や洗面用として、バケツから杓子で、小出しし乍ら、節約して使用していました。

（ハ）洗面

歯磨きは、僅かグラス一杯の水で、歯ブラシを使い、口を漱ぎました。併し顔は洗わず、赤ちゃんの尻拭のウエットティシュで、拭いていました。

（ニ）洗濯

洗濯は、水が多量に要り、娘が応援に来た時、一度、下町の湧き水で、洗ってきてくれましたが、洗濯回数を減らすため、娘が埼玉より五枚組で買ってきてくれた肌着を、今迄の分と合わせて使いましたが、それでも足らなくなるので、パンツ等は、出来る丈汚れない様に、男でも生理用パットを利用しました。又、妻は、姪の家の風呂に、入浴に行くついでに、纏めて洗濯をして来ました。

（ホ）風呂

風呂は、前記項目の中で、最も上水を大量に必要とするため、震災後、全然入っておらず、一週間目に、タオルを濡らして、全身を拭きましたが、二週間目に、豊中にいる姪から、風呂の招待を受け、泊まりがけで、入浴に出かけ、久しぶりに壮快な気分になれました。風呂は、水丈でなく都市ガスが出るまで二ヶ月近くの間、わが家の風呂に入る事が出来ませんでした。従って次の二週間目にも、姪の家に「貰い湯」に行きましたが、兄や知人の家族では、カントリークラブや、有馬温泉まで、時間をかけて入浴にいったそうです。

（ヘ）トイレ

生活用水で一番悩ませられたのは、トイレ用水でした。震災当初は、前夜の風呂の残り湯を使って流していましたが、それがなくなると、全くお手上げでした。御承知の如く、大都市では、下水道が完備し、殆ど総ての家が水洗トイレなので、断水すると、汚物を流す事が出来ず、悪臭も放つので始末におえません。それかと云って、我慢する訳にいかず、水の確保に必死でした。私の地区では、幸に、六甲山系から流れる谷川が、直ぐ近くにあり、廃水は混じっているが、割合水が澄んでいるので、近所の人達と協力して、毎朝、谷川水を汲み上げに行きました。併し、谷川に遠い家は、小学校まで、用足しに出かけ、プールの水を汲んで、後始末していたそうです。トイレ用水は、家族全員が、使用するので、毎日大量の水が必要で、運搬兼貯水容器も、大型容器が必要でした。私達は、考えた結果、各家庭にあるゴミ容器のゴミをポリ袋に移し、大寸のポリ袋を二重にしてゴミ容器の内面に内張りして水タンクとして利用しました。

（3）家庭ゴミ

震災で、市の清掃局も被害を受けただけでなく、倒壊家屋の廃材処理にも困って、他府県の清掃局に、応援を頼んでいたらしいのですが、余り協力は得られず、指定場所に置かれた家庭

ゴミは、回収される事なく、又、回収されても、直ぐに溜まり、二、三週間ゴミ袋は、山積となっていましたが、家庭ゴミの増加は、水が使えなくなっても、手拭、その他の紙類ゴミの増加による事が多いと考えられます。

(4) 荒ゴミ

震災で、家具、家財にも、大被害を受け、高価な美術工芸品や、来客用の高級食器、書籍、レコード、CD、その他思出の品々を失った方々の多くは、一時「もう〃物〃は、要らない」と諦めの境地におられ、震災後の一、二ヶ月間の荒ゴミ回収日には、家具、テレビ等の電気製品は、勿論の事、破損した美術工芸品や、私共が捨てるのは、勿体ないと思う様な、新しい儘の百科事典、学術図書や、書物も捨てられていました。

(5) 暖房

わが家には、エアコンディショナーによる暖冷房が、完備していますが、電気代が高くつくので、冬は、専ら、ガスストーブによる暖房に頼っていましたが、震災で、ガスが止まったので、電力使用のエアコンディショナーに、切替えました。併し寒い日は、少なかったので、膝掛毛布や、厚着で充分でした。

(6) 通勤、通学

電車が、不通の時には、通勤、通学の人達は、始業時間に間に合うように、震災前よりかなり早起、早出で、不通区間は、時間の当てにならない満員バスを利用するか、歩くしかありませんでした。各鉄道の部分再開が、進むにつれて、阪神間の阪急線、JR線、阪神線の乗客は、不通区間を、開通している他社線の最寄駅まで歩いて、乗継ぎ乍ら通っていました。阪神とJRが、それぞれ阪神御影駅とJR住吉駅以西が不通で、逆に阪急が、阪急御影駅以東が不通の折りには、閑静な御影の住宅街道路は、阪急御影駅－JR住吉駅－阪神御影駅間を乗り継ぐ歩行者の往来で混みました。

八、被災者の苦痛

昨年の阪神淡路大震災で、被災地にいる人は、大なり小なり家屋の損害を受けていますが、被災者の最大の苦痛は、破損家屋に費すお金の問題です。持ち屋が全壊した人も、半壊した人も、元の場所にわが家を再建するか、わが家の再建を諦めて他所に移るかの経済的決断を迫られ、夫々、決断されましたが、何れを決めるにしても、新に住む家の確保に莫大な費用がかかり、泣いておられます。

万一の災害の発生に備えて、地震保険や、火災保険を掛けた人もおられましたが、地震保険金の限度額が少なく、火災保険も特記事項を楯に殆ど保険金が受取れなかったと聞いています。

家を再建するには、敷地面積と家の規模にもよりますが、破損家屋の取り壊しと整地に最低二千五百万円、再建家屋と設備に三千万円の、合計五千五百万円かかるとしても、老齢者には、

銀行は「お金」を貸しませんし、又、ローンで、わが家を買ったばかりのサラリーマンの人達は、家が壊れても、今迄のローンの返済免除もなく、住宅再建に二重のローンが必要で、これを借りる事が出来たとしても、会社定年の将来まで、今迄のローンと合わせて、一億円以上のローン返済金が必要で、持家の購入を諦めねばなりません。これらの人達の救済が望まれますが、義援金の配布は、奥尻島や普賢岳が、一戸当たり、一千万円以上あったのに対し、今回の震災では、被災者数が、多過ぎるので、神戸市や、その他の都市では一軒当たり、二十万～三十万円位しか、行渡らず、政府の救済援助対策の遅れと国を挙げての阪神淡路大震災の復興援助政策の盛り上がりの無さに、被災者の方々は失望されています。

九、震災と心の傷

阪神地方では、昭和九年に室戸台風、昭和十三年に阪神大水害、昭和十九年から戦争末期の大空襲、今回の阪神淡路大震災で、思いもよらない四度目の大災害の洗礼を受けました。私と同じ世代以上の人達は、これらの試練を経験し、今回の震災に対しても冷静に対処できましたが、震災後、避難生活、住居に対する費用、人間関係、残り人生の生活設計を考える時、若い人達以上に心の傷は、大きく癒える事がありません。

連れ合いを亡くし、一人暮らしをしておられた方で、今回の震災で家を無くし、親しい近隣の人達とも別れ、簡易住宅に入居した人の中には、孤独と人生に希望をなくして亡くなる人は、今も後を断ちません。

又、自分の家を無くし、親子、又は、親戚の家に、避難した人が、最初の間は、心よく歓迎されていても、十日以上も経つと、家計の出費の増大、部屋が窮屈、食事その他の問題で、お互いに気遣いが重なって、これ以上、世話になれないと、壊れたわが家に戻る人や、被災していない大阪のマンションを借りて、移り住んだ人もいます。この事は、私や妻の身内でも現実に起こり、私の姉夫婦は、息子が単身赴任で不在中、息子の家に招かれて避難しましたが、息子の嫁に気遣いして、二ヶ月後、自宅に戻りました。

又、妻の兄は、震災で職を失い、彼の長男のいる東京に移る決心をし、兄夫婦は、西宮の被災住宅を処分して、関西を去りました。

又、妻の母は、震災前、老齢でも元気でしたが、震災時、家が、倒壊した妻の姉夫婦が、沢山の荷物持参で、避難して来た為、母の家であり乍ら、母の居場所が狭まり、母と姉の親子間の軋轢が起こり、精神的ストレスが溜まって、震災後の五月の初めに亡くなりました。

私達夫婦は、健康の為に、毎日、早朝散歩をしていますが、外見上、被害の目立たない外人宅が、震災後、急に空家になったり、今迄住んでおられた邸宅が、震災後、一年過ぎてからの

現在でも、或日突然取り壊される家が、此処彼処に見られ、驚いています。外見の被害は目立たなくとも、屋内の被害が、大きかったのは、想像できませんでした。

わが家も、何時又、全壊するかも知れない不安があり、多少修繕しなければならない箇所もありますが、現在その儘住んでおります。

私共の周囲に不幸な人達が、多い中で、私は今、多数の同窓生や寮友の諸兄に励まされ、生きて来られた喜びを、しみじみと味わっております。

まとめ

最後に、学術的、又は、今後の震災の対応に役立つかどうかは、わかりませんが、私が阪神大震で経験した被災状況に、観察、考察を織り混ぜ、又震災の対応方法や、震災時の異常現象についても、若干述べて見たいとおもいます。

1　被災状況の観察、考察

(1)　阪神間の震災地域について、JR神戸線及び、阪急神戸線の車窓から見て、倒壊家屋の被災状況は、東側は武庫川を境とし、又、東北の宝塚より西南の神戸市の須磨に至る六甲山系を境として、又南側は大阪湾の海岸線を境とする線で囲まれた内側の地域で顕著でした。

(2)　六甲山系の被災箇所は、六甲山系から、大阪湾に注ぐ大小の河川の流域で、河川の平行線上の家屋に倒壊が顕著でした。

(3)　崩壊家屋は、二階建の木造住宅でも、鉄筋コンクリート製ビルでも、一階部分丈が崩壊したダルマ落し現象が多く見られます。

(4)　高速道路、家屋、室内の家具の倒壊は、南側より北方向に倒れています。

(5)　室内に設置された家具で、上部を天井より固定した家具は、倒壊し難かった。

(6)　平底固定家具より、脚付家具の方が倒れ難かった。

(7)　瓦葺の重い家屋は、軽量スレート葺家屋より崩壊し易かった。

2　震災に対する心得

(1)　印鑑、通帳、カード、保険証、現金、貴金属等は、空巣や泥棒に対して、分散する方が安全と云われるが、地震の場合分散すると、落下逸散して、見付からなくなる。チャック付バックに入れて身近に置く方がよい。

(2)　懐中電灯や携帯ラジオは、常時使っていないで、肝心の時に電池が放電してて、使えなかった。又身近に置かないと、取りに行けず役に立たない。

(3)　寝室のベッドの廻りに重い箪笥や本箱、ピアノ等置くと、

地震発生で、倒れて、骨折や死亡した人もいるので危険である。又それが倒れて入口を塞いだ時に火災が発生すると焼死の危険がある。

(4) 地震発生の非常事態の場合、身近に軍手、軍足、タオルなど、破砕ガラスによる、怪我や、身を守るのに必要である。

(5) 被災地では、倒壊家屋による粉塵がひどいので、粉塵マスクや、帽子を、欠かす事が出来ない。

3 地震発生時の異常現象

(1) 地震光については、私は直接見ておりませんが、これを直接見られた近隣の人(複数)の話によりますと、夜空は、雷光や青白い光で覆われ、昼間のように明るくなり、建造物の輪郭が、はっきりし、映画を見ている感じだったそうです。

(2) 動物の挙動について、地震発生前の夜中に、近くの森で、急に烏が、鳴き叫んだのを覚えています。併し、地震発生の当日は、姿も見せず、声も聞きませんでした。

(3) 生まれて六ヶ月の犬を飼っている近くの奥さんは、地震発生の三十分前に、その犬が吠えだしたと云っていました。

(4) 地震発生の三日目の午後、ここ数年間、いなくなって久しく見た事がない鳶が、十数羽、森の上空で輪を描いていました。

震災後一年の被災地の状況

震災後一年経った平成八年二月現在、何が、どう変わったか述べようと思います。

一、道路の状況

震災後一年経た今も、阪神間の動脈である阪神高速道路神戸線は、武庫川から須磨間が、復旧せず、国道2号線や43号線では、災害復旧関係の認可された車輌以外、乗用車の通行は、制限され、日曜、祭日などの休日以外、一部の区間を除いて、今も通った事がありません。山手幹線などは、震災前より、車輌の通行が増えて、渋滞がひどく、災害復旧のための他府県ナンバーのダンプカーや、コンクリートミキサー車の往来が目立ちます。鉄道を跨ぐ陸橋は、まだ完全復旧せず、通行止も、まだ何ヶ所かありますが、これまで、殆んどの道路を塞いでいた瓦礫は、取除かれ通行は、できますが、道路の陥没や裂目は、応急にアスファルトを流し込んだ丈で、地ならしが、されていないので、徐行しなければ、車は走れません。又、至る所で、道路の補修工事が行われ、部分的に片側通行の個所が多くて、車は、容易に進めません。

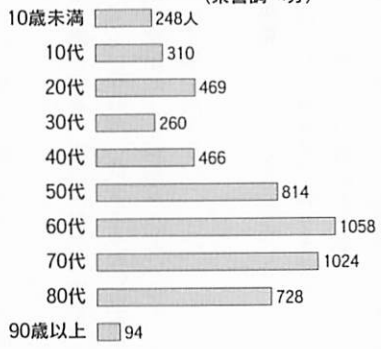
二、住宅の状況

住宅地では、壊れた儘の家は、今では、殆どなく、瓦礫の

被害の状況（兵庫、大阪、京都）

死者 6,308人　　不明 2人　　負傷者 38,495人

兵庫県内の年齢別死者内訳
（県警調べ分）



全壊	106,247棟
半壊	130,334棟
全焼	7,050棟
半焼以下	424棟

被害総額（推計）

兵庫県	約9兆9,268億円
大阪府	約2,880億円
京都府	約27億円

（1996年1月10日現在）

山は、片付き更地となり、雑草も生えるようになりました。

一方、一見被災した様に見えない立派な邸でも、或日突然解体して、半年も経たない間に、ホーマルな規格住宅が組み立てられ、再建されてしまうので、元の状態を知らない人は、どこが、被災したのか、よく見なければわかりません。しかし、殆ど空地のなかった地域に、空地が、目立ち、所々で、花が供えられているのを見ると、その地で、誰かが、震災で亡くなられた事が判ります。

狭い土地で、古い家が密集した下町の地域では、新しい街には、道路や公園を広く取る事が義務づけられ、行政、地主、家主と、元の居住空間を狭められ事に反対する被災者との話合はつかず、被災者は、家を再建する事ができず、当分、手付ずの宅地が、残る事でしょう。

三、公園の状況

石屋川公園や、新神戸駅近くの生田川公園では、テント生活者は、めっきり少なくなりましたが、まだテントが、残っています。

震災時に、消火栓から水が出ず、火災が拡大した教訓を生かして、神戸市では、大きな公園の広場の地下に、防水用の貯水槽を作るため、東灘区でも、今、彼方此方の公園で、広場が掘り返されています。

四、市民生活と市街の状況

JR、阪急、阪神、山陽、地下鉄、ポートライナーや六甲ライナーが、復旧してから、電車で、神戸の中心街の三宮へも、度々出かけられるようになりました。玄関口の三宮駅前周辺では、新聞会館、阪急会館、交通ビル。そごう百貨店、センター街ビル、その他の大きなビルが崩壊し、解体撤去され、震災前と、すっかり様相が変わり、街が、小さくなった気がします。センター街も、アーケードが、なくなりましたが、人通りが増え、活気が、幾分戻っています。

① ショッピング関係

震災前、よく買物に出かけた三宮のそごう百貨店、阪急地下食品街、センター街のベビーショップのファミリア、電気の星電社、ダイエー三宮店、元町の大丸神戸店等のビルは壊れ、大丸やそごうは、崩壊を免れた建物の一部で、営業を再開していますが、品数が極端に少なくなりました。三宮、元町、神戸駅の周辺では、新しいビルで、高級洋品店や日用品店が、開店する一方、高級輸入食品を置いていた店は、売行きがよくないのか、上品な装飾を取り除き、一般日用品の売場に、配置転換したり、震災で、営業不振に拍車がかかり、廃業した店舗の後には、西日本最大の売場面積を持つ書店が、大阪から、三宮のセンター街に、進出して来ました。

私共も、震災で壊れた食器棚や食器を補充しようと、神戸や芦屋の店を見廻りましたが、品数も少なく、気に入った商品が、見付からないので、買控えています。

② グルメ関係

神戸には、南京町を始め、各国の料理店が、沢山ありますが、震災後、被災した店の多くは、仮設店舗で、たくましく営業を再開しています。私達が、二月毎の会合に、利用していた三宮の直営ビアホールは、震災で壊滅したため、この店が再建される迄、会合は、三月毎になり、会場は、転々と変えています。神戸には、又、有名な洋菓子店が、数多くあり、和菓子部門を扱っていて、被災した工場では、他の県に移転した会社もありますが、大部分は、地元に残っています。又、美味しいパンを、焼いている職人気質のパン屋さんも何軒かあり、今も健在で、仮設店舗で私共に美味しいパンを提供して呉れるので喜んでいます。

震災前後の食料事情で変わった事と云えば、奥さんを亡くし、或いは、家族を疎開させて、一人被災地で頑張っている男性のために、ミニスーパーができ、温かい惣菜が売出されるようになって、食事の調理が省け、喜ばれています。

③ 学校関係

先日（平成八年二月）、用事で、住吉川東の本山まで来ると、つい二、三日前まで、建てられていた山手幹線道路沿いの本山小学校、本山第二小学校に、ショベルカーが入

って、校舎が取り壊されているのを見て驚きました。この校舎は、被災者の避難場所として、確か天皇、皇后両陛下が、お見舞いに立ち寄られた所で、私宅の近くの鷹匠中学校や親和女子中学校も、震災後一年過ぎた今頃になって、校舎が取り壊されています。

一方、名門の灘高校（東灘区）や関西学院大学では、寄宿舎が壊れて、地方から来ている学生さんの宿泊施設が、不足しているので、長兄の話によると、私達の大阪の生家を、学生さんのために貸して欲しいと云う学校側からの打診があったそうです。

④　教養、文化関係

阪神大震災で、美術館、文化ホール、動物園、水族館、社寺、教会等も、かなりの被害を受け、その復旧は、自己資金で賄える法人もあれば、出来ない法人もあり、震災後、県立美術館、市立小磯美術館、大谷美術館（西宮）の三館は、各館所有の絵画を、大阪の高島屋で、合同展覧会を開き、入場料の収益金を、復興資金として、各館で分配すると云う事で話題になりました。北大の故山本吉之助先輩が、かって園長を務めた王子動物園の被害は、聞いておりませんが、北大の井上喜平治先輩や、吉田啓正先輩が、館長をを務めた須磨水族館では、海水の補給や、酸素供給装置が止まり、貴重な海洋動物や、魚類が多数死んだと聞きました。社寺、教会の復興は、どうなるのか、私共には、判りません。

⑤　催し関係

震災当時、被災地の夜は、暗闇でしたが、震災後半年も過ぎると、街燈も、ネオンも、だんだん点るようになり、明るくなって来ました。震災後始めてのクリスマスを迎える昨年の十二月十五日～二十五日には、イタリアのデザイナーによる光の祭典ルミナリエで、三宮のビジネス街の八百米にわたって、虹色のイルミネーションで飾られ、さくら銀行本店前広場では、軽音楽や、クリスマスキャロルで、被災地市民を喜ばせてくれました。

五、工業地域、港湾設備の状況

これまで殆ど報告されていない工場地帯の被災状況を、報告します。

神戸市には、川崎製鉄、川崎重工、神戸造船所、川崎車輛、三菱重工神戸造船所等、日本有数の鉄鋼、造船会社が、神戸港周辺に、集中し、ゴム会社も、住友ダンロップを始め大小のゴム関連工場が、また食品工業では、灘五郷で知られる酒造会社が神戸市東部海岸に、またポートアイランドや、六甲アイランドなどの人工島には、ファッション、洋菓子その他、有名な食品会社の工場が数多くあります。

①　重工業関係

昨年の大震災で、重工業関係では、神戸市東部にある私

のかっての勤務地の神戸製鋼が、最大の被害を受け、本社地区の社屋事務所、中央研究所、旧病院、健保会館、体育館、記念館等と関連会社の社屋、工場などが壊滅し、これらの建物は、皮肉にも、神戸製鋼の主力製品の一である建設機械で取り壊し、撤去され、広大な神戸製鋼の敷地は、更地となり、「つわものどもの夢の跡」の感慨を深くしております。また、神鋼地区の西隣にあった住友ゴム本社工場は、新築の本社ビルだけを残して壊滅し、本社工場の再建は、あきらめたと聞いています。

② 清酒関係

東灘区から灘区の海岸地帯には、灘五郷として、日本有数の清酒の醸造地として知られ、古い土地の蔵屋敷が続き、昨年の震災では、古い酒蔵は、壊滅し、酒タンクが、壊れ、清酒が、かなり流失したと聞きました。今では、酒の仕込も、大部分の会社で、復活したそうですが、一部の蔵元では、廃業に追いやられていると聞いています。

③ 港湾関係

神戸港では、岸壁が壊れ、ガントリークレーンも傾いたが、現在では、震災前の八十%まで復旧したと聞いています。併し、震災時に、隣の大阪湾や名古屋港や韓国の釜山港に振替え輸出入した貨物の顧客は復旧後も神戸港に、戻らず、東洋有数の船貿易を誇っていた神戸港は、今、窮地に、追い込まれています。

あとがき

以上の如く、阪神大震災が、起こってから、二年目の被災地の現況を述べましたが、被災地の復旧は、仮設住宅や、仮設店舗で、再開しています。震災復興は、設備、施設、を元の状況に復旧するのではなく、活気のある産業を復興しようとして、活動が始まりました。これには今後十年以上かかる事でしょう。被災地では、自己資金での立ち直りが、困難で、兵庫県では関東大震災並の災害援助法の特別立法を、政府に要望していますが、政府や、中央官庁の官僚は、これらの扱いに冷淡で、今住専問題に、被災地の救済資金より、巨額の国民の税金を、使おうとしていて、腹立たしく思っています。

被災地が、再び活気のある新しい街に生まれ換わるまで、皆様のご支援と、暖かい理解のある目をもって、見守って頂きたいと思います。

阪神・淡路大震災の教訓

吉野生壮
（昭和三十三年入寮）

一　起《阪神・淡路大震災から一年が過ぎて》

私は、昭和三十三年に入寮して一年半を恵迪寮で過ごしました。六十年安保の時期で寮生も毎日のようにデモに駆り出されましたが、寮の中でも政治や哲学、恋愛観などについて深夜まで議論を交わした時代でした。

昭和三十七年に水産学部を卒業し、二年間は東京の会社に勤めておりましたが、その後、故郷の兵庫県三木市に帰り、兵庫県庁で地方行政を担当しております。専門が水産ですので主に農林水産関係の行政をやってきましたが、現在は震災復興本部に所属し、神戸市との連携や被災者対策を担当しております。

平成七年一月十七日の大震災から一年余りが過ぎましたが、一年前の恐怖と混乱と悲しみの日々を振り返ってみると、改めて地震の恐ろしさを再認識させられます。被災地では被害を受けた人々の懸命の努力と多くの方々から寄せられた暖かいご支援により、徐々にではありますが復興の兆しが見え始めました。ご支援をいただいた皆様に心からお礼を申し上げます。

兵庫県内の被災状況は、平成八年一月二十六日現在

死者	六、二七九名
負傷者	三四、九〇〇名
倒壊家屋	一九二、七〇六棟
焼失家屋	七、四五六棟

となっています。そして被害の総額はハードの施設関係だけで約十兆円に上ると計算されています。

地震の発生直後は、停電百万戸、ガス供給停止八十五万戸、水道断水百二十七万戸、避難者はピーク時で三十一万人を超えていました。鉄道はちょうど一年で完全に復旧しましたが、阪神間を縦貫する高速道路の復旧は八年の十月頃になる予定です。神戸港の貨物の取り扱い量は八十％程度回復しておりますが、機能が完全に回復するには今後も時間がかかると言われております。

住宅やビルの再建は一部には着工されている所もありますが、被災者が個人の住宅を再建するのは大変なことで、区画整理なども行いながらの復興となると権利関係の調整にも手間取

り、これには長い年月がかかることが予想されます。また、災害に強い防災都市の再建や経済の復興も大変な課題ですが、しかし、それ以上に長い期間が必要なのは「心の復興」ではないかと心配しております。私自身は家が少し壊れたぐらいで、大きな被害はありませんでしたが、震災の前と現在とでは価値観や生活観に大きな変化が生じていることに気が付きます。

二　承《震災が提起した課題》

震災から一年が経過した現在、地震直後の混乱のなかで直面した救急医療、被災者の救出、火災の防止、食料の補給、生活用品の調達、交通を含めたライフラインの確保、家屋の倒壊防止などの課題がありますが、被災した多くの人々の願いや無念にも死亡した方々が何を訴えたいかを想像するとき、地震によって提起されたもっと大きな課題が横たわっていることが見えてきます。

その一番目は都市の構造の問題です。

神戸市を始として西宮市、芦屋市など阪神間の各都市は、長い歴史の経過の中で「阪神地域」という言葉で感じられる地域アイデンティティーをもっていました。交通の要衝であることも手伝って住宅や産業がバランス良く配置され、温暖な気候、独自の文化や自然景観にも恵まれており、この地域に住むことは関西に住む我々の理想でもありました。そのため日本経済の発展に呼応するように都市的要素を集積し、六甲山の中腹まで住宅地が開発され、海岸も埋立てられて超過密都市となっているところがちょうど一休みしている活断層の上であったため、住宅・交通・産業などあらゆる都市構造の在り方が問われることになったともいえます。しかし、過密都市は地震がなくても近い将来においた必ず直面する課題を抱えていたとも言えます。インカ帝国やマヤ文明がどのような経過を辿ったか、自然の力と人間の造る都市との関係を原点から考え直す時かもしれません。

第二番目は高齢化社会の問題です。

先般、新聞を見ておりますと、東京での話として「神戸にも老人問題があったのかと言った人があった。」という記事がありました。阪神地域は高級な住宅地が多く、神戸には八十ヵ国以上の国々の人が四万人あまり住んでおり、異人館も点在して国際的なイメージが強いためか、他の地域では華やかなことばかりが話題となると思われますが、今回の震災のおける最大の課題は高齢者や障害者など弱い立場の人々が住みやすい町をどう造るかということがあります。地震による死亡者の五十三％は六十歳以上の高齢者ですし、仮設住宅に住んでいる人々も六十五歳以上が三十％を超える状況で、地震は高齢者や福祉対策が緊急の課題であることを浮き彫りにしました。震災復興計画の推進にあたっては住宅、医療、福祉施設更には都市基盤の整備も含めて、来るべき高齢化社会を前提とした対策が必要で、

仮設住宅や他府県に仮住まいしておられる被災者が多いため、早急な対応に迫られています。

第三番目は産業の方向です。

私たちが入試の勉強をしたころは、阪神地域は京浜、中京および北九州に並ぶ工業地域でした。しかし今は、製鉄、造船、機械などの産業に支えられた重工業地帯としてよりもむしろ神戸港を核とする流通都市としてのウェイトが大きく、アパレルや食品などのファッション産業や観光への依存度が高くなっております。しかし、兵庫県南部地震はこれらの産業構造にも見直しを提起しました。バブルの崩壊により経済の見通しもつかず、アジア諸国の台頭により否応なしに構造改革に迫られております。北海道においても石炭や製鉄に依存した地球が時代の変遷に伴って構造の改変を迫られたように、神戸港の復興にはコンテナ基地としての役割の他に、空港を併設した流通の合理化や第二次産業をベースとしながらも文化・産業・自然が調和しながら高度に集積した情報発信基地を目標とした、新たな視点での産業形成が必要であると思われます。

以上のほか、リスク管理や地域コミュニティー、こころのケア、情報通信、ボランティア等日本の各都市が近い将来に対応を余儀なくされる数多くの課題が顕在化されましたが、特に「医・職・住」に係わることは被災者のなかでも高齢者などの社会的に弱い立場の人々のためには緊急に対応する必要があります。

三　転《阪神間という地域》

私は兵庫県から夢とロマンを求めて北海道大学へゆきました。水産学部ですから函館にも居りました。神戸と北海道とを関連づけると幕末の海運業者である北前船の高田屋嘉兵衛のことが頭に浮かびます。彼が初めて北前船で松前に入った模様や厚岸に上陸して北海道の澄み切った美しい自然に接したときの鮮烈な印象は私にも実感として理解できます。彼は淡路島の五色町の出身ですが、北海道へ進出するための拠点は神戸です。今回の震災で大きな被害を被った地区は神戸市内では長田区のほかに灘区や東灘区がありますが、二月十二日に亡くなった司馬遼太郎が高田屋嘉兵衛について書いた歴史小説「菜の花の沖」に『灘』について次のような説明があります。

★　いまの阪神間に「灘」という、海にのぞむ地域がある。

大阪湾北部の一部をさす呼称だが、どこからどこまでを灘というのか、わかりにくい。「灘五郎」といっても江戸期と明治後ではすこしちがうし、ときにごく印象的ながら、北摂の伊丹まで加えられたりする。

強いて地域をひろげていえば、武庫川を東限とし、芦屋、西宮をふくめつつ、西は魚崎・御影――つまり六甲山麓――にいたる地域かとおもえる。（中略）

阪神間の灘地方をうたった古歌は「新古今集」や「続後撰

集」などに見られるが、みな沖へ漕ぎ出た舟人の側に立つ気分から詩句が作られている。おきで逆風に遭えば素早く帆をおろして漕ぐか、いそぎ間切りをしてもよりの入江に逃げこまなければならないが、そのような逃げ込み可能な入江のない長汀の沖を灘という場合が多い。要するに、灘とは、舟人がその海域をそのように名づけたわけで、陸の者が称んだわけではない。（中略）

ところが、江戸中期から、あらたな酒造業者が、海岸の灘（西宮をふくむ）に展開するようになった。灘は、海洋とまぎらわしいために、ことさら灘目とよばれることが多かった。

灘目の海岸平野は、北摂の山地から流れてくる川が土砂を沖積させてできた野で、海浜の砂も銀粒をまぶしたようにうつくしく、それに磯馴れの松が松原をなしてつづき、文字どおり白砂青松の浜であった。

現在、阪神間の海岸は埋め立てが進み、いわゆる自然海岸を見つけることは難しい。尼崎市から神戸市にかけての埋立地はおよそ二千ヘクタールにおよぶと思われますが、これらの埋立地は、今回の地震によって、護岸や防波堤の破損および地盤の液状化現象により無残な状況となりました。港湾施設が破損したため船の接岸や荷役が困難になり、まさに取り付く島もない「灘」でもありました。

高田屋嘉兵衛が淡路で焼かれた瓦を瓦舟に積んで灘の沖を大坂に向かい、また、菜種油や灘の宮水で造られた酒を樽舟で江戸に運んだ二百年まえは、阪神地域は関西の重要な位置を占めながらも、自然観があふれる地域であったことが伺われます。

約二百年間における近代化への過程で、日本中最も文化的で近代的であるといわれるこの地域が、最もおろそかにしていたのは自然への配慮ではないかと思われます。行政を担当した私にも一端の責任はあるわけですが、地震の直後には動物の営みの原点ともいえる「食べる」「排泄する」「眠る」といった行為すら不可能な地域になっていたことを思うと、自然を軽視した近代文明都市は脆弱であることを改めて痛感させられました。

四　結《寮歌は真理》

私が恵迪寮にいたころは学生運動に熱心な寮生もたくさんいましたが、いわゆるバンカラも健在でした。寮生活ではこの二つのタイプに大別される考え方でよく論議が交わされた記憶があります。私は神戸の六甲山の裏の三木市の山奥の出身でしたので、みんなの話がよく分からない事が多くむしろ北海道の自然に感動しながら過ごした寮生活でした。

文才もありませんでしたので、学生運動のビラやあちこちの文章から言葉を寄せ集めて寮歌を応募しましたが、たまたま応募者が少なかったため、昭和三十四年度は私の詩が当選する結果となりました。しかし、自分の教養に基づくものでないだけに、今でも恥ずかしい気持ちです。

今回の地震による被災者の多くは、過密都市の中で近代文明の揺り籠に支えられた生活からの突然の変化に大混乱をきたしました。幸にして怪我をしなかった人々もいわゆるライフラインの途絶に対して、自らの生活のための防衛手段を発揮できない場合が多かったと思われます。

私は「関西エルム新聞」にも寄稿しましたが、リスク管理の発想として「恵迪寮生活」を教訓に自分の生活をしております。多くの友人をもつこと、自分のことは自分でやること、寒さに耐えること、粗食に耐えること、ストームに負けないこと、等々です。

さらに付け加えるならば恵迪寮の寮歌は人生の哲学が集積されたものであると言えましょう。震災以来、私は「般若心経」を毎日拝読しており、また内容についてもかなり勉強してまいりました。戦後五十年が経過し、震災、オウム、住専などの混乱のなかで、自分の年齢も考えながら人生観を追求するとき、清楚な生活をしながら自然観を成熟させていく必要を感じています。そのベースになるのはやはり学生時代を過ごした北海道の自然であり、寮で培った人生観であるような気がしております。

停年も近くなっておりますのに、学生時代を懐かしみ、寮歌のなかに人生の真理を見出すことは私の人生に進歩がなかったのか、年をとって子供に還りつつあるのか、それとも本当に恵迪寮の哲学が偉大すぎるのか……、残りの人生で考え続けます。



（小久保隆正氏提供）

阪神大震災のお見舞へのお礼

辻山昌佑
（昭和二十六年入寮）

阪神大震災の御見舞の御礼と報告を北大関西同窓会幹事長として申し上げます。震災発生と共に北大会館を見廻り、西宮、芦屋、神戸灘と状況調査現地入り。会として全会員約七五〇名に御見舞伺いと状況報告依頼並びに一口五千円據金呼掛を発信。理事会を開き会として三十万円の據出、会館の開放、據金は会員の被害に対し支出する事を決議。

東京同窓会十万円、東京同窓有志十一万円、札幌同窓会（農学部の同窓会）五十万円、恵迪寮同窓会から十万円の御見舞を拝受。会員は二〇二人から百四十九万円の據金があり計二百六十万円の予想を超える額が集まりました。三月、家屋倒壊・死傷等被害甚大な二五名へ、会員七万円、会員外同窓三万円、その他被害額三十万円以上の二七名へ一万円の御見舞金と併せ北大タオル、クラーク博士テレカ二枚と御見舞状をそれぞれ付けて送りました。その後、当初軽微と思った被害が思いの外大きいことが次第に分かり、激震地区の神戸、芦屋、西宮、尼崎、伊丹、宝塚、川西、豊中、大阪市（一部）の残りの全会員二二六名へ元気を出して貰うべく八月にボーイズビーアンビシャステレカと元気出し状を送りました。イチローやブルーウェーブが優勝した様に、皆様の暖かい励ましが届いて、元気を出して頑張っています。有難う存じます。復興はまだまだこれからです。今後共よろしくお願い申し上げます。

さて平成八年は全国恵迪寮同窓会を西日本支部が開識社と併せて行う当番となっており、九月十四日（土）の開催に向けて準備に入っています。震災前の支部常任幹事会では第一回の須磨大会同様、泊まり込みで心ゆくまでやりたいと云うことでした。第二回のコロンブスのサンタマリア号での大阪湾岸クルーズとフラメンコ、巨大水族館と異色のレストラン借切での夜十一時迄の狂気乱舞よりも、瀬戸の浦波の篝火一泊のインプレッションの方が強力だったとの事。関西は遠いから集まりが悪いと思うのですが、在関西の諸兄と相談の上、震災にめげずやらねばなりますまい。御意見、アイディアを〒五七一大阪府門真市栄町九の十一の小生宅西日本支部へお願いします。TEL兼FAXは〇六－九〇九の三二二九です。

祝 《恵 迪》 第2号 発刊

昭和五年入寮
中山二郎
（自宅）藤沢市本町三―九―十

昭和六年入寮
繁富一雄
（勤）株式会社繁富工務店
札幌市中央区南十二条西六丁目一番二十八号

昭和八年入寮
朝比奈英三
（自宅）札幌市西区山の手一条五丁目五―二―三〇六

昭和八年入寮
萩野辰夫
（自宅）静岡県田方郡韮山町中字奥洞一二五四―三〇

昭和九年入寮
河合正恭
（自宅）東京都豊島区駒込四―一―六

昭和十年入寮
宍戸昌夫
（自宅）東京都世田谷区野沢三―二十六―三

昭和十一年入寮
内田智康
（自宅）浜松市元城町一一八―十

昭和十二年入寮
髙安一郎
（自宅）神戸市中央区港島中町六丁目神戸パークシティB―五一〇

昭和十二年入寮
森本忠良
（自宅）八王子市めじろ台三―四―八

昭和十四年入寮
吉田俊郎
（自宅）東京都目黒区三田二丁目六―一七―九〇九

昭和十五年入寮
岩田善輔
（自宅）江別市野幌屯田町三二―十

昭和十六年入寮
仲村参郎
（自宅）札幌郡広島町西の里北三―七―十一

昭和十七年入寮
樋田成二
（自宅）愛知県中島郡祖父江町大字本甲字大溝

昭和十八年入寮
安井勉
（自宅）札幌市厚別区もみじ台西五丁目十一―七

昭和二十年入寮
弘田幸裕
（勤）大陽計測株式会東京都大田区山王一―二六

昭和二十年入寮
今寛
（自宅）札幌市豊平区中の島一条十丁目二―十一

祝 《恵 迪》 第2号 発刊

昭和二十一年入寮

稲垣昌利

（自宅）札幌市白石区北郷三条一丁目四―十八

昭和二十一年入寮

西田恒夫

（自宅）札幌市中央区宮の森二六丁目四―一―五〇四

昭和二十二年入寮

阿澄昌夫

（自宅）別府市東荘園六―一

昭和二十二年入寮

木村咲哉

（自宅）札幌市西区山の手二条十丁目一―十九

昭和二十二年入寮

中澤英輔

（勤）釧路赤十字血液センター釧路市新釧路町五

昭和二十二年入寮

森岡和馬

（自宅）札幌市手稲区前田二条十一丁目九―二十三

昭和二十三年入寮

阿部洋七郎

（自宅）札幌市豊平区清田六条二丁目二十三―十九

昭和二十三年入寮

七戸長生

（自宅）札幌市厚別区もみじ台北一丁目四―九

昭和二十三年入寮

村山正

（勤）北海道自動車短期大学札幌市豊平区中の島二―六

昭和二十五年入寮

石上勇

（勤）北海道農業土木技術指導協同組合札幌市中央区北五条西六丁目

昭和二十五年入寮

一戸昭

（自宅）札幌市南区南の沢二条三丁目五―一

昭和二十五年入寮

佐山峻

（自宅）札幌市白石区栄通十四―二―十七―八〇一

昭和二十六年入寮

河原克美

（自宅）札幌市豊平区西岡五―十四―十三―七

昭和二十六年入寮

神野善司

（勤）京王プラザホテル札幌札幌市中央区北五条西七丁目二―一

昭和二十六年入寮

辻山昌佑

（自宅）門真市栄町九の十一

昭和二十六年入寮

中瀬篤信

（自宅）札幌市南区真駒内南町二丁目二―四

祝　《恵　迪》　第2号　発刊

昭和二十七年入寮

小寺義彦

（勤）㈱ラルズ
札幌市豊平区平岸一条一丁目
九―六

昭和二十七年入寮

鈴木重雄

（自宅）札幌郡広島町緑陽町
三―一―六

昭和二十七年入寮

中楠潤

（勤）トヨタカローラ札幌㈱
札幌市豊平区美園三条
六丁目三―十

昭和二十七年入寮

村田忠臣

（自宅）札幌市白石区南郷通
五丁目北五―九

昭和二十七年入寮

吉村洋吉

（勤）石山病院
札幌市南区石山二条八丁目
二番十二号

昭和二十八年入寮

井口光雄

（自宅）札幌市南区藤野二条
十一丁目二四六の一三五

昭和二十八年入寮

須賀正太郎

（自宅）小平市鈴木町一―三八一―六

昭和二十八年入寮

髙根仟

（自宅）札幌市中央区北四条
西十一丁目

昭和二十八年入寮

三浦陽治

（自宅）札幌市西区西野一条
一丁目九―十

昭和二十八年入寮

村山幹夫

（自宅）札幌市豊平区福住三条
十二丁目四―十七

昭和二十八年入寮

山中洋

（勤）北海道社会福祉事業団
札幌市中央区北一西七
プレスト一・七ビル

昭和二十九年入寮

加藤法愷

（自宅）札幌市北区あいの里
二条二丁目十一―三十

昭和二十九年入寮

篠原猛

（自宅）所沢市小手指町二丁目四―五

昭和二十九年入寮

仁木良哉

（自宅）北海道石狩郡石狩町花川
北二条五丁目一七五

昭和二十九年入寮

村上一良

（自宅）札幌市南区北ノ沢六―九―一六

昭和三十年入寮

髙橋陽一

（勤）三井道路㈱道支社
札幌市中央区南一西二五

祝《恵迪》第2号発刊

昭和三十年入寮
厚谷純吉
（自宅）札幌郡広島町北進町一―五―一―N六〇二

昭和三十年入寮
伊東孝
（自宅）札幌市西区八軒七条西一丁目二―十二

昭和三十年入寮
幸健一郎
（自宅）札幌市南区南の沢二―四―五―一

昭和三十年入寮
髙井宗宏
（自宅）札幌郡広島町北進町四―三―二

昭和三十一年入寮
桜庭慎吾
（勤）高砂秀科工業㈱東京都港区高輪三丁目一九―一二

昭和三十一年入寮
横山清
（勤）㈱ラルズ札幌市豊平区平岸一条二丁目

昭和三十一年入寮
石川舜
（自宅）多摩市豊ヶ丘五―一―三―一〇二

昭和三十一年入寮
田中信義
（勤）医療法人社団開成病院札幌市北区北三十三条西六丁目

昭和三十二年入寮
湯浅亮
（勤）酪農学園大学獣医学部江別市文京台緑町五八二

昭和三十七年入寮
根岸正充
（自宅）札幌市北区新琴似六条二丁目二―八

昭和三十八年入寮
司馬威彦
（自宅）札幌市中央区南一条西二十七丁目一四十四〇五

昭和三十九年入寮
佐竹正治
（勤）（財）日本気象協会北海道本部札幌市中央区北四条西二十三丁目

昭和四十年入寮
石村義典
（自宅）江別市大麻栄町五―二三

昭和四十三年入寮
髙島秀典
（勤）建友興業㈱札幌市中央区北五条西十六丁目

昭和三十九年入寮
関口光雄
（自宅）東京都練馬区貫井四―四七―四二

昭和五十二年入寮
田子真
（自宅）茨城県つくば市松代五丁目五一七―一〇三

老夫雑感

青田義雄（昭和八年入寮）

風格のあった　委員長、佐藤文造氏。一昨年、永眠された。謹んで御冥福を祈る。

繁富一雄先輩が隣室に居られ、大変御世話になり、想い出多い楽しい日を送る事が出来た。情熱家であり、雄辯家。

入部（庭球部）の際の歓迎の辞は、簡にして、心を打つものがあり、挨拶とは斯くあるべきかと、感服した。ピンポンは相当な腕前、打ち合で負ける事は殆んどなかった様だ。

現在もあの形式の、新入寮生の宣誓式が行われているのだろうか。中央に委員長が鎮座。両側には、長髪髭面の面々、山賊まがいのいでたちで、厳然として控えている。委員長前に腰をかけ、かしこまって宣誓文　に眼を通している新入生を、じっと見据え、厳粛な雰囲気を醸し出す風にも見受けられた。百目ロウソクの炎だけがゆらぐ、薄暗い部屋。何んとも言いようのない、異様な沈黙の世界。

宣誓文は　黙読する事になっていたが、小生迂闊にも、聲を出して読み始めたら、近くの眼光鋭い、長髪の御仁から、破れ鐘のような聲で、「聲を出すな」と、どなられ、びっくり仰天。いま想い出しても、笑いがこみ上げて来る。ともあれ一風変った趣向の演出だった。

初めて酒を飲み、飲む程に、嬉しくなり、踊りながら、友人の襟首に酒を注いで廻り、驚かれたり、叱られたり。

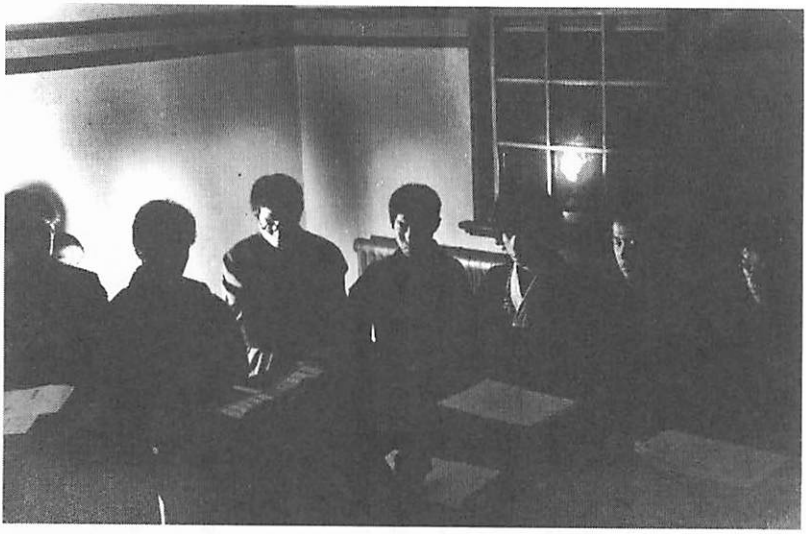
あのエネルギッシュな、深夜のストーム。

寒風肌刺す厳冬に
褌一本、下駄履きで
手持のスキーで調子を合わせ
床も抜けよと歓喜の乱舞
感涙溢れし青春絵巻

沸々として胸裡に迫る
光陰矢の如し往事茫々

近況

現在、身長一七二糎、体重五八瓩
若き女性、憧れのスリムスタイル
されど
八十路を迎え、老影深し
耳に松籟、もの忘れ
足腰衰え、牛歩の姿
流水落花、春去りぬ
時に天の美禄あり
一献を傾け、老骨を癒す
芳醇なる美酒に誘われ
何時しか陶然
千鳥足にて、意気軒昂
人間到る処、青山あり
暫し老夫を、鼓舞し労わる
情報渦巻く、騒音に耐え
ともかく存令、よろしく



新入寮生宣誓式（昭和12年）

私の想い出にある恵迪寮

高　安　一　郎
（昭和十二年入寮）



「私の恵迪寮」は、北十七条西九丁目の第二代目の寮舎で、一九三七年（昭和十二年）から一九四〇年（昭和十五年）のものである。丁度日本が太平洋戦争へなだれ込もうとする大きな変曲点の、そのすぐ手前の三年間、大略六十年前の事。去年は終戦五十年、今年は北大創基百二十年とか、私もそれなりの年齢を重ねた。ここらで六十年をタイム・スリップしてと思うことしきりである。平板を避けて、楽聖の「田園」の曲想に乗せて筆を進めてみよう。

第一楽章は、恵迪寮への道、アレグロ・マ・ノン・トロッポ。正しくは、大学正門を入り、林学講堂を過ぎてから北へと、約一キロ。これはススキノから寮へ帰る夜の経路で、冠動脈バイパス術のためにサフェナ大静脈を失った今の私の脚力にふさわしいアクセスは、西五丁目を走る市電で、終点の北十八条まで行き、そこから西、遠く手稲山を見乍ら約四百メートルで着く。大学正門前あたりと違い、電車通りから約百五十メートル程は民家があり、その間を抜けてはじめてキャンパスに入る。この道路を伝ってずっと西へ行くと琴似に至るので、「琴似街道」と呼んだ。

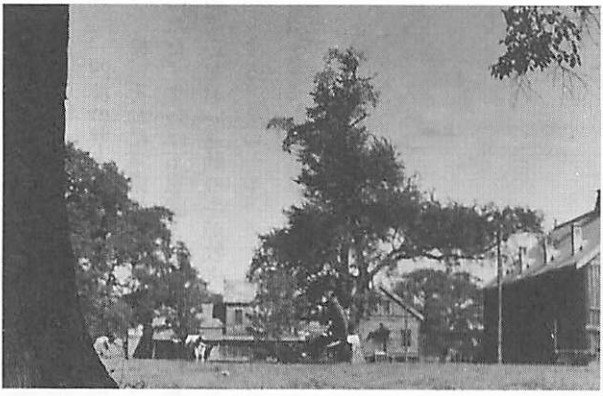
キャンパスに入ると右側は第二農場、左は各種競技場。だからそこに校門があってもよさそうであるが、それが無い。ということはこの道路部分は国有ではなく一般道（例えば市道）なのかも知れない。とすると、これに大学の中央道路がぶつかる

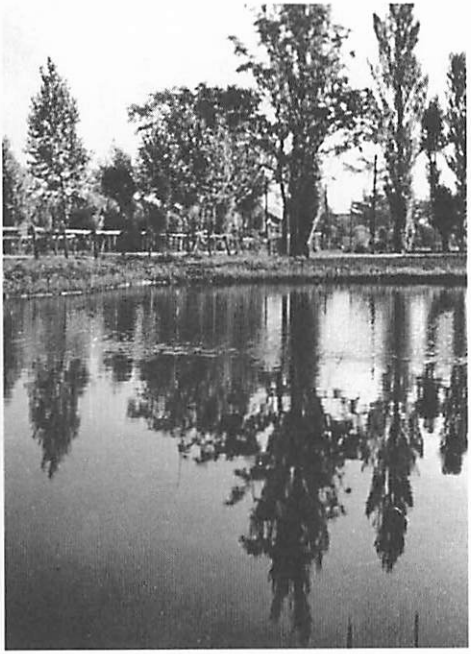


所に、南に入る門があってもよさそうであるが、それも無い。要するにそんな門は不要だったのである。二、三年前、機会があって、この辺を通ったら、中央道路の入口にものものしい検問所が出来ていて、車がせき止められ、許可証を持った人の車のみが入れるようになっていて、そこが大変埃っぽく混雑して居た。必要が生じたら「門」も出来るのだと悟ると同時に「時代」を感じさせられた。

たまに荷馬車位しか走らなかった昔の道に戻ろう。右の第二農場の牧柵の中には、よく黄白斑のゲルンジー種の乳牛が放されて居て、その奥に古い牛舎群（現在重文指定のモデルバーンを含む）、乳処理室、農場事務室などが散在する。農場入口を過ぎると、道路に面して数軒の官舎があり、ライラックなどが植えられて農場職員の方達が住まって居られ、それを外れると、飼料圃が北の方に奥深くまで続き、デントコーンや飼料用南瓜（通称ブタカボチャ）が栽培されて居た。

一年目の秋、十五夜の晩、あちこち歩き廻って自室に帰ると、私のベッドで誰かが寝て居る。しかも可なり大きな図体である。訝り乍らそっと布団を剥がしてみると、これが例の大南瓜で、同室の連中は一様ににやにやするばかり。悪戯の犯人は分らずじまいだった。もう一つ第二農場との御縁。寮の炊務として、時折日曜の朝食に、パンとミルクのメニューが組まれ、その為に牛乳を頒けて頂いた外、苺の季節には、個人でも牛乳を頒けて頂





いて、洗面器一杯の苺ミルクを数人が手掴みで喰った。

さてもう一度琴似街道に戻る。キャンパスに入ると今度は左側、東から順に陸上競技場、前記中央道路とのT字路の次がサッカー場（ラグビーと共用）、次がホッケーのグランド、その西に道路一本おいて、そこが恵迪寮だ。玄関は東に向いて、その前の円形の植込みに一本のオンコ（イチイ）がある外、門も、寮全体を囲む塀らしいものも、そんな「構え」は殆んど無かった。

寮舎の北側、街道との間は二十メートルもあったろうか、そこに皿の様な池がある。或る秋の日、野幌の原始林に遊び、その奥の小川で捕えた十センチばかりのスナヤツメ五～六尾をそこに放した記憶がある。寮の南から西へは、「原始林」と呼んで居た樹林で取り囲まれて、四棟の寮舎と付属の建物が静かに横たわって居た。ポプラ、楡、それに「原始林」の高木に取り囲まれて居ながら、寮のたたずまいは不思議と「広濶」な印象を止める。折ふし、その周辺を追い運動の牛が牧夫さんのゆるやかな歩度で、寮を一廻りする。その一歩々々にフェルマータが記され、曲想はラールゴ。然し記憶の中に音は無く、私は瞑目する。

第二楽章。原始林の中の湧水、アンダンテ・モルト・モッソ。寮の南側の原始林を構成する樹々については、しらべたこともなく、よく覚えても居ないが、ヤチダモやイタヤカエデなどがあったかも知れない。その下草



が記憶に残って居る。春早く、まだ緑の整わないうちに、キバナノアマナ（頂氷花）が、際立った黄色の六弁花を見せる。初夏が近づく頃、森の奥のやや深く、エンレイソウやシロバナエンレイソウも咲く。最初の年、この森でクロユリを見つけた。鼻を寄せると、すえた様な異様な臭いがした事と共に、この花をはじめて見た一種の感動は、特に忘れられない。

森のまん中程の所に湧き水があって、そこからは透明な水が、せせらぐ事もなくとても静かに西の方へと流れ、やがて第一農場から来る小川に吸い込まれる。この小さな泉も、遥かな昔に豊平川が作った扇状地サトポロペツ（札幌）の、その端末に現れた伏流水の一つなのだろう。この静かな流れの中に小さなトゲウオが棲んで居た。ある時、ビンを持って出て、これを掬い取って、寮の茶目（寮の食堂で給仕役をしているアンチャンをこう呼んで居た）に見せたら、「アー!!トンギョだ」と言った。

原始林の風情には郭公の声がよく似合う。郭公の初啼きは、私の経験では決まって毎年五月十九日だった。後年、戦後北大に助手として迎えて頂いてからの事。ある先輩が、「郭公は五月二十日の俸給日にはじめて鳴くんだ」と言って居たが、私にはいつも五月十九日だった。寮のベッドのまどろみの中で、初夏の郭公の声を聞くと、どうも八時半からの授業には出たくなくなり、そして「原始林」の中を彷徨することになる。予科一年目で「植物」の講義を受けた鈴木限三先生の残して居られる詩の一節、

空ゆく雲に心を奪はれて
緑の牧場を心ゆく限りさまよひ歩き
今日も学校に出づるあたはざりきと
悲しむ欠席の常習学生にも
深い親しみと微笑のあいさつを与へる

大正十五年七月作

鈴木限三遺稿集「白堊校舎の新しきころ」より

何だか私のことを仰言って居られる様でもある。先生は札幌農学校――札幌農科大学卒の大先輩で、同じ先輩の有島武郎の未完の小説「星座」の主人公のモデルだったことも私達の頃には皆知って居た。よき師を得たと今でも思っている。

寮生活の中での数々のエピソードで、この後の楽章の構想もあるのだが、駄文で紙面をほしいままにするのも如何かと思い、後は別の機会に譲ることにする。過日、別の本に寄稿したものの別刷を娘に与えたら、「こんなこともあったのに何故今日まで話して呉れなかったのか」と言われた。人にもよるだろうが、あの戦争を経過した私達の世代は、その過去を語るのに、何となく口が重くなる傾向があるらしい。どうやら平均寿命をクリアーしたのを機に、これからは許される時にはなるべく多くを語り残そうと、敢て拙文を呈する次第である。

寮生活を思い出すまえに

肥田　昇
（昭和十三年入寮）

日中戦争（昭和十二年・一九三七年）が起きた翌年、私は東京の中学から入学し、恵迪寮へ入り、三年間楽しく寮生活を過ごさしてもらった者である。

幸にして戦争の影響も北海道にはそんな大きく及んでいない時代での寮生活だった。

私にとって何もかも全く新しい生活のスタートだった。家から歩いて五分もかからぬ近い中学の平凡な五年間の生活から、一気に訪れたことのない北海道へ飛んでの私が選んだ北大での生活は、私の人生にいろいろな意味で大きな影響を与えてくれた。

先ず大学で日本一広大なエキゾチックなキャンパスの美しさと雄大さ、そして緑多く、整った街路樹のある落着いた札幌の街の美しさ（当時人口二十万人余）。更に集まった同僚の出身地の多様なこと、遠く当時の満州（奉天、大連、旅順など）台湾、朝鮮から、内地は九州、四国、中国……など、日本各地からの人々だった。

入寮すると外観より意外と廊下はきれい。決められた部屋へ入ると、木製のベッド四、窓際に机と椅子四対、片隅に小さな鏡と洗面台のある薄暗い部屋だった。天井と壁には若人の意気と夢など大書した落書きが眼について驚いた。入った部屋は柔道部、こわい猛者と思いきや優しい旭川出身のNさん、福島・相馬出身のOさんの先輩二人と、九州若松からという人のいい同僚のMくんの四人の生活。

それから始まる寮生活。原始の森を右に見て、モダンな白い工学部の手前のローンを横切って、中央通りを行き、大子川に沿う道を抜けて正門近い古い木造の予科校舎へ急ぐこと約十五分、八時半の始業……、そして三時半の終業まで、びっしり（？）と鍛えられ、終ると道場へ。先輩からいろいろと鍛えられ汗を流す。寮へ帰ると入浴、夫々クラブ活動から帰った連中がどやどやと入る。大聲をあげて寮歌を歌う男、わあわあと大聲で仲間と話す男たち、そしてやれやれと入浴を終って夕食。余りうまくないけれどお代わり自由の飯と汁。「茶目！飯（めし）！」「おゝ！」と元気よく飯櫃を持って来る可愛い坊主頭の少年たち。

かくして恵迪寮の寮生活が始まった。寮内は女人禁制、但し

売店の女の子、炊事の小母さんはOK、特別行事以外は寮内禁酒。

三年目（昭和十五年）頃から食糧も少しずつ窮屈になり始めたが、わが寮生活は何と楽しくも有意義なものだったろう。

新入生歓迎コンパ、総長、来賓参加の晩餐会、寮記念祭、真夜中の裸でスキーと下駄でまわし一張のストーム、定山渓クロスカントリー、開識社……走馬燈の様にあの頃のことが思い出される。

大学キャンパスの四季の移り変りの美しさと寮を取まく緑の林、牛の群、森に谺（こだま）するあの郭公の声、手稲山の日没、総てがロマンチックな情景であった。

然し、今は時代も変り学内も校舎が増え、すっかり移り変ってしまったことは致し方ないけれども残念である。

恵迪寮とは今のマンモス学生数の僅か数パーセントといわれるが、一日も早く大学当局とのわだかまりを解き、よりよい雰囲気のもと楽しく、有意義な寮生活と学生生活を送ってもらいたいものだ。

今や世界は大きく変ろうとしている。受験、受験とストレスを受けた高校生活から解放され、ほんとうに心の自由を得た学生達にとって、真に学問と共に心身を健やかに育んでくれる学園であってほしい。

多様な現在の情勢から「すくすく」と育つという事は仲々難しいことだろうが、美しいキャンパスの北大で過す之からの学生諸君が、二度と味わえない四年間の学生生活を心ゆくまで伸び伸びと、より楽しく、心豊かなものとなる様過して行ってもらいたいものだ。

そして、真のアムビシャスでジェントルな社会人として活動出来る素地を育んで行ってほしいと思っている。



記念祭の夜

寮生活落第生の回想

竹内伸太郎
（昭和十五年入寮）

とけ込めなかった寮生活

満州（現在の中国東北部）に育ちながら、遠い北大を選んだ理由に寮歌「都ぞ弥生」の存在もあった。それで当然のように入寮を希望して恵迪寮に入る。ところが協調性がなく人づきあいのよくない坊ちゃん育ちで、荒々しい？集団生活にさっぱり順応できず、情けない二年間を過ごしてしまった。

広い意味で学ぶという意欲がきわめて乏しかった。なぜあんなに勉強がきらいだったのか今でも時々考える。わが国が中国進出の出発点となった満州で育ったため、祖国の現地での行動から、本音と建て前の違いに思い悩んでいたのも一つの原因かも知れない。

宣誓式、鈍才会などの寮の慣例行事にも好感が持てず、記念祭の夜早く部屋に戻ってベッドの下に潜って寝たことさえある。「馬鹿になれ」という先輩の貴重な教えもあったのに、真面目に考える意欲もなかった。気は弱いくせに依怙地なところがあり、今も続けている超早寝早起きの習慣を、大多数の寮生に合わせようともしなかった。

また当時の寮は運動部の合宿所の観も無きにしも非ずだったが、自分の体力づくりに水泳をやっていたので、迷うことなく水泳部に入った。ところが正規の練習をやってみると関節の堅い体質に競泳はまったく不適当なことがわかり、ほとんど泳げなかった後輩が一年たったら私よりも早くなった。まったく効果の現れない目標に向かっての努力を続けることは容易でなく、水泳部でも劣等部員になってしまう。

こうして二年の間は我慢し、三年目は下宿で自由な生活をと考え三学期から退寮したが、その年は成績不良でドッペッタので、どっちみち寮にはいられなかった。その頃は戦局逼迫のため、学生の徴兵猶予期間が短縮され、ドッペルと徴兵確実と分っていても勉強をしなかったのだから、命懸けで落第したというわけである。なにかに熱中したための落第ならともかく、これといったこともやらず勉強もしなかったのは自慢にならない。

ところが予科だけで軍隊だと決まった後は、少し勉強するよ

うになり、課外のフランス語までも受講した。死ぬ前にいくらかでも学んでおこうという気持ちになったようだ。

航空隊で二年間生死の間を彷徨ったあと復学したときは、今度こそ学ぶつもりだったが、満州出身のためバイトで生きるのが精一杯、とうとう最後まで満足に学ぶことなく卒業してしまった。本気でいくらか勉強を始めたのは、お情けで卒業させてもらい公務員になってからである。すでに二十七才になっていたがそれでもなんとか間に合ったつもり。作物であれば超晩生種らしい。

思い出あれこれ

さてこうした恵迪寮時代に何もしなかったわけでもない。まずこんなおかしな男でも、寮にいたお陰で生涯にわたる友達も何人かできた。しかし遠く離れた場所に家庭を持っても訪れるくらいの仲だった二人はすでにあの世に先立ってしまっている。恵迪寮ではほかの学部にいく生徒ともつきあえるのがとくに良かったが、出身地が全国に散らばっているため、卒業後も近くに住むのは例外的になる。幸い青森県には元弘前大学農学部長佐々木信介、元りんご試験場長福島住雄といった恵迪寮の仲間がいる。

こうした数少ない友人の一人渡辺亮治に誘われて、「湖に星の散るなり」の寮歌でも知られている切替辰達哉先輩が担当していた寮報の編集を手伝ったことがある。お陰で海軍予備学生として特攻戦死した河晴彦が、入寮のとき感想文をのせたことを覚えていて、恵迪寮同窓会に連絡してそのコピーを送ってもらい、同期生に配布することもできた。

「都ぞ弥生」にひかれただけあって切替さんに限らず寮歌にはかなり縁が深く、昭和十七年の寮歌「春来にけらし」は同じ水泳部の橘爪、杢子コンビの作詞作曲だし、昭和四年の「黒潮鳴れる」を作詞した須田政美先輩には、青森県に勤務していたとき知りあってから、亡くなられるまで指導をいただいた。

その他恵迪座にも端役で出演させられたし、支笏湖旅行のときはクロスカントリーで、三十キロの道を走ったこともあり、これは生涯の最長走行記録となっている。

たいていの寮の行事には消極的だったが、開識社だけには熱心に参加して、退寮した後でもいつもでかけていた。安部能成、中谷宇吉郎、石塚喜明、橋本左五郎、東新、伊藤秀五郎など学内外の著名講師の話は、授業よりずっと面白かった。

またどの部屋に入ったときも掃除だけは異常なくらい丁寧にやることを積極的に引き受けた。それで外部から参観者がきたときは、いつも私のいる部屋が見せられたことになった。

こうした一種の奉仕精神が昂じて、興亜学会という右翼的なグループに仲間入りし、肉体的勤労奉仕に熱中しはじめた。千歳の山奥での木樵作業も二冬やったし、最大のものは昭和十六年の夏に学生義勇軍に加わってやった長都沼の排水工事であ

る。後にこれは大学排水と呼ばれるようになり、私たちの名を刻んだ記念碑が建てられている。

水泳に限らず運動はさっぱり駄目な男だったが、筋肉は鍛えてあったので肉体労働ならだれにも負けなかったのが、当時の予科生としては異端に近い方向を取らせたものだろう。しまいには新設された勤労作業班に二重加入して、農作業や土方仕事をやった。そうしてこうして培われたボランティア精神は生涯の糧となる。

またこの労働経験は、戦後バイト学生として学部生活を送ったときも、そのご開拓農家に実技の指導をするときにも大いに役立った。

北大の伝統を教えてくれた恵迪寮

さて落第と軍隊でやっと昭和二十三年に農学部を終えた後、北海道と青森県で平凡な地方公務員の生活を終わって今日に至っている。ただ第二の職場を含めた三十五年の勤務の過半の期間を、開拓事業にかかわる仕事をやり、これには新しい農業の創出を夢見て取り組んだ。

今では忘れられた戦後の開拓だが、青森県はこの事業にきわめて熱心で、一緒に働く人材にもめぐまれた。役人の行動を制約する前例というものがないことも幸いして、かなり思うままの行動ができ、そのいくらかの成果に自分では満足している。

何ごとも冷ややかに傍観的態度ばかりとりがちだった男が、なぜこんなにやれたのかといえば、やはり北大に学んだことが一番大きな理由だろう。ある先輩が北大の伝統は開拓者の面倒を見ることだと述べていたが、その伝統をもっとも多く伝えた場所は、やはり恵迪寮だったのかもしれない。



（昭和16年の記念祭漫画絵はがきより）

霜降の学生服

仲村参郎
（昭和十六年入寮）

昭和十六年、私は旧制釧路中学校からあこがれの北大予科に入学し、恵迪寮に入寮した。

だが残念ながら、翌年の夏、帰省中の釧路で大喀血、そのまま右上葉肺浸潤で一年間の病床生活を余儀なくされた。後始末に新寮の一室（陸上ホッケー部）を訪れた父はあまりのことに、これじゃ病気になるわいとぼやいたとか、あとで同室の友人からきかされた。一年ドッペって、十八年秋に復学した。

その頃から戦いのための勤労奉仕の日々がつづいた。仲間のほとんどが樺太上敷香の飛行場つくりに動員されたが、私は病み上りということで、十勝の亜麻工場での勤労奉仕となった。

作業は、畑の亜麻を刈りとり、それを束ねて干す。そんなことを朝から夕方までつづけるのだが、まわりは一面の耕地だから、札幌にいるよりもずっと食べるものに不自由はしなかった。



上の写真は誰が撮ったのかも忘れたが、拡大複写したらまことに見にくい。右端が私である。現在百七十センチ、体重七十三キロだが、この頃は百七十二センチ、体重は六十キロにも充たなかった。

もともとおしゃれ（身だしなみ）に無頓着だったが、それにしてもこの格好はあまりにもみすぼらしい。

後列、右から四人目が北大医学部第一外科の葛西洋一君（故人）だと思うが、そのほかの仲間は顔はおぼえているのに名前が思い出せない。誰方かおわかりの方は是非教えていただきたいと思う。

勤労奉仕が終ったあと、みんなで弟子屈の子宝温泉へ遊びに行ったが、旅館の番頭は私たちの服装を見て、これはヤバイと叮重に門前払いされた。

その足で釧路の自宅に帰ったが、玄関に入るなり、母が私の格好を見て可哀想だと涙を流したことを覚えている。学生時代のささやかな小遣いは本代や飲み代に消えてしまい、着るものにまで気がまわらなかったというのが実情だった。

ところで、私が着ていたこの霜降のボロ服はその後綺麗に洗濯して、どうしようもないままに行李の底に大切に保管していたが、幸い縁あって陽の目を見た。

恵迪寮同窓会に寄贈して、今は「北海道開拓の村」の旧寮の一室に、誰かの冬服と並んで飾られているのだ。

去る平成七年九月十六日の寮歌祭のとき、「開拓の村」へ行き、久しぶりにわが霜降と対面したが、たまたまそばにいた宍戸昌夫先輩（昭和十年入寮）にこれは釧路中学のボタンだと指さされびっくりした。あとでおききしたら、先生は当時の道内の中学の帽章、釦は今でも全部覚えていると言っておられて、二度びっくりしたものである。

寮生活の思い出

アンコの作り方で大激論

柴田松太郎（昭和十九年入寮）

私が生活部の幹事をしていた時の話である。ある時寮生たちにオハギを食べさせようということになり、アンコを作ることになった。私は甘いもの、特にアンコ類が大好きだが、自分で作ったことはなかった。しかしアンコを作る係りになってしまったので、ともかくも寮生分の小豆を大鍋で煮た。さて、小豆もよく煮えてきたので、砂糖を入れるときがきた。そこでもう一人の係りのM君と砂糖を入れる時期について、大激論になった。M君はまだ水があるうちに砂糖をいれるのだという。私は水がなくなってからでないと、砂糖から水気がでるのでアンコにならないと主張した。しかし自信があってそう主張したので

はない。ただ意地の張り合いに過ぎない。結局私が意地を張りとうして、私の意見どうりにやった。水がなくなってから砂糖をいれると、砂糖が溶けてベチョベチョになり、なかなか水気がひけない。これは失敗だったかなあと内心ビクビクしながら、ともかく火をとめた。一晩たって翌朝大鍋のふたを取ってみると、なんと理想的なアンコができているではないか。大袈裟な言い方をすれば、私が賭に勝ったのである。M君は私の主張が正しかったと認めた。

鍋の側のパラフィンがない

今度は、寮生にシルコを提供しようとしたときの出来事である。例の如くストーブの上に大鍋をかけ、小豆を煮ながら友人達と話をしていた。時々鍋の蓋を取って小豆の煮え具合を確かめた。そろそろ小豆も煮えてきたので、砂糖を入れることになった。その時、蓋をストーブの周囲のいろいろな物が置いてある所に置いた。そして砂糖を入れ終わりまた鍋に蓋をした。シルコが出来上がったらしいので、いざ蓋を取ってみるとシルコの表面に油のようなものがギラギラ浮いている。何故油のようなものが入ってしまったのか分からない。鍋も、蓋も、おたまもよく洗ったものを使ったのだから、油がはいるはずがない。しかし、よくよく考えてみると、蓋を置いた場所にあったはずのスキー用のパラフィンが1個見当たらない。床にも落ちていない。そこで合点がいった。つまり、熱くなっている蓋をパラフィンの上に置いてしまったので、パラフィンが蓋にくっつき、鍋の中に落ちて溶けたのである。シルコの上に浮いたパラフィンは掬いとって寮生諸君の腹の中におさめてもらった。その後腹の異常を訴える寮生もでなかったので、ホッと安堵の胸をなでおろした次第である。

中根先生のことども

終戦直後は物のない時代であった。ある時、寮の部室の天井の電球が切れた。そう簡単に電球は手にはいらない。さてどうしたものかと考えた。そこで悪知恵が働いた。学校（予科）の製図室の天井の電球である。ワット数は忘れたがかなり明るい電球であった。製図室の天井はかなり高く、電球をとりはずすのはかなり困難であった。やっととりはずして寮に持ちかえり、切れた電球と取り替えた。部室は前よりもずっと明るくなった。ところが、このことが学校当局の知るところとなり、会議にかけられたとのことである。会議の中で中根先生は「あれは寮生に貸してあげたのです。」と発言されてわれわれ寮生をかばってくださった、と聞いている。物静かな先生の人間性にいたく感動している。

（第11期生活部（購買）幹事）

第三十九回記念祭（旧き日記より）

中村勝美（昭和二十年入寮）

はじめに

ひょんなことで五十年昔の日記が出てきた。敗戦直後で未だ余燼治まらず、就中食糧の欠乏は甚だしく、生活部の連中の涙ぐましい努力にも拘らず、空きっ腹の寮生活だった。

記念祭の晩餐会に出された進駐軍放出のメリケン粉で焼かれた真っ白いパンが旨かった。夜中に飯盒の飯を塩もなく皆でホークで食べ乍ら駄べり合ったことも懐かしく思い出す。そんな時代に書かれた日記だが、ひたすら道を求める恰も修道僧だ。何より良き伝統と素晴しい友情に恵まれていたのがよく分かる。そんな環境の中で昭和二十一年十月戦後初めて再開された第三十九回記念祭の三ヵ日分だけを、旧き友情に改めて心から感謝を込めてご披露することとした。

昭和二十一年十月二十七日（日）晴れ

寮を囲繞する楡林も肌寒い木枯らしに紅葉した枯葉を僅かに残すのみとなった。

恵迪寮第三十九回記念祭の第二日目。開寮を待たずして既に門に詰掛ける人を見て驚く。スタートコンパ以来、全寮生が総力を盡した記念祭の当日、何か伝統の中に動かされている自分を感ずる。

午後中央講堂にて『舞踏会の手帖』を観る。記念祭デコレーションの来客者人気投票で我々の部屋



第39回記念祭（昭和21年）スタンプ

中村　勝美作

の「北大文学部」が五百四十票を獲得して第一位となった。
又自分の制作した記念スタンプが採用されて歓喜する。私の小さな歴史に大きい足跡を印した一つとして遺るであろう。
室内デコレーションの鵜乃博士論文（漱石研究・啄木研究・一茶・芭蕉等）の装飾の中で談笑すること四時間、全く苦労も忘れて語りかつ大笑いする。多田君の拾ってきた棒切れが芭蕉の杖であったり、只の石を覗かせて夏目漱石研究とは……新寮四十八号室一同の苦心の成果がもたらした痛快さも記念祭の収穫であり感激でもあった。

昭和二十一年十月二十八日（月）晴れ

記念祭第三日目、空晴れて木枯らしが冷たい朝だ。昨日の疲労で八時起床する。
十時より公開演劇ハルベ作『青春』西堀さん演出を観劇する。努力の結晶素晴らしい。
各人の演技は良いが、主演の個性に些か臭味があるのが唯一失点を残している。
五時より晩餐会。宮部金吾先生、伊藤元総長、今前総長、安澤農博以下のお歴々臨席。恰も骨董品のような方々許りだ。
明治九年入学八十七才の宮部先生。又、第一回の寮生である伊藤先生曰く「私は七十才になったが、宮部さんの前では未だ々々若い」とは全く吃驚させられる。
終わって懇親会で庭球部の『春の目覚め』、水泳部の『アルトハイデルベルグ』、自由文化部の『愛欲』と各部の演劇や先輩の熱演に哄笑、爆笑の連続だった。

昭和二十一年十月二十九日（火）曇り

午前三時第三十九回記念祭の終焉を飾る聖火祭始まる。
寮裏の原始林に集う三百の面前に紅蓮の炎は赤々と燃え上がる。いやが上にも一人一人の魂は燃え上がる炎と共に昂揚し聖火祭の奔流に没入する。やがて闇をつん裂く「魔神の呪い」の歌声が嵩まり、続く円陣の乱舞は感激に酔いしれ最高潮に達する。
最後に古城さん藤森さん老月君と共に舞う。東の空が仄々と白味始め、遠く手稲の連山が既に白雪を点在して聳立するのが見られる。肩を組み、歌う自分の胸中は打ち震え、両眼からは不覚にも涙止まらず、声を限りに歌い乱舞し続けた。
去年の聖火祭では二年目の嗚咽と慟哭を聞いて正直言って奇異に思い、羨ましくも思った私だった。しかし今何か大きい伝統の中に存在する自分をひしひしと実感させられた。
聖火も消え、終わりを惜しみつつ三々五々引き上げる皆んなの後姿は曾って見ない真剣さと厳粛な雰囲気を感じさせた。
午後は流石に疲れが出て猛眠した。
そして記念祭の全ては終ったのだ。

雪虫

井上裕司（昭和二十一年入寮）

十一月、札幌には雪虫が舞う。それは風のない冷気の淀む冬空に、唯一活き活きとした生命の営みを見せてくれる。トドマツの根元で成長したこのトドノ根大綿虫は、初雪の降る一週間位前に羽化し、故郷であるヤチダモに帰って行くといわれる。この虫の複雑な世代交代の過程はさておき、羽化したこの虫を雪虫とはよく名付けたものだ。北海道にとって長い冬の訪れは、たとえ豊かになった今でも、楽しい便りとは云い難い。その冬の前ぶれとして、粉雪のように舞う雪虫に、小春日に似た一刻の安らぎと、そこはかとない哀しみを感じる。

昭和二十一年初めて北海道の土を踏んで最初の冬が迫っていた。恵迪寮に入れたので、餓死することはないだろう、と多寡を括っていたのだが、食糧事情は最悪だった。生活部の懸命な努力にかかわらず、数個の澱粉団子の浮く塩汁、数切れの南瓜といったメニューサイクルが続いた。もっとも、当時は一般家庭でも、似たりよったりだったと思うが、ただ蛋白質と脂肪が著しく欠けていた。脂肪はなるべく体を動かさないことで凌ぐことが出来たが、蛋白質は健康管理上ぜひ補給せねばならないと思っていた。それは戦時中の体験から会得した生きるための知恵であった。

しかし身近に蛋白資源は殆ど見当たらない。犬猫の姿すら見えない。そのうち体のあちこちが痒くなってきた。蚤か虱か皮膚病か、いずれにしても、栄養失調の前兆である。何とか栄養を補給せねばと思って、窓外を見ると、雪虫の群れが見えた。勿論当時は名も知らぬ虫であったが、綿のような清潔感があり、群れているので濃度がある。手であふっても逃げる様子もなく、茫洋と漂っている。これを見逃す手はないと、玄関横にあった自転車を借用し、第二牧場横のポプラ並木に出て見ると、空間に虫の大群が漂っている。早速大口を開いてこの群につっこみ、三転、四転、ただひたすらこれを飲み込むことに専念した。どの程度口腔内に入れたか、抵抗感が全くないので判断できない。小一時間、道路を往復した。手足は冷気で痺れていたが、体内にほのぼのとした温かさが溢れて来て、久し振りに生命の充実感を味わった。晩秋の昼下がり、飽きもせず自転車で雪虫を追う男を、通行人は何と見たであろう。しかし私の記憶のなかに

は、黒々と冬枯れた原始林を背景に、赤錆びた屋根を連ねる寮舎とポプラの空間を覆い舞う雪虫が、幻想のように瞼に浮んで来る。もうあの風景も、生存への情熱も失われてしまったが、あの日の恍惚感だけは、いまだ鮮明に思い出すことが出来る。

「正法眼蔵随聞記」に「世間の人、馬従り落つる時、未だ地に落ちざるに種々の思い起る」とある。私が死の瞬間に見る絵巻物は、あの時の寮舎と、ポプラの梢と、雪虫の乱舞ではなかろうかと思っている。

恵水会の頃

高島巌（昭和二十二年入寮）

第二代恵迪寮時代、寮内部の一つに、恵水会というキリスト教を勉強しようとするグループがあった。今の寮生に聞いてみると現在はないというが、開学以来、キリスト教との因縁浅くない北大のこと、全学的な北大キリスト教青年会もあるので、現在の寮にもその下部組織があるはずと思うのだが、名称が変わったのだろうか。

もともとクリスチャンの集まりとしてできたものと思うが、信者はむしろ少なく、西欧文明のより良き理解のために聖書を勉強しようとするものの多い集まりであったが、郷関録にもきちんと記録されているれっきとした文化部であるのに、自分がそれに属した経験をもちながら、はたして何時からあったものなのか、何時消滅してしまったのか皆目分からない。

つれづれに寝床でめくる恵迪寮同窓会名簿を見ると、伊藤次郎、今西暢夫、牟田悌三、村野（細野）順三などの懐かしい方々はすべて一年先輩で、それ以上の先輩に記憶のあるお名前の見られないところを見ると、恐らく戦前からあったものであろうが、戦争中に休部、戦後復活したものではなかろうか。運動部の多くと違って、OB会も、部誌の発行されたこともなく、ただ思い出の中だけに生きる集団となってしまったのだろうか。

今では死語になってしまった「虚脱状態」という言葉、敗戦を契機とした大きな価値観の変換期に、日本人の内面をおそっていたはなはだしい放心状態のなか、民主主義、民主国家が合言葉となり、学制改革・男女共学の導入など、足早な新制度への変革の時期に、新しい行動の規範をもとめて暗中模索していた旧制中学の頃、キリスト教によりどころを見出そうとしていた私、恵迪寮入寮と同時に恵水会に入会したのはいわば当然のことであった。

同期入寮者の中に、尾関良隆、折登孝祥、加藤豊治、小林義康、角田登美夫、藤井義彦、本間均、松岡義隆の名が見えるが、手元の昭和二十四年度郷関録を見ると十四人の部員を数え、唯物論研究会の八人を超える勢力になっているが、多分この頃が一番多人数だったのではなかろうか。

以上にあげた誰彼のうち、もともとクリスチャンだった者は二人に過ぎず、その後受洗したという話を聞いた者もいないので、恵水会はクリスチャンの集団ではなかったといいきれるであろう。

記念祭の実施をめぐっての寮生大会で、旧制高校の学生寮が、Gemeinschaft としての集団か Gesellschaft としての集団かということが大真面目に議論されたりするような、リベラルな人間集団の中の部だったせいか、クラークさんの、control your appetite and passion という言葉を尊重しようとする宮部金吾先生の意を体して、禁酒禁煙を舎是とし、その禁を破った者は自ら退寮するという厳しい規律を守っていた青年寄宿舎とは違い、また、信者であることが入寮資格であった汝羊寮ともちがって、キリスト教を正面に掲げながら、キリスト教にある誤解を解明したいと入会の動機を公言する部員もいたりして、批判的な眼でキリスト教を見ようとする学生をまじえた、一切の束縛のない、ルーズなつながりの人間集団であった。

寮内では、指導教官として恵迪寮におられた、故人になられた真方敬道先生に個人的にも指導を仰ぐことが多かったが、決まった行事としては、日曜朝、天気のよい日には恵迪寮裏のローンで行われる早朝祈禱会があるだけで、これにしても参加が義務づけられていたわけではなく、そのあと、西洋史の辻村正吾先生のお宅に伺って聖書の講義を受け、あとはそれぞれ教会に通うのがしきたりであったが、いま思い出される常連の顔ぶれは、きわめて限られたものであった。

また、通う教会としては、北大らしく独立教会が多かったが、それには、当時集会の指導をしておられた農学部の時田教授の人間的な魅力も影響していたであろう。ただ、どういうものかカトリック系の人は恵水会にはいなかった。

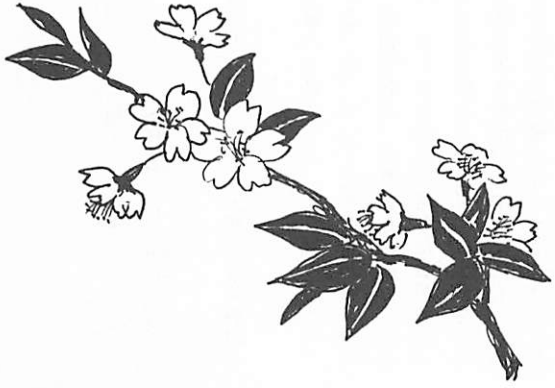
辻村先生のお宅での聖書の講義は、ロマ書やコリント書などの書簡類が主題であったが、聖書の記述の背景を求めて、いくつかの経典外文書に眼を通したことや、マルチン・ルター訳のドイツ語聖書を読んだことなどが記憶に残っている。

戦後のGHQの民主化教育の一環として、アメリカ聖書協会

からの寄贈になる、アラブの砂漠をラクダの隊商が進む姿を表紙に描いた、ビニール表装のポケット判の欽定訳新約聖書が安価に大量に出回っていたが、いたるところにこまかく書き込みをして数年のうちにボロボロになっていたその聖書、今失われて私の手元にはない。しかし、後に医学部に進んで、良き医者とは如何なる医者かと考えるとき、結局、良き人とはいかなる人か、良きこととは如何なることかという、形而上学的なレベルでものを考える必要に迫られたとき、私の思想の根底に、キリスト教的倫理感がどっしりと定着していることを知ったが、恵水会時代の聖書研究がそのもとになっていたことを思わずにいられない。

学制改革で旧制高校が消滅するとき、時の文部大臣、天野貞祐が、「高等学校の運命」という題で読売新聞昭和二十三年二月二十四日号に発表した小文は、「旧学制に於て最も成功した教育が高校教育であったことは識者の一様に承認するところであろう。高校生活の体験者は異口同音に礼讃していう――寮生活のいかに楽しかりしことか、われらは高校において最も幸福な時期を持った、ひとり学問を学んだだけでなく、生涯の友人をも与えられた、と。」という書き出しで始まっているが、私にとって、正に恵水会での出会いがそうであったことを、しみじみと満足感と充実感とを以て思い出すことができる。

一九四七年に発見された、クムラン文書ともいわれた死海文書のことは、その頃すでに発見の事実がニュースとして伝えられてはいたが、我々の眼にすることはできなかった。それが最近、オーストラリアのバーバラ・スーリング女史によって、「イエスのミステリー」として出版されたが、かっていくつか目にした経典外文書のレベルとはまったく違った、大量の、系統立った古代キリスト教の文献を手にして、そぞろ、恵水会時代のキリスト教への傾倒を懐かしく思い出すこの頃である。



恵迪の友情

田中哲夫
（昭和二十五年入寮）

私の手元にある昭和六十一年十月十七日刊の「恵迪の青春―エルムの樹蔭で―」と平成四年十一月刊の「恵迪寮同窓名簿」をひもときながら、私なりの感慨にふけっている。「恵迪の青春」では、はじめて親許を離れて恵迪寮に入寮した頃の思い出をたどった。今回は、入寮二年目の記憶をたどってみた。

二年目になった昭和二十六年四月、私が所属していたエスペラント研究会は、医学部を志した中村泰治君や私、経済学部に行く高尾忠良君の函館高校の同級生三人は協議の結果、解散することになった。一年目、ずっと隣室だった恵水会の熊谷直敏君（高校同期）にさそわれて中村と私は恵水会に、高尾は柔道部に移った。当時、恵水会は、石田端（高校同期）が中心になって拡大策をとったのか、野球部から新井田孝市、熊本利彦、「モーロー部」より宮本千之助（三君とも高校同期）、一年目途中から同室となった山本二朗君、二年目から入寮の松野拓君が新たに入部した。従って一年目のときからの石田、熊谷、高橋庄次君、吉田昌一君、白川久成君に加えると昭和二十五年入寮の会の一六八名中十二名の大所帯となった。部屋構成で二人があふれ、私と松野は北寮階上スペシャルで生物部の高橋忠、渡辺章と合同した。

「恵迪の青春」に一年先輩の大島久さん（工学部・土木科）が恵水会のことを記している。夜、ベッドを寄せ合わせて畳の間をつくり、車座になって聖書を読み、宗教書を輪読し、賛美歌をうたった。日曜日には、教会の礼拝に出席した者が多かったとのことだが、恵水会の部屋を離れていた私には大島さんのような思い出がない。私と同室の生物部の連中もなにもしなかったようだから、私に恵水会所属の緊張がなかったのはあたりまえだったのでしょう。

しかし、医学部に入学した昭和二十七年四月、札幌独立教会で北大の新入学生のための記念講演会があるとのことで、東京教育大学から医学部に入学してきた同期の荒川巌君（医局は東大小児科、現在静岡県伊東市で開業、内村鑑三先生の高弟で有名な無教会派の塚本虎二先生の集会に参加されていた）に誘われて出席した。教会への何等の抵抗感もなく出席したのは、おそらく恵水会に参加しながら何もしなかったことの反省であっ

た気がする。はじめて聖書を買い求め、毎日一生懸命に読んだ。医学部の聖書研究会にも所属し、札幌独立教会に通った。ここで主管者の北大農学部水産学科教授（昭和二十七年四月から、函館に移られ、北大水産学部水産植物学科教授）の時田郁先生との劇的なであいとなり、以後親炙することになった。さらに医学部の聖書研究会で北大看護学校の学生であった軽部陽子と知り合い、大学卒業七年後に結婚することになったのだから恵迪寮恵水会を通しての神様の御導きであったのであろうと感謝している。

二年目の一学期に同室となった後輩になる小林滋宗（夕張高卒、札医大）、茶畑仁司（函館西高卒、工学部電気工学科）、高田隆司（函館西高卒、工学部電気工学科）の三君は、性格が明るく、私達の寮生活での最大の楽しみだった所謂「エッセン・マッヘン」で、男女共学を一年間体験した彼等三人は、共学が如何にたのしかったかを毎晩のように聞かし、渡辺、松野、私をしてうらやましがらせた。高橋だけは「和ちゃん」というガールフレンド（北大看護学校生だったらしい）がいて彼等の話をききながら適当に応じていた。高橋、松野、渡辺とは大学卒業後も毎年の年賀状で旧交をあたためていたが、高橋は肺癌手術で一時回復したものの、再発で亡くなったのはさびしかった。

寮の後期委員会が発足してから部屋替えがあった。石田が委員長、高橋が会計部長、宮本が購買部部長となった。恵水会、生物部あわせて二名あふれ、私と一年後輩の清水邦昭君（農学部農経学科）が新寮四五号室（モーロー部）で一年目の佐藤藤吉さん、奥村正文君（医学部、現岩見沢市立病院長）と同室となった。寮の中で冬は最も寒い部屋が私の医学部受験のためのきびしい試練の場となった。夜おそくまで勉強している私のため、同室の三人の友は細かく気をつかってくれた。奥村君は岩見沢の自宅がお寺で、帰省した時持ち帰った米を炊いて「エッセンマッヘン」をした。彼とは二年毎の寮歌祭で会うのをたのしみにしている。佐藤さんは旧制一高をめざした剛健な方だったし、樺太出身の清水君はやさしかった。私のためにたのしい筈の寮生活がかなり制約されたのであろう彼等にすまない気持ちでいっぱいだった。寮歌祭であった奥村君が私の寮生活をみて発奮し、医学部に進学できたことを話してくれた時、ほっとしたものである。

二十六年十二月上旬、私は猛烈な腹痛のため数日間悩まされた。委員会厚生の菊地昶史君（高校同期）が面倒みてくれたがよくならず、北大病院の医師が往診してくれた。若い医師はおてあげとのことで、結局、佐藤さん、清水君、奥村君が私をソリにのせて北大病院にはこんでくれた。鎮痛剤（麻薬らしい）を注射されて痛みが不思議にとれ、再びソリにのせられて寮にもどった。ソリをひっぱる三人の寮友を背に寒空の月のきれいだったことを、寮歌「都ぞ弥生」の三番を思いながらその友情と共に忘れることはできない。

三年前の恵迪寮歌祭で、盛岡の切替辰哉先生（岩手医大名誉

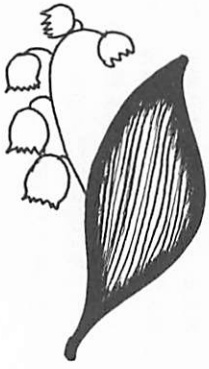
教授）が挨拶の中で盛岡で札幌農学校二回生の新渡戸稲造先生の講演を依頼されたので、内村鑑三、宮部金吾、新渡戸稲造の精神は恵迪寮にうけつがれている恵迪の精神であることを話してみたいと、申されたことを思いだしている。

平成七年九月二十八日に北海道新聞社で「思い出の遠友夜学校」を出版した。平成六年（一九九四年）六月二十一日、北大学術交流会館で開催された「遠友夜学校創立百周年記念講演会」での講演をもとに編集されたものである。序文を書かれた故高倉新一郎先生は、この夜学校は、その設立の趣旨（貧しい人々の子供達のための夜学校で、明治二十七年に設立、その運営はほとんど北大の教官とその関係者の努力と、学生の無報酬の奉仕によるものだった。（昭和十九年三月閉校）にのっとって、論語の「有朋自遠方来不亦楽乎」の句より遠友夜学校と名付けられたとのことである。

新渡戸稲造先生の高邁な精神による設立で、その校是は「リンカーンに学べ！リンカーン精神に学べ！」であった。夜学校は単なる貧家の子弟の教育だけではなく、今日のセツルメント事業のような働きをもったとのことである。昨年の寮歌祭でお会いした宍戸昌夫先生（横浜市大名誉教授）は、「忘れ得ぬ生徒の瞳の輝き」と題して夜学校に奉仕された思い出を記されている。

創立百周年記念会で記念講演された佐藤全弘先生（大阪市大名誉教授）は次の如く話された。内村鑑三先生は、札幌に学んで本当にありがたく思ったのは、北海道の天然と、そこで結んだ友垣と、そこで与えられた信仰であることを常に弟子たちに語り、文章にもしている（学生時代に内村鑑三、新渡戸稲造の感化をうけた元東大総長の矢内原忠雄先生は、昭和二十七年・一九五二年五月二十四日の東大五月祭で、札幌農学校の精神で教育し、その精神を貫いていたなら日本は誤った太平洋戦争をしなかったであろうと講演された。）内村、宮部、新渡戸、三先生の間の友情はまことに美わしいものであった。この天然と人間と神の三要素は、三人の長い生涯を定めた大切な要素だったというのが、講演要旨である。

私達の恵迪寮での小さな交わり、培われた友情もこの範疇にはいるのだろうというのが、切替先輩が強調したかったのではないかなと想像している。大先輩の偉大な道を思うと私達のたどりし道程は小さく比べるわけにはいかない。しかし私達なりに寮生活の友との交わりをとうして与えられたものは、寛容、忍耐、そして希望だったように思う。これからの歩みにも大きな励みになると思う昨今である。



一冊のノート

工藤信彦（昭和二十五年入寮）

私の掌元に一冊の大学ノートがある。「炊務部在庫日記　自一九五一・一・一九」と表書きがあり、一四三期の炊務であった私が、故長尾久司君に引継ぎをした七月十七日までを書き記したもので、37ページの記録である。十二年前、「なつかしき恵迪寮舎に別れを告げる会」に参加した際、二十六年の炊務部長水庭久尚君から渡されたものである。三十年ぶりの思いがけない出会いであった。

ノートは、当初の二ヶ月分の日録メモ、第四四回記念祭に関する炊務の詳しい記録、そして引継ぎ事項の部分と、大よそ三部に分かれている。ズボラな私にふさわしい気ままなノートに過ぎないけれども、「生活部」を「炊務部」と名称変えしたのが一月三十日の寮生大会であることや、受験生宿泊のために教養の三月の試験を四月に延期したことが、二月五日の頃に明記してあったりして、いささかの資料的役割りをなすものと思える。

しかしこのノートは、何よりも、十九歳であった私自身の、また共に在った炊務の、そして一四三期の委員会の、涙ぐましい青春の記録として目前にある。多くの仲間のように冷静にものが見えず、ひたすら一途であったことが歴然としていて、何とも気恥ずかしい限りではあるが、それだけにどこか生々しい肉感が漂っている。

一日の食費45円でどうすれば当時の標準カロリーを維持できるかを、真面目に考えて苦慮している部分を読んだりすると、何の経験もない大学一年生の仕事じゃないよとつぶやいてみたくなる。このノートには記されていないが、部長の辻英夫君と二人で、大学のトラックを使って粉雪の中、石狩町で船一隻分の鰊を買いとった時のことや、新琴似に漬物用の大根の買付けに出かけて商談不成立、どうしたら寮生に顔向けできるかと語り合いながら、北二十一条あたりの草原で抱き合って泣いた思い出などが甦る。三百人の寮生は重かった。

十九歳で純心もないものだが、炊務の体験は、人生における〈公〉という人間の社会的役割りを教えてくれたということで、大きかったと思っている。四十年近く高校教師を職業としてきたけれども、生徒のためではなく、自らの職業として教職を全

うしようとして全力で生きたのも、恵迪寮のあの半歳の体験が支えであったと思っている。

先日、寮歌を歌うために札幌に飛び、多くの友と「別離の歌」を歌って涙した。台風で足止めをくったので、初めて開拓の村を訪れて寮と出会い、その後ゆっくり北大の構内を歩いて帰京した。さわやかな風の日であったことがうれしかった。

恵迪寮・新制度に移りし頃

吉井　誠（昭和二十六年入寮）

恵迪寮……口にすると懐かしく、即座にいろいろの想いが心に浮かぶ。予科時代や新制になって寮生活をされた方には、その時時の様々な思い出があると推察されるが、旧制の中学から改革編入となった新制高校を卒業し、新制時代の第二年目に入寮した私には戦中、戦後のバンカラ風を容認する気持があり、寧ろ寮生活を楽しむ気風が強かったと言える。

灰色と言われた受験勉強から解放されて、仲間とことん付き合う、別の意味では自由が利かぬ寮の生活は良い修行の場だとさえ思っていた。大正四年に建てられた我が家は当時相当な荒屋になっていたから、古びた寮の建物にも新しさを感じ、親しみを持って落ち着けたように思うし、「贅沢は敵だ」と躾けられた戦時教育と戦後の忍従精神が未だ生きて居たのか、大いに満足していた。従って寮生活は楽しく、寮は青春の故郷的存在になっている。

その懐かしさに惹かれ、平成六年、平成七年と二年続けて、秋の陽射しの中に開拓の村を訪れ、復元された恵迪寮に入り、『都ぞ弥生』とともに流れる説明の声を聞きながら、飽きることと無く当時の想い出に浸った。展示品の机や木製ベッドなどは、現実に私たちがお世話になって使用していたものよりは数段立派なものであったが、想い出の確認には事欠かなかった。私の寮友達が載って居る寮歌祭の写真を始め、手元に大事に保存しているのと同じ頃の「郷関録」や覚えた寮歌の数々に触れ、こ

れと同じ様な部屋で最後のスキーストームをしたなあ……などと、なかなかその場を離れたくない気持ちであった。

受験の時にもお世話になり、委員や部屋の先輩方に親切にされ、ご指導を頂いたりしたが、入寮手続きをしたのが昭和二十六年四月十四日正午、その日から翌年九月十四日までお世話になった。私にとって、この一年半の寮生活は何物にも替えがたい貴重な経験になった。

入学式は十六日であった。その夜が石上委員会による宣誓式、各部所属の部屋に落ち着いた夜の洗礼、数日して、一般教養部正副部長が出席されての歓迎コンパ、更には数日後の鈍才会と多くの行事を経て漸く恵迪寮生となった。

洗礼や鈍才会で度肝を抜かれながらも、済んでみると、不思議と部や部屋の仲間同士気持ちが一つになる。当時も感じた如く、それらは価値有る行事であったと思うし、新入りの寮生達はこの行事によって余分な力みが抜け、堅さも取れて寮生活に馴染み、更に連休に帰省した後、観桜会が済むと一層寮生らしくなって行ったように思う。

当時の学生は真実ハングリーであった。食べ盛りの年齢でもあり、寮の食事では皆空腹を抱える状況にあった。帰省時に米などを持ち寄っては電気コンロを使い、マッヘンしては同じ鍋の飯を楽しんだ。これも又良さであったろうと思う。また、寮の食事には我が家では食べたことが無いネーベンもあった。それらは本当に美味いと感じ、その日が楽しみでもあった。ホッケのフライに野菜サラダ、けんちん汁、ハヤシライスなどである。週二回の昼食のブロットは総てコッペで、ザーメンと通称したクリームが掛けられていた。

夜食として購買で売られるブロットもそれで、ジャムを付けると高かった。腹の虫が寝付かぬ夜はそれを求めて食したが、その夜は何処からやって来るのか、体長二十センチもある大ねずみの訪問を受けた。机の上に零れたパン屑を当てにしたらしい。窓際に机を置き、その一端にベッドを付けた状態で暮らしていた為か、机の上から枕の傍までやってきて、挨拶代わりか顔や耳の辺りに息を吹き掛けたりしていた。始めは驚いたが、来ない夜は淋しく、訪れを期待して食べ残しを置くようになった。後年、ケイテキネズミにまで増長し、敵視された様子もあるが、その頃は「友あり、夜中にのみ来る……」の親しさがあった。

六月十日、第四十四回の記念祭が行われ、全寮生で記念写真を撮り、裏の原始林ではファイヤーストームが行われたが、残念ながらアルコールの後の激しい動きですっかり酔っぱらってしまい、最初の幻想的な感激の思い出と暗闇に向けての寮舎への戻り道で排水に落ちた記憶しか無い。その後寮歌祭もあって、先輩から教えられた寮歌を共に歌い、同室の仲間と練習を積んだ成果をと、太鼓の音と共に南中北新の各寮毎に華々しくボリュウームを競い、感激に涙した。寮歌祭の後、暫くは廊下を歩きながら放歌高吟する寮生が多かったが、室内に居ても何時か

それに合わせ、歩みに連れて消え去るまで歌っていたのを思い出す。

後期は石田委員会に代わり、その年度の寮歌祭は後期の委員を始めとする二年目の追い出しコンパの時も行われたので、年二回は実施されていたと思われる。

寮時代、寮歌は常にロずさんでいたから、今でも時に、口を衝いて出てくることが多いが、東京エルム会寮歌委員会が昭和四十九年に刊行した『都ぞ弥生』を読むと、その序文の中に、「予科学生の寮歌であった為、新制の学生の寮歌として、恵迪寮生は毎年伝統行事として寮歌を生み出し、伝授していることを欣ぶ」との表現がある。この本の「前篇『都ぞ弥生』をめぐって」と共に、「後篇『北大寮歌』について」に収集された各年度寮歌の作者・作曲者などが綴るエピソードを読んで、その寮歌を口ずさむと、唯口伝で歌って来た寮歌に深い味わいを覚える様になった。

忘れられないのは夜中のスキーストームである。入寮した頃はまだそれが許されていた。他の部屋からの訪問をしばしば受けるので、我が硬式庭球部もと新入りの七人が褌一つで、「札幌農学校は蝦夷ヶ島　熊が棲む……」と全寮を回った。その後も続いていたが、元気の有り過ぎるグループが居たらしく、階下の天井がひび割れして仕舞い、それを機に禁止になった。いや、数年後に夜中のストームを迷惑に思った方も居られるので、解禁の期間があったのかも知れない。受け止め方は様々あるだろうが、私にとっては一所懸命に踊り狂った懐かしい青春の思い出である。

当時は札幌市内でも白鳥事件が発生するなど、血生臭い話題が絶えなかったが、二月下旬佐藤委員会の下で行われた追い出しコンパが終わり、先輩方が退寮すると、受験生を泊めて世話をし、四月には新寮生を迎えて慣習と寮歌を教えたが、口伝の寮歌の節が楽譜と微妙に異なる様に、慣習も少しずつ変遷して行くものと思う。

私達の先輩には男女共学の経験の無い方が多く、偶に共学時の女性達が訪れたりすると、最初は柔弱な輩と見られたこともあったが、新しく部屋に迎えた後輩は総てが共学校の出で、話題も華やかさを帯び、既に当り前のことになっていた。それが年と共に少しずつ日常の生活にまで及び、徐々にアパート化して行ったとしても不思議ではない様な気もする。

しかし、良いことばかりでも無かった。その頃の寮は、未だ「バイ菌も死ぬ」ほどには汚れ切っていなかったと思うが、インキンに罹った寮生が出て、伝染源は寮の風呂場とか騒がれたことがあった。幸い部屋には感染者が無く無事であったものの、不運の人達は治療に通った様子であった。また私の退寮直後に赤痢が発生し、寮生は週日ほど禁足になった様に思う。幸い保菌せずに退寮出来たので、下宿に迷惑を掛けることも無かった。丁度学部移行を決める時期で、同期の寮生は困っただろうと案じていた。当時はまだ市内には赤痢騒ぎが聞こえて来る時代で

もあった。

私の頃も部屋やトイレの落書きは多かったが、それなりの風格があり、楽しめた。と言って自分で書く程の才能もなく、専ら傑作を読み返すのが日課であった。言うなれば感激音痴のみの、平凡な寮生でもあったのだろうか。

全ての職場勤めから解放された昨秋、初めて地元のエルム会に参加し、数人の先輩と同席させて戴き、楽しく過ごした。閉会直前、老いも若きも無い、総員無邪気な顔で、『都ぞ弥生』を始め、『瓔珞みがく』や校歌を歌った。

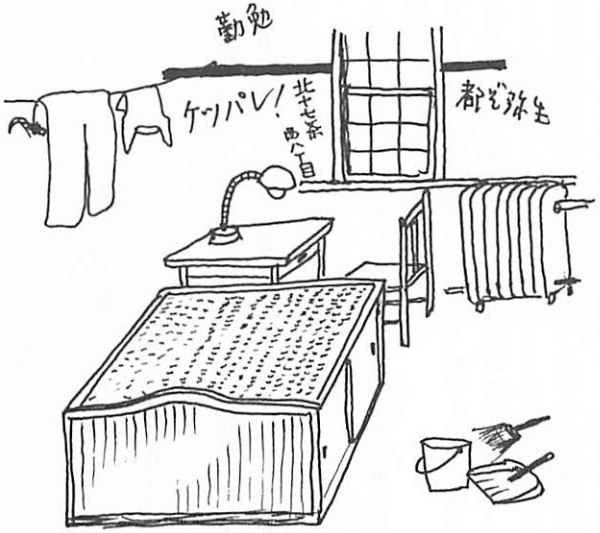
校歌『永遠の幸』の全てを歌い終えて、歌い継ぐのは恵迪寮生のつとめの如く、それも何故か寮歌に押され気味であったと惜しい気持を感じていたが、折しも、平成七年秋発行の札幌同窓会誌に、昭和二十四年卒の和泉庫四郎氏の「漂流する北大校歌」が発表され、その理由が解った。

有島武郎氏が作歌されて既に九十五年、和泉氏提言の通り、同窓の方達の力で、長かった『永遠の幸』の冬の時代を終わらせる為にも、歌い続けたいとの思いが強い。

恵迪寮……無条件で懐かしい。入寮直後に新寮、後北寮、南寮、北寮とお世話になった。特に南寮の二階の窓越しに、疎らながら原始林を眺めて暮らした頃は特に良かった。他の時代は知らず、私の頃の恵迪寮は斯くの如くあった。

その四十有余年前の多感な想いは若き血潮のほとばしりとして、今なお心の片隅で温々と生き続けている。

貴とき野心の訓へ培ひ
栄え行く　我等寮を誇らずや　〔都ぞ弥生・引用〕



北大 ―寮生活とラグビー部の四年間―

萩原　昇
（昭和三十六年入寮）

小生が恵迪寮に入寮したのは、昭和三十六年の四月ですから、もう三十五年の歳月が経過しています。その頃の事を今思い出すと、今でもずいぶん心細い状態だったと思います。

北大を受験するに当っても、東京試験場付近に良い宿舎がないかと、手紙で大学本部に問い合わせたりしています。結局、芸大を受験する友人が宿泊する飯田橋の公務員宿泊に一緒にお世話になり、上北沢の日大文理学部まで行きました。

その頃、がんで病床にあった母親に合格の電報のことを話すと、嬉しさよりも、遠くへ手放す方が心配になったようです。思索と読書を理想とし、スポーツや遊びを否定するような状態にあった息子は、余程頼りなく見えたのでしょう。一緒に合格したS君の家を訪問したり、北大に在学中のO先輩の家へ訪問したりしました。

布団袋一つと行李一つを前橋からチッキで送り、O先輩に引率されて旅立ちました。その頃は、向こう三軒両隣の交流があって、餞別までもらいました。小生の通学した中学の卒業生は半数の人が就職した時代でした。

途中、上野駅からは、O先輩の同級生が三人同乗し、先輩たちの話しに耳を傾けながら、青森までの夜行列車、青函連絡船、函館本線「急行アカシア」と皆初めて乗る路線で、二十六時間の長旅でした。連絡船は、波高い津軽の海を渡り、白銀輝く渡島の峰々が見えた時は、いよいよ北海道だなと異郷の地へ足を踏み入れる思いでした。

O先輩の下宿は、北大正門前の道を東へわずかの所にありました。二階の部屋で一休みした後、恵迪寮に向かいました。残雪のある北大キャンパスは、やはり広いと思いました。蒸気機関車の引込線が工学部の北側までひかれ、貨車で石炭を運んでいました。煙突から幾条もの黒い煙が煤となって、残雪を汚なくよごし、原始林の中の恵迪寮も夕闇の中で、余計黒ずんで見えました。

仮宿で泊った部屋が寮務委員の大谷先輩の部屋でした。大谷先輩はラグビー部の名ウイングで、身長はそれ程大きくはなかったのですが、胸板も厚く、なにしろ駿足でした。裸電球の下でしたが、頭はスポーツ刈りにし、人なつっこそうな笑顔が非

常に暖かみのあるやさしい兄貴に見えました。身体を動かしてみたいなら、ラグビー部へ入らないかと誘われました。音楽が好きなら、ハワイアンバンドもあるよと口笛を吹きながら、ウクレレを奏で出しました。その夜は、疲れ果てて、安心してぐっすり寝られました。

入寮選考には、父親の書いた嘆願書を持参して来ました。北海道大学入学志願者心得の一番後には、『その他』として「本学には学寮の設備があるが、収容人員に限度があり、希望者の一部しか入寮できない」とありました。家は自営業でありましたが、父親は経済的に苦しいと訴える気持で小生に持たせたのでしょう。近くの群大の養心寮の寮生が時々家へ買物に来ていましたから、それとなく聞いて、学生寮での生活費など知っていたのかもしれません。

入寮が決まり、スポーツへの衝動に駆られて、ラグビー部の部屋に入りました。一年生三人が入りました。行李をベッドの下に入れ、布団をひろげれば引越しは終りました。机や本立ては揃っていたからです。

ラグビー部の練習に初めて参加した時は、靴からジャージーまで先輩のお下がりでのみすぼらしい姿で、つわもの揃いのラガーの迫力に圧倒されたことを思い出します。教養の講義は、古河講堂が教養本部の時代で、そこを中心に行われていましたが、寮に帰ると午後四時頃から練習し、暗くなるまで、走り、スクラムを組み、セービング・タックルでグランドに倒れこみ、へとへとになりました。高校の三年間は、運動らしい運動もせず、約四キロの自転車通学が唯一の運動でした。唯、中学時代には、一年間程、町の柔道場に稽古に通っていましたので、スタミナだけにはチョッビリ自信を持っていました。

五月の連休の春の小樽合宿は、その後、〝恐怖の合宿〟と言われた程で、何人もの新入生が脱落しました。小生は、ちょうど大学での健康診断の結果、再検診になり合宿を見合わせてもらいました。参加していたらラグビー部から去っていたかもしれません。

そして、一人留守番の間、五月の北の自然の百花繚乱の春を、原始林や農場、植物園で感じることが出来たのです。

ラグビー部の寮生は部員数からすれば、少数派でしたが、大きなメリットはラグビー場への往復の時間のロスがなかったことです。ラグビー場は、現在の体育館の所にありましたが、ラグビーの練習が終ると、そのまま、しまい湯の寮の風呂に多数の部員が殺到しました。その時の風呂は円形でしたが、しまい湯のため、湯は少なく、もうスチームも出ていなかったのです。泥水のようになった湯を汲み上げて体を洗いました。身体がほてっていましたから、上り湯は水でも気持が良かったことを覚えています。ラグビーの練習に、なんとかついて行く内に、練習が終った時のほっとした気持とともに、体力の充実、生きている実感が得られるようになりました。

寮の食事は、最初こそ、これが北海道の米かと思いましたが、

三食七十円で寮費百円の生活に不満はありませんでした。風呂の隣りの売店で牛乳を飲み、栄養を補給しました。夜の十一時のスペシャルも積極的に廊下を走って、食堂に向かいました。ありつけない時は、空腹に耐えかね、電車通りのモツラーメン屋に七十円を持って出かけました。

秋には、大谷先輩ともう一人の水産専攻の人が函館へ移行すると、下宿にいたラグビー部の同級生がぞくぞくと入寮してきました。大学でのクラブ活動は、七年の世代の交流があります。リーダーは、神戸や東京の伝統校で、高校時代ラグビーをやってきた人が主流でしたが、ラグビースピリットを身につけ、ジェントルマンでした。

ラグビー部の部屋は、明日の練習のことを考え、早く眠りにつきましたから、ストームをかけられても、しぶしぶとベッドの上に起き上り、力なく手拍子を打ちました。落書きもやらず、看板アタックもしなかったけれども、観桜会、寮祭、観楓会等には人並みにつき合いました。酒もラグビー部のコンパや寮の催しの時以外は飲まなかったし、マージャン、煙草もやらなかったのです。ラグビーの力をつけるためですが、結局、案外他の寮生よりもお金を使わなかったのです。その当時の運動部と文化系の部屋の割合は、一対二で運動部は少数派でした。ちなみに、恵迪生の道内と道外の出身の割合は、同じく一対二でした。

北海道のラグビーシーズンは、四月から十一月の雪の降る頃までで、本州とはシーズンを異にしています。シーズンオフは、アルバイトも積極的にやりました。肉体労働で一日四百円位でした。厳寒の地へ長期のバイトへ行き、内臓をこわしてしまった人もいます。全く札幌を離れなかったかというとそうでもなく、小樽、帯広、仙台での定期戦、島松自衛隊基地や小樽の真光寺、釧路の大楽毛での合宿、赤平での炭鉱チームとの試合と各地へ出かけています。

恵迪寮の二年間の生活が終ると下宿生活に戻る者もいましたが、ラグビー部の四人は、楡影寮、桑園寮、進修寮と別れていきました。進修寮はキャンパスの外にありましたが、元和歌山県人寮だったとか伝えられていましたが、二十四名の家庭的雰囲気のある寮でした。寮母の藤沢さんが娘さんと一緒に住み込み、食事の面倒をみ、夏は隣りの畑での野菜作り、冬は雪はねとやってくれました。二人部屋で、気の合った者同士が入りました。きれい好きな者同士が入ると、床もガラスもみがきあげました。石炭ストーブでしたが、二年間事故もなかったのです。風呂はなく、近くの銭湯に行きました。

恵迪寮時代と違って、ちょっと余裕も出来、気の合った者が喫茶店でコーヒーを飲んだり、酒場の止まり木に上がって、安酒を飲み交すこともありました。女子寮やドレメとの合ハイ、クラーク会館での寮連祭では、近くにあった女子寮と合同で演劇と合唱まで全員で取り組みました。スキーも買うことが出来て、憧れのヘルヴェチアヒュッテに山スキーを楽しんだことも

あり、手軽に市電で藻岩山へ行けるのも地の利でした。

寮生活を四年間続けた人は、北大生の中でも少数の部類に入るでしょう。経済的に苦しい人たちだと言えるし、自宅から通学出来た人たちや下宿に入っていた人たちから見れば、うらやましいと思われた面もあるでしょう。静かに勉学に打ち込む、自分の時間を楽しむということは、当然制限されるでしょう。小さな狭い部屋に、大家族で住んでいた年代の人たちだったから、寮生活が出来たともいえるでしょう。

現在は、子供が少なくなり、しかも子供部屋があるのが当り前の時代になって、一緒にやって寮生活して行けるだろうかという危惧もあります。たまたま、小生はこの二年間、下水道の実務研修を全寮制で実施する所で、全国からの市町村職員の世話を担当してみて、この心配は晴れました。三週間という期限があることもあるでしょうが、今の若い人も、大部屋の八人の部屋に満足しているようです。むしろ、四人の部屋は嫌われているのです。新規学卒者も、他の分野を経験して来た人も、実に熱心に仕事のことを中心にして、交流し合うことが出来るのです。

昨年の阪神大震災、地下鉄サリン事件は、教育界にも大きな衝撃を与えました。少子化の時代を迎えて、各大学で改革が進行中ですが、学生は大学に入ってから色々やれなかったことをやってみたいという人が多数なのが現実ではないでしょうか。

今や、全国のどんな小さな町を訪れても、学習塾の看板が目につき、トイレの水洗化が実施されているかいないかを除いて、生活の質は同じようなものになったといわれています。

そして、学校でのいじめは憂慮すべき事態と言わざるを得ない段階に来ており、一方、大学の選択は競争回避型に、地元指向になっているといわれています。

このような中で、恵迪寮も、もう一棟、昔ながらの木造で増築してみるのも良いでしょう。若い人はレトロを好みます。部屋の人数も学年に応じて、色々のメニューがあって良いと思います。もちろん、食堂も、自炊出来る部屋もほしいですね。若い人は、きれい好きですから、余り経験していない掃除や洗濯もきちんとやるでしょう。

小生の娘二人は、自宅から通学しましたが、孫には北大へ入るようすすめたい夢を見ています。その頃には恵迪寮出身の女性総長が出現しているかもしれません。



「ぬぐう」ことなど

石村義典
（昭和四十年入寮）

恵迪寮を離れてすでに三十年という時間の流れをもつ。すでに役職にある恵迪の友人をその会社にたずねたことがある。会話の途中、彼は背広の内ポケットからおもむろに三つ折したチリ紙を用いるべくとり出した。「オールドスタイルですか」の問いかけとともに、私はズボンのポケットからの日本手拭を示したことがある。彼と私は一廻りの年齢の差をもつが恵迪の同期である。

昭和四十年初めの恵迪寮、そこでチリ紙も使用されていたはずであるが、チリ紙の使用の記憶は私にはもはや消えている。記憶の中での恵迪の「ぬぐう」に用いる物品としては新聞紙がある。

旧制中学最後の入学、そして新制高校へと、そのなかで「ぬぐう」に新聞紙を切って、ポケットに入れていた。「恵迪寮での完全な個室はトイレである。」そんな落書が便所にあったが、恵迪寮の便所の個室はつかい残した新聞紙で敷きつめられ、積み重ねられており、その中央に落す穴があるといった感じの光景がいまも私のなかにある。もちろん水洗便所ではない。落下物の堆積の頂上がだんだん上に、尻に向ってのびてくる。頂上の上昇の速度を特に意識するのは厳冬の「シバレ」の季節である。どこかの国のいつかの時代、堆積して棒状に凍ったクソを肥料として市場に売りに行くことのあった話を読んだことがある。不純物（新聞紙 etc）を混える恵迪のそれは、その国においても売り物にはならなかったであろう。

昭和一桁生れの私、南国の農家では「ぬぐう」ために青草がひろびろとした便所においてあったのを記憶している。瀬戸内での年が明けてからの冬の農作業は麦畑への土入れと、そこへの下肥の施用が主をなす。腐熟した人糞を肥溜から麦畑、山畑へと肥たごを終日かつぐ作業に粉雪をもはこんでくる木枯しのなかで、痛い寒さを無縁にする。腐熟した下肥は集められてくる個々の家々の匂い、粘りなどの個性を消失して下肥の均一な匂いと色彩をもってくる。恵迪のその匂いは個性を喪失しつつある、その中間の匂いの記憶を私にのこしていた。

終日の肥たごかつぎの夕暮、小麦藁やナスビの稈で沸した風呂が一つの休心であることもあった。鋳物の五右衛門風呂に入

るには、浮いている底板に両足で均衡をとって乗り沈めることからはじめる。昭和四十年代初めの夏休みに、我が家に案内した恵迪の友人たちは、今も我が家の五右衛門風呂の記憶を私に語ることがある。五右衛門風呂は湯船の広さよりもその深さに充分さをもち、首までどっぷりとつかることができる。

隔日に入浴できる恵迪寮の風呂では、蒸気で加熱された湯が浴槽の縁辺部に沿って出る構造になっていたとうけとる。午後四時の入浴開始時には入浴の適温を超えている湯が速度をもって円形の浴槽の縁に沿って回っていたと記憶のなかにある。その浴槽の縁辺の湯の高温帯を意を決して一瞬にして突っきり、円形の浴槽の中心部に入りこむと、適温帯が存在しているのを発見したことがある。浴槽の周囲で水を入れて浴槽の湯の適温化を待つ僚友を尻目にして、その中心部に入りこみ、入浴を楽しんだものである。昭和四十年代私たちが親しんだ浴場も、何代か前の寮委員たちがインキンの寮内蔓延を契機に改善改築をなしとげたのがそれであったことを知ったのも、つい最近のことである。

新寮移行の頃 ～月寒学寮最後の一年～

佐々木 欣也
（昭和五十五年入寮）

畏友・清原君からの電話で今回のこの原稿を引き受けてすぐ、久し振りに当時の資料を引っ張り出してみました。と言っても、それは容易なことではなく、押し入れの中の幾つものダンボール箱……それらはガムテープで閉じられ、札幌を離れて内地に戻って以降、ほこりまみれのまま放置していたものでしたが……を開けては中をかきまわし、ようやく見つけ出したのが、「月寒学寮文書」と題された一冊のファイルと、八十三年版の手帳です。

「こんな時代もあった」、と言うにはまだ年月は経ってはいないものの、やはり懐かしい。ファイルは一九八二年四月十五

日（木）九時より食堂で開かれた「月寒寮生大会議案書」で始まっています。綴じ込まれた文書のほとんどは、いわゆるガリ版のゲバ文字文書か「青焼き」で（当時はまだ普通のコピーは普及しておらず、それらは「白焼き」と呼ばれ、しかも現在の乾式ではなく湿式だった）、当時寮長だった高橋俊郎さんの独特の字体が続いています。旧寮最後の年の北大学生寮の一つとして、あの頃はこんなことをこんな言葉遣いで議論していたんだな、と、思わず頬がゆるみます（もっとも私の場合、高校の教員となった今も相変わらず、教職員組合の役員のハシクレとして、同じような議論と行動の毎日なのですが）。

まことに慌ただしい最後の一年間でした。長期に渡る学内の「懸案」であった新々寮問題がいよいよ「決着」しよう（「させられよう」）というこの年、私たち北大学生寮七寮生は、負担区分問題、入寮銓衡権を巡る問題、ドッペリ（留年）生の新寮移行の問題、寮生雇いの炊婦さんたちの雇用継続の問題など、様々な問題への対応を迫られていました。その中で、クラーク先生の訓えたる「余は諸子をして、紳士をもって対するであろう……」という言葉の精神からはおよそかけ離れた学生部の文部事務官の連中の態度（話し合いを求めて学生部に赴けば門前払い、座り込めば力づくのゴボウ抜き、抗議すれば写真を撮る）と姑息な学生部委員の教官たちの無責任な言動に、ほとほと疲れた一年でもありました。私自身、当時は「寮連」（北大学生自治会連合）執行委員でもあったため、これら大学当局とのやりとりのほとんどに関わっていましたが、今こうしてワープロのキーを叩いていても、嘲笑う彼等一人ひとりの姿がよみがえり、憤りに胸が震えるのがわかります。

しかし、そのような一方で、月寒での日々は穏やかに過ぎていくのでした。恵迪寮や、他の五つの学部寮がキャンパス内か大学周辺に在ったのに対し、私たちの月寒寮はその名の示すごとく豊平川を越えた遠隔の地に在りました。

名物「月寒アンパン」の店と道を隔ててポプラ並木に囲まれた敷地の中に、かつての旧軍司令官の官舎として建てられた赤煉瓦の二階づくりの寮。小鳥のさえずる夏の早朝、その学生寮らしからぬ風情に、散歩中の市民が入り込んで案内を請うてきたこともあります。冬は冬で、夜通し吹雪いた明け方、純白の雪と建物の赤煉瓦が旭光に映えて、我が寮ながらその美しさに息をのんだこともありました。また秋の日の昼下がり、授業を受けに大学に行くのをやめて、まだ夕方の寮連執行委員会までは時間があるわいとばかり、庭先の木に渡したハンモックでミツルと（私が恵迪寮から連れていった、いわゆる「寮犬」で、寮住込みの阿部さんご夫婦をはじめ、みんなにかわいがられていました）昼寝を決め込んだこともしばしばでした。

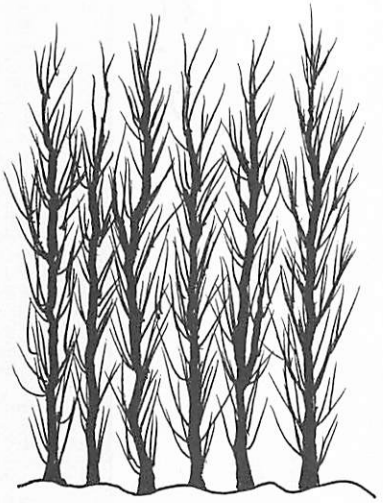
最後の年の月寒寮生のメンバーは高橋、鶴原、田中（通称「ネンQさん」）、石田、家村、山野、成岡、河合（通称「トッツァン」）、伊藤（通称「年寄り伊藤」）、伊藤（通称「若伊藤」）そして佐々木の十一名。みんなゲルトには恵まれていなかったけ

れど、そのほとんどが恵迪寮での部屋サークル・雑誌『恵迪』編輯委員会の人脈で、毎日は楽しいものでした。大騒ぎの餅つき、冬が来る前の石炭小屋掃除、月寒公園での深夜の雪滑りや花見、寿司コンパ、夜中の何時であろうと寮内に響き渡るネンQさんのサンダルの甲高い足音、「タコ部屋」での学習会、石田さんの部屋で、居住者を無視してコタツを囲んで毎晩ウダウダと続いた酒盛り、そして何より、阿部さんご夫婦がつくってくださるエッセンは、格段に美味しかった。

このように断片的ながら思い出は幾つも蘇ってきます。新々寮問題についても、けっして熱心に取り組む寮自治会ではなかったけれど、入寮銓衡権を巡って北大学生寮七寮の中で唯一、学生部当局が出した「入寮届の受理について」なる文書を突き返し、「月寒寮からのアピール」というビラを出したことは、当時の私たちとしては特記に値するかもしれません。

ともあれ、こうした生活にもやがて終りの日が来ました。阿部さんご夫婦の雇用問題も不満足ながら決着し、ドッペリ生も新寮移行できることとなった八十三年三月二十日（土）。午後四時より、歴代OBも招いて寮食堂でささやかに閉寮コンパを催しました。成岡さんデザインの、赤煉瓦をあしらった記念手拭いを配布したのはこの時だったように思います。やがて宴も終り、卒業生は札幌を去り、私たちはキャンバス内にできた新しい「コンクリートの箱」に引っ越したのでした。

顧みて、感傷的な「思い出」は幾つも浮かんでくるものの、あの毎日が自分にとってどんな意味を持つ日々であったのか、現在もなお明瞭に対象化するに至ってはいません。しかし少なくとも言えそうなことは、私にとって北大での寮生活とは、恵迪での二年間に加えた月寒での一年間だけであって、その後の新々寮での二年間は全くの「別物」だということです。旧寮と変わらぬ仲間たちとの交歓があってもなお、そうなのです。どうしても私の心の中で、両者の間には「太い線」が引かれてしまうのです。誰がそうしたのか。誰なのか。おそらくは私と同期の諸君の胸中の想いも、私と同じなのではないでしょうか。



寮歌をめぐって

閉寮記念歌「別離の歌」はいつ作られたか

吉井周雄（昭和八年入寮）

先日、寮歌の好きな仲間が集まった時のことでした。平成五年に北大予科が当番となった第二十五回北海道寮歌祭の実行委員長をつとめた昭和二十年予科医類修了の小菅高之君から次のような問題が提起された。昭和七年五月発行の寮歌集には昭和七年度寮歌「古城の春」は掲載されているが、その前年即ち、昭和六年に恵迪寮が改築された際の「別離の歌」が見当たらない。これはどうした訳であろうか、とのことでした。

私は昭和八年四月に入学、入寮したのですが、その点の経緯は分らず、私が属していた予科サッカー部の当時の主将であった中村小弥太先輩が「別離の歌」の作曲者であります。

今年七年一日に逝去されましたが、二月頃は御元気であって、当時のことを御尋ねしたところ、御電話の話では「六十年以前のことでもあるので記憶ははっきりしていない。しかしその当時を思い出すと、次のようなことがあった。それは恵迪寮の第九九期（昭和八年四月より）寮委員長の佐藤文造さん（中村さんと同年次）と寮の廊下で会った時に「別離の歌」は中村さん作曲のものが選に入ったと言われた。その時に白石祐義さんの名前も話の中に出ていたようだ。」ということでした。白石さんは昭和七年予科医類に入学、入寮していた人で、昭和八年寮歌「タンネの氷柱」の作曲者であった。

当時の状況をふりかえってみると、恵迪寮は昭和六年一月に学校側より突然、移転、改築の話が出て、北大五〇ヶ年の長期計画の一貫として、跡地に法文系学部の建物を作るとのことであった。しかるに、政府の緊縮財政の下で予算は厳しく、寮の老朽化のための改築のみが認められた。また、この頃に、大学予科の廃止問題も政府から出されたが多くの反対で撤回され

た。

寮は昭和六年四月末に閉寮、七月より改築にかかり、十一月二十二日にほぼ出来上がって、入寮を始め、十二月一日に新入寮生の歓迎会が新しい食堂で行われた。この新入寮生の中に中村小弥太さんも含まれていた。なお閉寮中に、昭和六年度寮歌「平和の光輝ける」が発表されている。新寮が出来てほっとした時に、大学当局より寮の収容人員を1室三人とするとのことで、寮生は従来の四人定員を固持して強く要求していたが、新年次の入学生がきまる直前の昭和七年三月十日にやっと寮生の希望が受入れられた。

当時、新しい寮に蹴球部の室が数室あって、中村小弥太さんも入室していた。そして昭和七年四月に新しい入寮者として、サッカー部樋口　眞（現在渡辺眞）さんが中村さんと同室となった。樋口さんの記憶の中に「入寮早々に中村さんと大槻　均さんが時々話合い乍ら、ギターで一生懸命作曲していた。そこへ寮の委員が来室して、その曲を聞き乍ら良い曲だと言って、今年の寮歌にすると断言していた。それが昭和七年度寮歌「古城の春」の誕生でした。そして、長い間の恵迪寮にサッカー部の室を持った部員にはなつかしく、うれしい寮歌だ」と述べているので「古城の春」の誕生ははっきりした。

新しい寮に入ってからも、昭和七年秋から懸案の自炊制度が検討を重ねられ、八年三月二十六日より実施の運びとなった。このように新寮の運営から円滑に進むと、寮生の気持ちにもゆとりが出て、閉寮時の壊されて行く時の寮への哀愁、寮生の間に改めて感じられた強い友情などを後輩にも残しておきたいということもあったろう。昭和七年に樋口さんと一緒に入寮して、サッカー部にいた外岡鉄男さんは「一年生の冬（昭和七年十一月～八年四月）に寮の中村さんの室へ行くとギターで中村さんの作曲した「別離の歌」を弾き乍ら歌ってくれたことを思い出す」と述べていて、或いは中村さんと大槻さんの発意で〝別離の歌〟が作られ、寮歌に取り上げられたのかも知れません。そして昭和八年四月に寮歌「タンネの氷柱」が発表され、前記の佐藤文造委員長の言とも一致します。なお、「寮史」によりますと、中村小弥太さんの恵迪寮の在寮期間は昭和六年十一月二十二日より昭和七年十一月三十日までとなっております。外岡さんが「別離の歌」を中村さんから聞かれたのは中村さんが寮を出る前の頃だったのではないでしょうか。

また、「恵迪寮史」が初版として昭和八年十一月二十一日に発行されている。その巻尾に編集者の一人である笠間尚武さんが、昭和八年十一月七日に書いた編集後記の中に「都合により篠川（大槻）均作詩、中村小弥太作曲の閉寮記念歌をのせることが出来なかったのは遺憾である」と述べている。因みに寮史の原稿の〆切は昭和八年三月末日であった。勿論、昭和八年度寮歌「タンネのつらら」も寮史初版には載っていない。昭和八年四月の寮委員会で寮歌の決定発表では〆切に間に合はなかった。

以上により「別離の歌」の発表の時期は外岡鉄男さんの思い出により昭和七年十一月以降と考えられ、昭和八年四月であると思われます。

「古城の春」「別離の歌」「タンネの氷柱」の作詩、作曲された方々、佐藤文造委員長、そして中村小弥太さんも今年（平成七年）七月一日に逝去され、皆様が幽明境を異にされており、心から御冥福を御祈り申上げます。そして、これらのなつかしい、立派な寮歌を残されましたことに感謝申し上げます。

この新しい寮も老朽化して昭和五十八年に現在の恵迪寮（コンクリート5階建）に改築されました。

なお、中村小弥太さんと同期でサッカー部におられた小宮書之助さんの御努力により、〝中村小弥太君を偲ぶ・北蒼会〟（北蒼会はサッカー部に在籍した昭和十二年以前に予科修了の部員の会です）という追憶文集が作られて、その中に渡辺　眞さん（旧制・樋口）と外岡鉄男さんの文から関係部分を抜き書きさせて頂いて、当時の様子が大変はっきりしました。御両氏に厚く御礼申し上げます。

僕と寮歌

村　山　正　郎
（昭和十六年入寮）

僕が懐かしの恵迪寮生活を過ごしたのは、昭和十六年四月から十九年二月までのほぼ三年間である。寮は新寮、運動部は陸上ホッケー部（注①）、十七年前半には九人の寮友と共に生活部委員をつとめた（これがなかなか大変な仕事であった）。

この三年間の思い出は、それこそ短時日では語り尽せないが、つい先日の出来事の如く新鮮明瞭である。

ところで、寮歌については、入寮当日の風呂場で受けた蛮声の洗礼以来、寮の内外で何かにつけてそれこそよく唄った。その頃から五十年以上も経った現在でもその点は変らない。ある事情で難聴になり文字通り音痴になった今でも、唄うのは殆ど

寮歌ばかりで、まわりからはこれは歌ではなくお経であるといわれても、寮歌は唄うもので聞かせるものではないとばかりに、毎日口ずさんでいる。

僕が寮を去るまでには、「一帯ゆるき」（明治四十年）から「天地の奥に」（昭和十八年）までの四十四の寮歌があったのであるが、現在その丁度半分位しか唄えないのは情ない。

これらの寮歌の中には、何時でも何となく自然に口をついて出るという幾つかがある。僕にとっては、昭和十三年寮歌「津軽の滄海の」がその一つ（注②）であり、特にその第三節が代表格である。「石狩の平野に爽夏訪れて、原始の大森は緑影も小暗し、郭公の朗声静寂に徹り、清涼しき朝の熟睡を破る」

当時の恵迪寮の前方には、陸上ホッケー、サッカー、ラグビー、陸上競技の各グランドがゆったりと並び、その右手に野球グランドがあり、さらにその右には緑の芝生が工学部まで広がっていた。また、寮の南と西には原始林がひっそりと座を占めていた。冬期以外は、午後四時過ぎ頃から、これらのグランドにはユニフォームが溢れ動き、掛け合う声が寮にこだまする躍動の舞台となり、それが暗くなるまで続く毎日であった。

一夜が明けると、舞台は正に前記の「津軽の滄海の」第三節となる。僕はこれを口ずさんで、目を覚ました恵迪寮と静かな原始林、朝を迎えた広々としたグランドと緑濃い芝生の拡がり、それに〝カッコー……カッコー……〟のすべてが、あたかも眼前に展開しているような感慨にふけるのである。

なお、私はまだ郭公の姿を見たことがない。いつも〝声はすれども姿は見えず〟なのである。寮歌と郭公についても、また郭公そのものについても、興味深いことがありそうであるが、この辺で一応筆を置くことにする。

※①昭和十七年夏、「柔楡哺紅に」に送られて出場した最後のインターハイ、陸上ホッケー部は全国優勝を成し遂げた。

※②「津軽の滄海の」と並んで、「春未だ浅き」（昭和十二年第三十回記念祭歌）、「タンネの氷柱」（昭和八年）など々々直ぐ口に上る。



寮歌随想二題

随想 —— 蕪村の句と寮歌

水庭久尚
（昭和二十六年入寮）

愁ひつつ岡にのぼれば花いばら　（蕪村）

かつて、小著『路傍の博物誌』を書いたとき、「ノイバラ」の項で、この句を、「近代青春の感じを受ける」と紹介したが、その後この句が蕪村五十九歳のときの作と知って、蕪村の感覚のみずみずしさに驚き入ったものである。

たしかに蕪村の句には、芭蕉の侘、寂とは対照的な、明るく絵画的でみずみずしい感覚の句が目立つ。この句だけをみれば、誰でも大正ロマン期の近代性を感じ、江戸期の俳句とは決して思わないだろう。蕪村は、青春の気分をいつまでも抱き続けた詩人であった。

またこの句には、我々が愛唱してやまない寮歌に相通ずる浪漫性と若々しい精神性が流れている。愁い、岡（丘・陵）、花いばらはいずれも旧制高校寮歌に好んで詠み込まれている頌春の語句である。

この句の「愁ひつつ」について、詩人の萩原朔太郎は、「現実的な憂愁ではなく、青空に漂う雲のような、または何かの旅愁のような、遠い眺望への視野を持った、心の茫漠とした愁である」といっている（中野孝次『清貧の思想』）のも、うなずける。この句にあえて拙い解釈を加えるならば、—春愁の想いを抱いて、遥かな広野を眺めようと、ひとりこの岡に登ってきたが、その道の辺にノイバラの花がしらじらと咲いていて、心にしみ入るものがあった—

これは、蕪村が過ぎ去った甘美な青春の日日を遥かに追慕する句なのかも知れない。私が、とくにこの句から連想する寮歌は、三年の青春を惜しむ、旧制北大予科最後の寮歌、昭和二十四年の「彷徨へる心のままに」である。この寮歌には、蕪村の句に共通する青春の愁いと、無限の詩情が漂っていて、そこに、永遠の青春性を感ずるからである。

彷徨へる　心のままに
見返りの　陵を登れば

野は遥か　去にし日の面影
蕭々の　闇にとけゆく
斯くあるは　人の宿命か
天地に　星の飛ぶなり

回想－砂丘と寮歌

浜茄子紅き磯辺にも
鈴蘭薫る谷間にも
愛奴の姿薄れゆく
蝦夷の昔を懐ふかな

昭和二十七年の夏、寮の同室の友と、銭函から石狩川口まで、石狩湾に沿った砂浜を歩いたことがある。それは『随筆北海道』という本の中に、詩人の河田禎が書いていた、「砂丘の童話」という文章に触発されて、思い立った徒歩旅行であった。

紺碧の日本海、弓なりに北へ向って伸びる汀の線。砂丘が続き、砂丘の陰には柏の林があった。そして石狩の平野は、柏林の内側に肥沃な黒い土を抱いてどっかと腰を据え、どこまでも広い北の空の下にひろがっていた。

僕ら三人は、寮から借り出した飯盒と、それに米と罐詰をリュックに入れ、足駄がけで砂丘を歩いた。

北海道の俚謡に、「石狩浜中ブーラブラ、あとから掛取ホーイホイ」というのがあったが、僕らはまさに石狩浜中をブーラブラと、のんきに漫歩している貴族であった。

一回目は、小川のほとりにあった柳の疎林のかげの開拓農家の脇で、さらに二回目は、砂浜に打ち捨てられ朽ち果てかけた廃船のかげで、道中二回の飯盒炊さんを楽しみ、陽が西へ傾くころ、石狩の町はずれに到着した。

灯台が真近に見える砂丘は、一面ハマナスの群生地であった。鮮やかな紅紫色の花弁と、赤い珊瑚珠のような実が艶を競い、むせるような芳香があたり一面に漂っていた。

僕らはハマナスの花に埋まって、踏破してきた遥かな砂丘と、その背景に連なる朝里、余市の山々を眺め、寮歌をうたいながら一日の行楽を回想していた。

夏の入陽に砂丘の
猟虎の骨に鷗飛ぶ
融けざる銀の山脈は
碧薄れゆく空にうく
名残の光身にあびて
異郷の方を思ふかな

記念館と寮歌と

河原克美（昭二十六年入寮）

旧制高等学校記念館

七月下旬の或る日、午前中の短い時間であったが旧制高等学校記念館を訪問した。来意は予め告げてあったが、館長から「お待ちしていました」と言われて恐縮した。

数年前、この記念館は生まれていなかったが旧制松本高等学校記念館があって見学の機会を得た。当の松本高等学校の資料のほかに、他の旧制高等学校や大学予科の資料も少しづつではあるが展示されていたがその中で北大予科の資料が殆どない状態だった。やがて旧制松本高等学校記念館を基礎に旧制高等学校記念館へと発展したと知って、いつか訪れてその折りには恵迪寮関係の資料など届けたいと思った。井口君（光雄・恵迪寮同窓会事務局長）から受取ってこの日北原館長届けた資料は『恵迪寮史』復刻版と第二巻、写真で綴った『青春の北大恵迪寮』、それに手持ちの会誌『恵迪』創刊号と「これは旧制の物ではないから館長さん酒飲む時にでも羽織って」と差し出した、背に「都ぞ弥生の……」を染め抜いた例の陣羽織一着。飾り気のない落ち着いた印象の女性職員の手で先方から贈られたのは『旧制高等学校記念館資料目録』と『旧制高等学校同窓会・賛助会住所』。

この記念館は旧制松本高等学校のキャンパスに旧校舎に隣接して新しく建設された。設立のために汗にまみれた熱心な旧制高等学校関係者の存在していたことは想像に難くないが、その設立のために松本市が債を起こしたのは驚異である。立地や経緯から、当然松本高等学校の常設展示の比重は大きいが、松本高等学校思誠寮の再現された一室の壁に「北大予科・林田」の落書を見たのは嬉しかった。

松本駅から一直線の道路、十五分も歩いて突き当たると旧制松本高等学校の正門。門のすぐ右脇の校舎、少し先左側の講堂が残されており、今も市民に開放されている。正門からの一本道にはこの学校を象徴するヒマラヤ杉が並び、今はなき思誠寮のあたりまで続く。この構内は朝よりも昼よりも夕暮れ時が適わしいと思っている。少年時代のこのキャンパスの印象が今もそう思わせているのだろうか。

夕暮るる　筑摩の森を　そぞろ行く
我が紅の顔を
若き生命の誇らひは
染むる一入　沈み行く
夕日の映えに

（大正九年度　逍遥歌）

青春の歌

この記念館の中の大きなガラス張りの展示コーナーに、旧制松江高等学校の木製の校章――かつて本校舎の正面を飾っていたであろう――表札――この表札を右に迎え、左に別れて、昔少年たちが往来したであろう――そして校旗などが並べられていて、松江から松本へ移して常設しているのかと驚き、かつ、いぶかった。

目もはろばろと　桃色の
春の雲行く　大空を
仰ぎて立てる　若人に
三春清き　花のかげ

（大正十二年　「青春の歌」）

と、この土地の清らかさと、ほのぼのとした青春の情を歌った山陰のこの里のたたずまいに触れてみたいと、一昨年の春、出張の合間の一夜を松江に泊まり、この寮歌が印象づける宍道湖のあたりをぼんやりと眺め、松江城郭、郷土資料館で目にしたのがこの校章・表札・校旗であった。

旧制高等学校記念館では、そのとき〝あがたの森文化会館〟と呼んでいる旧松本高等学校の校舎の方で、開校七十五周年高等学校特設展示を繰りひろげており、松江の遺品はその催しを期して松江から運ばれ、当地にとっては借り物であることを、特設展リーフレットの隅の「後援・松江市教育委員会」の文字から推測することが出来て安堵した。このような文化遺産を松江から松本に永遠に移してしまうことなどあり得ないと思ってのことであった。

この「青春の歌」を覚えて久しいが、口伝口承で、しかも当の松江高等学校出身者からの伝承でなかったせいか、久しく三拍子のワルツ調で歌ってはばからなかった。歌詞も素晴らしいが、これがまた三拍子で釣合いがとれるというものなのだ。或る時全国寮歌祭の放送を聴いて、おや、と思い後に『日本寮歌集』の楽譜で確かめたら2／4とあった。しかし、本当に松江高等学校の生徒たちは「正調」の2／4で歌い続けただろうか。

松江から富山へ

夜、松江の宿から日立にいる水庭（久尚君・S26入寮）に電話して松江高等学校を探訪していることを告げた。札幌へ帰ってからまた電話をして、今度は折りを見て富山に行って旧制富山高等学校に触れたいと言った。

丘の団欒（まどい）に憧（あこが）れて
ふるさと遠く　若き子が
青冥寮に　三年（みつとせ）の
夢見る多き　旅枕

（昭和二年『丘の団欒に』）

と歌われた富山へ行って〝剣ヶ丘に住み馴れて、涙にもろき子となりぬ〟と、さめざめと感傷的な、歌っていると涙が出そうになるこの歌の、せめて住み馴れた剣ヶ丘の青冥寮の跡地ぐらいは見たいのだ、と心情を吐露したわけである。

「君の心根は見上げたものよ」と、やさしく賞められたがまだその願いは果たしていない。その時、彼はこうも伝えている。「恵迪寮時代に大庭（幸生君・S26入寮）と二人で青冥寮に泊まったよ」。この種のことではいつも彼の後塵を拝しているが「どちらも人間国宝ね」と女房は評するのだ。

今、ほのかな記憶が甦るのだが、この寮歌は彼が恵迪寮裏の原始林のあたりで教えてくれたものだが、青冥寮の旅を終えたあとの或る日のことであったのだろう。恵迪寮ではもちろん恵迪寮の寮歌を覚えたし夢中になったが、北大予科以外の旧制高等学校の寮歌の幾つかも収穫した。新潟高等学校の「生誕ここに」も、この頃覚えた歌だと思う。この六花寮寮歌は大正九年新潟高等学校創立一周年に創られたものだが、校歌の代わりに歌われて来たというから、われわれの「都ぞ弥生」のポジションである。

明善寮の閉寮

前恵迪寮の閉寮の年であったか。仙台に出かけた折、時間を盗んで車を走らせた。明善寮は如何にというわけである。塀の中には地ならしをするブルドーザーが見えて、建物を取りこわしたあとの作業をしていることがすぐに理解できた。余り高くない二本の石の門柱の向かって右手のそれに「明善寮」の文字を見るのも淋しい思いであった。

もう四十年も前のことになる。サッカーの東北大学との定期戦は、この年北大が仙台にやって来てこの寮にお世話になったが、今、恵迪寮と運命を同じくしてその姿を消してしまっているのだ。試合後の交歓会は片平丁のキャンパスの中で開かれたが、勝った相手が歓喜して歌った凱歌「戦、勝てり」に口惜しい思いを押し殺して拍手を送ったのも鮮明な記憶である。

明善寮の代表的寮歌「山紫に水清き」で始まる歌は明治三十九年の作。仙台の明媚な風光と少年たちの清浄な心と軒昂な意

気を詠み込んでいて美しいが、この時はじめて第二高等学校の正当な後継者たちの歌うのを聴き感動一入であった。

山紫に水清き
郷は名に負う五城楼
向上の主義　自治の制
高き理想を胸にして
健児一つに睦み合う
明善の寮　我が棲家

（明治三十九年　「山紫に水清き」）

もう十七回忌を過ごした女房の親父が第二高等学校だったので、寮歌の話を持ちかけたことがあったが余り興味のない風情で、旧制高等学校生徒としては異端だったのかも知れないと、少々淋しい思いをしたことがある。

しかし酒を汲み交わし寮歌を高吟して青春を謳歌したのは旧制高等学校を特徴づける潮流の一つであって、潮流というのは心の面でも行動の上でもさまざまな位置にある生徒たちの総体であるのだから、潮流の中心から遠い生徒も含めて「旧制高等学校」であったと見るのが正しい見方なのであろう。

見果てぬ夢

松本高等学校といえば「春寂寥」で、少年の心を揺する名寮歌である。春夏秋冬を一番から四番に配した美文の詞と逍遥歌とも思える調子と旋律が微妙な哀愁感を誘う。

あの頃、陸軍幼年学校を目指していたのだが敗戦で一寸先は闇となった。しかしそこは子供のこと、周囲のけたたましい変化と戦後の現実生活の中で、いつまでも絶望感に打ちひしがれているわけもない。気を取り戻した時、通っていた中学のすぐ隣に松本高等学校が見えたのだ。狙いを定めていたら、今度は自分のいる中学校が高等学校になり、現に今存在する松本高等学校が新しい大学になるという不条理が押し付けられて悲憤に明け暮れたものである。

かくして松本高校は目の前から消え去り、旧制高等学校は見果てぬ夢となった。記念館の北原館長にお目にかゝった時、敬愛する汲田さん（克夫・大阪教育大名誉教授）がはからずも共通の既知であったのは驚きであったが、「最後の松本高等学校生徒を以て任じている方」と館長の言われるとおり、最後のチャンスを勝ち得た人である。中学で一年後輩の身にとって逢う度に松本高等学校が想起され、羨望、今も断ち得ないのだ。この原稿を推敲していたら、近況を知らせる便りが届いて「人の世の清き国ぞと憧れぬ」と墨痕流麗たる一葉の半紙が同封されていたのも感激である。

松本高等学校に心をひかれて寮歌を知り始めたのか。だが中学生の大抵が寮歌入門で覚える第一高等学校のあれとか、第三

高等学校のそれとかは世間並の中学生としてすでに口にしていたように思う。高等学校の寮歌は当の生徒諸君には、その折りのその場面でのそれぞれ共通の情を以て歌う自分たちの青春歌であったが、高等学校に憧れる少年たちにとっては、少々の背伸びを伴って、時には自己顕示、時には甘い心のやすらぎを求めて歌われたものであろう。

「正調」ということ

軍国少年のなれの果てが気を取り直して入学した北大。恵迪寮ではたちまち寮歌の捕囚となった。先のくだりの水庭などがそれに油を注いでくれたものだ。寮を出てからサッカー部へ入れてもらったら、第四高等学校出身の町原（亨）さんとか、第五高等学校出身の西山（保直）さんとか、或いは浦和高等学校出身の奥田（宏治）さんなどのサムライが意気軒昂で、第四高等学校は時習寮「北の都に秋たけて」や「南下軍の歌」、第五高等学校は「武夫原頭に草萌えて」で始まる習学寮の歌、浦和高等学校は武原寮の「武蔵が原の末遠く」を、知らず知らずに覚えさせられてしまった。

「北の都」は大正四年の歌で〝自由のために死す〟とか〝主義を愛して死す〟という近代思想が歌われていて意気高い。〝たゞに血を盛る瓶ならば、五尺の男児要なきも〟で始まる「南下軍の歌」は高等学校間で往来して斗われたスポーツ戦の、敵地に乗り込む時の遠征歌で、すこぶる勇壮で調子がいい。「武蔵ヶ原」は瞑想的で〝歌酔い〟しそうになる寮歌の一つの典型だが、後の音楽家諸井三郎氏の作曲と知ったのは余程あとのことである。

こうして当の高等学校出身者から伝授された寮歌ではあるが、正統の後継者ではないのでそのとおり歌って来たかどうかは怪しい。正統の後継者が歌い継いでいる寮歌とて、かつて作曲者である赤木顕次先輩を嘆かせた後継者の歌う「都ぞ弥生」のような事がしばしば起きている。楽譜があっても殆ど無視して伝承されるのだから当然で、その上、歌う方はその時代の風潮や歌い手集団の気分でやることも手伝って、「正調」の伝承はなかなか難しいようである。寮歌を長く引張って歌う正調崩しの歌い方を歴史的に地理学的に見事に検証されたのは浦和高等学校出身の柏瀬清一さんである。北大予科が主犯ではないかと槍玉にあげられているのも嬉しい。

「昭和時代の寮歌は、挙げればきりがないほど名詞、名曲が多い。昭和がだめになった――とは、ナンバー・スクールの中の一部の偏見にすぎない。非ナンバー・スクールの寮歌の質の豊富さに対する僭越な無知に原因するのだろう。同時に、明治コンプレックスに。

だが、昭和七、八年から、異常な歌い方が始まった。北大予科「都ぞ弥生」の〝み〟の一語（一音）を5秒以上延ばして歌う。この歌い方が南下して裏日本は新潟高と富山高は影響を受

けたが金沢（四高）はわずかな影響で終わり、表日本は二高、水戸高、浦和高と席捲したが東京までは侵入せず、桜草咲く荒川の堤でストップ。私が昭和十六年、浦高の「武原寮」に入寮した晩、先輩たちの声をききこの世になにが起こったかと驚いた。寮歌「武蔵が原の末遠く」はテンポは、正確には、「む」から「く」まで十二・五秒である。ところが、「む」の字だけで約十秒、うなる、いや、自己陶酔する。

超スロー・テンポの犯人、それは北大予科生だったようだ。だが誰が〝犯人〟だったか寮歌祭関係者の知識を総動員してもさだかではない。私にとってもまだ謎。一つの推測が許されるなら、瞑想的、であるゆえに人間の内面を重視し、一歩誤まれば限りない自己陶酔におちいる寮歌は、浦和以南、松本以西に、少なくも傑作が生まれなかったためだろう。戦争の暗い谷間に入った……それが理由だったら、東京と表・西日本の高校生は鈍感だったことになってしまう。」（『あんそろじい旧制高等学校』第一巻「寮歌の美学」より）

歌の伝承（一）

浦和高等学校出身の柏瀬さんの文章を紹介させて貰ったが、その柏瀬さんの文章の中にこれまた読み捨てならないのがあるのでこれも紹介せずにはいられない。

「私は今、神奈川県に住んでいるが、横浜、川崎、横須賀市を含む県に、高校は一校も無かった。今や、全国旧制高校数三十八に比べ、横浜市内だけの新制高校数六十九。また全国の大学の数・定員は、全旧制高校より、気の遠くなるほど多い。東大だけの現定員が旧制高校の全定員とほぼ同じなのだ。にもかかわらず、学生の力で作詞、作曲する歴史が、新制後今日まで受け継がれているのはただ一校。予科形態だったために旧新両学制の極端な断絶をまぬがれ、かつて、パイオニアの覇気と情熱があったからこそ、はろばろとおおらかな詞と曲を生むことができた一校、

都ぞ弥生の雲紫に　花の香漂う
宴遊（うたげ）の莚
尽きせぬ奢に濃き紅や
その春暮れては移ろう色の……

明治四十五年度のこの寮歌の伝統を守ってきた北大教養部の今の諸君である。」（前出）

恵迪寮生諸君！恵迪寮同窓生諸君！特にまた予科卒業生諸君！すべての北大生と卒業生諸君！

こんな讃辞に、かつて浴したことがあったろうか。この一文は寮歌や旧制高等学校を単に歴史的に地理学的にあるいは美学的に検証分析したものではなく、分析対象に深い愛情を抱いて居られるが故に「北大教養部の諸君である」という結論を導か

れたものなのだ。

大学予科を含めて旧制高等学校は教育制度の改変により昭和二十五年に終止符を打ちこの世から消え去った。それは実態的に旧制高等学校の終焉と新制大学の新設なのか、旧制高等学校の新制大学への移行継承なのか。教育制度とは別にその実態を論ずると「高等学校は終った。新設の大学は俺たちとは無関係」とする人も多いことを知っている。北大予科の卒業生の中にも、特に制度の改変期にいた予科生の中に、新制の大学は俺たちの北大と違うのではないかと言う人もいないわけではない。にもかかわらず、寮歌は当の高等学校や大学予科の卒業生を越えて歌われ続けているのだ。寮歌を旧制の私物にしていまうとわが国の文化遺産を後世に伝える術を失っていくことになってしまう。

柏瀬さんの一文は、北大の旧制と新制は融合して流れて来たが故に、パイオニアの覇気と情熱の伝統を今も受継いでいる諸君が寮歌を毎年作り続けて来たのであり、それは全国にたゞ北大においてのみ成されて来た快挙である、と言われているのだ。

「北大教養部の今の諸君」が来る年も来る年も寮歌を創り続け、この伝統を守ってほしい、という柏瀬さんの願いは大方の恵迪寮同窓生の願いでもあり、ありがたい激励の一文であるのだ。

歌の伝承（二）

あれから再びその地を訪れてはいないが、金沢は二十数年前の初訪問であった。仕事の合間を縫っての、短時間の金沢の街であったが、第四高等学校の跡や如何と思ったからである。

彼らが、〝北の都〟と称した金沢で、今は文化遺産となった煉瓦の本館は記念館として残され、本館前には「四高健児の像」と銘うった台座の上に四高健児が屹立しているのを見た。大方の街がそうであったように、高等学校の生徒に対して人びとは寛大でしばしば愛情を以て接してくれたというが、金沢という街が特に際立っているように思えたのは、この高等学校を卒業して北大に学んだ町原さん（前出）から聞かされた、その時代の幾つかのエピソードのせいばかりではなさそうに思えた。

教育制度が変わり、すでに存在していない学校の遺産を保存し、モニュメントを建て、後世にその存在を伝えようというからには、その土地での異常な存在感があったからに他ならない。

しかし資料やモニュメントと異なり、ビジュアルな存在ではない寮歌、金沢の時習寮の寮歌は今この土地でどのように歌われているのだろうか。

旧制高等学校記念館で、松本高等学校思誠寮の寮歌は、どうですかと北原館長にうかがったら、新制の信州大学でも思誠寮のあった時代には学生諸君がよく歌っていたとのことであった。記念館を見学していたら思誠寮の寮歌が流れて来た。

春　寂寥の洛陽に
昔を偲ぶ　唐人の
傷める心　今日は我
小さき胸に　懐きつつ
木の花蔭に　さすらへば
あはれ悲し　逝く春の
一片ごとに　落る涙

（大正九年「春寂寥」）

ひとり娘真里奈の亭主克彦は澤田（昭志君・S26入寮）の長男で信州大学出身である。もう殆ど末期的で建物としては瀕死の状態だった思誠寮の寮生だった時代に、この「春寂寥」や逍遥歌「夕暮るる筑摩の森」などを愛唱したというのを聞いて大層うれしかったものである。

元日寮歌（一）

克彦という名前が出たのでその克彦がそっくり名前を頂戴したもう一人の克彦のことに触れるが、北大サッカー部の先輩で東さん（克彦・北大名誉教授）は恵迪寮生であったことはないが無類の寮歌ファンである。サッカー部の古手の後輩たちが時々招集されて一献やるが、必ず何冊かの発行年月の異なる恵迪寮寮歌集が引張り出され、大体は年代順に、しかしよく憶えのないは失礼して全員斉唱である。寮歌好きでも大勢で歌う機会はなかなかないので、参加者一同肚の底から歌い、酔うほどに心の底から歌う。

元旦に東さんのところと合同で祝膳に向かうことがあるが、もちろん元旦から寮歌である。ご夫妻が同席であろうと一向にかまわず、日立にいる水庭に電話をして、電話口に出た彼と選曲して電話で寮歌を歌う、ということを始めたのはもう十年以上も前のことだ。時には当方から一方的に「次は・・・！」と寮歌を押しつけても拒否されたことはかつてない。そればかりか電話口に寮歌集があるわけでもないのに即座にオーケーして一言一句の淀みも誤りもないのだ。

かくして今年も気分爽快にスタートだ。が女房は「二人とも人間国宝」との思いをますます強め、向こうでは「二人ともまるで化石ね」と言っている。

元旦寮歌（二）

一九八八年の正月を期に、年賀状での挨拶文の代わりに恵迪寮の寮歌を手書きして印刷することにした。受取った方はひとりよがりの賀状に迷惑するかも知れないと思いながら、寮歌なら遠くにいる古い友人たちも案外何かを感じ取って呉れるのではないかと思ったりしてのことであった。

一九八八年元旦　豊かに稔れる石狩の野に……
（「都ぞ弥生」二番全部）
一九八九年元旦　瓔珞みがく石狩の……
（桜星会歌一番全部）
一九九〇年元旦　黒潮鳴れる……
（「黒潮鳴れる」一番全部）
一九九一年元旦　幾世幾年流れけむ……
（「幾世幾年」一番全部）
一九九二年元旦　あゝその朔風飄々として……
（「都ぞ弥生」三番後半）
一九九三年元旦　アカシアの花散り敷く夕べ……
（「津軽の海の」二番全部）
一九九四年元旦　羊の群は去り行きて……
（「あゝ妖雲は」二番全部）
一九九五年元旦　心は月に仄かに薫る……
（「黒潮鳴れる」二番全部）

選んだものを並べてみると、少しロマンチックで矢張り北国の自然をうたったものになっていて、寮歌を知らない人にもわかってもらえそうなものになっている。

歌を創った先輩には申し訳ないのだが、年賀状だから読んでもらいたいし、詩になっているから意味がわかればよろしいというものではなく、読めなければ困るし、心が伝わらない。だから寮歌独特の、遊び字を添えて元の字の一つを読む、たとえば「心情」と書いてココロと読むとか、音でも訓でも読めない読み方を強制する表意的な表現で「懐情」と書いてココロと読むなどというやり方、今様のことばで言うと「読ませ」とでもいうのだろうか、この「読ませ」の多い寮歌は年賀状には採用し難い。小さな葉書に手書きのルビをふるのも興ざめである。どうしても採用したいときは「読ませ」の極力少ないもので、しかも作者の意に反し当方で改竄してしまう。「懐情は月に仄かに浮かぶ」は「心は月に……」となるわけだ。

後輩諸君には申し訳ないが、歌ったことのない寮歌は無意識のうちに遠ざけられる。いつだったか「最近の寮歌にもいいのがあるから取り上げろよ」と誰かに言われたことがありその気になって寮歌集をひもといたが、どういうわけか、これ、と思うのにやたらとこの「読ませ」が多く取り上げ難い。年賀状寮歌採用基準を按瀉して、いつまでも採用されない名歌の作者のご理解を乞う次第である。

魔人の呪い

札幌は里塚霊園の一隅にサッカーボールを擬した花崗岩を乗せた墓石があり、その脇に大正六年の寮歌「魔人の呪い」の一番と六番の詞が刻まれた歌碑がある。墓石の主は昭和五十九年触媒研究所の現職教授で逝かれた松井さん（敏二・S18入寮）

である。

松井さんは豊橋中学の時代からのサッカー・マンで、もちろん北大予科・学部を通じて北大蹴球部員として活躍されたが、サッカーの世界では、戦後の北大サッカー部の育ての親として知られている。また、北大教職員組合の一線の活動家として生涯を終えられ、その方でも著名である。北大サッカー部では永く監督・部長を務められ、サッカーの指導はもとより部員たちのそして卒業した後輩達の生活にも深く関わられた。松井さんの家で食事にありつかない部員は誰もいなかっただろう。「河原を探すなら松井さんの家に行け」と言われたほど入り浸りした日々が想い出される。

普段晩酌もせず、どちらかというと余り呑む方でなかった松井さんだが、時折差し向かいでサントリーのホワイトか何かを出して、ボツリボツリと話ししているうちに少々ほろほろとして来たあたりで、寮歌を唱うのだが、いつでも「魔人の呪い」が最初で、時にはこれだけだったりした。つまり、松井さんの愛唱歌だったわけである。亡くなられた後、泰子夫人がその愛唱歌をサッカーのボールの姿を乗せた墓石と共に歌碑として建立されたものである。全国的にも寮歌の歌碑はそう数多くはないだろうが、個人で建立した寮歌碑というのは稀少であろう。

十月二日の命日に、ゆかりの深かった人びとが参詣、墓前でこの寮歌を斉唱して十年経った。墓地に「魔人の呪い」など、こうした因縁を知らない人が見たら無気味に思うだろう、というのが大方の見解だが、恵迪寮同窓生の諸兄には、ぜひ知っていただきたい経緯である。

北大予科同窓会

旧制高等学校記念館でいただいた「旧制高等学校同窓会・賛助会住所」には各高等学校・大学予科の同窓会の名と連絡先があるが、北大予科のその欄には「東京エルム会」となっていて「北大予科同窓会」となっていない。なっていないわけで、「北大予科同窓会」は存在していないのだ。他の大学予科は京城帝大、旅順工大、台北帝大などの予科同窓会名があるが、北大と共に予科同窓会の見当らないのが、例えば東京商大、神戸商大、東京工大などである。

第二次世界大戦で失った植民地の大学予科の同窓会は、失われた大学なるが故にその存在の意味がわかる。内地の大学予科は旧制から新制へと学制の改革により予科はなくなっても移行が断絶なく進んだからだろうか。大学予科とはそこを終えればその大学へ進学することになっているので予科同窓会なるものはそもそも組織する必要もなく、昔から存在しなかったからだろうか。どうも後者の理由のように思える。

北大予科もそのようにして同窓会を持たなかったと思うが、予科から他の大学へ進学した少数の人びとに還るべき青春の故郷がないのは淋しいだろうと思う。何とかならないのだろうか。

東京エルム会の諸先輩が心配をして旧制高等学校記念館に連絡をつけて下さっているのは誠にありがたいことだと思っている。しかし北大予科の資料を多少は系統的に提供しようとすると、東京エルム会の諸先輩におまかせ、というわけにも参らないと思う。特設展示を企画するから資料を少々まとめて、などと言われても大変だろうと思う。しかし、予科を知らない身で僭越な事だが今更、同窓会作りでもあるまいと思うのだ。

北大歴史資料館

仮に旧制高等学校記念館に意欲的に努力して、相当な資料提供をしたとしても、かけがえのない貴重品は寄贈し放しということにも参らないだろう。松本や金沢などで、ご当地の旧制高等学校の資料が保存、公開されていて、札幌に北大予科のミュージアムがないことを、学制の旧新移行に断絶がなかったから仕方がないと思い切ってしまうのは余りにも淋しいことだ。

しかし考えてみると、ご当地の旧制高等学校が存在感がありその存在を後世に伝えようとしたのは、その存在感のあるものが消滅した事によっているのであって、北大予科に照らしてみると事情は相当違って来る。札幌にあっては北大予科は北大の一時期に北大の一部を構成したものに過ぎず北大は消滅することなく今も厳として存在しているのだから、その一部の予科を切り離して何かを保存しようなどという動因は強力に働くことはなかったのだ、と思う。

北大には「百年記念館」があって歴史的資料が保管、展示されている。だが、もっともっと市民に身近かな、名実共に解放された資料館であってほしい。近くにいる市民ばかりでなく北海道を訪れる大勢の観光客が、寄ってみたくなるような「いつでも来てください、いつでも見てください、北大の歴史とその精神を」と呼びかけられるような資料館であってほしい。

札幌農学校の演武場であった時計台の大改修が今、行われている。北大の現キャンパスに札幌農学校が移転したのは一九〇三年（明36）。当時の教室棟（講堂）も記念すべき文化遺産として保存し続けたいが、「北大歴史資料館」としては、移転当時のものではないが古河講堂がうってつけであろう。クラーク像も近い。市民や観光に訪れる人たちにわかりやすい場所にあるし、第一、風格がそのまま実態を物語るではないか、と思う。この提案を取り上げてほしいと切に願っている。

北大四季四句

延齢草　青春のうた　よみがへり
楡　ぽぷら　葉うら涼しき　風の行く
やまならし　今日　揺落の　風を知る
寒風や　落日　ぽぷら　天を突く

俳句

鈴木信夫作

（昭和十七年入寮）

御無沙汰致しました。「恵迪」受領し、早速、読ませて頂きました。大へん面白く、且つ有益に存じました。その御盡力を心から労らいたいと存じます。さて、私儀肝臓癌が再発致しまして、昨年東大病院の第二外科に入院し、手術を致しまして、どうやら経過も順調で、今の所、富士の見えるこの葉山町で余生を楽しんでいる毎日です。病院入院中、俳句を作って見ましたが、若し次の号に掲載して頂ければ幸甚です。駄句で、お恥ずかしい次第です。

肝癌再手術のため東大病院第二外科に入院して

秋の夜や　病の床（とこ）に虫の声
病室の　窓に冷たき時雨かな

十五夜

夜も更けて　窓辺にしるく　月の影
不忍（シノバズ）の池にたゆとう　秋の月
芒（スヽキ）添え　不忍の上の　月拝む

十六夜

いざよいは　雲のかかりて　夜もすがら
いざよいの　月を追う身の　病かな

（編集部より）

昭和十九年寮歌「雪解の楡陵の」の作詞者であり、こよなく恵迪寮を愛された鈴木信夫さんは、平成七年五月五日、帰らぬ人となりました。掲載致しました俳句は、同年二月三日、右記の手紙と共に編集部に寄せられました。謹んで鈴木さんのご冥福をお祈り申し上げます。

同窓・同期交流

戦後五十年、援農先を訪ねて

中西三郎
（昭和十九年入寮）

はじめに

平成七年の十月、五〇年前の昭和二十年の春から秋の収穫まで援農に入った「常呂郡置戸町・訓子府町」を六人の友と訪れた。その地は青春の激変となった終戦を迎えた地でもあった。

我々は昭和十九年に北大予科農類に入学した。

昭和十九年といえば、戦局はすでに末期の状態にあり、その年の七月にはサイパン・グアム島が米軍により攻略され、サイパン島から飛び立つ爆撃機はしばしば我が国本土目がけて飛来するようになって来た頃である。

しかし、我々は子供の頃より「神国日本」「鬼畜米英」「大東亜共栄圏」、この戦は聖戦である、負ける訳がないと教えこまれていた。新聞・ラジオから伝えられる情報はそのことをあおり立てるものばかりであった。たとえ戦局が不利になりつつあっても「欲しがりません勝つまでは」とか「出せ一億の底力」とか、戦意を高揚させるものばかりであった。

従って、戦局が終りに近付いているのを肌を感じつつも、頭ではそれを否定し「勝つ」「勝つまで頑張ろう」と意気に燃えていたことも事実であった。我々の先輩は繰り上げ卒業で社会に投げ出され、戦場に駆り出された。我々が予科に入学した時は、すでに予科三年が二年半に短縮されていたが、更に、その年から予科は二年に短縮されることになった。

学生が軍需工場や軍需施設、農村に勤労動員として駆り出されるのは極く当たり前のことであった。

昭和二十年五月から九月中旬まで置戸、訓子府に援農に出掛けたのもその一つである。援農とは、読んで字の如く、農家の

手伝いに行くことであり、戦場に駆り出されて働き手を失った農家の手伝いに行くことである。それも「聖戦」を勝ち抜くため、銃後の国民が果たすべき当然の責務であった。

予科に入学した年には「軍用飛行場滑走路の建設」「網走へ援農」「旭川へ明渠工事」に駆り出された。延べ六五日の勤労動員であった。

二年目に入る三月十九日には「学徒動員令」が発令された。学徒動員令とは「国民学校（現在の小学校）以外の全学校の授業は停止して、勤労に挺身せよ」というものである。

援農の地で終戦を迎える

置戸・訓子府は北見から国鉄池北線（国鉄が民営化されて「ちほく高原鉄道」という）で十勝方面に向かった村（現在は町）である。我々農類二年目の予科生約百名がそれぞれの村の農家に入った。札幌を五月十日の夜行で現地に向かった。五月というのに現地では雪が降っていた。まさに寂寞とした僻地の空気を一層寒々とさせていた日であった。

訓子府は水田地帯というほどではないが、水田があった。置戸は畑作地帯である。電気・水道はない。情報から隔絶された僻地であった。

情報に飢え、本に飢えていた我々にとり、ラジオは聞けない。ただ、一日遅れの新聞が唯一の情報源である。ランプの灯りを頼りに新聞を読む、本を読むのが楽しみであったが、慣れない農作業に疲れ果てた身体は睡魔が先にたってしまう。

ほとんどの者は一、二名づつ農家に分宿して農作業を手伝った。始めの頃こそ手伝うといった状態であるが、馬の使い方にも慣れるに従い、手伝うのではなく一家の大黒柱となっていった。農家に残っているのは女・子供と老人だけである。

皆が皆、戦勝を信じていたかと言えば嘘になる。情報の乏しい中でも、こんな僻地で防空壕が掘られようとしている状況、終戦のその年の七月中旬、北海道を襲った空襲の警報サイレンがこんな僻地にも微かであるが聞こえてくると、実感として戦の末期を感じざるをえない。

それでも、皆は良く働いた。

そして、終戦。

私は置戸の川南第三という部落に入っていた。勿論、ラジオもない。その頃、亜麻の収穫の真最中であった。午前に早馬が「今日正午、ラジオで重大発表がある」と告げて回った。

何か分からない。だが、何か不吉な予感がした。終戦を知った状態は入った所により、さまざまである。

不吉な予感を感じつつ亜麻の収穫を続けた。そして、夕方、小学生の高学年位の子供が馬に乗って「日本が負けた。日本が負けた」と触れて回った。

これで終わったという安堵、今まで我々が信じて、また、信じようとしてきたものは何だったのかという虚脱感。

実は私は同僚七名と川南第三部落に入ったが、部落の事情があって、農家の分宿を断られ、部落の集会所に自炊合宿を余儀なくさせられていた。

終戦の報を聞いて頭は真っ白になり、どうやって合宿所まで帰り着いたのか分からない。一人、二人と合宿所に戻って来る。誰も一言も喋らない。喋れば涙がこぼれてくるのは分かっている。友に文句を言っても仕方がない。悔しい、癪だ。一人で畑の真ん中で大声で怒鳴りたい。何を怒鳴るのか、誰に向かって怒鳴るのか。分からない。でも、怒鳴りたい。恐らく、皆、そんな心境でなかったのかと思う。

夕方遅く、たまたま置戸の市街地方面に出掛けていた友が富永先生のメモを持って帰って来た。（富永先生は人文の教官で、この時、我々の指導に置戸に来ていた）

そのメモには次のようなことが書いてあった。

川南の諸君
御聖断により戦を止むるに至った
原子爆弾の悪魔性
国民の殺りくをあわれみ給い
御聖断あらせられた
国体継続は承認された　満・台・樺等を支那へ
武装解除　帰農　あらゆる忍耐の生活に入る
日本の家を維持するのみ　指導あるまで鍬の手を止めるな
学徒は国内混乱に対する秩序に良心たるなり
胸底にたたえるのだ……
泣け　泣きぬけ　而してうろたえるな

八月十五日夕　富永

終戦から一ヶ月ほど作業を手伝って、札幌に帰った。これで平和に学業に戻れたかと言えば、決してそうではない。

札幌に帰って一週間程して秩父別という所に一ヶ月半援農に駆り出された。冬は燃料が無く長期間学校は休校となった。三年目に入ると食糧難により恵迪寮は六～九月まで閉鎖、次の冬再び、燃料事情により長期休校と苦難の子科生活は続いた。

これらの状況はまた何かの機会に書けるかも知れないが、ここでは、我々にとって人生の青春の激変となった終戦。その終戦を迎えた地、置戸・訓子府を訪れること、それは単なる感傷ではない。ある意味では新しい時代に向けての出発の地となった生誕地への旅であった。

訪問の記

同行の友六名とは私以外、畑島好古、角幡春雄、山中正文（以上置戸）、箸蔵敏郎、荒井治郎（以上訓子府）である。それぞれの感動の記の概要は次のようである。

畑島君

彼はご夫婦で同行された。奥さんにすれば、夫の青春の一頁を知る貴重な旅でもあった。

彼が入った農家は極く最近まで優秀な酪農家であった。その家は入った当時まだ子供であった人の時代になっている。その家の乳牛は全国表彰を受けたほどの優秀な酪農家であった。

彼が訪れた時、その牧場は「過酷な労働により、家族の健康を損なうよりは」と酪農業を辞めて、今は土木・建設作業員となっていた。

ご当主は農業の落伍者としての負い目からか、最初は彼に会うのをためらわれたらしい。でも、語るうちにおばあさんの話や、当主の絶頂期の頃の話におよび彼の訪問を心から喜んでくれたそうだ。彼も昔、馬を使って起こした畑の跡を見たり、今は無き防風林を思い出したりと訪れた感動を味わったと言う。続いて、彼は同じ部落に入った友の援農先に向かった。その農家は置戸町でも五指に入ると見られている優秀な酪農家になっていたそうだ。勿論、現経営者は当時は幼児である。それでも両親から我々予科生が援農に来てくれたこと、その農家に入った友のこともよく知っていて、話は弾んだとのこと。その部落はかつて三〇数軒あった農家が今は僅か七軒に減っていたそうだ。

角幡君

彼が入った農家は今でも健在だ。入った当時小学生低学年だった長男が跡を継ぎ、農地を増やし、町のいろいろな要職に就くなどした堅実な経営者であったが、若くして亡くなり、彼が訪れた時はその息子が跡を継いでいた。

彼は援農を終わってからも暫くその農家と文通し、彼のことはその息子にまで伝わっていた。しかも、彼を案内してくれた役場の課長さんが、奇しくもその農家の五男坊であった。

我々が訪問を計画した段階で役場と何回となくやりとりした際に役場の窓口になって下さったのが、その課長さんであった。最初は分からなかったが、彼の名前が出るや、角幡さんが私の家に来て下さったことは母からよく聞かされていたと事前に連絡が入っていたので、そのことはあらかじめ分かっていたが、彼はその課長さんの印象はまったくないと言う。分かったことは、課長さんは昭和二十二年生まれで、彼が援農に入った時にはまだ生まれておらず、分からないのが当然であった。

彼が入った当時、その農家には父親は病身で経営の采配をするだけ、働き手は母親と上の娘さんの二人だけであった。彼が入ったことにより男手の働き手が増え、貴重な存在となった。その農家はすでに四男六女の子沢山で東条英機からの表彰状が飾られていたそうである。

彼の訪問は熱烈歓迎の態で迎えられた。当時、女学生で北見に下宿していた娘さんが、是非、会いたいと言う。そして、そ

の娘さんの嫁ぎ先を訪ねた。そのご主人は我々が学部当時、北大の林学実科に在学しておられ、今は町の教育長をしておられた。積もる話は山ほどあれど、時間の関係で無情にも打ち切らざるをえなかった。

山中君

彼が入った農家はすでに離農していることは承知していた。だが、彼が働いたあの家、あの畑はどうなっているか、また、五㎞の道を置戸市街まで部落の娘さん達と松前ピリカ一座を見にいった置戸座、往復した途中にあった市街地を見下ろす展望台、置戸神社などなど、彼の期待は大きい。

彼の部落へは彼が目に焼き付いている道とは逆の道から入ったので、彼の記憶が仲々蘇らない。案内の課長さんも部落の位置は分かるが、彼が入った農家となると定かでない。日は段々と暮れかかってくる。彼の顔が歪む。ある場所に来て彼の顔にうっすらと輝きが見える。彼の顔に緊張感が漂う。だが、確たる手掛かりになるものがない。

付近の農家を訪ねるも、留守で聞けない。焦燥感と諦めの交錯している時、一人の年寄がオートバイで帰って来た。少しアルコールが入っているらしい。彼はその年寄に駆け寄り、彼が入った農家の場所は何処かと尋ねる。最初のうちは話がどこかですれ違い、仲々噛み合ってこない。ふと井戸の話になるや霧が晴れたように二人の話は噛み合いだした。興奮し出した彼は「ここに馬小屋があった」「ここに玄関が」と、そこら中を駆けずり回りだした。時には年寄の記憶を訂正したりと、没我の境に入って行った。

私

私は先に書いたように川南第三部落に入った。そして、そこで自炊合宿をした。

私達が入るその前年、東京のある大学生が暗渠工事に来たそうだ。ところが、その大学生の質の悪いこと、酒を飲んで暗渠の土管を叩き壊すは、娘をからかうはで、農家連中のひんしゅくをかったとのこと、我々を含めて世の大学生は「だらしない者」「怖い者」の印象を叩き込まれていたらしい。だから、一軒を除いて働き手は欲しいが、泊める訳にはいかないとの結果が我々の自炊合宿となった訳である。

そこから四軒の農家に働きに行った。良く働いた。「今度の大学生は違う」と評判は高まっていった。合宿所では夜、ランプの灯りを頼りに本を読み、故郷から来る手紙で故郷の状況を知り、戦局を伺い、実にいろいろなことを話し合った。哲学、文学、時局、恋愛、日本の将来などなど。

そして、終戦となった。富永先生からのメモは先に書いた。終戦当日、部落の農家がその集会所に集まった。

酒を汲み交わし、断腸の思いをさらけ出し、泣く者、激昂する者、誰が持って来たのか日本刀が一振あった。友の一人が庭

の桜の大木に寄り掛かり、抜き身の日本刀を引っ提げて、腹から絞り出すようにして詩吟を吟じた。

一組はある農家に分宿し、計五軒の農家に働きに行った。その内、今残っているのは一軒だけである。そのことは事前の役場との打ち合わせで分かっていたが、私はなんとしても、青春をぶつけ合ったその合宿所の跡に行って見たかった。合宿所の前に小川が流れていた。庭に桜の大木がある。この記憶だけで跡は分かると考えていた。だが、時は五〇年の歳月が流れていた。一軒残っている農家の案内がなければその付近までは行けても、その場所は分からなかったであろう。小川の川筋は変わって、小川はなかった。桜の木は切られてしまっていた。かつて合宿所のあった所は雑木林であった。だが、そこから見る部落の光景は全く変わっていなかったのが救いであった。

箸蔵君

彼は訓子府の農家に入った。置戸の場合は予め役場と連絡を取り合っていたので訪問先にも事前の連絡が付いていた。

が、彼の場合、その農家の付近を見るだけでも良いとの気持ちであった。

彼を案内してくれた置戸役場の課長さんが、訓子府の役場に彼を案内し、彼が入った農家の現況を調べに連れて行って下さった。

面会した課長さんが、奇しくも彼が入った農家の次男坊であった。彼の感激は言語に尽し難い。

彼が入った農家は今でも健在であった。何の前触れもなく、その農家を訪れた。現在の経営主は彼が入った当時は小学生であったが、母親が健在であり、彼のことを良く覚えていた。家に招じ入れられ、今は亡き当時の経営主の霊に手を合わせることが出来た。

彼にしてみれば考えても見なかった感動であった。彼曰く「孤児がやっと我が家を見付けえた気持ちだった」と。

荒井君

彼が入った農家は当時から大きな酪農家であったらしい。その農家に三人の者が入っただけでも規模が分かるような気がする。彼はＮＨＫに勤め、相当の地位まで栄進した。ある時、その酪農家がＮＨＫの全国コンクールで優勝した。その時、彼がタッチしたらしい。

従って、その酪農家は偉くなった彼のことを良く覚えている。今年、その酪農家の入植百年を記念して祝賀会を開き、記念誌を作る計画がある。彼は招待を受け、記念誌への執筆を依頼されていた。従って、彼の場合、他の訪問者とは別格であった。

彼はその酪農家の賓客である。我々は置戸町営メモリーハウスに泊まったが、彼はその酪農家に二泊した。彼を知る昔の子供達がその子供、孫を連れて集まったそうだ。そこで、彼以外の予科生を含め、当時の話に花が咲いたとのことである。翌日、

彼はその酪農家家族と知床半島までドライブをした。

むすびにかえて

以上が我々一行の訪問の概要である。

その訪問に当たり置戸役場の三人の課長さんが自ら運転して我々をそれぞれの援農先に案内して下さった。恐らく、課長さん方の御厚意がなければこの感動は無かったであろう。ここに、改めてその御厚意に感謝したい。

我々が援農に入った昭和二十年の置戸の人口は約一万一千人であった。その後、終戦による復員者、そして、経済の成長期に入るまで農業は主要な産業であったため、昭和三十年の人口は一万三千人に増えている。それが、経済の成長と共に農家の離農が進み、我々が訪れた時には人口は四千人台に急減していた。

それは置戸ばかりではない。全国の農村いずれもが抱えている現象であり、問題である。

我々はともすれば、経済の成長に浮かれ過ぎてはいなかったか、その「つけ」がバブルの崩壊と共に大きくのしかかっている現実と、我々の青春の一頁を包み込んでくれた置戸の現状を見た時、自然の大切さ、自然と共生する社会の構築の重要さを反省せざるを得なかった訪問であった。

最後に一言「援農は異常な時代の特異な体験であったが、そこで得た体験が冒しがたい、人間としての本当に大事なものに触れた原体験」であったことを付け加えておきたい。



援農の予科生たち

恵迪寮寮舎とお別れの火祭り　昭和十六年入寮の十七人衆の一人として

番場猛夫（昭和十六年入寮）

恵迪寮の寮舎が間もなく取り壊されることになった昭和五十八年四月十六日、我々一同は、思い出深い寮舎との決別の情禁じ難く、青春の日々を過ごした寮舎の玄関前に集まり、篝火をたいて当時の寮歌を歌うことにした。

発起人は三国英四郎、大須賀一雄、村山正郎の三氏である。実行幹事は札幌在住の音羽敬三（間組）と番場猛夫（北大理学部）に委ねられた。

この計画に賛同した者は十七名に及んだ。参加した顔ぶれは下記の通りである。

秋谷　元（工、土木）*	鈴木　英世（医、外科）	北海道三笠市在住
糸原　公（医、外科）	曾根崎日吉（医、内科）	札幌在住
上平　林作（農、農学）	寺山　良雄（理、化学）	札幌在住
大須賀一雄（工、機械）*	中井　健五（医、薬理）	秋田市在住
小川　周三（農、水産）	西尾　徳三（工、鉱山）*	東京在住
音羽　敬三（工、土木）	番場　猛夫（理、地鉱）	札幌在住
加藤　荘司（医、小児科）	三国英四郎（工、土木）	鎌倉市在住
	三宅　正元（工、鉱山）	田無市在住
	村山　正郎（理、地鉱）	東京在住
	山岡　廣海（工、鉱山）	札幌在住

（＊逝去者）

ここに経過を報告する。

私は実行の許可を北大教養部長の藪重夫教授に申し出た。文書で出すように言われ、三月三十一日付け文書で委細を説明したところ、火をたくのであれば消防署へ届け、承認をとりつけ

ることを条件にOKとなった。消防署からは消火用バケツ五個、消火器一個を用意せよと指示された。これを「揚煙届け」と言うのだそうだ。こういう場合は何事も仰せのとおりにしたほうがいい。

間組の音羽は商売がら苦もなくすべてを用意してくれた。薪はトラックで運び、一緒に防寒具、握り飯、少々の飲み物に至るまで気を利かせてくれた。

この日歌った寮歌は我らがしばしば口にした次の十曲である。

藻岩の緑（明治四十四年寮歌）
都ぞ弥生（明治四十五年寮歌）
我が運命こそ（大正三年寮歌）
魔人の呪（大正六年寮歌）
生命の争闘（大正十年）
春雨に濡る（大正十二年）
タンネの氷柱（昭和八年寮歌）
別離の歌（昭和六年閉寮記念寮歌）
春まだ浅き（昭和十二年第三十回記念寮歌）
津軽の蒼海の（昭和十三年寮歌）

四月十六日は素晴らしい晴天で我らの情熱が天に届いたのかと思われた。井桁に組んだ薪に火が入ったのは太陽がまさに沈まんとする時で、恵迪の森のシルエットが夜空に浮かび、我らに青春の日のことどもが甦った。火をいれたのが誰だったか、思い出せぬが、ここに載せた十枚の写真がすべてを物語ってくれるだろう。

〔写真1〕には全員の顔がある。左から、曾根崎、糸原、西尾、音羽、秋谷、中井、加藤、三国、大須賀、三宅、鈴木、番場、寺山、村山、山岡、上平、小川の十七名がいる。〔写真2〕には左から三国、音羽、三宅、加藤、中井が並ぶ。〔写真3〕には番場、大須賀、寺山、鈴木、秋谷、上平がいる。

火が入ってからが本番だ。〔写真4〕は左から鈴木、村山、三国、三宅、中井、小川が歌う。〔写真5〕は三国、三宅、中井、加藤、大須賀、西尾が歌う。〔写真6〕には予科の旗を振る糸原と、音羽、秋谷、山岡、小川がいる。篝火の番をしているのは音羽幹事だ。ご苦労様。

火祭りの報告はこれぐらいにして次に移ろう。

舞台は三河屋に移った。〔写真7〕の正面には左から大須賀、三国、番場、西尾が並ぶ。右隅にいるのは小川、曾根崎、中井らしい。向かい側にいるのは村山だ。〔写真8〕に示す別の卓では音羽、糸原、寺山、鈴木が気炎をあげている。

議論風発、時の経つのも忘れるとはこういうことを言うのだろう。宴は果てしもなかったが、番場幹事の提案で、狸小路のロシア料理店コーシカに席を移し、爽やかなウォッカとロシア

紅茶で口直しをして解散となった。

コーシカでは〔写真9〕だ。中井、西尾、加藤、音羽、山岡がいる。

さて、この日の恵迪寮寮舎の写真を二、三枚出しておく。〔写真10〕は暖房の跡か。〔写真11〕は新寮か、〔写真12〕は渡り廊下か。

この日から、かれこれ十五年になる。この日の仲間のうち三人は鬼籍に移ってしまった。哀惜の念に耐えない。大須賀、秋谷、西尾3君のご冥福を祈りたい。我らは七十才代も半ばに近い。健康に留意して八十才を過ぎたあたりでもう一度集まることが出来ればこんなに嬉しいことはない。

ともあれ、恵迪寮の歴史のなかに、こんなひとこまが存在したことを世人に伝えておくのもよろしかろうと、あえて報告することにした次第である。この記事を用意するに当たり、音羽敬三、村山正郎両氏から助言を頂いた。記して感謝の意を表したい。



写真－1



写真－2



写真－3



写真－4



写真－5



写真－6



写真－7



写真－8



写真－9



写真－10



写真－11



写真－12

昭和二十七年入寮組の一端

村上啓司（昭和二十七年入寮）



この会に参加した六名。前列左から、宮下進治（農・林）、小寺義彦（法・法）、鈴木重雄（法・法）。後列左から、久保喜一（農・林）、松崎貞夫（法・法）、村上啓司（農・林）である。

恵迪寮同窓会の肝煎りで、この一月二十七日に札幌の「北家」で新春寮歌歌い初めの会が催された。この会に参加した昭和二十七年入寮組は、写真のわずか六名で、さびしいといえばさびしいが、他の年次組に比べると多い方でもあり、四十数年ぶりに顔を会わせた人達もいて、有意義な会であった。

昭和二十七年といえば、入寮早々、集団赤痢とか住民票焼却とかの事件続きで、落ち着かなかったことを想い出す。その焼却は、寮のすぐ前にあったホッケーグランドを通り越した向うにある陸上競技のグランドで行われたのであったが、先日、何十年ぶりかでこの付近を雪の中で徘徊してみると、このあたりの風景は全く昔を憶い出させる何物もないように変っていて、近代的建物が立ち並び、今浦島の感を深くしたものであった。

我々が寮生であったころは、春早く寮章となっていたキバナノアマナが道端にたくさん咲き、南隣にあった原生林と称される疎林の中には、北海道の春を代表する野草が数多く咲いたものである。その野草を同級の渡辺定元君が名札を付して、食堂の片隅のテーブルに展示したのもなつかしく想い出す。

寮の西側の裏手は、ヤチがかった草地であり、そのはずれ（大学農場との境）は小川となっていて、この小川（アイヌ名で、サクシコトニという）の土手に寝そべって、西山の南端の恵庭

岳から北端の手稲山、そのまた北の無名山の連なりまで、時間の経過にしたがって陽の差し具合の異なる様子を一日飽くことなく眺め、学校はサボッて専らひなたぼっこに明け暮れたのであった。雪が融けたら、現恵迪寮とサクシコトニ川との関係がどうなっているのか、是非この目で確かめたいと思っている。

恵迪旧懐

桜庭慎吾（昭和三十一年入寮）

さる年の秋、久し振りに訪札した。暑気の厳しい東京から千歳に着き、そのまま母校を訪ねる。構内の柳や芝生の緑が鮮やかに眼を射る。ななかまどは早くも実を朱に染め透明な空気はやや冷気を帯び大変心地よい。

農学部に恵迪寮時代の友、高井宗宏君を訪ね、また理学部の福永典之君に会い、互いの無事を確かめあった。懐かしい旧友に会えたことから昔の寮の跡を訪ねてみたくなり、ひとり中央の道を辿った。昔日の広々とした三つのグランドには、今や教養部の建物や体育館がぎっしりと建ち並び、余りの変貌ぶりに驚くと同時に、覚悟はしていたのだが、曽って軒を連ねた四棟の寮の建物が跡形もなく消滅しているの眼のあたりにして、心裡に茫々と風が吹くのを感じた。「ここに恵迪寮ありき」と刻んだ石碑の前に立った時、昔に溢らぬものを求めて、足は自ずと原始林の道に向った。懐かしい原始林は往昔のままの姿であった。柏の大樹に山葡萄の赤い蔓が綸む様子に安堵の念を覚えると共に、感興に委ね、一詩を得た。

旧懐

白楊牧野分　白楊は牧野を分け
楡樹蒼空極　楡樹は蒼空を極む
葡萄蔓赤綸　葡萄の蔓は赤く綸み
北郷秋深識　北の郷に秋の深きを識る

（昭和六十三年九月作）

原始林の草叢に被われた道を進むと、「都ぞ弥生」の記念碑があった。この碑の建立記念式典が行われたのは、確か昭和三十二年であった。そして今は舞鶴に居る太田徹君が、当時寮の委員長として、ほか幾人かの委員と共に式典に並んだことを懐かしく想い出していた。

平成七年の十一月、東銀座のさる席で恵迪寮のスキー部の部屋のOBの集まりがあった。32年入寮の滋野三樹氏、33年入寮の松山哲三氏の肝入りで、卒業後初めての再会が果されることになった。32年入寮の加藤勝久氏は岩手から遠路馳けつけ、33年入寮の伊藤勝夫氏は大坂から参じ、他に32年入寮の中村寿氏等総勢六名――であった。スキー部の部屋は三十二年春、同期の久保治良君等と創めたように記憶している。彼と一緒に炊務委員の任を終え、共に北大スキー部に所属していた事もあり、新らしい棲み家を作った次第である。再会した諸氏の話により、部屋はその後七年間続き、35年入寮の藍原英樹氏の尽力による名簿を見て、真に嬉しく、感慨しきりなるものがあった。

六名の面々、飲む程に興が弾み、松山氏が割箸の袋に何やら書いて小生に手渡す。

今夕、旧友に会う。

多く飲みて些かも憂い無し。

全く屈託のない集り、盃を挙げる毎に饒舌、あたかも三十餘年の隔絶が忽然と消え、恵迪の部屋に居る様な気持に還った。

おひらきは、「都ぞ弥生」の斉唱、唱っているうちに心がのびのびと広がるのを覚える。

松山氏の仕掛けに乗り、

都ぞ弥生の歌を唱えば
迪に恵って、意自ら悠たり。

と転、結の句を付けた。

旧　友
今夕会旧友
多飲無些憂
唱歌都弥生
恵迪意自悠

哲三・慎吾　合作

室蘭恵迪会

芝　垣　美　男
（昭和三十九年入寮）

昨年、私が一番嬉しかった事のひとつが、室蘭恵迪（けいてき）会の結成です。

室蘭近郊（登別、伊達を含む）在住の北海道大学出身者で、同大学教養課程唯一の大学寮、恵迪寮在寮経験者の集まりです。

私は、昭和三十九年三月室蘭清水高校を卒業し、同年四月北海道大学に進みましたが、すぐ恵迪寮に入寮しました。理由は、貧しかったからです。三食付きの寮費は、当時で一日百円位でしょうか。四人一部屋の汚い男子寮でした。入寮の面接はヒゲ面の先輩寮生自ら行い、私には、「お前、落語やるのか、じゃやってみろ」と言われ、小噺をして、入寮を許可されました。二年間の寮生活でしたが、私の人生では思い出多い日々でした。そんな訳で、私の三人の娘の名前も恵迪寮寮歌から名付ける結果となりました。昭和四十九年、室蘭に戻ってから、いつの日か恵迪寮出身者の集まりを、と心に思っていましたが、室蘭近郊在住者三十五名が判明し、全員に呼び掛けたところ、全員大賛成で、七月の夏の宵、室蘭恵迪会開催となり、寮歌を心行くまで歌い上げ、夢が実現致しました。

室蘭恵迪会の終身会長は最長老昭和八年入寮で、今年八十一歳になる現役医師の池田洋二氏。室蘭恵迪会では、恵迪寮と染め抜いた陣羽織を纏い元気そのものです。十九年入寮の上田智夫氏、高橋昭三氏は、貧しかった当時を懐かしみ、高橋氏は第一回目の日時を間違え、二回目の会合では、今後の皆勤を誓った。二十三年入寮の沢山豊氏は、会合は皆勤で元気に寮歌を唱い、同年入寮の菊地敬夫氏は、海外旅行で一回目の会合は欠席し、二回目は、恵迪寮と染め抜いたハチマキを絞めて現れた。二十五年入寮の川上敏晃氏、三十年入寮の保志賢介氏、三十一年入寮の長谷川孝太郎氏、二川哲雄氏らは、いずれも会合は皆勤で、心から恵迪寮を懐かしんでいる様子だった。三十四年入寮の石橋啓男氏は当時を思い出しては涙ぐむ。

室蘭恵迪会で、初対面の人が随分おりますが、青春時代を恵迪寮で過ごしたと言う、只それだけの共通体験で、直ぐにうちとけ、肩を組み、寮歌を歌い、感激して皆、目を潤ませる。本当に何の利害関係もなく、腹の底から寮歌を大声で歌うだけの室蘭恵迪会である。

長源院と第二東名
―恵迪寮静岡同窓会有志の風流行事顛末―

加藤秀弘
（昭和四十六年入寮）

やはり縁は異なものである。私は静岡県清水市にある水産庁のとある研究所に勤務しているが、日頃懇意にしているとなりの研究室の室長が静岡市郊外の海を望む風光明媚な分譲地に瀟洒な新居を建てた。やがて、自治会活動などにも参入したらしく、時折のダベリの際にもそんな様子が伺えた。そしてある時「あのな加藤、今度のな自治会の副会長がなあ、けったいなおっさんでなあ、○○○製紙を最近退職したばかりで、まあ議論をすればギラギラ乗りまくるし、まあ昔の学生そのままやな。それがなあ、本郷出はどうも理屈ぽっくていかんとか自分を棚に上げて言うし、よく聞けば恵迪寮のなんとかだったらしいで、おまえの先輩やろうがなんとかせーや」。何とかせーもあったものではないが、こうして少々歳の離れた先輩とご縁ができた。

件の自治会副会長は、林産29年卒の中光良之氏（25年入寮）である。ある日職場に、その中光氏より電話があった。「長源院にお参りに行くから、君もなー、あのなー、来るんだぞ」。

長源院は正式には大森山長源寺と言い、長享二年（一四八八年）に今川氏親の重臣・朝比奈氏が建立した曹洞宗の古刹である。……とこんなことは後から知ることだが、恵迪寮生には特別な地である。ここには「都ぞ弥生」の作歌者、横山芳介先輩の墓所があり、境内にはその歌碑がある。なぜここに歌碑があるかは、我々のような若手（と思っている）の寮OBでも、東京エルム会刊行の「都ぞ弥生」（山口哲夫編）に収録された星野氏の記事で相当細かに知ることができたし、忘れっぽい私も長源院の名前だけは知っていた。「そーか、長源院かー」をきっかけに、徐々に忘れいたフレーズを思い出した。

長源院はJR静岡駅の北東、沓谷にあり、谷津山と言う小高い丘を背にして、北西に展開している。寮OB等諸先輩にお供してここを訪れたのは平成七年の二月半ばのことである。境内には、「都ぞ弥生」の歌碑が二ヶ所にあり、一つは横山家墓所に、今一つは本堂前にある。歌碑の筆跡は何れも横山氏のノートから起こしたものであるから、かっての恵迪寮南寮横に設立された歌碑とほぼ同一のものである。本堂前の歌碑は平成五年（一九九三年）二月になんと長源院の北堀昌雄住職が建立されたものだそうで、この経緯については浜松の永井潔先輩（水36）



長源院における、一九九三年二月の「都ぞ弥生」新歌碑序幕風景

が「関西エルム新聞」に詳細に報告されているので、ここでは説明を省きたい。墓参には、昭和23～34年入寮組六名とその年代に相当するOB三名、そして、少なくとも十年以上は離れた年代の私が加わり計十名が参加した。まずは墓所をお参りし、友人から譲り受けていた懐かしい北の誉「都ぞ弥生」を墓前に供え、かつそれを回し飲みして、本堂前の歌碑に向かった。件の中光先輩が「皆さーん、今日はご苦労様です。一人新参者を紹介しますと、このヒゲ面男はひょんなことから知り合った昭和46年入寮の加藤君です。昭和47年度の寮歌を作歌したそうなので…」と演説を始めたので、「あーあの、47年の寮歌のことは、未だに気恥ずかしくて…どうかご勘弁を」と横ヤリを入れたところ、「うるせー、それじゃー都ぞ弥生の音頭をやれ」と言うことで、卒業以来久々に声を出すはめになった。OB諸氏の歌声も結構若々しく、谷津山に木霊した。目を閉じれば、思い出深い南寮からの四季折々の景色が目に浮かび、〝ああ何年も札幌に行ってないなー、俺も結構歳をとったなー〟と頭のどこかで昔の仲間が囁いたような気がした。

墓参後には、当然精進落としの要ありで、静岡駅前の焼鳥屋で一献ということになった。諸先輩の味のあるお話に、手にした杯も忘れる程であったが、中でもこの四月に静大演習林教授を退官した熊谷直敏先輩（25年入寮、農29）の短い挨拶は忘れがたい。「口で言うのも気恥ずかしいが、私は静岡の地にあっても、やはり北大と恵迪寮が忘れがたく、静大でもクラーク精神で学生を教えてきました」。絵に描いたような恵迪人の言葉ではあったが、長い間寮から離れていた私には妙に新鮮に感じられてならなかった。

話はここで終わらない。三月ともなると年度末やら、四月の学会シーズンにあわせた仕事やら、本業ではクジラの繁殖回遊の季節になるやらで、結構いろいろなことがある。そんな最中に、独特口調で始まる中光コールが飛び込んできた。「あのな、おまえこの前は飲み足りなかったろー、こんどな観桜会を四月x日にやるからな、それでな…」。「あわわ、あのー…」。「今回

の観桜会はな、鈴木脩造先輩（19年入寮、農25）の庭でやるからな。鈴木先輩ってのは、なんだな…、最長老の神様みたいな人だ。」…と言うようなわけで、4月吉日実に風流な観桜会が挙行されることとなった。

鈴木脩造先輩は、JA静岡県農業協同組合中央会会長などを務められ、県農業会の重鎮である。静岡市北部に長閑な田畑や茶畑が広がる中ノ郷に広々とした屋敷を構えられている。JR静岡駅に集結した一行は静岡同窓会の要とも言うべき高木功先輩（34年入寮、農38）の先導で、中ノ郷に向かう。バスの終点から一頻り歩いた茶畑の中に鈴木家への道しるべがあり、遥か先に鈴木邸を望む。庭には見事な枝振りの桜の木があり、その下では鈴木御夫妻、御子息夫妻が宴の準備に勤しんでいる。鈴木先輩は尊大なところも見えず、実に誠実さと貫禄が相半ばする容貌で、我々を迎える。さすがの中光先輩も重鎮の前では、常にあらずして物腰が柔らかい。

奥様、若奥様が運んで下さる料理や若竹でかんを付けた美味しいお酒への返礼は、末席の者としては、ひたすら飲むことと寮歌をがなることだけである。「えー、観桜会ですから、まず“藻岩の緑”から」などと続けていると、予科帽を被った鈴木先輩に「君、古いのもよく知ってるね」などと声をかけられ、妙に嬉しくなってしまう。酒がまわるにつれ、諸先輩もエンジンがかかり、桜の木の下で旗を振り、蛮声をあげる。今回は恵迪タイマンの北古味雄先輩の（32年入寮、獣37）加入もあり、元バッカスの中光先輩と鍔迫り合いが絶え間ない。隣家は遥か先で、久々に気兼ねなしに、寮歌が歌える。

それにしても、この長閑で美しい景色はどうだろう…。桜の花びら越しに見える青空と濃い緑の茶畑は…何物にも代え難い。そうした印象を比較的率直に、宴に加わられていた鈴木先輩の御子息に伝えた。「あー、そうですね、自分でも良いところだと思いますよ。でもね、この景色も、あとそー長くは続きませんよ。うちの直ぐ横にね、第二東名がやがて走るんですよ」と御子息は、日本画のような景色の一点を見つめるように言った。

昭和三十年代に建設された東名高速道路が、日本に果たした役割ははかり知れない。日本経済の高度成長の引き金となっただけでなく、都市と地方の時間差が縮り、地方にはほんの僅かな計画的開発を押さえて目先の利益に執着した多数の無計画開発が横行し、調和の取れた清々しい山里に原色のにわかビルが進出し、そして壊され、風情のある景色が日本の至る所で消えていった。私が育った里の景色も、こうして壊され、昔を知る者としては、目を覆いたくなるような殺伐とした中途半端な街並みが残るばかりとなった。キャリング・キャパシティーに達した東名に、第二東名が必要なことは、きっと一応の理があるには違いない。しかし、やはりこの静岡の中ノ郷の風情は確実に奪われるであろうし、第二東名に触発された数々の開発が行われるに違いない。青っぽい議論など展開する気はないが、今



静岡市郊外、中ノ郷での有志観桜会。
（1995年4月、鈴木脩三邸にて）

る頃、一同お開きとなった。家路につく諸先輩の後ろを、ほろ酔いかげんで歩きつつ、年代を超えて（特に私は）こうして打ち解けられるのも、やはりみんな恵迪寮を大切に思っているからだろうとしみじみ思った。ひょっとしたら、この先輩達は、静岡に恵迪寮同窓会総会を誘致することなどを話しているのかもしれない。私が在寮した昭和46年～47年当時、大学紛争は終結に向かっていたが、やはり各セクトの対立は鋭く学内に残っていた。そうした中で、不思議と恵迪寮生というアイデンティティーは明確で、とにもかくにも都ぞ弥生を歌っている時は、色々ややこしいことを越えて連帯感が持てたことを、懐かしく思い出した。

以下に、この一連の風流な行事に参加した諸先輩に敬意を表しつつ、その氏名を記して本稿を閉じたい（敬称略、入寮年、卒業年の順）。

◎長源院墓参：源馬琢磨（昭和23年、農28年）、長澤和（23年、農28年）、熊谷直敏（25年、農29年）、辻英夫（25年、農29年）、中光良之（25年、農29年）、安達昌章（一、医35）、永井潔（一、水36）、内海登（一、農38年）、高木功（34年、農38年）、加藤秀弘（46年、水50）。

◎中ノ郷観桜会：鈴木脩造（昭和19年、農25年）、熊谷、辻、中光、宮原靖夫（一、医33年）、永井、北古味雄（32年、獣37）、内海、高木、加藤。

度こそは、日本の風土と調和のとれた開発を心から願わないではいられない。

さて、四月のうららかな日を、桜の木の下で風流にすごし、時には書生っぽい議論に花を咲かせて、鈴木邸の裏山に日が陰

自作「男の金字塔（ピラミッド）」
―ススキノ有線曲第2弾　がんばれ!!男の人生応援歌

田中信義（昭和三十二年入寮）

恵迪創刊号で、自作ど・艶歌「雪舞（ゆきまい）」がススキノ有線放送に流れていることをおこがましくも紹介させていただきました。女心のほのかな哀愁を詩情にただよう涙にしてみるつもりでした。酔いが深みに沈みながら青春の花模様を追いつづけているススキノの夜毎に交わされる華やぎなのです。

さて、夢は醒めてまた夢になるというわけで、こりもせず、昨年11月10日に自作第2弾「男の金字塔（ピラミッド）」を有線放送にメニュー・インしました。巣立ち行く我が子を見送る時のような祈願をこめて〝がんばれ〟人生の応援歌なのです。特に、昨今の世相は男性の軟弱化を促進しているに違いありません。

我が国の繁栄と退廃はそのまゝ今世紀末の驕りと不安・混迷の渦に巻きこまれて行くのであろうか―否とよ。未来へのロマンと希望を醸成する現生を信じているのです。

がんばれ!!応援歌「男の金字塔（ピラミッド）」を「雪舞（ゆきまい）」ともどもススキノの一夜の摘まみにね。

男の金字塔（ピラミッド）

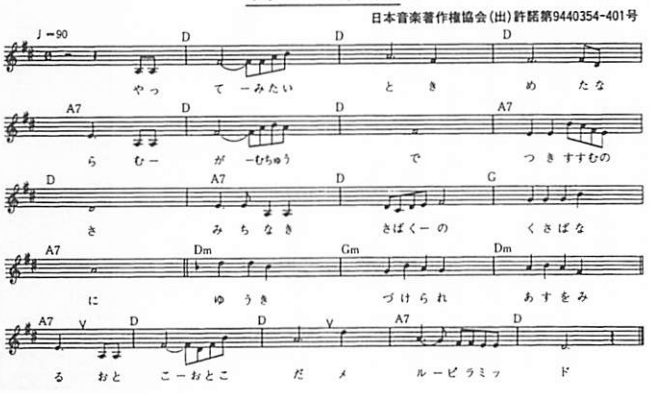
作詞　たなかのぶよし
作曲　堀江洋三
唄　しもさと洋二郎

一、やってみたいと　決めたなら
無我夢中で　突き進むのさ
道なき砂漠の　草花に
勇気付けられ　明日（あす）を見る
男　男だ　メル　金字塔（ピラミッド）

二、ひと目で好きに　なった女（こ）
当たって砕けろ　真心込めて
愛を求めて　さ迷って
夢は膨らみ　幸を得る（う）
男　男だ　メル　金字塔（ピラミッド）

三、汗にまみれて　努力（どりょく）する
広い大地と　空と海
自分の星を　胸に秘め
銀河流れて　辿り着く（たどりつく）
男　男だ　メル　金字塔（ピラミッド）
メル　金字塔（ピラミッド）

※「メル」は古代エジプト語で「ピラミッド」のことです。



紀行

中国東北地方の旅

繁富一雄（昭和六年入寮）

私は中国には十回以上訪問して居るが、未だ東北地方だけは行った事がなかった。私の家内は中国東北地方、旧満州国の吉林省吉林市の生れである。家内の父親は会津若松市の出身で、明治四十三年に東京帝国大学の林学科を卒業し、王子製紙株式会社に入社、吉林省へ社命で出張させられ、その時生まれた娘が妻のヒサである。現在ヒサは七十五歳で、今迄一度も生れ故郷に行った事がなかった。旧満州国は遼寧省、吉林省、黒龍江省の三省から成り立って居り、現在の瀋陽は奉天と云い、現在の長春は新京と呼ばれ旧満州国の首都で、人口は只今八百三十万人の大都会である。家内が時々思い出した様に夢に見る大きい川が幼い目に残っていると懐かしい様に云うので、是非一度連れて行ってやり度いと私はかねがね思って居た。

然し、東北地方に行く道がとても悪く、私達が仲々容易に行ける場所ではないと中国人が云うので、今迄行く機会を失ってしまって居た。ところが最近になって、長男一彬の友人に北大工学部の中国人留学生がいることを知った。この人は馬方太先生といい、中国共産党の幹部でもあるという。一夕私の家に呼んで食事を共にし乍ら東北地方の吉林市に行く道を聞いたところ、とても詳しく知って居た。七月が一番良い気候であると云うのでそれに決め、彼に相談し乍ら旅行プランを作った。

中国の東北地方の風景は、延々と続く玉蜀黍（トウモロコシ）畑や麦畑、ゆったりと流れる川の畔で草を食む羊や牛たち、アカシヤやポプラや柳の並木道、地平線に沈む真赤な太陽の下を小さい痩せた馬が駆けて行く。之は全く北海道に似た観がありとても親しみを憶えた。

七月十二日（水）　快晴

自宅を正午丁度に出発。ＪＡＬ便 午後二時 千歳空港発、午後四時五分 関西空港着。関西空港ホテルに一泊した。

七月十三日（木）　晴

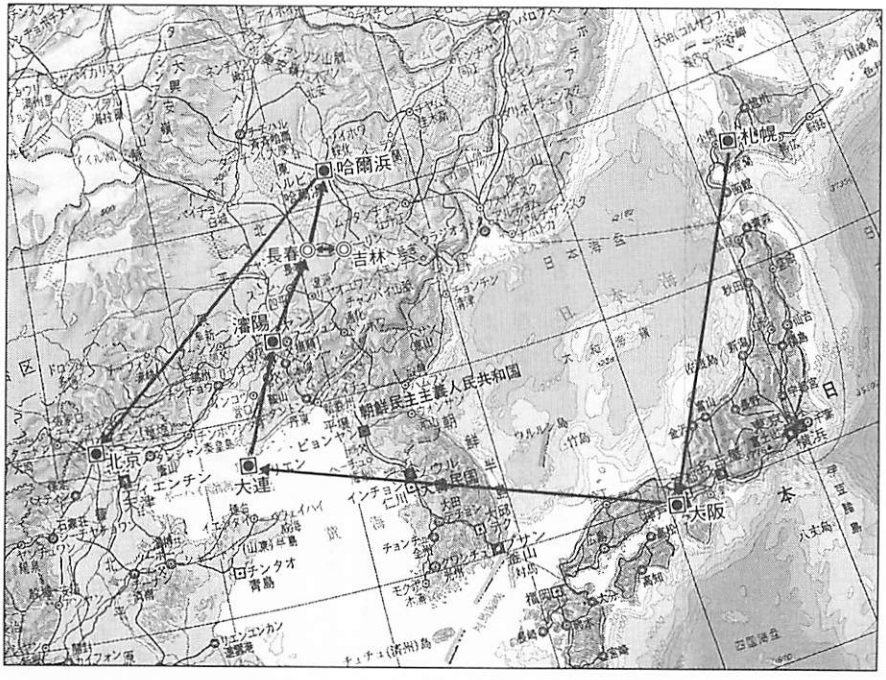
ＡＮＡ便 十時十五分 関西空港発、午後一時四十分 大連着。大連空港の通関は全くのフリーパスで何の調べもなく実に気持ちが良い。こんな処は何処の国にもない。全世界この様にして欲しいものだと思った。ホテルは高麗華（ブリカ）大酒店といって大連のNo.1だそうだが、とても綺麗なホテルであった。街は中国にしては仲々立派な店が揃って居た。

七月十四日（金）　雨天

午前八時三十分 ホテルを出発。私は旅順港２０３高地に於ける乃木希典大将の水師営の会見の歌と金州城の詩がとても好きで未だに憶て居り、家内と口ずさみながら大連市街より旅順港に向かった。

水師営の会見

佐々木 信綱　作詞



一、　旅順開城　約成りて　敵の将軍　ステッセル
　　乃木大将と　会見の　所は何処　水師営

二、　庭に一本　棗の木　弾丸あとも　著く
　　崩れ残れる　民屋に　今ぞ相見る　二将軍

金州城の詩

乃木希典

斜陽さす金州城は荒れ果てて風腥く人影もなし
山川草木転た荒涼
十里風腥し新戦場
征馬前まず人語らず
金州城外斜陽に立つ
山川草木転荒涼　十里風腥新戦場
征馬不前人不語　金州城外立斜陽

現在、旅順港は中国の軍港になって居り一般外国人の入境が許されていないが、車より一歩も外に出ない事と写真を撮影しない事を厳守すれば二〇三高地の頂上迄案内してくれる、との共産党幹部の方より指示があったのでそれに従った。この二〇三高地は明治三十七年及び三十八年の日露戦争の時、乃木大将が巨萬の将兵を投じて漸く勝利をおさめた古戦場である。ここで乃木大将は二人の息子を戦死させて居り、乃木大将も断腸の思いであった事と推察される。その時旅順港はロシアの東洋艦隊が入港して居り、之を封鎖する為に広瀬中佐がその任に当たり、任務を終え引揚げる時、杉野兵曹長が居ないので探しあぐねている間に敵弾に倒れたと云う美談も残って居る。

大連市内に旅順の街があり、有名な旅順工科大学は何処にあるか探したが終に見付ける事が出来なかった。数人の人に尋ねたが誰も知らなかった。旅順工科大学はもうありませんよとにべなく云う人も居たので、探すのを断念した。旅順港よりホテルに帰る途中、西瓜や瓜を沢山売っていたので、西瓜を買って帰り夕食後食べたが、日本に比較して見かけは立派であるが味は全然駄目であった。中国料理は世界一と云われているが果物はそうでもなく、日本にはかなわないと思った。諺に云われている〝洋館に住み、中国料理を食べ、日本人の妻を持つ事がこの世の最大の贅沢である〟は少々怪しい節もある様に思われる。

七月十五日（土）　快晴

午前九時にホテルを出発し、車で大連市内を観光した後、瀋陽（奉天）に向かった。大連から瀋陽迄は高速道路が完成して居り約四百㎞の距離である。この高速道路は日本が関わって作ったもので、大蔵省の審議官や建設省の技師が来て色々指導した由にて、とても立派に出来上がって居た。大連市郊外に出て



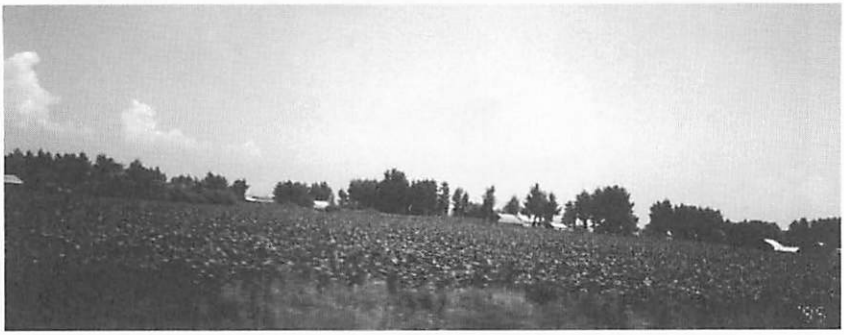
乃木大将の漢詩にある金州城外斜陽に立つと歌われた処を通って、瀋陽に向け車を飛ばした。更に驚く事は、この高速道路は六十㎞位殆ど一直線で曲がる所がない。矢張り中国は大した国だと思った。日本は一億二千万の人口に対し中国は十二億の民である。之こそ桁違いである。運転手が疲れるので所々休み乍ら午後四時三十分、無事に瀋陽に到着した。この間、見渡す限りの玉蜀黍畑で出来栄えも素晴らしく青々として居た。ホテルはNew World Hotel Shenyang（瀋陽新世界酒店）で、ここに馬方太先生が迎えに来てくれた。夕食は午後六時より鹿鳴館にて大御馳走になった。

七月十六日（日）　晴

一日中瀋陽の街を見学。古都に行ったり古宮にも行ったりした。日曜日のせいもあって沢山の人が見学に来ていた。が、中国人は寄り付いて充分見る様子もなく、只単に歩いているだけの様な感がした。次に張学良邸へ見学に行った。資料は沢山あって見甲斐があった。張作霖の家はホテルに変わって居た。その後、撫順市の露天掘りを見度いと思い、瀋陽から撫順市に向かって車を走らせた。ところが馬方太先生は、露天掘りより自分の工場を見てアドバイスをして欲しい、との事で鋳物工場を見に行った。私は日立製作所、日立工場で十三年間勤務した機械家なので一目見ればすぐ判った。残念ながら馬方太先生の工場は未だ未だレベルが低く、一通りの仕事が出来る様になるには十年かかると思った。（上の写真）

七月十七日（月）　晴

午前八時半にホテルを出発した。瀋陽（奉天）から長春（新京）迄は汽車に乗る事にした。中国の汽車は軟座車と硬座車に分かれて居り、軟座車はファーストクラスの事で、硬座車は（昔の日本の言葉で云えば）三等列車の事である。十年前頃迄は軟座車には一般の中国人は乗って居なかった。殆ど外国から来た



人や中国の要人だけでとても空いていた。その感覚があるので悠々と駅に向かった。九時に沈陽（瀋陽のこと）北駅に到着し駅に入ったところ、大変な人混みに驚かされた。軟座車の待合室はあったが、駅員に直ぐ乗る様に忠告され改札口よりプラットホームに入ったが、二十輌以上の列車で何処に軟座車が付いているか見当もつかないので、長い長いプラットホームを駅員に尋ね乍ら、漸く前から三輌目にある一輌のみの軟座車を見付けた。急いだので汗だくだくになった。軟座車の車内に入ったところ、私達の席は一番端の便所のそばであった。一昔前と違い、軟座車は一般に開放されて、中国人の中産階級の若者で占められ、我々は端の方に追い出された様な形で実に情けない目にあった。然し列車は予定通り九時三十分に瀋陽北駅を出発し、午後二時二十一分長春に到着した。実に正確な時間で之も驚きの一つであった。五時間の長い長い窮屈な汽車の旅行は、とても今後二度と出来ないと思った。但し汽車の窓外の眺めは実に素晴らしかった。広く果てしない平原には荒地なぞ何処にも見当らない程に畑は耕作されて居り、中国の農村は貧しいと聞いていたが、とうていそのようには見えなかった。そしてこの美しい田園風景はヨーロッパに比較して遜色ないと思った。

（上の写真）

長春南站に着いた。ここ



が旧満州国時代の首都で、新京と呼ばれ政府がおかれた処である。馬方太先生の友人が出迎えてくれた。この人は、大型のリンカーンのリムジン車で、私達を楽府大酒店(Paradise Hotel)に案内してくれた。このホテルは最近建設された許りで、中国には之以上のホテルはないと思われる程立派であった。

夕方市内見学に出掛けた。長春は吉林省の省都であり東北地方の中心に位置する。昔から塞外（万里の長城以北）の春城と呼ばれ、春には町中が花と緑に囲まれ実に美しい町である。（前頁下の写真）。戦前、日本の関東軍司令部を始めとする諸官庁の建物が築かれ、皇帝を迎え入れる皇居の建設が進められていた。これらの施設の多くは今も尚当時のまま残され、大学などの施設として使われて居り、訪れる日本人は感慨無量である。中でも日本の城の天守閣に当たる旧関東軍司令部は現共産党吉林省委員会が入って居り、独特の威厳を保っている。中心街の東に当たる旧王宮は現在、吉林省博物館として長春の象徴的な建物である。当時建設中であった皇居は現在長春地質学院となって居る。しばらく歩くと道は緑に囲まれた広大な南湖公園につき当たる。ここで市民は釣りやボート遊びを楽しんでいる。解放後は長春は重工業都市として発展し、中国初の国産トラック『解放号』や高級自動車『紅旗』がこの町から生れた。

ここで私は、今迄聞いた事のない話を耳にした。日本に於いては、中国に対し日本軍が侵略戦争を仕掛けたから一、〇〇〇億円の借款を与える約束を村山総理はされた報道があった。然し長春の市民の何人かから、日本の関東軍が駐在してくれた御陰で、毎年秋の収穫時期になると現われて根こそぎ奪略して行った馬賊が来なくなって、平和な日々が送れる様になったと聞かされて、驚かされた。関東軍にも、良い処もあったとうけ留めるべきであろうか。

夕食は中国料理で大変美味しかった。スッポン料理も良かったが、特に粘米餅（ニェン・ミィー・ビェン nian mi bing）と云って黒と白の平な形をした餅がうまかった。帰国してから探したが、之は日本では何処に行っても見付ける事が出来ないだろう。

七月十八日（火）　快晴

今日は妻ヒサの出生の地、吉林省城内の七軒房を訪れる事になって居り、之が今回の旅行の最大の目的である。運転手は崔さんと云って大変上手に運転をする人である。長春と吉林は百二十八㎞で、余り遠くない距離であるが、途中道路修理個所が多く三時間かかって漸く吉林市に到着した。その間誠に広い平野が続いて居り、何処にも荒地はなく一面玉蜀黍と麦畑であった。

案内人として公安局より加さんを派遣してもらったので大いに助かった。妻の出生の地、七軒房を探すのに土地の人と加さんが交渉して下さって漸く判った。土地の人が曰く、〝七軒房





ではなく七間房が本当だ、私は昔役人であったからよく知っている〃と。七間房に着いて家内が、こんな処であった様な気がすると大変喜んで居た。（上の写真上）私はチェックする意味で、近所で靴磨きをして居る人に、ここが七間房通りですかと尋ねた。「サウダ」昔から変わって居ないとの返事を得て〝ヨカッタナー〟と妻に話した。妻はとても嬉しそうで何枚も何枚も写真を撮った。それから思い出が幽かに残る松花江を見に行ったところ、瞼に浮かんだ様子と同じだと更に嬉しそうで、来た甲斐があった、もう思い残す事がないと涙を流さんばかりであった。（上の写真下）昼も過ぎ遅くなってお腹が空いたので、松花江を渡って新しい街に行き公園の中にある飯店で食事をした。帰途、妻は吉林駅を見て、矢張りここで生れたのだと再確認した様であった。帰途は更に車が混んで、百二十八㎞の道程を四時間もかかってやっとの思いでホテルに着いた。因に長春の人口は八百三十万で、北海道全部の人口は五百七十万であり、比較にならない程沢山の人が中国に居るのである。

七月十九日（水）　快晴

午前十時 ホテル出発。長春 － 哈爾浜（ハルビン）の距離は二百四十二㎞で、一時間に八十㎞としても三時間で充分ハルビンに着くと思った。途中見渡す限り玉蜀黍と麦畑で、日本では考えられない雄大な農地。何処も青々と茂って居り、中国の

誇る大農場が展開されていた。道は約六十㎞位の距離が一直線で、北海道では（否日本では）一直線の距離は四十㎞が最高である。ここに住んでいる中国の農民は皆裕福に違いないと思った。途中で瓜を買ったが十元＝百円で山程くれた。三時間を経過したが未だ到着の見込がないので運転手に聞いてみたところ、未だ半分しか来ていないとの事、仕方なく我慢する以外方法はないとあきらめた。六時間以上かかって午後四時三十分に漸くハルビンに到着した。Harbin Flamingo Hotel に入り、疲れて夕食後直ぐ寝る事にした。

七月二十日（木）　快晴

午前九時半頃ホテルを出発して市内観光へ出掛けた。ハルビンは松花江の川畔に開けた異国情緒漂う中国北端の黒龍江省の省都である。町の北側には大河松花江が東西に流れている。この地はかつて小さい村落であったがロシアの進出によって交通の要所となった。町はロシア風の建物や街並みの面影を残していて中国随一のエキゾチックな町である。しかし中国の経済改革が進んだ為に繁華な町となって、激しい人混みが続き、そこを通り抜けないと仲々目的の処には行けない。ここは美術工芸品の産地で手頃な土産品が沢山並んで居る。一番の見所は松花江のほとりで公園になっている処である。景色が仲々良く半日でも一日でも充分に過ごせる。

七月二十一日（金）　快晴

午前四時半に起床、朝食を取らずに七時にホテルを出発し、車で八時にハルビン空港へ到着した。V.I.P.ルームに案内され、ホテルから持って来た朝食をそこでゆっくり食べた。飛行機は九時三十分に定刻で出発し、十一時三十分北京空港に着いた。この路線の飛行機はロシアの古いアエロフロートの払下げで、何時落ちるか判らないと息子達にケチを付けられていたので、実は覚悟して乗ったところ、アメリカの新鋭の７２７でファーストクラスがちゃんと付いていて、実に快適に北京迄送ってくれた。

七月二十一日から二十四日迄、北京の長富宮ホテル（ニューオータニ）にて過ごし、七月二十五日、無事札幌に帰って来た。



紀行

チベット印象記

高橋邦臣
（昭和二十八年入寮）

プロローグ

「チョモランマを眺めにいきませんか？ロンブク氷河から…」という話が古い山の友人であるY広島大教授からあったのは、平成五年夏の終わり頃であったろうか。

参加人員も多数は不可で、数名の手作りのトレッキング方式の遠征である。

ネパール側からチョモランマを眺めるツアーは話をきくことは多いが、チベット側となると入国許可がはたして取れるか、情報がなかなか得られないし、現に中国政府も外国人の立ち入りには、かなり神経を使っているようだ。

いずれにしても、なかなか得られないチャンスだけに二つ返事でメンバーに加えてもらい、Y教授をジェネラル・マネージャーとしたチームを編成した。広島勢二名、札幌勢三名、計五名の構成で、期間は平成七年八月一日～八月十六日、経路は上海～成都～ラッサまで空路により、ラッサから車二台に分乗して約七五〇㎞、カトマンズに通じる国道を西進し、シカールの先の分岐からロンブクに至り、チョモランマの麓ロンブクB.C.に三泊四日キャンプを設営、チョモランマを眺め、幻の花「青いケシ」を撮影できれば、これにこした幸せはないとばかりに、もくろんだトレッキングならぬカー・レッキングの旅である。印象に残った事柄を項目ごとに記述したい。

上海と成都

Y教授のお弟子さん達が空港に出迎えてくれた。宿泊は上海交通大学の施設で、名称は「教師活動中心」つまりクラブなのであろう。ホテルとレストランの施設である。

この大学は交通に関する各種研究をテーマにしているとのことで工学系の大学と言ってよいのであろう。Y教授のお弟子さんの李助教授のお世話になる。

中国のお土産に印鑑がよいと聞いたので、メノウの印材でお願いしたところ我々が帰国する時までに、揃えて下さった。全部で六十本を超える数であった。

町を見学する時間はなかったが、帰国前夜、李助教授のお宅に招かれて夕食をよばれた後、上海友誼店で買い物をした程度で、あとはタクシーで通過しただけといってよいだろう。友誼店を遊戯店と思い違いをして、Friendship-shopと聞いてはじめて納得した我が愚かさが身にしみた次第。

成都はチベット入国許可証受取りのため一泊した。四川省の中心都市。日本人にとって、三国志の舞台で馴染みの都市で、諸葛孔明を祀った武侯廟と杜甫ゆかりの浣花堂が名所であるが、今回は見学する時間がなく、漢方で高山病の予防薬の手配をした後、本場の四川料理店「陳マーボ・トウフ」のフルコースを楽しんだくらいであった。

ラッサ

成都空港から積み込まれる荷物を飛行機の窓から眺めていると、丁度我々の荷物が見え、その横に鳥かごがある。生きているニワトリである。ラッサで餌を与えて飼育するより、手っとり早く安上がりなのであろう。あいにく、我々の荷物の上に置かれたものだから堪らない、ラッサで荷物を受け取ったら、糞だらけの悲喜劇となってしまった。

標高五〇〇mの成都から三、六〇〇mつまり、富士山のてっぺんまで一気に放り上げられたのと同じである。高度順応もへったくれもない。飛行機から降り、歩きはじめたらすぐに息が苦しくなった。空気の濃度はラッサで平地の六八%とのこと、高山病は一番心配していたことである。成都で購入した予防薬は量が多く、目を白黒させながら飲み込む有り様である。メンバーのH尾道短大教授は体育生理のご専門で我々の健康管理兼高所における影響のデータ収集の目的を持っておられたが、真先に影響が現れはじめた。

それでも、ラッサに二泊、ギャンツェに二泊、シカール一泊と馴らしながら五、二〇〇mのロンブクにたどり着くことができた。

クンガ空港からラッサまで約一〇〇km、ヤルツァンボ河に沿った国道を遡り、支流ラッサ河右岸に町は開けている。人口十五万、チベット第一の都市、チベット自治区の政庁がある。自治区制定三十周年の準備が進んでいるが、必ずしも平穏というわけでもない、モニュメントが破壊されて、修理の途中であった。ここは、外国人に対して開放されているので、どこを撮影しても問題はないが、他の都市では一部しか開放されておらず、ガイドからここは撮影しないでくださいと、注意された所もあった。

ポタラ宮

ラッサの写真をご覧になった方々にはお馴染みの宮殿である。現在、一般に開放され観光名所になっている。ポタは観音

修業、ラは山・峠の意味で約一〇〇mの小山の上に建てられた、ダライ・ラマの宮殿である。我々は息が苦しいので、ゆっくりと坂道を登って行った。内部はチベット仏教の仏像が安置された部屋で、それを次々と通りぬけ、段々と上部へと上がって行った。仏像の写真を撮影するにはお金がかかる。隠し撮りをして、ばれたら厄介なことになるので、ヴィデオをもっているM君にまかせておいた。宮殿の最上部から眺めるとラッサ河が流れ、街が広がっている。大昭寺のあたりに香の煙があがっている。金色の屋根が青空に輝く、はるばるとやって来たものである。同行のH教授の顔色は真っ青で、酸素ボンベから吸入しながらの参観となった。

宮殿のトイレには驚いた。大用の所は囲いもなにもなく、とても用を足す気にはなれそうもない。H教授は大用の所で小用を足している私の後ろ姿を撮って、喜んでおられたが、とんだトイレ考現学になってしまった。

八角街

大昭寺の門前街である。正門の所では、身を大地に投げ出してお祈りをしている人々が大勢いる。商店街はぐるりと寺の周りをとりまいていて、あらゆる商品が販売されている。巡礼でラッサにやって来た人々は勿論のこと、市民の日常生活に欠かせない場所である。

ヤクのバター、肉、乳のたんぱく質を乾燥させた保存食、曼陀羅、お経、仏具、雑貨etc. 食品はY教授の専門でたとえばバターを包装しているのは何であるか等、目の輝きが違っている。

いちばん驚いたのは、人の頭骨の飲器であった。これぱかりは買う元気がでなかった。亀の甲羅を飾り面にしたものもあった。トルコ石、貴金属類はまず本物はないものと思ったほうがよさそうである。言い値で買うことは全く無い。交渉すれば、一〇〇%値切ることができる。日本円とのレートは中国一元に対して十二円位であるが、物価が安いのでこちらの金銭感覚がひっくり返りそうである。石をくりぬいてつくった高さ四cm位のゾウの丸彫りを二十五元で買ったが日本円で三百円位である。

人の流れは時計回りになっていて、反対から来る人はいない一方交通であった。それでも、一回りしたときは酸素不足の影響もあって、すっかり疲れてしまった。

ラッサからギャンツェへ

八月五日。二台のランド・クルーザーに分乗し、チベット人のドライバー、通訳の劉君の計八名の一行はラッサを出発した。南路をとり、峠を三つ越えなければならない。距離は約二五〇kmである。道路はかなりの悪路でこれは覚悟の前である。

ヤルツアンボにかかる曲水大橋をわたる。交通の要衝で軍隊

が警備している。写真は撮影しないよう注意された。

第一の峠カンバ・ラの登りにかかる。二五km位であろうか、一時間で頂上に着く。眼前にヤムドクツオの湖面がひろがる。標高は四、八〇〇m、真っ青な湖面に強烈なインパクトを受けた。峠をくだり湖畔で昼食、その時、たまたまさわったイラクサの刺激の強かったこと、翌朝、水で手を洗ったところ、ビリッとしびれたくらいであった。

ヤムドクツオの湖岸に沿って六〇km、ナカルツエを過ぎてから第二の峠カローラの登りにかかる。二一kmの悪路で、途中、前方にバスがうまっていた。イタリア人たちのツアーである。それを助けて、ずいぶん感謝された。彼等とは、この日、同じホテルに泊まることになった。カローラは標高五、〇〇〇m、すぐそばにノジンガング（七、一九一m）がそびえている。氷河の舌端をかすめて道路は下る。峠の下に、日中合同登山隊がB.C.を設営していた。

第三のメッセラ（四、五〇〇m）から、振り返ると真っ白なノジンガングの頂上がのぞまれた。この日、ギャンツエ到着は午後八時であった。

ギャンツエ

八月六日。チベット第三の都市。高度順応のため一日滞在を延ばした。ギャンツエには古城がある。一九〇三年探検家で知られるヤングハズバンドが英印軍を率いてシッキムからチベットに入り、ギャンツエにやって来た。現地軍と戦闘になり、二～三ヶ月旧式装備の現地軍はこの城にたてこもって頑張ったのである。現在は史跡になって、青少年の愛国心を鼓舞する教育施設である。地上一二〇m位の山の地形を利用して築城している。見学に訪れた。中腹で料金を払う。八元である。抗英遺址となっている。最上部まで上がるのは苦しかった。

見下ろすと有名な寺院白居寺（パルチョ寺）が見える。右手に視線を移すと、鳥葬台が見えた。我々はすっかり興奮して、シャッターを押した。その他、抗日戦争の展示もあり、ヒットラー、ムッソリーニ、東条首相の写真を展示してあった。

いずれにしても、この町は、インドに通ずる道路の分岐であり、交通の要衝である。

シガツエを経てラーツエさらにシカールへ

八月七日。ギャンツエ発、シガツエまで八六km、ここで中尼公路に合流し、西行する。一六〇kmでラーツエに到着する。中尼公路には、花崗岩の距離標識が一km毎に置かれ、北京からの距離がわかるようになっている。

シガツエを過ぎてから気をつけて見ると、四、九〇〇台になっている。五、〇〇〇kmの地点で車を止めさせ、写真を撮っていると、いつの間にか子供たちがよってくる。どこでもそう

であったが学校に行っている様子などまったくない。何かくれとねだるのである。

私が手帳に記録していると、そばに寄ってきて、私をつつき手を出すのである。我々も敗戦当時同じようなものだったので、とかく言う資格はないが貧困なのである。雪祭りのバッジやゴム風船を持って行ったのでそれを与えた。

チベット人達はろばを連れて往来している。車をひかせたり、背中に荷をのせたりして何処に行くのか、行きかっていた。

ツオーラ（四、五〇〇m）をこえるとラーツエに着く。街には軍隊が駐屯し、兵士相手の酒場が多い。星月餐庁、簡陋酒家などはなんとなく意味は理解できるが、民族団結酒家となると酒を飲んでも酔えない気になりそうである。

この先で道は二つに分かれ、中尼公路は左に入る。真っ直ぐ行けば聖地マナサロヴァ湖、カイラス山に至るルートである。分岐から三〇kmでギャツオーラ（五、二六〇m）である。分岐には検問所があり、遮断機がおりている。ここで、パスポートとチベット入国許可証の提示をもとめられた。公路には数カ所にこのような検問所がある。五、〇〇〇mを超える峠のてっぺんでもヤクを放牧している。

ここに、チョモランマ自然保護区の標識があった。ちなみにチョモランマはQomolangmaと綴る。峠の下りの途中、はるかにヒマラヤのピークが見えた。チベット人たちはチョモランマと言っていたが、真偽はともかく一〇〇kmへだてて眺めるヒマラヤン・ジャイアンツの姿に大きく感動した。

シカールのチョモランマ・ホテルに到着、子供達がアンモナイトの化石を売りにきた。定日珠峰賓館と中国語で書いてあった。設備が故障しても修理する技術がないのか、水洗トイレは水が出ず、バケツに水を汲んで流すありさまだった。

ロンブクと青いケシ

八月八日。シカールから六〇kmでチュー村に着く。ここから、ロンブクに至る道が分岐する。検問所があり、入山料として車一台四百元、外国人一人四十元、計千元徴収された。果たして、国家に全部入るのであろうか。

戦前、イギリスのエベレスト遠征隊は、このルートから入っている。ロンブクB.C.まで七一kmで、途中パンラ（五、一五〇m）を越える。山肌を見ると褶曲した地層がはっきりみえる。車は大きくカーブしている道に沿って次第に高度をあげて行く。頂上近くなって、チベット人運転手が青いケシを見つけてむしり取って来た。我々に早く見せたいという好意はよくわかるが、彼等にはその辺の雑草でも摘むような感覚かもしれない。

大きな群落はないが一株づつかなりの数が分布している。頂上に車を止めて、じっくりとカメラをかまえて撮影にかかる。数種類の花が咲いていたが、残念なことに植物名は不明であった。ここから見えるヒマラヤン・ジャイアンツはまさしく圧巻



でチョモランマを中心に四座見えるという。チョモランマ（第一位）、ローツエ（第四位）、マカルー（第五位）、チョオユー（第七位）である。花を撮りながらまっていると、雲が切れてチョモランマが姿を見せはじめた。三〇㎞隔てて眺めるチョモランマ、青いケシとお目当ては最小限果たされた。

峠を下り、いくつかの集落をすぎ、ロンブクから流れ出ているザァカール・チュー河を遡るかたちですんで行った。河谷はだんだんせばまり、濁流うずまく河の流れのそばを、タイヤのあとだけがついているような道がロンブクに向かってついている。やがて、道が迂回し、稜線のかげから、チョモランマが姿をあらわした。青空に屹立し、眼前に大きく、真っ白に雪をいただいている。

足元には青いケシ、ゴマノハグサ科のシオガマの仲間や、ウスユキソウつまりエーデルワイスの仲間が咲いている。我々は歓声をあげて車を止め、チョモランマをバックに写真を撮る。前進を開始した我々は間もなくロンブクに到着、はるばるやって来たのだ。

ここは標高五、〇〇〇m、ロンブク寺がある。ここにキャンプの予定であった。テントや寝袋は借りて来たので、ただちに設営にかかる。食事は日本から準備してきたものを使用する。酸素の含有率は平地の六〇%位、沸点は八〇℃、当然、生米は炊けない。インスタント・ラーメン、もち、アルファー米を日本から持参した高圧釜で加熱するのである。



トレッキングでやって来ている他のパーティの



テントが十数張りキャンプしていた。十八才位の娘をリーダーにした女の子達が巡礼に来ていて、我々のテントを覗きにきた。バッジを与えたらすっかり喜んでいた。四〇㎞位離れた集落からトラックに便乗して巡礼に来たという。寺院に宿泊できる所があって、彼女達はそこに寝泊まりしていた。仲良くなった我々に部屋を見せて、お茶をだしてくれたりもした。

夕方、残照がチョモランマの頂を赤く染めて輝いた。

ロンブクB.C.

八月九日　寺院からさらに奥、四㎞イギリス隊がベースキャンプを置いた所がロンブクB.C.で我々の予定はそこまでキャンプをのばし、あとはできるだけロンブク氷河を遡るということであった。ここは標高五、二〇〇m、チョモランマとの標高差三、六四八m、五、〇〇〇mを超える所まで来ても、さらに富士山位の標高差がある。スケールの大きさがおわかり頂けると思う。

登山隊が三隊入っていた。雨期にもかかわらずである。チョモランマはやはり世界一の山と感じた。雨期といっても雨がふりっぱなしというわけではない。しかし、朝見えていたチョモランマは時間がたつと、曇ってきたり、雨が降ったり天候は変わりやすい。中国語の説明では「登山大本営」とある。言いえて妙である。ここは、右岸の支流が形成した扇状地と氷河が運んで来たモレーンの丘が交錯した石原であった。

夜、空はよく晴れた。たしか、月齢は十三夜位のはず、Y教授は月夜のチョモランマが見えたら、思いがけない拾い物と言う。教授の予言は見事に当たり、チョモランマの月光のもと幽玄なすがたに心うたれたが、写真に収められず、しっかりと脳裏に刻み込んでおくしかなかった。

八月十日。朝方、降雪をみた。三㎝程度ですぐ融けてしまった。氷河の方向に行けるだけ登ろうと出発した。はるか彼方に白い氷の塔が林立しているのが見えるが、とても、そこまでは行けない。三時間程登って行くと氷河の末端にでた。モレーンにおおわれた氷河は裂け目が口を開け、温度が上昇すると崩れて、音をたてて水面に落下している。我々はここで行動をやめ

た。標高は五、五〇〇ｍ（推定）位まで行ったことになる。

このころから、快晴の頂上に雲が湧き始めだした。急速に天候が悪化し、チョモランマは雲にかくれ雨が降りだし、テントに帰った時はすっかりぬれてしまった。

ラッサへの帰路

八月十一日。目的を一二〇％達成した我々は十分に満足して帰路についた。テントを撤収してラッサにひきかえすルートを辿った。

ロンブク寺院では、お布施をだして拝観させてもらった。写真もOKで、暗い本堂の中で、僧達が勤行していた。この寺院の塔を前景にチョモランマを撮るのがポイントであるが、生憎チョモランマは雲の中であった。

パドゥーチという村にロッジがありトレッキングの人を相手に泊めたり、食事を提供していた。そこでヤクの乳を飲もうと寄ったら、ロンブク寺に巡礼に来ていたチベット娘がいた。彼女たちはうまく車をつかまえて便乗して帰っていたのだ。M君がヴィデオで撮ってやってすぐその場で再生して見せてやったら、たいそう驚いていたが、また、喜んで何回も見せてくれとせがんでいた。

樹木などなにもない山肌に経文がかかれているのがみうけられる。仏教が彼等の生活に密接に関わっている。たとえば、殺生はしない。食べるための殺生は別の種族が行うという話である。

この日は、パンラを越えてシカールまで戻り、水も湯もでないホテルに泊まる。

八月十二日。ガツォーラを越えてラーツェでマナサロヴァからの道と合流する。市街に至る途中、道路工事のため迂回路をとった。道とはいえない河の中を走る。前方にバスが埋まっているのを引き上げる。この日、シガツェまで帰り着く。

八月十三日。シガツェはチベット第二の都市、パンチェンラマの寺院タシルンポがあり参観することができた。ラッサまで約二八〇㎞ヤルツァンボ河に沿った国道を東走する。鳥葬台のある小山の側を走る。一五〇ｍ～二〇〇ｍ位の標高差がある。遺体をかつぎあげるのは、なかなか、大変であろう。

地名はわからなかったが、ちょっとした食堂がかたまっている所で昼食、渡船があり、対岸にゾンツォンミンという有名な寺院が見える。ヤルツァンボが山峡を急流となって流れ下っている場所を抜け、曲水大橋の所にきて、ようやくラッサに帰り着いた気がした。長かった旅も終わりに近づいたのである。

河口慧海

明治時代、仏教原典研究の志を持った河口慧海は、鎖国していたチベットにネパールから、間道を伝って潜入した。ダウラ

ギリの北をまわり国境を越えてからカイラス、マナサロヴァにまわり、命がけの危険にあいながら、ヤルツァンボ河に沿ってラッサにいたっている。また、帰国する時には、カンパラ、カローラを越えギャンツェからシッキムに至るルートをとっている。彼の著した「西蔵旅行記」は山の名著でもあるが、我々の経路と彼の足跡を重ねあわせてみた。するとンラッサからギャンツェまでのルートとラーツェからシガツェをへてラッサにいたるルートが一致する。ヤムドクツォ、ノジンガング、ギャンツェ城を彼は見ている。ヤングハズバンドが現地軍とドンパチやらかしたのは、慧海がギャンツェを去った後ということになる。

また、ラーツェ、シガツェ、ラッサの経路も同様で、彼はタシルンポ寺のスケッチまでのこしている。

彼に対して申し訳ないのは、二本の足で踏破した慧海であるが、我々は強力なエンジンをもったランドクルーザーに乗っていながら、道が悪いとか、息が苦しいといって旅をしたことである。

その他の印象

(1) 時差は日本時間と北京時間は一時間、時計を遅らせる。ところが、中国は一律、北京時間である。135°Eの日本、90°Eのラッサでは45°の経度差がある。つまり北京とは二時間の時差を無視した運用で、朝はなかなか明るくならないし、夜はおそくまで明るい。午後四時といっても、実際には二時の太陽が頭上で輝いているのである。

(2) 私が困ったのは職業欄の記入であった。Y教授はNon-Jobと記入するのは具合が悪かろうと教室にいる中国人留学生に聞いてくれたところ、このような場合、札幌市役所老休幹部と言ってよいとのこと、滞在中はもっぱらこれでとおした。むしろ、老朽幹部と言ったほうが実態に合うのでないかと苦笑した。

(3) チベット人運転手に我々一行五名の年齢順を聞いてみた、M君が一番若いのですぐにわかったが、次は?と聞くと、なんと一番年齢の高い私だというのである。理由を尋ねると、歩き方がしっかりしているというのである。彼等の見方は外見よりも、実際的な見方をするようである。それから気がついたのは、視力が強烈である。我々が全然見えないはるか遠くに埋まっているバスを識別していたのが印象に残った。

(4) 帰りのラッサ空港で積み込んでいる荷物が眼に入った。おおきなダンボール箱に鮮松茸とある。成都まで二時間、上海まで二時間、うまく接続するとその日のうちに日本に到着可能である。このような所からまで、松茸が輸入されているとはいささかどころか、おおいにおどろいた。

ある週刊誌によれば、雲南省では松茸成り金がいるそう

で、すべて日本に向けたビジネスで得たものとのことである。

(5) 劉君は成都出身で、我々の通訳兼ガイドをつとめてくれた青年である。チベット滞在中行動を共にしてくれた。カイラス社という観光会社の社員でシーズン中はラッサ滞在、オフには成都に帰るという生活である。チョモランマまで行けるということで、たいそう喜んでガイドしてくれた。ギャンツェとシガールのホテルでは同室となった。かなり、日本語ができるので話がはずんだ。たまたま、成都とゆかりの深い三国志の話になり、英雄たちの人物評論となった。

私が悪役のトップ曹操が歴史上の見地から、トップクラスの人物と言う評価を展開したところ、びっくりした表情をしていた。

別れる前日、プレゼントをくれた。それは、切手シリーズで、「中国古典文学名著(三国演義)」とあった。

三国志の名場面が題材になっている。赤壁の戦いは、一六cm×四cmの大きさである。合計九枚の切手は、帰国後、台紙に貼って整理し、大切な記念品としている。

(6) 八月十四日。チベット最後の夜、チベット料理店にでかけた。レストランの名は「郷香餐庁」という。ヤクの肉が多くだされ、美味しく料理されていた。飲み物は裸麦を発酵させた「チャン」で、アルコール八%、飲みやすかった。チベット式歓迎の方法は、立たせて白い長い織物(本来は絹だと思う)を首にかけてくれ、かなりおおきな器に「チャン」を注ぎ、どうぞ飲んで下さいという意味の歌を歌い、それが終わると一気に飲み、それも三回くりかえす。一気飲みの元祖かもしれない。宴を終えて帰る時は、織物は頂いて帰る。

運転をしてくれたチベット人も空港で別れる時、織物を首にかけて名残を惜しんでくれた。

エピローグ

成都に到着し、息苦しさからようやく解放された。そのかわり暑さも戻ってきた。すぐ、上海行きに乗換え、一気に舞い戻った。

八月十六日。上海から関西空港に帰ってきた。一行五名、ひどい人はコレラ症状を呈し、ドクターにひどく怒られたという。間もなく、道新の記事で、中国や東南アジアから帰国してから発病する例が多いとのこと。我々も相当に注意して生水は絶対に飲まなかったのであるが、腹をこわしてしまった。

せっかくの楽しい旅行のしめくくりは、健康で帰国することと痛感した。

ニュージーランド便り

河内洋佑
（昭和二十七年入寮）

ニュージーランドの大学寮

送っていただいた「恵迪」創刊号を見ていたら、アメリカでは男女混住の大学寮ではドアがあって棟が分かれており、ある時間になるとそのドアが閉まってしまうという記事がありました。そこで、ニュージーランドの大学の学生寮の現状をちょっとご紹介する気になりました。

私の勤務しているオタゴ大学では創立一〇〇年を記念して、一九六九年に寮（ユニバーシティ・カレッジと呼ばれています）を卒業生の寄附金をもとに建てました。それまでにも寮は大学の周辺にたくさん建っていましたが、宗教団体が建設経営するものが多かったようです。その全収容能力は学生の大半が希望すれば入れる程度でした。そして全部の寮が男女別でした。現在、ほとんどの寮が男女混住になりましたが、それを除けばシステムとしてはほとんど変わっていませんので、以下には現在もそのままの部分は現在形で記します。

ユニバーシティ・カレッジも最初は男女別棟で一階の食堂・娯楽室が共用になっていました。各室は個室でベッド、引き出し付きの机、洋服タンス、スタンドが付属しており、トイレ、シャワーが共用です。また毛布、シーツや枕カバーは寮が提供し、毛布以外は週に一度洗濯交換してくれます。寮に入るにはこのように、自分の衣類とか本だけを持って来ればよいので、ビジネスホテル並みと言ってもよいでしょう。食事は二種類くらいのチョイスがあり、三食付きが普通です。そのほか共同設備として、洗濯機、乾燥機、各種楽器の揃った音楽室、パソコンが十余台並んでいるコンピューター室（大学のコンピューター・センターの大型コンピューターに接続していて、インターネットへのアクセスも可能です）、ビリヤード室、図書室、そして各階には電子レンジやちょっとした炊事、湯沸かし設備のある小部屋、電話、その他があります。寮は学生の委員が大学の教職員である舎監と協力して運営するようになっています。門限などはありません。

日本の大学寮と違っている点の一つは、大学の休暇中寮生は

寮を出なければならず、その間寮は学会などの参加者の宿泊設備として提供されることです。これはたいへんよい方法で、学会参加者は大学の会場に近いところで、ビジネスホテルに近い設備施設を利用することができ、比較的安い宿泊費で済み、同時に寮はその利益を学生に戻すことができるわけです。休暇中に寮から出た学生はどこへ行くかというと、こちらの学生は自分の稼いだお金で大学に来る人が多いので、長期休暇中には農場などに住込みで稼ぎに行っているわけです。もちろん郷里に帰る人もいます。また郷里に帰れない外国人学生などは、その間大学の世話する別の宿舎に入って自炊生活をしています。

このように寮は三食洗濯付きで便利ですが、なにしろ数百人の共同生活なので、新入生が新しい環境に慣れるまで一―二年の間入っていて、それからは寮を出て友人・知人と一軒家（フラット）を借りて気ままな共同生活をするというのが多いようです。その方が経済的にも節約になるといいます。各人が一室を持ち、そのほかに共通の居間や台所、トイレ、シャワーがあって、炊事は交替でするのが普通です。フラットに入りたい人は大学の掲示板などで、一緒に暮らす人を求むという広告を見て探しますが、また大学には職員学生の宿泊の世話をする専門の職員であるアコモデーション・オフィッサーがおり、寮・下宿・借家などの斡旋をしてくれます。

ところで今から二五年前の一九七〇年に学生のこのような宿泊施設関係に大変化が起きました。それは寮を出て下宿生活をしていた学生が、フラットで共同生活をするに当たって、男女で混住を始めたのを知った大学のアコモデーション・オフィッサーがそれを禁止しようとして、学生下宿を戸別訪問したことから始まりました。学生は誰がどう住もうとそれは個人の自由であると主張して座り込みストライキを行い、結局このような混住を大学に認めさせたという事件でした。

それ以来一軒借りて住む場合、男女混住の方が普通になりました。そしてその方が学生は精神的にも安定し、社会生活によりよく適応できることが分かってから、大学寮も男女混住になりました。それもフロアを変えて住むなどというものではなく、部屋が隣同志だったりする完全なミックスになり、トイレやシャワーも共同になったのです。私が用事で寮にいる学生の部屋を尋ねたとき、ちょうど同じ階のシャワーから出てきた女子学生がからだにタオルを巻いただけで出てきたのにぶつかってびっくりしたことがあります。

ユニバーシティ・カレッジのこのような変化によって、他の宗教団体経営の寮も全部男女混住になりました。そうしなければ、学生の入居希望者がなくなってしまうからです。

実は私の息子たちも大学に入ったとき家を出て、男女四人づつ八人で一軒借りて下宿してしまい、皆で交替で炊事や洗濯をしていました。息子によれば、一緒に住んでいた女子学生の方が、男子学生より炊事などは下手で、彼女らの炊事はあまり評判がよくなかったそうです。

こういう男女混住というと、日本ではすぐ「事故が起きるのではないか」などと考えるようですが、一軒に一緒に住んでいるからといって、それがそのまま、男女交際の問題になることはすくないようです。

その点で、日本から来ている留学生はわりと問題を起こしやすいと聞いています。結局日本人は一人前の大人としての異性間交際に不慣れで、友人関係と男女関係を取り違える場合があるのではないかと考えられます。

ニュージーランドでももちろん結婚は一生の大事には違いありませんが、それだけに慎重で、一緒に暮らして多数の異性の表裏をよく見ることは伴侶を選ぶ目を育てることにつながるのであろうと想像されます。離婚は日本より多く、自由であるとはいえ、軽々しく結婚し離婚することは本人にとっていろいろな点で不利であることには違いありません。また日本と異なり、見合い結婚という制度はないし、誰かが相手を世話してくれるということもまずありません。したがって選択に失敗してもそれは本人の責任で誰を恨むこともできない訳です。

私はこちらに来る前に日本の研究所にかなり長い間勤めていましたが、同じ職場の未婚の若い女性に「まだお嫁に行かないの」とか「早くいかないと…」などと、いろいろな人がからかうのを聞いたことを思い出します。こちらではこのようなことを女性に言うのはたとえ冗談としても絶対禁句であるし、何のユーモアとしても受けとられないでしょう。最近の言葉で言えばそんなことを言うことはセクシャル・ハラスメントととられてしまいます。男女とも結婚しようがしまいが、それは個人の問題で、成人に対して他人がとやかく言うべき問題ではないからです。

昔からある寮では、上級生が新入生を夜中に襲ってベッドからひきずりだし、水風呂に突っ込むとか、夜中に屋上に上がって一斉に狼のような叫びを挙げるとか、昔の恵迪寮のようなこともあったようです。また昔はアメリカの一九六〇年代の真似で、パンティ・レイドといって男子寮生が女子寮に押し掛けて女子の下着を盗み、それを女子寮の屋根の上に広げるなどということもあったようです。最近では女子学生が同じ寮に入るようになってそういうことはなくなったようです。

オーストラリア国立大学の寮に二十余年前に泊まったことがありますが、ここはその頃から現在のニュージーランドとほとんど同じでした。私の泊まった部屋の隣はイタリア人の女子学生で、夕食後に数人の寮生と一緒に彼女の部屋に招ばれて一杯御馳走になったことがあります。その頃オーストラリアの寮がニュージーランドの寮と違っていたのは寮の中にバーがあって夕食の前後には学生たちが集まってビールを飲みながら談笑していたことでした。ちなみにニュージーランドでも昼食のときに学内でビールやワインを飲むことは差支えなく、お酒の好きな先生は午後の講義の前に一杯飲んでから出かける人もいますし、学会などの集会で聴衆がお酒を飲みながら講演を聞いたり

議論することもあります。シンポジウムという言葉の起源はお酒を飲みながら議論するという意味だと聞いたことがあります。学生食堂にもバーがあります。

余談はさておき、男女混住の寮への転換に際しては、一九六〇年代に広く使われるようになったピルの影響を無視することはできないでしょう。女子学生は大学の診療所へ行けば、ピルを自由に入手できます。また一九八〇年代にエイズが問題になってからは、学内の売店などでもコンドームを売るようになりました。学生の作る新入生への学内案内パンフレットにも「性欲について」という1冊のガイドブックが加わりました。日本ではボーイフレンド、ガールフレンドといった場合、単なる異性の友人という意味にとられることが多いようですが、こちらではただの友人はフレンドであり、ボーイフレンド、ガールフレンドといったときは、特定の異性で、多くの場合同棲している異性を指しています。

しかし、だからといってニュージーランドの若者が不特定多数の異性と関係するというのは違います。彼等は自分のボーイフレンド、ガールフレンドについておおっぴらで、周囲もそれを認めています。ただ、寮生活とこのような関係はやはり両立し難く、このような関係になったカップルは寮を出て自分たちでフラットするようです。

ニュージーランドの一般社会はわりあい保守的で、変化は大きくありませんし、キリスト教的道徳価値観の影響は今も非常に強く感じられます。しかし以上のように、十年、二〇年というスケールで見ると、若者の文化には著しい変化が起きており、その変化は儒教的道徳の支配する日本よりもいっそうラディカルなのかもしれません。大学の学生寮はその変化の先端を担っているようです。

南半球でオーロラを見た

北半球の高緯度地方の夜空を彩るオーロラの神秘な光は人々をひきつけて止まない。アラスカでオーロラを見ることを目的にした日本からのツーアなども商業的に引き合うほどの申し込みがあるようである。しかし、オーロラは本来東京でも見える可能性があり、実際に見えたらしい記録が志賀直哉の日記にあることはあまり知られていない。

一方南半球では南極のオーロラがよく知られているが、越冬隊で参加するのでなければ夏は日が沈まないので明るすぎて、夏隊として行ってもなかなか目撃するチャンスはないようである。

私の住んでいるニュージーランドのダニディン市は南緯45度半で緯度としては稚内程度に過ぎないが、今までに幸い何度かオーロラを見ることができた。とはいってもオーロラがまれな現象であることには違いがなく、出た次の日の新聞に昨夜オーロラが出たという記事が載っているのを見て、「残念、見損な

った」と思うことも多い。私は当地の友人知人の間でオーロラが出ていることに気が付いたら、それが例え真夜中であってもお互いに知らせ合うよう約束している。しかし、このネットワークが成功したことは今までに一度しかない。それも偶然ながらこの約束をしたその夜にオーロラが出て大成功しただけである。

冬の当地は日没が四時半頃、日の出が八時半なので夜が長く、オーロラの観測には向いている筈なのだが、冬は一般に天気が悪いし、寒くて戸外観測には向いていない。夏は逆に暗くなるのが十時過ぎ、明るくなるのが三時半頃なので、よほど明るいオーロラでないと例え出現しても夜の早い時間には見えないわけである。そのオーロラの写真をお見せしたいが、カラーでないとつまらないし、いずれにせよアラスカのものほど鮮やかではないので、想像で我慢していただかねばならないのは残念である。

私の見たものはカーテン状ではなく光の柱のような形であった。しかし色は赤や緑のほか白いこともあり、色も形もしばしば急激に変化した。地上の光の、雲などへの反射とは考えられないほどに急激に変化することで、オーロラと思って車をとばして町の光の弱いところへ駆け付けて、この夜空の神秘を満喫したものである。

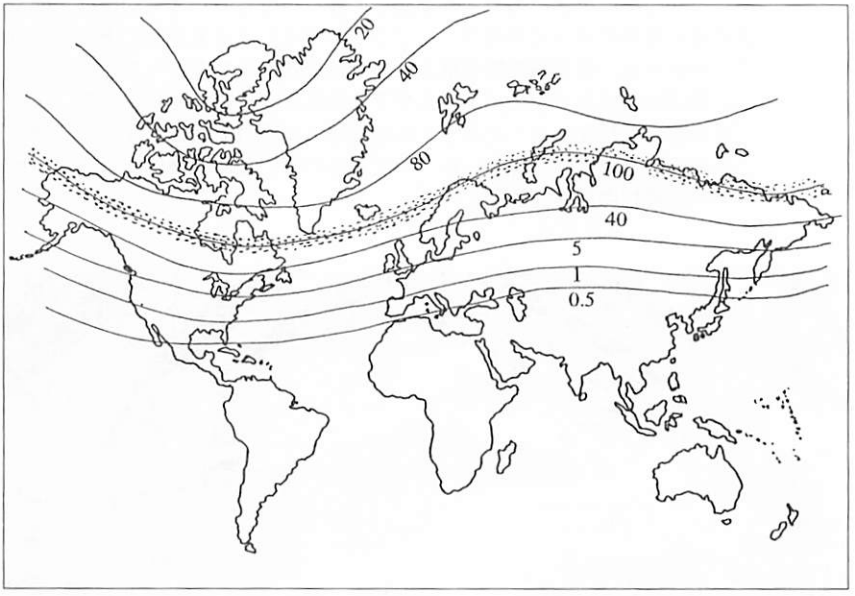
アラスカや南極でよく見られることは知られているが、このようにオーロラの見えるのは極に近い高緯度地域に限られるわけではない。空電現象の研究で有名なオタゴ大学物理教室のダウデン教授によれば、シドニー（南緯33度半でほぼ高知に相当する）で、しかも真っ昼間に見えたことがあるそうである。ただダウデン教授がオーロラだと言って指し示しても信じない人が多かったという。

オーロラがどこで見えるかという地図（第1図）を見ると、アラスカの最北端バーロー（Barrow）、カナダのイエローナイフ（YellowKnife）やグースベイ（Goose Bay カナダの東端）、ノルウエーの北端に近いトロムソ（Tromso ナルビクの北一六〇㎞）、ロシアのノルドビク（Nordvik）などでは秋から春にかけて毎晩のように見られることがわかる（夏は白夜のためよく見えない）。

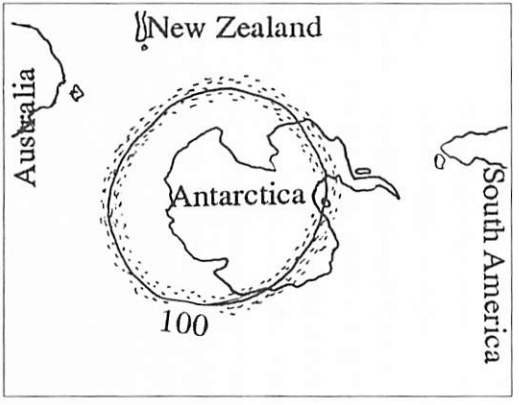
日本では北海道の北の端で〇・五％くらいの確率、すなわち空が晴れていれば、年に一度か二度は見えるかもしれないということになる。東京だと約三十年に一回くらいで見える筈である。

日本書紀にある神武天皇と長髄彦の戦いに際して天皇の弓の先に止まった金の鵄（とび）というのはオーロラだったという説があるそうである。金の鵄が光り輝いてそのさまが雷光のようだったため、長髄彦の軍勢は幻惑されて力戦できなかったと記されている。また、今昔物語にもオーロラと思われる記録があるそうである。中国では淮南子（えなんじ、西暦紀元前一二〇年頃前漢で編集された逸話集）にも記録があるという。

第１図　オーロラの見え方を示す図。空が晴れている夜に見える確率を数字で示す。

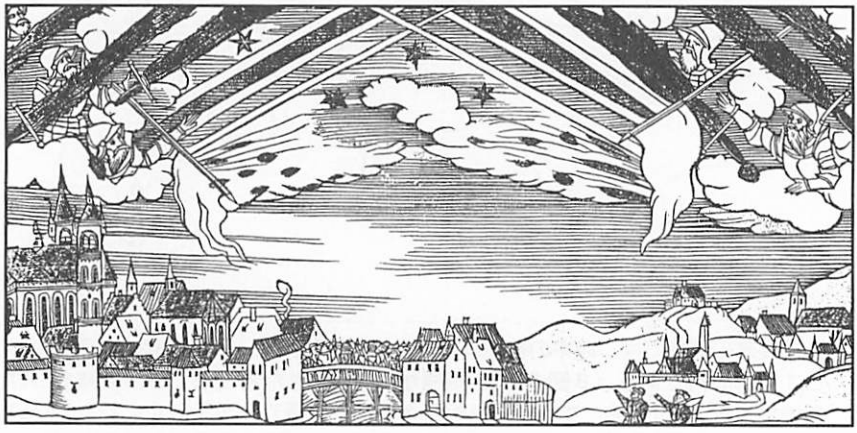


A．投影法の関係で同じ確率の線が奇妙な曲線で示されているが、実は磁極を中心とする同心円である（B図参照）。磁極から少し離れたところでは点模様をつけた地域を含めて100%、すなわち毎晩見えるが、磁極では20%、すなわち5日に1度くらいしか見られない。北極点ではそれほどひんぱんに見られないことに注意していただきたい。世界の大都市はほとんど全部が5%の線の外側にあり、そのため余計にオーロラは珍しいものになっている。



B．南極周辺でのオーロラの見える確率。昭和基地はこの図で南極大陸の下の端でオーロラが100%見える線と陸地の交わるところにあり、オーロラの観測にとって非常に適したところにあることがわかる。北極と同様、南極点ではその周辺に比べてオーロラの見える確率は低くなっている。

第2図　オーロラが何かがよくわかっていなかった中世以前や、未開人の間では、オーロラを恐れたり、いろいろな事件の前兆などと信じられることが多かった。1942年にアメリカで三晩連続して繰り広げられたオーロラは、南では北緯41度半のオハイオ州クリーブランドでまでよく見えた。あとになってこれは日本の真珠湾攻撃の前兆だったと信ずる人も多かったと言う。ここに掲げた絵はドイツのバンベルグで1560年に見られたオーロラを、天空で光かがやく鎧をまとった兵士たちが敵味方に別れて戦いをくりひろげているものであるという解釈に基づいて描かれている。原画はチューリッヒの中央図書絵画保存館所蔵。



空が暗くなってすぐに見られるオーロラは往々巻雲に似ていて、あまりオーロラらしくない。しかし夜がふけるに従って光鮮やかになることが多いので、そういう前兆が見えたら大いに期待してよいようである。色がもっとも鮮やかになるのは真夜中ころであると言われている。またオーロラは連続して出ることが多いので、ある晩に見えたらその翌日も見える率が高い。また明瞭なオーロラは二七日周期を持っているから、カレンダーに印をつけておくとよい。季節的には春分や秋分の前後によく現れる。この頃現れるものは中緯度地方まで広がることがあるので、本州でも注意する価値があるだろう（東京や札幌のような大都会では夜が明るすぎて、せっかく出ても見えないと思われるが）。ダニディンでの経験によれば、オーロラの出る夜はテレビの画面が変に乱れたりするので、戸外に出て空を見上げてみつけるということもあった（ダニディンは人口僅か一〇万ほどの大学町なので夜空が暗く、この点で日本の都会に比べて圧倒的に有利である。）さらにオーロラは太陽黒点の周期に関係して一一年周期でよく出現する。次にオーロラがよく見られるのは七年先の二〇〇二年である。残念ながら現在は太陽活動の最も弱まった、オーロラの見えにくい時期に当たっ

ているわけである。

アメリカではコロラド州ボールダーにある海洋大気圏局（NOAA）の宇宙環境センターがその直前三時間の地磁気変動に基づいて一日四回、電話、モデム、短波放送などでオーロラ予報を出している。地磁気変動が激しいほどきれいなオーロラが見られるわけである。ただし地磁気変動の予測は大変困難なので、予報が必ずあたるわけではない。

北半球のオーロラは英語ではNorthern lights、南半球のものはSouthern lightsである。ラテン語ではそれぞれAurora borealis, Aurora australisと言われる。南極探検家としてよく知られているアーネスト・シャックルトンは一九〇七年から一九〇九年にかけての探検記の標題として「オーロラ・オーストラリス」を選んでいる。

オーロラが何故現れるかなどについては専門的になりすぎるのでここでは省略させていただくが、興味のある方はアラスカ大学の赤祖父俊一教授による中公自然選書「オーロラ―地球をとりまく放電現象」でも参考にされるとよいだろう。

（この小文を書くに当たって、オタゴ大学物理学科のダウデン教授、日本語学科の郭南燕博士に教示を受けた。記して感謝の意を表する。）

（ニュージーランド・ダニディン在住）

カンボジァ国・三題

大島　久
（昭和二十四年入寮）

昭和二十八年、工学部土木を出て、北海道開発局から本州四国連絡橋公団の第一建設局長と役人・公団生活を送り、五十九年から日本工営株式会社という建設コンサルタントに勤めています。

昨年、カンボジァ国の「メコン河架橋計画調査」を国際協力

事業団（ＪＩＣＡ）から受注し、調査団長として四回現地に行きました。

カンボジァ国の知られていない一面などをご紹介します。

メコン河と夢の架け橋

メコン河は、中国のチベットからミャンマー・タイ・ラオス・カンボジァおよびベトナムを経由して南シナ海へ注ぐ、全長四二〇〇㎞の大河です。

架橋地点は、河口から四一〇㎞上流です。標高は一五ｍしかありません。乾季の川幅は六〇〇ｍもあります。乾季と雨季の水位差が一四ｍあります。カンボジァ国を南北に貫流して、カンボジァ国を東西に分断し、橋は一ヶ所もありません。フェリーと渡船が連絡手段です。

架橋は、地元の人々・カンボジァ人にとっては、母なる大河を渡る、「夢の架け橋」であり、我々調査団は色々な階層の人々に関心を持たれ、マスコミの取材に追われています。

アンコール・ワットとシャム嫌い

アンコール・ワットは、八世紀から一二世紀頃にかけて、クメール人により建造された芸術性の高い寺院の遺跡ですが、周辺には一〇〇万人が居住していたと言われる巨大な都市遺跡があり、沢山の仏教遺跡もあります。

クメール人が、広大で荘厳・栄華を誇った都市を捨て、三五〇㎞離れた現在の首都プノンペン市に遷都した理由は、シャム族の侵略・戦争に負けたためです。シャム族はタイ人が主流で、東南アジアを広範囲に征服した一三世紀頃の部族です。

メコン河の架橋調査のため、我々調査団が契約したタイ国の地質調査会社（カンボジァ国には信頼できる地質調査会社がありません）のタイ人が架橋地点でボーリングしようとしたら、地元の住民がビケをはり、タイ人作業員の立ち入りが拒否され、ボーリングが出来ませんでした。一三世紀頃からのシャム族に対するクメール人の恨み・タイ人嫌いが、理由です。

カンボジァ人はベトナム人も嫌いで、ラオス人には好意を持っていると言われます。

結婚披露宴など

カンボジァ人の大半はクメール人であり、公用語は、クメール語であり、クメール字を使用します。第二次世界大戦前は、フランスの植民地であり、フランス語が公用語でした。戦後の独立戦争後、沢山の人々がソ連と中国に留学したようです。今は英語の勉強が盛んです。

我々調査団が接触する政府の役人は、何人か英語を話します。我々調査団は通訳を雇いました。調査団員は英語を使い、通

訳は英語をクメール語に訳します。

その通訳（二七歳の男性・中国系）が結婚することになり、結婚披露宴に招待されました。

平日の吉日、午前十一時から午後二時まで。チャイナ・レストランでした。

レストランの入り口で、新郎・新婦、両親・兄弟・親戚が出迎えます。

レストランの中では、到着順にテーブルに案内され、丸テーブルが十人で満席になると、飲み物・御馳走が運ばれ、テーブルに着席している人々が食事をします。着席している人々の間では、殆ど、会話がありません。フルコースの食事が終わると、テーブルに着席していた人々が一斉に立ち上がって帰ります。レストランにいた時間は、一時間少々でした。

レストランの入り口では、新郎・新婦、両親・兄弟・親戚が立ちっぱなしで、お客を見送り、また、新しいお客を出迎えます。

お客が帰ったテーブルは、すぐ片付けられ、新しいテーブルクロスが掛けられて、つぎのお客の用意がされます。

この日のお客の数は、四五〇人だったといわれました。

ある日、日本人会主催の忘年会がありました。カンボジァには、家族を含めて六〇〇人ほどの日本人がいて、忘年会には二〇〇人以上参加しました。

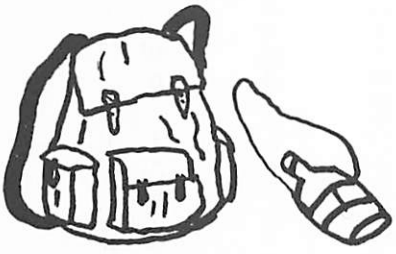
北大出身で、ボランティアで農村開発に活躍している方々もおります。

カンボジァ国が、日本国との国交を再開して六年目です。

フランスの植民地時代、日本軍の侵略、フランスとの独立戦争、米軍の爆撃、ポルポト政権時代の大虐殺、ベトナム軍の侵略・占領、そして、今でもポルポト派との内戦が地方で続いていますが、日本自衛隊のPKO派遣・国連など世界各国の支援によって、やっと、平和が戻り、戦乱による破壊からの復興に手を付けたというのが現状です。

これから、平和の中で発展することでしょう。

我々が関係しているメコン河架橋計画が、カンボジァ国の発展に大きく役立ち、また、その他の面での支援に少しでも役に立ちたいと考えています。



適塾 ——死霊の棲む所——

青山和嗣（昭和二十六年入寮）

Tさん。お指図に従って、早速、適塾へ行って来ました。長い間大阪に住んでいるので、緒方洪庵と適塾の名前くらいは知っていましたが、普段あまり大阪文化などとは無縁の生活を送っていたために、殆ど無関心、というのが正直な所です。

そもそも、大阪の文化、とか浪花の文芸などと構えていわれると、どうも反撥したくなるたちで、だいいち、ヌラヌラしたあの大阪弁が嫌い。チャラチャラした漫才も嫌い。おかみにたてつくのはいいけど、全国的に有名な、あの交通のマナーの悪さ。（赤信号。ミンナデワタレバコワクナイ）。東京のマスコミのデッチアゲ。陰謀という説もあるということですが、實際すぐに金のことをいうサラリーマンや学生。（ソレ、ナボヤネン？）デパートですら値切ってでも買おうという若い女のクソ度胸。とかくその猥雑さは、東京側の（エエカッコウシィー）の誇張はあるにしても目立つことです。

嫌い嫌いでよくも三十数年住み続けたものだと自分でも感心する程ですが、それがTさんのおかげで、こんな大阪にも、これ程の感動を受ける文化の結晶があったのか、と絶句する程の経験をすることができました。

以下、見て来たばかり印象ですので乱雑でセンチメンタルですが、報告します。

〈適塾〉のある北浜三丁目。というと東京でいえば兜町。証券取引所と目と鼻の繁華街です。近くに中之島公会堂などがあり、読んで字の如く中之島とは、パリでいえばシテ島。ニューヨークのマンハッタンのように大川の中にある島で、大阪では唯一の息抜きの場といっていいでしょう。

その大川から一本道をへだてた裏通りに適塾はあるのですが、百数十年前のこのあたりは高麗橋筋・今橋筋に近く、かの有名な金持ちの代表・鴻池善右ェ門・三井の家や米穀を扱う大きな問屋がずらりと軒を並べていた所です。

天保八年（一八三七）二月。東町与力であった大塩平八郎は、突如弟子達と反乱を起こし大阪の北東にある役宅から打って出て、市のほぼ中央部に至る十五乃至二十の道を、鉄砲を撃ち、

あちこち放火をしながら通過して行きました。

「無通の役人を誅し、金持ちの町人を懲らす」というスローガンの下に、鉄砲・ヤリで武装し、大砲の車をゴロゴロと引きづって行った、そのマルクスも民衆もへったくれもない無暴な一日革命の標的を、適塾の建物は、わづかにかすめています。

森鴎外によれば、この一日革命で三千三百軒が焼けたそうです。更にその直情径行ともいうべき反逆の理論づけには、さすがの鴎外もサジを投げたとみえて、正しいとも間違っているとも、何ら論評を行っておりません。

その大塩平八郎の乱のわづか七年後に、緒方洪庵は適塾をひらいています。（一八四四）

七年。といえば反乱の記憶も生々しいものがあるでしょうが、この適塾は、開設以後二十年の間に六百人以上の弟子を養成し松下村塾の吉田松陰と並んで明治の歴史の重要人物を輩出しているので、その名は有名になったのだと思います。ついでにいえば反逆者大塩平八郎もまた、長柄町の私宅に塾を構えていますし、麻酔薬の研究で有名な華岡青洲の一派も、同様だったとのことです。

適塾の建物が鴻池善右ェ門の家に近い、といっても、それは近いというだけの話で、勿論平八郎の標的になるような大邸宅ではありませんから放火はまぬがれたようです。建物は間口六間。建坪九十坪。二階建てで、当時からいえば、極く極く平凡な商家の造りだったに違いありません。表玄関から入った様子などは、僕の田舎の本家である百姓家とそんなに変わらないくらいの広さです。恵迪寮の同窓のN君の家などは、茨城の中位の地主ですがこの適塾の二倍の広さはあるでしょう。

一階は畳の間が四、五室。その保管のよさは、まるで家全体が「生きている」とでもいえばいいのか、客間に座って猫の額ほどの庭を眺めていると、今にも猪首の洪庵先生が、煙草盆をぶらさげて出て来そうな錯覚を起こす程です。

京都へ行かれた方はよくお判りかと思いますが、観光ズレしたお寺などでは、千年も昔の仏様がコンクリートの宝蔵におさまっていたりします。決して音を出すことのない古楽器。お茶の入らない茶器。何年か前に僕は萩の松下村塾を見たことがあって、これはまた適塾に比べても格段に貧相で、たった二間の平屋建てで、よくもこんな所で、と感じ入ったことがありますが、しかし人の出入りを禁じたこの建物は、残酷ないい方ですが建物のミイラでした。

適塾は決してそんなことはありません。洪庵先生が、奥さんの八重さんが、目の前にいて、読書をしたり、縫物をしていたり。塾頭の福沢諭吉がドタドタと階段を降りて来ても決しておかしくない程「生きて」いるのです。それは人間の湿り気であり、気配であり、思いきっていえば、洪庵や福沢や橋本左内や村田蔵六の死霊の世界といえるような気さえして来ます。人の気配を残すような保存とは、例えていえば、亡くなってしまった親しい人が、いつ生き返って帰って来てもいいように、仏壇

に陰膳を供えるような気持ちなのでしょうか。黄泉の国から帰って来れば、庭に雑草が生えていれば気持ちが悪いだろうし、障子の桟にほこりが溜まっていれば心持ちが悪いだろうし、そういう心根がなければこれ程に徹底した保存は出来る筈がありません。

客間で、いいかげん洪庵先生の死霊に酔ったような気持ちになって、ギシギシときしむ急な階段を十二段ふんで、二階にあがって、僕は息をのみました。

それは若者の死霊の集団でした。

そいつらは、この世に想いを残した自分達の愛蔵品のまわりにウヨウヨしているのです。

「病學通論」――洪庵先生がオランダ語から翻訳した医学の教科書です。

「虎狼痢治準」――コロリチジュン――　安政六年（一八五九）。といえば、ペルリが浦賀に来てから六年目になりますが、この年、長崎に入港したアメリカの軍艦「ミシシッピ号」の水兵の中にコレラが発生し、異民族が接触する際に必ずといっていい程生ずる悲劇で、アッという間に日本全国に蔓延した。この時オランダの軍医ポンペが治療法を口述したものだということです。

福沢諭吉は、安政二年（一八五五）にこの適塾に入っています。三年間ここで修業することになるのですが、あと十三年で明治維新です。ペルリが来ます（一八五三）。アメリカ大使のハリスが来ます。英国のオールコックが来る。日本は有史以来の異変で大騒ぎです。勤王か佐幕か、開国なのか攘夷なのか、アヘン戦争（一八四〇）の経過をみて、隣の清国の現状を考えれば、自ずから結論は出そうなものなのに、手品のタネのようなもので、それは多分、よほど後の世になってみなければ判らないことなのでしょう。尊王でありながら吉田松陰は、アメリカの船で密航しようとします。佐幕でありながら、水戸の殿様（斉昭）は、同時に尊王であり攘夷です。（彼はこんな和歌を残しています。よほど蘭学が憎かったのでしょうか）

蘭学者へ
蟹文字をよみかく人は
我が国の道よこざまに
踏みなたがいぞ

徳川斉昭

攘夷と開国のせめぎあいのはざまで、吉田松陰・梅田雲浜・橋本左内は殺されて死体は塩漬けにされてしまいます。とばっちりでヒュースケンが斬られ、敵討ちのように井伊直弼が刺されます。

天下がひっくりかえるような騒動の真っ只中にあるのに、福沢によれば適塾の学生は、それとは無関係に、ひたすら勉強し、塾での生活を楽しんでいます。

その福沢らの勉学のバイブルが、目の前のガラス・ケースに収まっています。

ヅーフハルマです。

「これはむかし長崎の出島に在留していたオランダのドクトル・ヅーフという人（註一）がハルマというドイツ・オランダ対訳の原書の字引（註二）を翻訳したもので、蘭学社会唯一の宝書とあがめられ、それを日本人が伝写して、緒方の塾中のもたった一部しかないから、三人も四人もヅーフのまわりに寄り合って見ていた。」（福翁自伝）

（註一）Hendrik Doeff（一七七七―一八三五）長崎出島の商館長

（註二）Fransois Halman:Woordenbock der Nederduitsche en Fransche Taalen:Dictionarie flamand et fransois

我々がむかし中学に入学した時に、まず最初に買ってもらって、はじめて英語というものに触れたのが「三省堂のコンサイス」でした。当時は、英語の辞書といえば、あのインディアンペーパーのコンサイスであったように、「緒方の塾生」には辞書といえばヅーフ・ハルマだったのです。

それは当然和紙です。A－4ほどのサイズで厚さ五センチもあろうかと思われるものが六巻。各ページは、日本語は毛筆で、オランダ語は鵞ペンで書いた細字でびっしり埋まっています。

とはいえ、所詮手書きですから、到底今の辞書ほどに細かい字ではありません。一ページがざっと三〇～五〇語。全巻で三万～五万語といった所でしょうか。

目をこらしてよく見ると、殆ど全てが、一語一語の逐語訳で、今の辞書のように、変化・イディオム・例文などといった親切な説明は何もありません。無愛想なものです。

「まず初めて塾に入門した者は何も知らぬ、何も知らぬ者にどうして教えるかというと、そのとき江戸で翻刻になっているオランダの文典が二冊ある。一をガランマチカ（grammatica－文法）といい、一をセインタキス（syntax－文章論）という。初学の者にはまずそのガランマチカを教え素読を授けるかたわら講釈もして聞かせる。これを一冊読み終えるとセインタキスをまたその通りにして教える。どうやらこうやら二冊の文典が解せるようになったところで会読をさせる。会読ということは、生徒が十人なら十人、十五人なら十五人に、会頭がひとりあって、その会読するのを聞いていて出来不出来によって白玉をつけたり黒玉をつけたりするという趣向で……」（自伝）

その勉強の仕方はというと

「この一年ばかり枕をしたことがない。というのは時はなんどきでもかまわぬ。殆ど昼夜の区別はない。日が暮れたからといって寝ようとも思わず、しきりに書を読んでいる。……これは私ひとりが別段勉強家でもなんでもない。同窓生はたいてい皆そんなものでおよそ勉強ということについては、実にこの上にしようはないというほど勉強しました。」（自伝）。凡そ世の

中の自伝というものほどあてにならぬものもありませんから、にわかに信じがたいのですが、話半分としても、世にいう蘭学とか適塾での勉学の様子が少しは判って来ます。

塾生の殆どは下級武士か、田舎の医者の子で当然貧乏書生の集まりです。貧乏には慣れていますから、洗面器で鶏の頭を煮て食った話など、どこか我々の身辺で聞いたような話がいっぱい出て来ます。近所には儒学者の塾もあり、また華岡一派の漢方医の塾もあったのでその裕福な塾生などをみて敵意をむき出しにしたりしています。

そして適塾の教育が「決して立身出世のためにあらず、純粋にして学問への憧憬以外に何ものもなく」それ故に、適塾の蘭学は日本一であった、と福沢は豪語しています。

出世してしまえば何とでもいえるのですから、やはり話半分としても、目の前にはかの「ヅーフ」がガラス箱の中に鎮座しています。紙はささくれだって、字面も所どころかすれています。紙の端には手垢で真っ黒です。鬼気せまるものがあります。

例え勉強の目的が立身出世であったとしても、金もうけでも、或いは漢学・儒学への敵意であったとしても、この学舎の中で二十才台の若者達が燃やした情熱は青白い炎となってゆれています。もし魂魄というものがこの世にあるものならば、その執念は死霊となってさまよっています。

せまい「ヅーフ部屋」の隣が三十二帖の「書生部屋」でした。大部屋には違いありませんが、たかが八帖の部屋が四つ分です。大阪の町屋ですから天井も低く、しかも天井板が張ってありません。屋根裏がむき出し野間まです。人に見せるための部屋ではありませんから、当時としては普通のことかも知れませんが、見た所屋根部屋の物置、という感じです。右手に小さな窓があるだけですから昼でも薄暗い。こんな部屋に通常三十人が起居していたというのですから、一人あたりのスペースがタタミ一枚。これが死霊たちの勉強部屋であり、教室であり、生活の場でもあったのです。

僕はこの陰惨といってもいいような部屋を見ていて、何故か突然見たこともないアウシュビッツを連想しました。

死霊のわざです。

若し僕がユダヤの子だったとしたら、そして何十年も昔、親の殺されたアウシュビッツか、ダハウか、トレブリンカを訪れて、實際に人間を焼いたカマドをのぞいたとしたら。爪あとも生々しいシャワー室に入ったとしたら。きっと髪の毛の逆立つ、肌に粟を生ずるこの同じ思いをするに違いありません。

言うまでもなく、適塾とユダヤの強制収容所とでは余りに違いがあります。しかし、片や勉学に呻き、片や何の意味もない殺戮におののく、この魂のふるえの質は同じかも知れません。

死霊がうごめきます。

部屋の真ん中に、大屋根を支える一本の柱があります。四寸角ほどの頼りなげな柱です。圧巻はこの柱に加えられた無数の刀傷でした。

北海道に住む皆さんには、絶対にわかってもらえないのが、大阪の熱帯夜です。これはとても摂氏何度という数字には表わせないものです。真夜中でもムンムンする熱さ、それに加えて、飽和に近い湿度。空気中でタオルを絞ればそのまま水がジワジワと出て来そうな、夜着もシャツも全部脱ぎすてて、自分の皮膚をはぎとりたくなるような不快。それは、サウナはまだそこから出さえすれば爽やかな空気が待っています。どこまで動いてもサウナから出られないという閉塞状態。といえばあたっているでしょうか。

そんな中での夜中の三十人です。青春の悩みもあるでしょう。逃げ場のない幕末に生きる将来への不安もあるでしょう。下級武士の子がナマクラ刀で真ん中の柱めがけて、ゴツゴツと切り刻んでいるさまは想像するだに、この世のものとも思えなくなります。

その音が階下の洪庵先生に聞こえない筈はありません。猫背で猪首五十才近い先生がキセルをくわえて上を睨んだか、それともニコニコ笑っていたか。

気がつくと、いつの間にか僕はこの頼りない、傷だらけの柱を撫でさすっておりました。あたりに人気のないのをいいことに、いつまでもいつまでも、そのくろびかりする木の肌を撫でているうちに突然、僕の胸に突きあげるものを覚え、不覚にも涙を押さえることが出来ませんでした。それは確かに、自分の余りにも不勉強だった青春への悔悟であり、日暮れてなお道の遠きを憶う慚愧のかたまりでした。

Tさん。

唐突ですが、これで報告を終わらせて頂きます。サッポロでの時計台の移転問題と関連して参考までに大阪の適塾の保管状態を調べて来るように、という御依頼で本当はもっと冷静に観察しなければならないのですが、思いがけず巨大な印象をつきつけられて、興奮してしまいました。このような機会をつくってくれたTさんに感謝します。

私見ですが、サッポロの時計台は、どんなことがあっても動かしてはなりません。あの中には今でも死霊がうごめいています。内村鑑三であり新渡戸稲造であり、宮部金吾でありクラーク達の死霊です。

時計台は移転すれば、たちまち彼ら死霊達は逃げてしまいます。そして死霊の住めない建物は、たちまち建物のミイラになってしまうからです。

ついでながら、僕は、(幸か不幸か)まだ生きております。だから僕の魂魄は生霊のままです。物質ではありませんから、質量も体積も重量もありませんが、すでになくなった恵迪寮の跡のあの石碑と雑草だけの空間を、ウロウロとさまよっております。

我ながら気味の悪い話ですが。

「瓔珞みがく」 ―インターネット―

神野善司（昭和二十六年入寮）

瓔珞みがく石狩の　源遠く訪ひくれば
原始の森は闇くして　雪解の泉玉と湧く

恵迪寮卒と自称し、今では、ホテルの経営にたずさわっている私であるが、学部は電気工学であった。卒業前年の昭和二十九年、企業実習として、石狩川水系の水力発電所に一夏を過ごした。そしてその間、私は石狩川の源流を訪ね歩いた。

もちろん山岳部でもなく、山の装備も持たない私には、源流とされている小石狩岳南沢のベテトク沢すら登れなかった。しかし、源流平という本流の分岐を越え、林道も消えた標高千五百メートルの沢で、いくつもの「瓔珞」を見た。

八月の中旬というのに沢には残雪がある。花を咲かし終えた夏の陽光が、最後の余力でするどく雪を解かす。間もなくやってくる秋の初雪の前に、急ぎ融かされた、そんな泉玉が沢を滴り落ちる。

濡れた石に映る原始の樹林は、未だ青々し、静かな、しかしむんむんした緑に覆われた沢から、源流は滴る。滴りを受けて揺ぐ石が色を帯びている。濡れた細枝や小葉にも色がある。紅であり、黄色があり、青も紫もある。緑が抜けた白い葉もある。それらが黒ずんだ小枝に掴まって、流れに耐えている。

私はそこに、瓔珞を視た。石狩源流の瓔珞は色を帯びて、自然の息吹きを伝える。季節を告げ、時の流れを知らせるなかに、自然の根元にある多彩を伝える。

平成八年の春、札幌で「故宮博物院」の宝物を観る機会があった。大事な儀式の際、皇帝と皇后が胸にする宝珠が展示されていた。百八個の連珠は、色によって四季に分けられ、十株三

連のさがり珠が、旬・日を表わしている。宇宙の時空を支配せんとする権威を、色と珠で連らねた瓔珞である。

水力発電所に実習したのに、電力会社に就職せず、私は鉄道事業に職を奉じた。そこで出会った色は、赤・黄・青の三色である。ＹＥＳとＮＯの中間に「どちらでもない。暫し待て。考えよ」がある。色との取り組みとは別に、このことは私の人生観の一つとなった。

もちろん電気工学で、エネルギーとしての電気技術とは別に、信号としてのＯＮ・ＯＦＦのデジタル技術があって、これは私にとって変らぬ興味の対象でもあった。中間があったり、多彩であったり、感覚的なアナログであってはならないのである。

今日、電気パルスによるデジタル技術が、半導体の極微の技術に支えられて、情報革命を推進している。文字や音はもちろん、映像や色彩（将来は香りや触覚までも）のあらゆる処理・伝達・蓄積を可能にしている。

その結果が、マスメディアであり、インターネットとして、今後の経済、社会、政治、教育のあらゆる部門に影響を及ぼそうとしている。

特に情報の伝達については、独占された一つのラインやチャンネルではなく、提供し合った蜘蛛の巣のようなネットワークを通じ、優先したり、乗り替えたり、譲り合ったりしながら、一対一、一対マルチ、マルチ対マルチが、同時双方向あるいは非同時随時におこなわれる。

この開かれたインターネットは、個人であれ、企業であれ、平等であって、国境や組織を超えて直接的である。ネガティブな面や、問題点を克服しながら、世界百九十ヵ国の人類がぶらさがる。壮大なインターネットが、出来上りつつある。

私は、このインターネットに「瓔珞」を見る。十人十色、百ヵ国百色。多種多彩な人類が、相互共用で繋がる、この地球規模の情報ネットが、現代の瓔珞であると考える。

浜茄子紅き磯辺にも　鈴蘭薫る谷間にも
愛奴の姿薄れゆく　蝦夷の昔を懐うかな

鉄道から転身して、札幌のホテル経営に携わるようになったのは、「はまなす国体」開催の平成元年の年であった。今の天皇皇后両陛下が即位されて、初の行事が北海道国体であり、ご宿泊が、私のホテルであった。

国体の行われる秋は、浜茄子は実になっている。石狩浜の砂地に低く這う浜茄子の、濃い緑の葉陰を、堅い朱色の実が色どる。寒気を増してきている浜風に耐えて、冬を迎える硬さをもった浜茄子である。

春の浜茄子の花。軟かい緑の葉の上に咲く、可憐ななかにも、春の未だ冷たさの残る浜風に耐えて花弁を振るわせる、そんな「はまなす」をご覧にいれたい。

そこで、フレームによる低温培養をおこなった。花木野菜を

季節より早く育てる温室栽培とは逆に、冷気を保つことで浜茄子の開花結実を遅らせる訳である。鉢植の開花した浜茄子をお部屋やロビーに置いて、結実した鉢と共に「花も実もあるはまなす国体」として供覧したのである。自然の理に反して、専門家のひんしゅくをかうことかもしれないが、両陛下は興味を示された。後に皇太子殿下が結婚され、雅子妃殿下のご紋花に「はまなす」が採用された。必ずしもこのことがあって決められた訳ではないが、私にとっては感慨深いものがある。

植物に限らず、生物の遺伝子レベルでの研究が進んでいる。しかしバイオとまでいわなくても、環境を変えてコントロールすることはいとも易いことである。

トマトの水耕培養で、その成長を阻害するあらゆる条件を取り除き、制限ない環境を維持し続けると、一粒の種が巨大な樹に成長し、四十平方メートルにも拡がった枝葉に一万個以上のトマトが実ったという実験がある。

またバクテリアが、その分裂増殖を抑える一切の制約から解き放され、増大に適した環境が保たれるならば、一年たらずして、地球はそのバクテリアで覆いつくされてしまうという計算もある。

生物は、地球の上で単独で、勝手に生き続けることはできない。すべてが、生かされている。人類についても然りである。人間が、「地球に優しく」なんて言うのはおこがましい。人間といえども地球の一部であり、地球に生かされているのである。自然環境を変えてゆく人間は、地球の癌かもしれない。その癌とも言える人類が、この地球の中で生かしてもらう。そういう壮大な実験を、人類は、苦しみながらやっているとも言えるのである。

季節感を失うのも、地球の息吹きに逆らうことで、いかがかとは思うが、何月生まれの子供でも、苺のケーキでバースディを祝ってもらえたり、花も実もある国体くらいは、許されて然るべきであろう。

今円山の桜花　　歴史は旧りて四十年
吾が学び家の先人が　建てし功はいや栄ゆ

札幌の西郊に、標高二百五十メートルの「円山」がある。徒歩でしか登れないこの山一帯が「天然記念物・円山原始林」であって、大正十年に指定された。

今でも、狐が徘徊し、蝦夷栗鼠、縞栗鼠が駆け廻り、野鳥、山草の宝庫である。四十種を超える樹木は、倒木となってもそのまま放置され、茸が繁茂する。周辺が宅地化した都市の、至近の自然林としては、世界でも希有のものである。

私はほとんど毎朝、年間三百日位はこの山に登っている。山頂で見る札幌市街は、年々拡がり、建物も高くなっているが、たたずまいや、息吹きは昔と変らない。

山頂に、高さ二メートルほどの石碑が建立されている。「山

神」と刻まれ、磐側に明治五年十二月と刻まれている。

明治五年（一八七二年）、北海道開拓使がここに立って俯瞰し、構想した。開拓顧問であるケプロンとその幕僚は、札幌周辺の地質や岩石、森林を調査して、円山の建築石材、豊平川の砂利、平地の森林木材に眼を付けて進言した。そして開拓使は、本府を札幌に置くことに決めた。

山頂からの採石は、三層楼の洋風建築物として当時、目をみはらせた開拓使本庁舎の土台石をはじめ、主な建造物の土台に使われたが、ここからの採石は一年余で終った。

このとき建立された「山神」は、大山祇神で、娘が木花開耶姫だから、神武天皇の曽祖父ということになる。人類太古より、山林と共に生きた、信仰の象徴である。

そのまま土中に埋没していた石碑が、昭和二十一年に須藤与八氏に発見され、三十一年に、現在の基盤で再建立されたのである。

明治五年の十二月三日は、日本の暦が陰暦から陽暦に替わり、明治六年一月一日となって、西洋化の第一歩を踏み出した日である。そして七曜が採用され、時計が導入された。農耕ばかりでなく、職人も商人も役人も、日の出と日の入りを前程に働いていたのが、時計で生活するようになったのだ。

七曜の方はなかなか定着せず、旧暦六輝の方が馴染んでおり、仏滅の安息日、祝い事の大安が普通であった。仏滅は本来、七曜でいう日曜日に相当するものだが、昭和に入って忌み嫌う日にされたのは、語感からくるものだと思われる。

ともあれその四年後、明治九年に、バチュラ称号を与えられる最初の学校として開基した北大が、今年百二十年を迎える。山頂の碑を拝しながら、感慨深い想いをしている。

一世紀の四分の一で、北海道が六百万人近い人口を擁し、日本で五番目の都市、札幌を創り上げてきたのは、世界の国造り、都市造りのなかでも例をみないことである。が、問題はこれからである。

インターネット文明が、地球の日の出、日の入りをなくし、国境をなくし、既存のシステムを破り、タテの構造からヨコの構造に変わり、個々の色合いを持った人間が直接に、平等につながってゆく。

現代の「瓔珞」を北海道、ひいては北海道大学の源流に尋ねなくてはならない。



延齢草 —北工九期会 卒業六〇周年記念品について—

徳尾政治（昭和五年入寮）

北大工学部を昭和十一年（第九期）に卒業した者達が結成した北工九期会では毎年総会を含む旅行を行ない、五年毎に北大を訪問している。記念品としては、四五周年のループタイ（大雪山とタンネ）、五〇周年のループタイ（番いの鶴）とペンダント（鶴）があり何れも北海道を象徴したものであった。

六〇周年を迎えるに当たり、明治四十五年の寮歌「都ぞ弥生」に歌い込まれ、昭和七年に北大予科恵迪寮の徽章になった「延齢草」をテーマとする事に思い至たった。

「都ぞ弥生」の四番「牧場の若草　陽炎燃えて　森には桂の新緑萌し　雲ゆく雲雀に　延齢草の　真白の花影　さゆらぎて立つ　云々」に歌い込まれているように、北海道の原野にエゾエンゴサクの青紫色の花莚が畳まれる頃、オオバナノエンレイソウの白い花の競宴が始まる。

エンレイソウ（ユリ科）の中間にはエンレイソウ、ミヤマエンレイソウ（シロバナエンレイソウ）、オオバナエンレイソウの三種がある。「此等の種間雑種であるヒダカエンレイソウ、トカチエンレイソウ、シラオイエンレイソウそれにエンレイソウの変種で紫色の内花破片が発達したコジマエンレイソウがある」オオバナノエンレイソウは本州では宮城県北部を南限とし、北海道では至る所の原野や広樹林地帯に育成している。

エンレイソウの名称

漢字ではこれを「延齢草」と書く。その由来については「牧野新日本植物図鑑」には、意味不明とあり、「大言海」には「薬としての基の効能に拠る名か」とだけ説明している。試みに「本草綱目啓蒙」を見ると「王孫又一種延年草と呼ぶ者あり、又一名ヤクトウシ、タチアオイ、クルメキナ、ミツバイチゴ、ミツバアオイ、ミツバニンジン、エンレイソウエレソウ（花戸）、エレグサ（阿川）、その実生は緑色、熟さば黒色、根は我朮（ガジュツ）根の形に似て白色味苦し、和州の村民乾かして傷食の薬とす」。訛ってエレソウと呼ぶこの根茎を乾かしたものを延齢草根と称して、民間でこれを煎じて胃腸薬や催吐剤に使う高々腹痛の薬程度で、とても「齢を延ばす」程度の効果は期待出

来そうもない。

又エンレイソウの名は「本草綱目啓蒙」の他、「本草図譜」、「草木図説」、などにも見えるが江戸中期以降の本草書にはこれについての記述はない。こうして見ると、延齢草の命名は比較的に新しいものと考えなければならない。

筆者はエンレイソウが取りわけ北海道と縁が深いところから、先ずアイヌとの係わり合いに注目した。

良く知られているようにエンレイソウの仲間は、実が熟すると紫黒色になり甘酸っぱい汁が多く含まれるので、アイヌはこれをヤマソバと称して、その実を好んで食べる。ヤマソバは、実に稜が入り、そばの実に似ているのでその名があるという。

更科源蔵の「コタン生物記」を見ると、筆者の少年時代に、アイヌの古老から、実が丸くて角がなく、すべすべした方をマツネヤマウリ（雌のエンレイソウ）と言い、実に角があってごつごつした方をピンネエマウリ（雌のエンレイソウ）と教わる下りがある。

知里真志保「分類アイヌ語辞典（植物編）」によるとアイヌ語でオオバナノエンレイソウを Pinne-emauri（男であるエマウリ）、エンレイソウを Maune-emauri（女であるエンレイソウ）と云うとある。emauri はエンレイソウ全般を示すアイヌ語であるが、更に広くエゾイチゴやナワシロイチゴなどの漿果をも emauri と呼ぶと云うことである。筆者によると、アイヌ語のエマウリがエンレイソウの語源の様に思われると云うことである。

すなわち、アイヌから口移しにエンレイソウの名として内地人が教わったエマウリの語が、エマウリーエムリーエムレーエンレイと転化し、エンレインに縁起のよい「延齢草」の名で呼ばれるようになったのではないだろうか。

因みに、江戸初期に医師直瀬玄朔の創製に係わり、当時庶民の人気を博した健康常備薬に延齢丹なるものがあった。こうした名前の存在が延齢草の命名に何程か影響しているかも知れない。また、別名の延命草、養老草も延年、延命、養老の語がそれぞれ延齢と同義語である為の派生であろう。

このような経緯で生じたと思われる延齢草の名は日本独自のもので、漢名でないにも拘わらず、一九七六年刊の「中国高等植物図鑑」にシロバナエンレイソウの正名としてこれを挙げている。元々、日本で生まれた延齢草の語が最近になって中国で認知された。

元来齢を延ばす意味の語は中国で始まったもので、菊の異名にも延齢客と云うのがある。

〈出典…原色牧野植物大図鑑－高山植物－〉

又この植物は染色体の数が少なく、かつ大きいことから、形態学、細胞学、遺伝学などの実験研究材料として良く用いられている。

更に、この花は五月二十一日の誕生花に選ばれていて、その花言葉は、熱心、モダンな美となっている。

延齢草を恵迪寮の寮生章と決定

昭和四年度第八八委員会は同年七月に「延齢草」を恵迪寮の寮生章と決定した。

今期委員会は寮生章の制定を志し、之が図案を全寮生より募集して、今日我らが襟に付する如き「延齢草」を得た。

その趣旨とするところは寮生相互の親睦と団結を計り、恵迪寮ガイストをもって、寮政刷新、寮風促進の実を挙げ、もって学内の範たらんとするにある。

苟も恵迪寮生たるを誇りとする者は、深くこれを愛して瞬時も離すべきでない。

〈出典…恵迪寮史　昭和八年一一月二一日発行
編集者　恵迪寮史編纂委員会
発行者　北海道帝国大学恵迪寮〉

以上の経緯から我々北工九期会の卒業六〇周年記念品のモチーフを「延齢草」と定め、ループタイとペンダントの製造を鋳金家に依頼した。

（北工九期会代表幹事　徳尾政治
会計幹事　坪井貴志男）

俳句

青木秀夫
（昭和二十八年入寮）

スキー履き大地を駈ける余生あり
宿坊に朝の勤行冴え返る
啓蟄や大志抱きし昔あり
菜園の日差しに蝶の生まれけり
祀りある幣のあたらし登山口
磐を来て滝壺の温泉に浸りたる
ふるさとへ逸る車窓を隠す海霧
夜明けかと紛ふ良夜でありにけり
日当たりて命繋げる虫の声
青春の寮舎を今に枯木立

始めよければすべて良し

中岡章（昭和十年入寮）

「終りよければすべて良し」はさる文豪の戯曲名であったと思うが、その反対も亦真であると思う。社会に出る前、平和なる山村、暖かい家庭、まだ自然のまゝであった山や川、そして其処を共に駈けまわった友達、それらの思出が、後年、社会に出て、いろいろと揉まれ、苦しんでいる時、どれほど強い力を与えてくれたことか、同意される方は少なくないのではないか。「恵迪」の歴史的発刊の機に、私の恵まれた青春時代の一齣を聞いていただきたい。

恵迪寮南寮六号室

同室は三年生が農類の山口甚三郎氏、二年生が農類の小峰康正氏、工静男氏、そして新人が工類の私であった。青函連絡船、道内鉄道沿線の風景、遥けくも来つるものかなの思い一杯であった。札幌駅に降りた時の馬ふん風の疾風、宿の縁側の吸いつけられるような冷たさにすっかり縮みあがって、同宿の寺田林平君（故人）と一緒に故郷に帰る話まで始めた。

それが何かにつけてゆったりし清潔な恵迪寮に入ることを許されて、前記三氏と同室にしていただいてからはすっかり楽しくなった。

激しい柔道部の練習と学習との間をさいて、この田舎者に親身も及ばない世話をしていただいたことは忘れられない。爾来五十年余が流れ、やっと小暇を得て、往昔の友情に感謝の敬意を表わしたいと三先輩に連絡をとった。（恵迪寮同窓会名簿に負うところが大きい）。残念ながら一堂に会するまでに工先輩が永眠され、やっと山口先輩（畜産科卒）を名古屋駅にお迎えし、当地の柴田勝君（寮同窓生、農化）と共に、ささやかな一席を持つことができた。先輩は変わらず、ご健顔の上に聖者の趣を添えられて、私に歓びに満ちた人生の第一歩を踏み出すことを助けていただいた頃の話題に時の立つのを忘れた。

海軍航空隊

私の兵役は、昭和十六年四月卒業と同時に、当時、四年目を

迎えた海軍航空（整備科）予備学生に採用されたことに始まる。同じ大学卒であっても、技術、軍医、主計等は中尉に任官するのに、予備学生は少尉の下であった。従って身分上のことで釈然としない点があったが「お前達は将校として部隊の指揮権を持つ」と励まされた。横須賀で一ヶ年の教育を受け、卒業と同時に招集され、海軍予備少尉として従軍した。任地は、セレベス島ケンダリ基地に、台湾高雄から出撃してきた零式戦闘機隊で、成功した緒戦の後の骨休めと機材整備の中であった。司令は亀井凱夫大佐。着任翌日の夕食時に、ニッパ椰子の士官室で歓迎会を開いてくれた。杯を重ねる程にふと誰からともなく「都ぞ弥生」が始まり、大合唱となった。兵学校、機関学校出の士官が大部分であったから皆受験生時代のことを思い出して、戦争を忘れて唱和してくれた。

亀井司令は英国の戦闘機の学校に留学された海軍きってのパイロットの草分けである。津和野の殿様の家系と伺った。私は士官室の末席にいたが、亀井司令は、始めて第一線に出て来た大学出の整備科将校に親切に目をかけて下さった。暇な時にはお呼びがかゝり、キングス・イングリッシュの会話を教わったり、鴎外のことなども伺った。ご子息、節夫氏が北大予科生で、恵迪寮に入られたとのことであった。戦争中の軍隊とは思われない和やかな数ケ月の思出は、ケンダリ基地で南十字星と共に、その後のはげしい戦中、戦後の勤務や生活を通して、温い励ましと慰めとを与えてくれた。

司令は惜しくも昭和十九年八月、グァム島で戦死された。令息、節夫氏とは、「日本に象がいたころ（岩波新書）」に導かれてやっと連絡がつき、京都大学名誉教授としてご健在であることが分った。

クエーカーの人々

昭和二十九年にニューヨークのコロンビア大学の大学院に留学した。当時の為替事情で貧書生の一人であった。北大を卒業して十三年後の学生生活は、言葉と懐の不自由さと相俟って余り朗らかなものではなかった。宿題の多さは経験された方も少くないと思う。

こんな学生に暖い支援の手を差し伸べてくれたのがクエーカー教徒（一名フレンド）であった。古いことを言えば、新渡戸博士はその熱心な一人であったことは北大生の誰しもが知るところ。私にスカラーシップの世話をしてくれたコンピューターのV・パシュキス博士、東アジア研究所所長のH・ボートン博士（昨年逝去）を始めとしてコロンビア大の教職員にも教徒が多かった。世界的に援助の手を広げていたAFSC（アメリカン・フレンズ・サービス・コミッティ）に関係している人も少からずで、理屈抜きで困っている人々に早急の具体的な方策を講じていた。

私は折角アメリカまで来たのだから宿題ばかりやっていては

もったいないと思い、家庭の様子を見る機会を作ってもらった。イースターの休暇に五日ばかり、新渡戸さんゆかりのフィラデルフィアの家庭を紹介された。

これが縁で、二年間の留学中（N・Y十ヶ月、ピッツバーグ一年三ヶ月）、随分フレンドの世話になった。旅行でも行く先々に紹介して宿と食事の面倒を見てくれた。お陰で限られた資金で広いアメリカを見聞することができ、私の世界は急速に広がっていった。



（レーン先生と御一家。昭和14年）

他人のことなんか構っていられない忙しい町ニューヨーク、札幌よりも寒い町での孤独な寮生活の寂しさをどれほど慰さめられたことであろうか。お陰で有益な留学生活を送ることができ、後年、再来の礎もできた。

これは余談になるが、キャンパスの近くにあるクエーカーの集会に出席して、一時間のsilent Worshipの後、ティータイムに参加した。いろいろ話している内に札幌から来たのならH・Mレインを知っているかと言う。彼は、私の予科時代の英語の先生ですと答えると「彼はこゝの会員です。」とのことであった。ああ、やはりそうであったか。彼の温容は、当地で会った多くの教徒に共通の印象であった。

昭和六十二年、私は一冊の本（註参照）によりレーン夫妻の戦争中の受難のことを知って、文字どおり愕然とした。あんなことがどうして夫妻に起こり得たのであろうか。その昔、ニューヨークの集会で「レーンを知っているか」と問いかけられて、知っていると返事をしたにも拘わらず、会話がそれ以上進行しなかったのは私の語学力の弱さのみでなく、あの事件の一部始終を承知していながら敢えて口を閉ざしたのではなかったか。不自然な沈黙がしばらく続いたのが妙にはっきりと思い出される次第である。

（註…上田誠吉著「ある北大生の受難－国家秘密法の爪痕」）

半世紀の彼方のことは茫洋として記憶も薄れつゝあるが、巣立ちの頃の私に、それぞれの先達が投げかけてくれた暖い光は、今も燦然と胸中に輝く。この誌面をかりて深甚なる謝意を表したい。それと共に、北大、恵迪寮、「都ぞ弥生」という懐かしき心の故郷が、世代を越えた今の寮生諸兄にも変わらざる意義を持ち続けて欲しいものと念願する。

寮と私

角幡春雄
（昭和十九年入寮）

先年、リスボンに住んでいたとき、下宿にしていたペンションは、インド人が経営していた。彼はどんないきさつがあったのか、故郷のゴアを離れてから、モザンピークやアンゴラなど旧ポルトガル植民地を転々とした時期があって、しばしば、かの地の人種や習俗のことを話題にした。

「体力はあるんだが、教育のない連中でね」だからお手上げだというように、両腕を大きくひろげて話をしめくくるのが癖だった。

一九八九年（平成元年）の夏に、アンゴラから留学生がひとり泊りにきた。

靴墨で光らせたような皮膚をもったこの青年は、みるとなかなか理智的な眼をしていて、私は好感をもったが、下宿の主人は、あきらかに私や他の宿泊者とは別の扱いをした。青年がひどくうまいポルトガル語を喋るのも気に入らないようだった。

反撥するように、私は彼と仲よくなった。食堂で話しこんだり、夕暮には、肩をならべてビールをのみにタスキーニャ（居酒屋風食堂）に立寄ったりしながら、リスボンの街をうろついた。

「おい、アンゴラの知的貴族（ノブレザ・インテレトゥアル）よ」と私がよびかけると、彼は、

「おう、日本の学者先生（プロフェッソール・ドトール）！」と応ずる。そんな呼吸を互いに気に入っていた。

最初に、私が、リスボン大学で学生をやっていると自己紹介したのをききとがめて、アジア人の年齢が見当つかなくて、「いったい、おまえは幾つなんだ？」ときいてきたのが、はじまりだった。

六十になっていた私と、二十歳をいくらもでていない黒人学生の二人連れは、どこにいても不審な眼でみられるのは避けられないことだった。注目を浴びるのが面白くて私たちはわざと肩を組んで奇声を発したり、千鳥足をやってみたりした。私自身には、いい年輩になって、そんな自由な外国暮しのできるのが愉快でならなかった。

やがて、ひと月もたたないで、この留学生は、

「帰って、政府の要職につかなくてはならなくなった」と、

奇妙なことを口にして、下宿からも、リスボンからも姿を消した。

こんなことを思いだしたのは、最近あるエッセイをよんだためである。

民俗学というのか文化人類学というのかよく知らないが、そういうことを専門にするひとのかいたものである。アンゴラに住むバントゥ系ヌガンゲラ族の、成年への通過儀礼のことをかいていた。

バントゥ系といっても、ヌガンゲラ族といっても、もちろん私にはなんの知識もない。ただ、アンゴラ、ああアフリカの南の方の、あいつのくにかと気づいたのである。しかしこのエッセイは面白かった。

どんな民族も部族も、それが未開であっても成熟した文化をもつものであっても、一生のあいだに幾つかの通過儀礼をもつ。なかでも成年式は特別な意義をもつ。子どもの域を脱して、互いに一人前の権利と義務をになう成人社会への参加のためのイニシエーションだからである。日本の古い時代の元服・加冠がそうだし、農民のあいだでおこなわれた名替祝いもそれである。

ヌガンゲラ族の少年は、十幾つかの一定の年齢に達して、肉体的条件がととのうと、集められて、部族の長老に伴われ、深い森のなかに入った。

女色はもちろん、家族をはなれて完全に世俗を絶つ。そして弓矢をつかって獣を狩る方法を仕込まれ、火を作ったり、樹の実をとって食餌にする技術を身につける。腹をわるくしたときには焼いた土が役立つとか、傷にはどんな草の汁が効くとか、ある植物をうっかり口にすると女は不妊になるといったことも、このとき授けられる大事な知恵である。

夜は夜で、火を焚いたまわりであらゆる教育がほどこされる。まず、部族の発生にまつわる天地創造の物語である。太古、天と地を結ぶ雨と稲妻が、神聖な森を育て、ついで自分たちの祖先を生んだという神話からはじまって、他の部族とどのように闘ってきたかの歴史が古老によって語られる。少年たちが、それらを諳んじなければならないのは当然である。

神謡や古謡を伝えられるのもこのときである。

気高い魂とはどういうものか、部族に伝わる古謡や歴史のうえの人物の行為を通じて説いてきかされる。

やがて割礼がほどこされる。目かくしをされて、仮面をつけた先輩たちによって棒で殴られながら股をくぐるといった試練も加えられる。

森のなかの期間をすごして、村落に連れもどされ、ふたたび首長の家に集合したとき、少年たちははじめて大人として扱われ、部族の成員になるという段取りである。

この記述をよんで、私はなにか自分にも遠い記憶にあるような、そんな気がしてならなかった。

はじめ漠然と不思議な思いに心をただよわせていたのだが、やがて気づいたのは、恵迪寮の三年間の経験であった。あれは、

ヌガンゲラ族でいえば森のなかのイニシエーションだったのではないか——。そう思ったとたん、いや確かにと、ひとり妙に得心がいった。

あれは、深い森の奥の生活のようであったし、女色も世間も、戦争さえも意識的に隔てて、神謡・古謡（寮歌）に浸った暮しであった。伝統という不思議な波動のなかで、一種酩酊感を伴う日々を送ったものである。

あらゆる通過儀礼（イニシエーション）が秘儀的性格を帯びるのは、当然である。

寮は、よそからみればわけのわからない奇態な行事にみたされていた。

新しく入寮してきた私たちは、まず深更、遠くの廊下におこる「ナーマンダー・ナンマイダー」という不気味な音調のくりかえしに目をさます。何ごとがおこったのか？波を打つような念佛が近づいてきて、荒々しく扉が叩かれ、そこから高下駄を鳴らした寮委員が乱入してくる。寝台のうえに神妙に坐ると、胡椒かなにかで目つぶしをされ、次には何が入っているのか知れたものではない液体を口のなかにそそがれる。「洗礼」という行事であった。これで寮生になる。

先輩のまえの舞台で野次を浴びながら、能うかぎりのバカ踊りを演じて合否を決めてもらう「鈍才会」。太鼓を叩いて夜毎に、四十も五十もある寮歌を唱って夜更しをする。越中褌の裸で、赤鬼青鬼にでもなった気分で、下駄を鳴らしスキーを床に叩きつけて狂い踊ったり……、ああいう精力浪費は、秘儀以外のなんだというのだろう。それを私たちは、密教の修行のように熱心に、酒がなくても酔ったような気分でやった。

そんな暮らしを三年やったあと、大学にいくために寮を脱けでるときの会合を「凡才会」とよんでいたのも理由あることだった。

あれは、少なくとも私には、ヌガンゲラ族の深い森のなかの試練のときであったと、いま思う。

私は北海道の山間の寒村に育った。中学（旧制）は往復に三時間をかけて汽車通学しなければならなかった。冬季は、まっ暗なうちに家をでて、星がなにかの信号のようにチカチカ瞬くのが空いっぱいに拡がるころになってようやく帰りついた。

中学は敬礼のやかましい学校で、零下十度を超える校庭で乾布摩擦をやったり、軍事教練や柔・剣道に熱心なことで有名だった。数学教師までができない生徒を殴り、上級生は集団をつくって「説教」といって下級生を遠慮なくしごいた。軍国主義の時代であったし、戦争のさなかであったから、文句も口にできなかった。背がいちばん小さくて、からだを動かすことがまるでだめな私は、仕方がないから、受験に成功して早く高等学校（これも旧制）に入ってしまおうと考えた。

恵迪寮に入った私は、たった十六歳のまるでチビッ子だった。教養も常識もない、ただ入学試験がうまくいっただけの少年だった。

寮は、全く異質な秘境であった。そして、中学とは百八十度異なった、というより思いもかけない世界であった。ほとんど衝撃的な、あたまがくらくらするような場所だった。

歯切れのいい東京弁を使う白皙長身の男は、ギリシャの昔からずっと哲学者だったのかと思うほど巧みに人生の意義を語ったし、東京の中学からきた十七歳のひとりは、机の上で、フランス語で高等数学の本を黙々と読んでいた。

「女という奴は、礦脈か遺跡みたいなものなんだ。掘ってみなければわからない。」

同室の、四歳年上の同級生は、そんなことをいって私の女性憧憬の雅さを嘲った。「日本の神は最高絶対という。キリスト教の全智全能の神と、いったいどっちが上なんだ」と議論をふっかけるかと思うと、私には理解しかねる詩をノートにかいていたりした。

学校にはいかないで、朝からラグビーのボールを蹴っている男、習いはじめたばかりのドイツ語でもうシラーの詩をよんでいる秀才……。私は初っぱなから、ほとんど絶望的なコンプレックスに悩まなければならなかった。

お手あげの状態から脱けだすために、案出した私の流儀は、だいぶ常軌を逸したものだった。まず「まじめな」と田舎でいわれた評価を捨てること。そのために教室の学業を放棄した。ひと一倍自堕落に振舞い、屈強な運動部の連中を友人にして、また、黙って読書に打込むものを尊敬することにした。自分でもわからない観念語を操って友人に議論をふっかけ、議論が徹夜になっても平気な顔を装った。教室はサボっても、馬場には必ずかよって、日が暮れて障碍の棒がみえなくなるまで馬術の練習に打込んだ。そして、寮の奇態な行事に熱心に参加することも、それであった。——

友人のひとりが、最近、統計をつくってまわしてくれた。それによると、私たちの、正規には三年間あった北大予科時代に、教室がひらかれていたのは、日数にして三分の一にも充たなかったそうである。

「ひでェーもんだ。おれたちほんとに卒業しているのかな」と誰もが首を傾けた。

二年生になった敗戦の年には、援農という、作男なみの住込みの動員があったし、戦後は、食糧がないとか冬期の石炭がないなどの理由で学校が閉鎖同然になったときもある。

残りの三分の一のあいだにも、誰もがいろいろな口実をつくって学校にはいかないですませる工夫をした。だから、学校の思い出はほとんどない。あるとしても、教室を根城にして、連れだって街にくりだした記憶くらいである。

「おれたち、しかし寮だけはたしかに卒業しているんだよな」みんな、そんなことを口にして慰めている。

寄宿寮に、あらゆる出身、個性や志望のものが、ごちゃまぜに暮らすことを中核に据えた旧制高校は、制度としてのモデルが、どこかにあったものだろうか。何年ものちになって「価値

「恵迪寮」について

多田邦雄
（昭和二十年入寮）

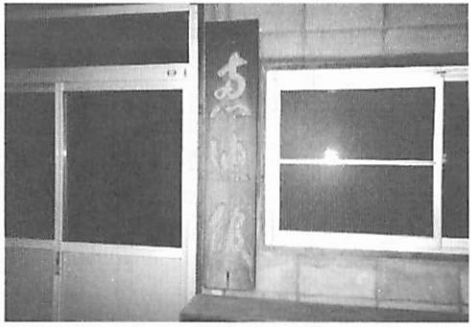
観の変圧器」とか「情操の貯水池」とか「友情の苗圃」とか、そんな言葉をならべてふりかえるような三年間の、制度や気風は、いったいどこからきたものかと考える。

中世、ヨーロッパの初期の大学は、固有の建物や施設を意味しなかった。学問を教授するひとと修学する人びとのいわばギルドであったから、学寮といった方が正しいだろう。イギリスのカレッジ＝学寮制度はその流れを汲むものではなかろうかと、実はあまり根拠もなしに思いこんでいる。明治以後の日本では、おなじ全寮制の札幌農学校が最初の例ではなかろうか。この制度が、そして、旧制高校に採用されたのではないかと、私は、イギリスのカレッジの場合よりはもうすこし自信をもって考えている。

――重ねてかくことにもなるが、私は恵迪寮で、ひととなるための秘儀的なイニシエーションをしたたかにうけたと思っている。それが私のなかのなにを変え、なにを私にもたらしたのか、もちろん定かでない。秘儀の秘儀たる所以だろう。ただ自分の生涯に、もしあの時期がなかったならばと思うと、卑小でとげとげしく痩せた自分を想像してうそ寒くなる。そして、自分で満足に思う性情も、困った癖だと嫌悪するところも、残らずあの時代の生活に根ざしていることに、あらためて気がつく。

私たちの古い寮はなくなり、日本の成年式は振袖の妍を競う成人式に変ってしまった。

アンゴラの、いっときの友情をリスボンで結んだ黒人青年は、彼のことばが嘘でなければ、いまごろ政府の顕職についているかもしれない。彼ともし文通があれば、ヌガンゲラ族は、いまでもエッセイにあったような怪しげな通過儀礼の伝統を維持しているのかどうか、きいてみることができるのだが――。彼のアドレスを聞いておかなかったのを残念に思っている。





「表彰状を書くのですが、この字はなんと読むのですか。」「ケイテキカンと読みます。」「ハア、ケイテキですか。」

北大出身者なら読めよう。又旧制高校出身者なら読める人も多かろう。

「恵迪館」。事の始めは……。昭和五十一年七月ごろ、福島県伊達郡伊達町の町立伊達小学校体育館に町の人が何人か集りつゝあった。丁度そこに私が来合わせた。「今日は何の集りですか。」「今度町に居合道研究会を作ろうと思って、その相談です。」「誰でも入れるんですか。」と言うことで遂に五十歳にして居合道を稽古することになった。しかし五十歳を越しての居合の技は中々の難業であり、少々苦痛になって来た。これに打ち勝つには、一に練習、二に練習……しかない。それには稽古場を作ろう。鉄筋コンクリート造りの倉庫の一部を改造し、35坪の稽古場が完成した。まずは余り恥をかくこともなく、二段から三段になった頃、この隠れ家稽古場が見つかり、居合道指導の石岡恒喜先生（昭和六十三年没）に子供達に剣道を教えているんだが貸しては貰えないかと頼まれ、それではと神棚やら何やらと道場の体裁を備えた。

こゝで先生から道場の命名と言うことになったので、「ケイテキカンでは如何でしょうか。」「ケイテキとはどんな字ですか。」「恵迪です。書経にあるそうですが、恵迪吉従逆凶、ミチニシタガエバキチナリ……と読むそうです。北大予科寄宿舎の恵迪寮からとろうと思うのです。」。その一週間後に石岡先生の篆刻の立派な看板（写真上）も出来て、昭和五十五年七月七日に恵迪館は発足した。

発足時の門下生は中学生七名だけであったが、翌年中学生二名が増え、小学生も四年生一名、三年生以下十六名となった。しかし道場連盟加盟後の昭和五十六年は日本武道館に於て県代表として、中学コート準優勝を果し、続いて東北地区中学剣道大会では決勝で3－2と破れ、準優勝となった。この七人もしくは後から加わった二人をも加えて恵迪館七人の侍と吾々は呼んでいる。今でもこの中から剣道で活躍している者もおり、第50回国体には二名の選手が出ている。

小学生については、始めは仲々団体としての構成が難しく、しばらくは個人戦で活躍していた。段々と門下生も増え、道場としての体裁も備って来たので、育成会なる後援会が結成された。私は育成会の会長に昭和十六年恵迪寮入寮（剣道部）の徳富朝光先生をお願いすることにした。先生は伊達町より4キロ所のところの福島市飯坂町に小児科医院を開業されており適役だと思ったのである。館の旗（道場旗）も制定された。新渡戸稲造筆になる、Boys be ambitiousを拡大しライトブルー白抜きとした（前頁写真下）。常に道場の正面に国旗と共に掲げられている。

また、胴の向かって右上に延齢草の寮生章を丸囲みしたマークを館章として貼ることにした。そして左腕にこの館章を黄の地に黒で染め、縫いつけた。一部異るが、明らかに無断盗用である。しかし私自身は晴れ晴れとして意気込みが違って来たように感じられた。

道場は昭和五十七年十月に１００坪の増改築をなした。改築部分75坪、新築部分70坪である。個人所属の道場としては大きい方である。

門下生の方は年を追うごとに増え、八十名となった平成五、六年がピークで、現在は六十名ぐらいとなっている。少子化現象の今としては他の道場と比して見ると、多い方である。成績は年によって異なるが、どんなに少くても優勝五回以上であり、平成七年は優勝十六回を数えている。また平成七年三月には全国スポ少剣道大会に県代表として、山口県山口市に遠征、また平成八年三月は同じく全国大会（大阪市）に出場予定である。ちなみに平成八年二月二十六日には福島テレビに全国スポ少大会剣道国体として放映された。また平成八年二月四日の鏡開きは同封新聞切抜きにある通りである。

少年の健啖喧噪鏡割り　鬼堂

平成元年の私の句である。

「恵迪館」創設以来十六年目となった。この事を少々晴れがましく書いてしまったが、気になることがないわけでない。無断盗用のことである。「恵迪館」、Boys be ambitious、寮生章丸囲み等である。「無断盗用けしからぬ。お叱りの方もあろうかと思うと、何となく晴れがましい気持ちも失せてしまうのである。」

丁度「恵迪館」が生まれて三年足らずの後に、恵迪寮がとりこわされ開拓村に移築された。その時「俺には開拓村の恵迪寮と恵迪館がある。」と思ったのである。「恵迪」の二字は私に青年時代の気概をよみがえらせ、私をして恵迪館に集る幼稚園児より中学生三年生までの子供達に、その気概を示し、大志の思想を教えよと言っているように思わせるのである。

同窓諸兄、許されよ。

「帝国軍艦咸臨丸乗組員」の写真

佐山峻（昭和二十五年入寮）

岡山に住む一回り年長の従兄から「先祖の遺品を整理するから一度来るように」との連絡があった。

岡山は私達の故郷ではない。本籍は紀州である。関西や四国に住むことの多かった従兄が、故郷の家を畳んで気候の温和な岡山に移っただけのことである。

従兄宅に着いた日に、いきなり見せられたのがボール函に詰まった写真の束である。歌人の九条武子や大阪相撲の親方と関取、今は亡き父や祖父母、伯父伯母たちの遺影に混じって出てきたのが「帝国軍艦咸臨丸乗組員」の写真（次頁）であった。蔵の中にあったのだという。

咸臨丸といえば、幕末の安政七年（一八六〇年）に日本の船として初めて太平洋を渡り、のちに北海道開拓使の所管となって、明治三年（一八七〇年）上磯沖で難破したあの船である。まだ沈没の所在が確認されず、従って沈んだままである。

写真にはご存じの福沢諭吉や、のちに海軍機関総監となり日本鉄道会社を興した肥田濱五郎などが写っている。写真の裏には写っている六人の説明のほか、「當原版は桑港領事館より拝借せるものなり」の但し書きと、［千九百五年五月　今井寫眞館　1303 POLK ST.SAN FRANCISCO,CAL.］の文字がある。つまり、この写真は咸臨丸がサンフランシスコに入港してから四五年後に、現地の今井寫眞館が原版を借りて作ったコピーである。

写真が珍しいのかどうかよく分からないままに（どうしてこの写真がわが家の蔵にあったのか）だけは想像できた。

岡山の従兄の父親は佐山芳之助といって、私の父の長兄である。この伯父は明治三十六年（一九〇三年）にサンフランシスコに渡った。因に伯父のつれ合いは、恵迪寮の先輩でもある松下三十郎北大名誉教授の叔母にあたる。私が札幌に来たのは、この三十郎兄が北大にいたためでもあったし、「都ぞ弥生」を教わったのもこの兄からである。

さて、祖父は和歌山県の湊村（今は田辺市に含まれている）の村長の傍ら、大阪で事業を行っていた。そして明治二十九年（一八九六年）に和歌山で最初の海外移民の会社を興したようだ。そうでなくとも、紀州は移民の盛んな土地柄である。以来



［帝国軍艦咸臨丸乗組員］
（後列向かって右から）岡田　井蔵　福澤　諭吉　小永井五八郎　肥田濱五郎　根津欽次郎　濱口與右衛門

今世紀にかけて、我が一族の者たちが次々に海を渡り、末裔の多くはそのまま米国市民になっている。

芳之助伯父の渡米の伏線もそのあたりにあったのではないかと思う。ところが伯父は一九〇六年四月の、史上最悪といわれたサンフランシスコ大地震に遭遇して帰国した。この地震については、私も伯父からいろいろ聞かされている。

『寝ていたら、頭の上から本が次から次から降ってきた。部屋中埃だらけになった。外へ出てみたら、あちこちから火の手が上がっていた。この街はもう駄目だな、と思ったので日本に帰って来たんだ』と。

帰国後伯父は、祖父の後を継いで村長や郡議員をしていたが、再び渡米することはなかった。

写真の束の中からは、咸臨丸のコピーを作った桑港・今井寫眞館一九〇四年撮影の、伯父が写っている写真も出てきた。これで寫眞館と伯父との繋りが読めた。

問題は『四百五十八町四方を焼き尽くし、焼け出された市民三十余万人』といわれたこの大地震を潜り抜けて、写真の原版が残っているかどうか、である。原版が消失しているとすれば、この写真は貴重なものになる。

今井寫眞館のあったポーク街は、日本人町にも近い。現在の領事館はこの日本人町の中にある。ただし、当時もそうだったのかどうかは分からない。被災当時の文書を読むと、領事館に駆けつけると呑気にワインを呑んでいた奴がいたので頭にき

た、などというのがあるから被害は軽微だったのかも知れない。

そこで、北海道新聞を通して慶應義塾大学福澤諭吉研究センターに調べてもらうことにした。

結果は、原版から直接コピーしたものは諭吉自身の署名のあるものとわが家の二枚、写真から再複写したものが三枚あることが分かった。原版の行方と福澤、肥田以外の人々の詳細については不明である。博学な寮生ＯＢのご協力を是非お願いしたいと思い、写真に写っている人々の氏名も記する。

さて、調査中に意外なことを知った。それは咸臨丸の乗員の仲間内で、勝海舟や福澤諭吉の評判があまり良くないことである。「勝は威張っているくせに航海中は船酔いで寝てばかりいる」とか「福澤は役に立たず、公費で私物の本を集めていた」とか、いやはや散々である。

故郷で散々だったクラーク先生を思うにつけても、妬みや中傷に挫けていてはいい仕事は出来ない。「ボーイズ・ビー・アンビシャス！」には「負けずに頑張ろう！」という意味があるのかも知れない。

芥川賞女史からの宿題

近藤智雄（昭和二十九年入寮）

「過去の事件の価値は、当事者にしかはかることができません。まさにこれゆえにもしこのことを掘り起こし、新しい光を当てるとしたら、それは近藤さん以外の筆によっては不可能です。万一、私がこのリンゴ事件に創作の種を見出したとしても、それは当事者に新たな苦痛と不満を感じさせるだけです。……」

上記の一文は、第八十八回芥川賞受賞作家・加藤幸子女史から最近私がもらった返信の一部である。丁寧な言葉使いの中に、はっきりと拒絶のニュアンスが読み取れるだろう。その通り、恥ずかしながら、彼女と初めて出会ってから実に三十九年ぶりに初めて声をかけ、そして見事にふられるハメになったしだい

である。

彼女は北大時代、私の一年後輩であった。もっとも、私の低空飛行の結果、卒業は同時だったから、四年間キャンパスの時空を共有していたことになる。すらりと背の高い、彫りの深いエキゾチックな容姿の美人。一学年約一千二百人中女子学生が三%前後しかいなかった当時だから、いやがうえにも目だち、入学後たちまち全学のアイドルになった。だが、勉学そっちのけで柔道の猛練習に明け暮れていた野蛮人の身には所詮は〝高嶺の花〟。ただ一つ、彼女が入学時に上野から札幌までやってきた約三十時間の鉄路、航路を、たまたま同道したという出会いがあったくらいとしておこう。

さて、私がなぜ女史に手紙を出す気になったか。そのきっかけは、女史の最近作「苺畑よ永遠に」（新潮社）を本屋で見つけ、読んだことに始まる。この書き下ろし長編小説は、彼女自身が返信にしたためてきたように、北大時代の自伝とみてよい。私は当時の札幌の街の鮮やかな描写にひかれ、のめり込むように読み進んでいくうち、ハッと思い出した。そういえば、彼女は農学部農学科専攻（通称プロパー）だったのだ。それも本に暗示している「沢田教室」だったとは……。その「沢田教室」こそまさに、私が〝主犯〟として関与した「リンゴ事件」の舞台であるリンゴ畑の管理者なのであった。

この事件は学寮「恵迪寮」の伝統に従った単純な〝粗暴犯〟だが、学寮自治とのからみで、全学的な大問題となった。しかし、〝主犯〟の私が先輩らの指示で今日まで真相に口をつぐんできたため、伝説のみが一人歩きしている。ただ、ここでは謎解きは控え、再び加藤女史の返信の一部を紹介するにとどめておこう。

「近藤さんは新聞記者としてりっぱに御活躍され、あのような著書も出版されておいでです。現在も大学教授として文章を書くことには十分問題はないように思うのですが……。私にはまだ少しわかりにくいリンゴ事件を材料にノンフィクションをぜひお書き下さいませ。きっと面白い本ができるような予感が……」

つまり私は「苺畑……」の読後、鮮やかに甦った青春の記憶の興奮にかられ、女史に無理なテーマでの執筆を願望したのであった。それにしても、遠い昔のアイドルが投げ返してきた宿題は、初老の身には甘ずっぱく、かつ重い。

〈初出・東海学園女子短期大学「図書館だより」第五十一号〉



創作

入れ歯（告知、尊厳死そして安楽死）

中瀬篤信
（昭和二十六年入寮）

一

午後の最後の外来患者を送りだし、診察室の窓辺に激しく吹きつける雪片を見やりながら、中沢はふうっと吐息を漏らした。医者になって三十七年間、大病院で胸部外科領域の医療に従事し続け、定年も近くなって仕事に少し疲れを覚えるようになっていた。「先生お疲れでしょう」看護婦がそおっとお茶を出した。「発音がおかしくて聞き辛くない?」「少しもおかしいと思いませんでしたけど、やはり喋り辛いのでしょう?」

実は、中沢自身が二週間前より口腔外科で治療を受けていた。それは虫歯も無いのに歯周病で上顎骨慢性炎症となり、残っている左右の奥歯の全てを抜き取られ、取りあえずの義歯をいれられたばかりであった。この入れ歯は、肉色をしたプラスチック製の人工口蓋の両奥に義歯の付いている代物で、パクリと口にくわえ込み、途中に付いている金具を残っている前歯にひっかけ固定するものである。このマウスピースは、抜歯後の歯肉や口蓋に全く馴染まず、五分ともたずすぐに吐き出したい衝動に駆られるのであった。当然のことながら食事は不味くなるし、上顎に余計なものが張り付いているので、発音がし辛いのである。

歯、目、○○の順に老化が進むと巷間云われているが、中沢もとうに老眼鏡が必需品となっており、六十才を過ぎては、そろそろ総入れ歯に近くなっても仕方が無いと自分に云い聞かせてはいても、まるでうつ病のような暗い気持ちになってしまうのであった。それはテレビで見た「生きもの地球紀行」の一シーンを思いだしてしまうからなのである。

アフリカのサバンナの木陰に、ライオンの一群がけだるそうに寝そべっていた。狙ったインパラに逃げられ、若い野牛を追ってはみたもののそのボスに逆襲され、もう幾日も餌にありついていないのだ。この群れの数百メートル先に一頭の痩せた雄のライオンがこちらを窺うように立っていた。たてがみも勢いを失い、皮膚病なのか、顔面は灰白色にまだらに変色しており、いかにも年老いた感じがした。そう、この老ライオンは、数か月前まではこの群れのボスであったのだ。しばらくして彼は群れに近づくことを諦め、どこか寂しげに去って行った。

群れの新しい首領の雄ライオンがふと頭をもたげた。遠くのほうから縞馬の大群が水場を求めてやって来る。のっそりと立ち上がった雄ライオンは、数頭の雌ライオンを引き連れ、ひそかに様子を窺っていた。列をなして進んでくる縞馬の中の弱そうなのに目星を付けるや、猛然と襲いかかった。逃げまどう獲物をやっと倒したライオン達は、縞馬の腹を引き裂き、柔らかい臓物にむしゃぶりつく。ある程度の食欲を満たした頃、いつの間にかライオンと獲物の周りに数頭のハイエナが忍び寄り、獲物の横取りを狙う。どうした訳かライオン達は獲物を置き去りにしてノソノソと去ってゆく。ハイエナたちは唸り声をあげながら肉塊を食いちぎる。ハイエナという動物は、見るからに不格好な姿態と下品な顔をしている泥棒野郎だ。大きな羽音が

した。すぐ近くに数羽の禿鷹が舞い降り、また天空からも獲物を狙ってハイエナ達を追い払う。争い群がりながら鋭い嘴で残りの餌をついばむ。すると、そこにあの群れを離れた老ライオンがのそのそとやってきて、禿鷹達を追い払い、少しは残された肉片を食べようと縞馬の下腿にむしゃぶりつく。もう自分一人では狩ができない彼には、久しぶりの食事であった。しばらくして顔を上げた老ライオンの口元は、赤く血液には染まっていたが、獲物の骨に付いている肉片はそのままに残っていた。口の周りの血液を嘗め廻し、何処かに立ち去ろうと辺りを見渡しながら大きなあくびをした。なんとその老ライオンには、肉片を食いちぎる歯が殆ど無かったのである。

それから数日が過ぎた。サバンナに陽炎が揺らぎ、晴れ上がった空に禿鷹たちが舞っている。そこにはきっと同じような弱肉強食の自然の営みがあるに違いない。そう、その禿鷹たちの嘴は、飢えと老いに倒れてしまったあの老ライオンの屍体に向けられていたのであった。

中沢はうんざりした顔つきで、このテレビの残像を打ち消すような仕草で手を振り、午後六時から始まる入院患者の臨床検討会に出席しようと立ち上がった。

二

「田中先生、食道癌の樋口さんの具合いはどうだね？」。新年早々の病状検討会である。「そろそろ危険な状況にあると思いますが、鎮痛剤（塩酸モルヒネ）がよく効いておりまして殆ど寝たきりの状態です」「家族の人たちには、最近の重篤な病状をよく説明してありますか？」「はい、昨日も奥さんとよく話し合いましたが、奥さんも一年前の手術の状況説明以来、ご主人の病状をよく理解しており、この再入院の時点で、もう二度と元気な姿で帰宅することはないと思っておられるようですが、ただ激しい痛みで苦しまないようにして下さい、とだけ希望しています」

主治医の田中は、ずり落ちそうな眼鏡を抑えながら頻りにまばたきをした。なにか心に掛かることがあるのだろう。

患者：樋口和夫、五十三才、自営業（樋口自動車商会社長）

丁度一年前の正月も終る頃、近所の開業医を通して中沢の外来を初めて訪れた。三ヶ月前からなんとなく胃の具合いが悪いようであったが余り気に留めていなかった。しかし心窩部にチクチクした痛みを感じるようになり、次第に食べ物が胸につかえる感じが強くなって、時には吐き出してしまうようになり、ようやく医者に診て貰うことにしたという。身長一五七センチ、体重五〇キロと小柄だが「最近五キロも痩せました」と精悍な顔に陰りをみせる。

開業医が持たせてくれた食道バリュウム検査や内視鏡所見は、下部食道に一部潰瘍を形成する約一〇センチにわたる立派な癌の存在を示していた。

「樋口さん、食事は、どのようなものを食べているのですか？

これだけ食道が細くなっては、普通のご飯が通ってゆかないでしょう?」「そうなんです。もともと私は小食でもあり、仕事が忙しく宴会も多いので適当に食べていたのですが、最近は詰まる感じが強まり、ビールばかり飲んでいました。お粥は不味くて、とても喉を通ってゆかないのですよ」と苦笑しながら答えた。「ところで先生、この病気、手術で治りますか?」樋口さんは気が小さいのか下を向いたまま小声で尋ねた。中沢はどう説明したものかと一瞬戸惑ったが「食道狭窄症です。お酒ばかり飲んでいたせいか食道粘膜が変性を起こし、細くなってしまったのです。すぐに入院し、いろいろな検査をした上で、手術をするかどうかを決めましょう」「手術となると大手術なのでしょう?開業医の先生は、食道の手術は非常に難しいと云っていましたが」「それはそうですが、あなたの場合、手術をしないで薬で治療する方法もあるかもしれません。よく検査した上でご相談しましょう」腫瘍の範囲が既に五センチを越え、周囲組織への転移の存在が予想されることから、根治手術はもう無理だと判断している中沢には、こう答えるのが精いっぱいであった。

確かに食道の手術は、癌に侵されている食道のすべてを抜去し、胃や腸管を用い食道を再建しなければならず、頚、胸、腹部の三ヶ所にメスが入る大手術である。また食道は、解剖学的に胃や腸と異なり外膜(漿膜)が存在しないので、癌は周囲に浸潤、転移し易く、組織的にも脆弱で、縫合不全を生じ易いのである。

案の定、入院後のCT検査では、転移は膵臓や周囲のリンパ節に存在しており、手術をするにしても既に根治的な意味を失っていた。

「奥さん、樋口さんに内緒で来て頂きましたが、今日は患者さんの病状の説明と今後の治療のご相談をしようと思っていますが…」「先生、主人は癌なのでしょう? なんとはなしに予感していました。後どのくらいもつのでしょうか?」と奥さんは、想像以上に冷静な態度で尋ねた。「病理学的には扁平上皮癌で、膵臓などに転移をしており、正直に申し上げて手術をするにはもう手遅れの状態です。進行が早いようなので後どのくらいもつのか…今のように全く食べられないと益々痩せていくばかりで、栄養のための点滴注射にも限度がありますし…ひいき目にみても半年、そう、一年はもちませんでしょう。化学療法や放射線治療も副作用が多く、あまり希望がもてません」。しばらくの間、ポロポロと涙を流し、ついには俯いてしまった奥さんは、暫くして急に頭を上げて「先生、なんとかならないのでしょうか。主人に一年でも二年でも、少しでも長生きして貰いたいんです」と縋るような目をした。

「申し訳ありません。私の力では、ご主人の寿命を延ばすことは殆ど出来ないと思います。只、私として出来ることは、少しでもお元気な間は、なんとかご自身の口から食事が出来るようにしてあげたいということです。手術により癌に侵された食

道を取り去り、胃で代用食道を創る食道再建術をしてはと考えています。根治性はありませんが、癌量を少なくすることと食事摂取が自力で可能になるようにすることだけです。しかし栄養が落ちていますから手術が不成功となり、かえって命を短くする危険がありますが」「成功する確率はどの程度でしょう?」「私達の経験から九十パーセント成功しますとお答えしても、もし不幸な十パーセントの方に入れば、患者さんにとっては百パーセントの不成功率となります。この様な状況下では何の保証もありませんが、私どもを信じて手術をするか、しないかということになるのではないでしょうか。御親戚の方とも、皆さんでよく相談してみて下さい」

「奥さん、ここで大切なことは、患者さんに正しい病名を告知するかどうかということです」「いいえ、先生、主人には決して癌だとは云わないでください。仕事は大胆にバリバリやり、会社を大きくしましたが、本当は気の小さな弱い人です。なんとなく病名を察しているかもしれませんが、先生から「癌」と告げられてはどうなるか分かりません。それほど気が弱いのです。それから私以外の会社の人にも、誰にも云わないで下さい。お願いします」

そのような話し合いが何度かもたれ、また患者さん自身の希望もあって、二週間後に食道切除、脾臓摘出、可能な限りのリンパ節郭清、胸骨前食道再建術が行われたが、予想通り転移は膵臓に存在し、その一部は残念ながら切除不能であった。しかし術後の経過は良く、二週後には自分の口から食事も出来るようになった。だが術後の放射線療法や抗癌剤による化学療法はこの時点ではもう無理で、副作用による体力の消耗により、かえって死期を早めてしまうのは明かであった。

「先生、アイスクリームがこんなに美味いものとは知らなかったですよ。随分長い間食べたことがなかったからかなあ。ところでビールはいつ頃になったら飲めるようになりますか?大きなジョッキでグイグイと飲みたいなあ…」掌を口元に飲み干すような仕草をした。

術後早期には誤飲でむせることもあったが、通常の食事を支障無く食べることが出来るようになった術後八週で、自宅に退院することになった。

「もう退院して、本当に大丈夫なのでしょうか?」退院の前日、奥さんは秘かに中沢を訪れた。「大丈夫と言いたいところですが、そういう訳にはゆきません。私ども外科医の為し得ることは総て致しましたが、切除不能であった膵臓転移等は次第に大きくなってくるに違いありません。もう少し体力が回復されてから、お知り合いの病院に入院され、内科的に化学療法をする手はあると思います」「いいえ、放射線治療とか、また、その様なお薬も髪の毛が抜けたりして主人に癌ということが判ってしまいます。効果が確実なのであれば別ですが…」「いずれにしても、そんなに長くは普通の生活が出来るとは思いません。少しでもお元気な内に、ご家族の方とご一緒に生活をされ、

そして会社の仕事も出来るだけされた方が良いと思うのですが。ところで会社のほうは上手くいっているのですか?」「中古の外車の販売と修理をしていますが、主人のワンマン経営でしたので、なかなか状況が判りません。バブルの崩壊で、本当に不景気で大変です。ただ一人娘と会社の人との結婚が決まりましたので、少し安心したところですが…」と、心労にやつれた顔の奥さんは、肩を落とした。

翌日、夫婦揃って退院の挨拶にきた樋口さんは「先生、お陰さまで食事が出来るようになりました。そろそろビールを少しなら飲んで構いませんか?」とニコニコ笑いながら尋ねた。ひょっとして彼は、なにひとつ自分の病気に疑念を抱いていないのだろうか。とすれば医師としてこれで良いのかと中沢はまたもや不安になった。「自宅に戻られて、消化の良い美味しいものを少しずつ沢山食べた方が、病院にいるよりも回復が早いでしょう。早く元気になって、会社の仕事を前のようにばりばりやって下さい。」「ところで中沢先生、私の正式な病名は何と云うのですか?」不意に尋ねられた中沢は「ええっと、それは、前にも申し上げた単純な食道狭窄症という病気です。多少のビールは構いませんが、飲み過ぎると再発することがありますから注意して下さい」と汗ばみながら答えた。手術をしたといっても、先の短い進行癌の患者に直接尋ねられて、中沢はどうしてもその真実を告げることが出来なかった。不安げに中沢を見つめていた奥さんは、ふと目を外らした。

「樋口さん、貴方が最初に病院に来られたのは大雪の日でしたが、もう雪もすっかり融けてしまい、これから良い季節になります。奥さんとご一緒に散歩でもされて弱った足を鍛え直して下さい。すぐにお元気になりますよ」と中沢は、努めて陽気な声で二人を送り出した。

三

確かに治療の難しい悪性疾患の病名を、患者自身に告知することはいろいろな問題を抱えている。終戦前まではわが国に於いても、肺結核あるいは癩病などは不治のいわゆる「死に至る病」であり、業病として恐れられていた。医学の進歩により、多くの不治の病を治すことが出来るようになった現代においても、数え切れない程の難病が存在する。たとえば癌やエイズはその代表的な疾患であろう。もし貴方が、「貴方は癌です」と直接、医師の口から告げられたとしたら、一体どのような心境になるかを想像してみたことがありますか?

現代医療では、悪性腫瘍(癌など)といっても、種類、発生部位、進展度、発見時期などにより差があるが、根治例も多く、直ちに死に結び付くものではない。いわゆる慢性の疾患なのである。すなわち根治しないまでも徐々に進行し、息を引き取るまでにかなりの時間経過が存在するのである。しかし「癌イコール死」なる一般常識が、即時に頭を駆け巡り、告知された途端

に吾を失うのである。

元来、人間がこの世に生を受けたその時に、長くても七ー八十年の余命しかない「老化」という名の慢性疾患に罹患しているのに拘らず、である。「人間五十年、下天の内にくらぶれば、夢幻のごとくなり。一度生を得て滅せぬ者のあるべきか」と生者必滅を謳いながら、己だけの生命の有限さから常に目を外らしていたいのが、人間なのである。（註一）

常日頃、生まれたり死んだりする事例をよく経験し、死とは生の絶対否定として、そして生と不可分な存在であることはよく認識できる。また人間は生きているうちには決して死を経験できないにも拘らず、死の観念をもっている。しかし生の此岸から死の彼岸に渡り、戻って来た者は誰一人おらず、死後の世界が花園なのか、暗黒の闇であるのか、彼岸情報は皆無なのである。深い谷間をのぞき込み石を投げ落とすと、なかなか水音が聞かれない。不安になる。何時まで経っても水音が聞こえない。何も見えない、何も聞こえない。深い深い底知れない恐怖が死の観念に付きまとうように思われる。告知を受けた途端、この恐怖が吾を失わせるのだろう。

告知を受けた後、この大きな精神的ショックから立ち直り、冷静さを取り戻し、事態に対処するようになるにはある程度の時間を要する。勿論、患者の年齢、性格、環境等により異なる。「癌告知を受けた患者に対するアンケート調査」笹子三津留著（註二）によれば、ショックから立ち直るまでの時間は次のようであった。

当日の内に立ち直った…十六％、一日くらい…十三％、三日くらい…十五％、一週間くらい…九％、一ヶ月以内…二十三％、三ヶ月以内…五％、それ以上…五％、無回答…十五％

こうした極端な精神的動揺の後、或は告知されると同時に自分を取り巻く家族や仕事場などに思いを巡らせ、さらなる余震が襲う。

治療する側に立ってみれば、米国のように癌を告知することは「患者の権利の尊重」であるという考えが普遍的に定着している社会であれば、精神的にも、治療上においても非常に楽なのである。患者に対し、適切な言葉を選び、充分な配慮をしつつ正確な病状を説明し、困難や苦痛を伴う治療に協力を求めることが出来るからである。日本の医者は、患者の絶望的心理をおもんばかり過ぎて、かえって本当の意味での医療をしていないのかもしれない。

キュブラーロス（註三 E.Kübler-Ross）は、死を迎える患者の心理過程を、否認、怒り、取引き、抑鬱、そして受容の五段階に分けている。簡単に解釈すると「私の病気がそんな悪いものであるものか」「何で私だけがこんな…」「なんとかならないもんだろうか」「やはり駄目なのか」と希望の無い日々におびえながらも人間は、経日とともに今ある状態をあるがままに受け入れるようになる、というようなことなのだろうか。さら

に人間には、この受容した時点を再出発点とする力も備わっているようだ。医者は、患者のこの力を見くびっているのだろう。

中沢の若い頃は、先輩の医師の「患者さんには余ほどの事が無い限り、癌と告げてはいけない」の言葉に従っていた。三〇年前、縦隔の悪性リンパ腫の老紳士がいた。ある公社の副理事長であった。摘出手術を行ったものの根治性がなく、また再発を抑える適当な抗癌剤もない時代で、予後はきわめて悪いものと思われた。手術創が治癒した頃、「先生、悪い病気であることは判っています。あとどのくらいの寿命ですか？　私のことは全く心配ありません。はっきり教えて下さい。それによって残された命を有効に使いたいからです」と真剣な眼差しで迫られた。逃げ場を失って「正確なことは判りませんが、二年以上は無理でしょう。肺が侵されると息苦しくなったり、血痰が出たりします…」

彼は退院した後、けっして中沢の外来を訪れなかった。自宅には連絡がとれず、勤め先に電話したところ、定年までの二年を残して退職し、関西の方に移られたとのことであった。丁度一年六ヶ月後の夏の終わりに、彼は前触れもなく突然やって来た。痩せ細った身体に目だけは光り、口唇には軽度のチアノーゼを示していた。PL教に帰依し関西で奉仕活動をしてきたという。時には近所の大学病院で診療を受けたこともあったが、最後は自分の故郷札幌の、中沢の病院で終えたいと思い定めていたという。「これで思い残すことはありません。最後の最後まで、自分の思うように生きることが出来ました。有難うございました」と言って、入院三日目に息を引き取った。それ以来中沢は既に病期が進行し手遅れの症例や、他の疾患で急逝してもおかしくないような高齢の患者には病名を伏せることが多いが、正常な判断力のある成人で、病期も早期で根治性の高い症例には明確に告知するようになった。この場合には勿論、家族や周囲の人々との緊密な連絡と患者に対する充分な配慮が必要なのは勿論である。（註四．病期＝癌病期分類、臓器別にどの程度進行しているかを示すもの）

問題なのは、治療後の再発例や進行癌症例の（あとどのくらい生きていられるか）という予後の告知である。治療の限界を越えたこれらの臨死患者(dying patient)に、幾らなんでもその推測される余命日数を告げる訳にはいかない。ただひたすら患者の精神的、肉体的痛みを和らげようとするのが医療者の努めであろう。(terminal care)

死は終着駅なのか？　いやそうではなく、死は避けられない生命の最も重要な過程であるとすれば、死の告知は、医師にとっても避けて通れない重要な倫理的、哲学的課題なのである。

こうした告知が当然のように行われている米国であってさえ、告知を巡る医事紛争があるのである。

A.［癌の告知により患者は絶望し自殺をしてしまったので、

告知をした医師に責任がある」という訴訟である。しかしほとんどは患者のうつ状態という病的精神異常に原因があり、医師の責任が問われた裁判例は少ないようである。

「末期医療に関するケアの在り方の検討会報告書」厚生省などによると、末期状態を告げる際に考慮すべき状況として次の四項目をあげている。

①告知の目的がはっきりしていること、
②患者に受容能力があること、
③医師及びその他の医療従事者と患者・家族との間の充分な信頼関係にあること、
④告知後の患者の身体面、精神面でのケア、支援ができること、である。

これら四項目のうち、自殺と関係して特に問題となるのは①と②で、この二項目について検討した上で告知が適当と判断したのであれば、医師が責任を問われることはないだろうと木下健治らは述べている。(木下法律事務所)

B.［病名を告知していない患者に、思わぬことで病名が漏れ、患者が自殺、あるいは強い精神的なショックを受けた責任］

特別な意図（患者への精神的な打撃を与えようとする）が無い限り責任を問われることはないが、医師は不用意に病名が漏れないように努力すべきである。

C.［告知に対する家族の反対］

患者本人が告知を希望しているのに拘らず「癌と知ったら可哀想」とか「癌と知ったら、家族が面倒をみるのが大変になる…」などの理由で家族が告知に反対の場合では、「患者の知る権利と自己決定権を尊重する」ということから出発すべきで、前記四項目を満たしている場合には、告知しなければならない。

D.［家族への告知を拒否する患者］

患者から「家族や肉親に癌と言わないでくれ」と言われ、後になって家族から「どうして教えてくれなかったのか」と非難された場合、患者自身から「教えないで欲しい」と依頼された以上、教えるべきではない。これは「守秘義務」という問題とともに、家族に伝えることが、患者の利益を侵害することもあり、遺産相続上の骨肉の争いを引き起こしたり、患者の財産上の損害を発生する危険があるからである。(註五. 癌告知をめぐるトラブル、岡田清、木下健治：メデイカル朝日1995－6より引用。)

「告知とは」

告知という日本語に相当する英語は、Truth telling（真実を告げ続けること）である。これは発病当初や終末期に、単に病名や予後を「宣言」する事ではなく、病状の変化するプロセスのおりおりに、患者や家族の説明を受けたいとする希望に対

し、誠実に真実を答え続けることなのである。そのためには患者が勇気をもって質問し、家族も患者との会話におびえず、その質問に答え、慰め、苦しみをわかち合うように努力することが大切である。そうした意味での癌の告知は、相互に信頼する患者、家族、医師たちの真実の人間関係の連続の中にあるべきである。（註六、季羽倭文子）しかし現実に於いては困難なことが多い。

四

食道癌の樋口さんが、退院して二週間ほど経ったある日曜日、樋口さん本人から中沢の自宅に電話が掛かってきた。「本当は病院に出向き、先生と直接お話すれば良いのですが、病院に行くとなると家内が付いて来るので、ちょっと家内に内緒の話なので…。実は、私の病期が癌であることは良く知っています」と語りだした。慌てた中沢は話を遮り「私がこれからそちらに出向きますから…」と近所のホテルのロビーでの約束をとりつけた。そこでの彼の話を要約すると、かなり前から食道の詰まり感があり、なにか変な病気ではないかと心配していたが、病院に行くのが恐いので延び延びになっていた。ところが知り合いの医者に癌かもしれないと脅され、急遽検査することになったという。検査した途端にその内科医が「出来るものなら一日も早く手術をして貰ったほうが良いですよ」と顔色を変えたので、もう間違いないと確信した。また退院時の先生の話を聞いて、逆に余程悪いのだなあと見当を付けました。手術の後も病名に無頓着のような顔をしていたが、これは癌と医者から告げられ、がっくりと落ち込む小心者の私を心配する家内のためで、ですから私が知っていることを家内に内緒にして欲しい。今は夫婦共々努めて明るく振舞っていますが、もし可能であれば検査入院ということにして化学治療もやって欲しいとのことであった。

中沢は正直なところホッとしながら、「承知しました。でも再発し易いので、元気なうちに好きなことをやって下さい。こちらも可能な限りの治療をやってみましょう」と言ったが、病名に就いては、口に出して肯定も否定もしなかった。

そんなことから退院後一ヶ月程で再入院し、一クールの化学治療を行い、さいわい副作用も少なかったので早々に退院することができた。

その後二週毎に外来通院していたが腹部の転移性腫瘤は次第に大きさを増し、疼痛を訴えるようになり、十月の末には三度目の入院となった。「先生、今度は最後までお世話になります。この約六ヶ月の間、借金の整理をしたり、いろいろ始末をつけてきました。もう心配ありません」と樋口さんは廊下の片隅で中沢に小声で挨拶をした。窓辺から秋の斜陽が射込んで、エレベーターのドアに黄葉の梢の影をぼんやりと写していた。

入院後の樋口さんは、次第に無口になって、個室のベッドに座り込み、ピンセットを使って複雑なジグソーパズルに夢中に

なっていた。病室から戻った婦長が「先生、樋口さんは、残された人生の時間を、あのパズルに織り込んでいるようで、見ていてとても辛いです。可哀想で、可哀想で…」と目をしばたかせた。「いや、おなかの鈍い痛みと心の傷みを紛らわせようと必死なんで、夢中になれるものであれば何でも良い。そう、新しいジグソーパズルを買って差し上げてくれないか」と中沢は言った。

いつの間にか落葉の季節から雪の季節に移り変わっていた。経口的鎮痛剤では効果が次第に少なくなり、硬膜外チューブにインフューザーポンプを使用して塩酸モルヒネなどの持続注入が大きな効果を示すようになっていた。十二月になると転移は腹部にとどまらず、肺、心嚢などにも認められ、胸水、腹水が貯留するようになった。もう廊下を歩き回ることもできなくなり、ベッドに寝たきりの状態になっていた。

「先生、来年の六月には、初孫が、できるのですが、それまでは　無理ですよね…」息苦しいのか、途切れとぎれに、聞くとはなしに呟いた。「お孫さんが?それはそれは。そういえば、お宅のお嬢さん、五月に結婚されたんですってね、会社の跡継ぎができて本当に良かったじゃないですか。樋口さんも頑張らなくては」と話をそらした。

中沢の頭には、先ほど診たばかりの彼の胸部レントゲン写真がこびりついていた。そこには無数の肺転移と、癌性心膜炎による拡張した心陰影があり、心嚢内の貯留液で心臓が圧迫され、いわゆる心タンポナーデという状態を引き起こし、ショックとなって、いつ命を終えても不思議はないのであった。中沢は迷っていた。もしこの貯留液を除去すれば、しばしの小康を得ることが出来るが、かえって苦しみの時間を引き延ばすだけのことではないのか。彼にとっては、どちらが幸せなのか。

案の定、翌朝より血圧が下降し、ショック状態となった。中沢は、直ちに田中医師に命じてその六〇〇ccもの心嚢内貯留液を除かせた。血圧はすぐに上昇し始め、夕方には意識も回復して、かすかに笑みを示すようになった。これを見た中沢は、こうした治療を少しでも躊躇したのを悔やみながら、まずは一安心と大きく吐息を漏らした。雪のちらつく夜半、帰宅するとテレビは大晦日の番組を流していた。

五

胸部外科は、胸部に存在する臓器の疾患の外科治療を担当するが、正式に厚生省が認可した標榜科目ではないので、十年前頃から公的病院では胸部外科とは標榜せずに心臓・血管外科と呼吸器外科とに分けている病院が多い。中沢の病院でもこの二つに分けて標榜し、心臓血管系を主とするものと肺、食道、縦隔等を主とする二チームの医師群に分けてはいるが、実際には医師の人的節約の意味でお互い協力し合って診療している。病棟には心臓の患者も居れば肺の患者もおり、当然臨床検討会も合同で行っているのである。

五十名の患者の一人一人の病状と治療効果を検討し終った頃、主治医の田中が「先生、樋口さんのことなんですが…」と言いにくそうな顔で話しだした。

「今日、娘さんの夫という人が来て、多分、初めて見舞いに来たと思うのですが、しばらく患者さんを見舞った後、私に面談を求めました。病状の説明を聞いた後、彼は私に（社長の重態なのは良く判りました。ここは一つ、尊厳死でお願いできませんでしょうか）と言われましてね」「それで君は何と答えたの？」「尊厳死ってなんのことですか？と聞き返すと（新聞などでよく見るのですが、治る見込みの無い重い患者に対して、その人間の尊厳さを守るため、あまり苦しまないように楽にしてくれるのが本当の医者ではないですか）と言うんです。安楽死のことですか？と聞き返すと（安楽死は法律的に駄目だそうなので、尊厳死ならば良いのでしょう）と押し付けがましい大きな態度で言うもんですから、それに説明したところで理解してくれそうもなかったので…、なかなか難しい問題です、明日にでも中沢先生と話をして下さいとだけ答えて、その人を帰しました」「何を言っているんだ。尊厳死とは、患者さん自身が願うことで、他人がとやかく言うべきことではないんだ、と怒鳴れなかったのか。樋口さんはまだ意識もはっきりしており、彼自身苦しくてもまだまだ生きたいと願っているんだ。それくらいのことも話せなかったのか」入れ歯に気を取られ、苛ついていた中沢は、田中医師のこの話に神経質に当り散らしたのであった。新年になり、初めての回診で「明けましておめでとう」と挨拶をした中沢の手を握り、目を潤ませていた樋口さんを思い起こしていた。

一般に患者さんが重篤な状態になると、今まで見舞いに来たこともない親戚や身内の人が急にやってきて、「何でこんなに悪くなったんだ。医者や看護婦の責任だ」とばかり騒ぎ立てる人たちがいる。患者の家族の手前、如何に心配しているかを示すためなのか、遺産の分け前を頭に描いているのか、とにかく患者の家族や医療従事者を悩ます人たちのいることは事実である。憤然とした中沢もすぐに気持ちを鎮め、明日はよく説明をしなくてはと思い定めた。

六

歴史的にみた［安楽死］EUTHANASIA, mercy killing（慈悲殺）

英語のeuthanasiaはギリシャ語に由来しており、eu（よき）thanatos（死）との合成語で、安らかな、苦痛の無い死を意味した。ギリシャ・スパルタでは、弱者特に先天性の異常児については棄子とし、またローマでは奇形児は即刻殺してよいと法律で許可をした。日本では、明治時代でも重症な奇形児が生まれると、産婆が直ちに濡れた和紙を児の鼻口にあてがい、産声を上げる間もなく児を亡きものとし、母親には「死産でした」と報告したという。こうした生後通常な生活を営めない子を亡

きものとする弱者抹殺の他に、ゲルマン人は、部隊の移動に支障を来す老兵や傷病兵をその予後の不良さもあって慈悲死とした。(弱者切捨て論)

快楽は善、苦痛を悪としたギリシャの哲学者エピクロスは、死の瞬間に身体の全ての機能が停止し、感覚も意識も喪失するので、死はなんら苦痛ではない。来世は単なる虚構・無に過ぎないとした。しかし、仏教などの宗教家は「人生の道のりの先が無の世界だとしたら、人生の旅はあての無い旅である。死の彼岸に人生という旅の本当の目的地がある。死後の永遠の生を信じる者にとっては、死は悲しい敗北ではなく、永遠の生命の門出である」と説く。

このように彼岸を信じ、極楽往生や死後再生を願う者にとっては、死にぎわの安楽さが重要であり、また何人たりとも安らかな死を願うのは当然のことである。古代ギリシャでは、彼らの間に「良き死」を達成するための他殺または自殺を認める風俗があり、安楽死についての真剣な議論があったという。

ヒポクラテスは既にその時代、「人は、より安楽な死を願うが、自分自身の慈悲者たりえない」と否定的な考えを述べている。

キリスト教等の宗教的な教えとしての生命第一主義：命は絶対貴いものに対して、神の存在を否定するようになった近代、人間の生命も自ら管理する権利があるのではないかと主張するようになった。優生保護法による人工中絶がそれである。

ヒトの生命の始まりを特定することは非常に難しい。即ち、生命の誕生を授精の時とするのか、着床妊娠の何時の時期から、あるいは赤ちゃんが母胎から外界に出た時をもってその始まりとするのか、明確な線を引くことはできない。松浦雄一郎ら(註七、近代医療と生命倫理)は、人の命の始まりを学問的意味、機能的な意義により次のようにまとめている。

① 授精(遺伝的個体の成立)
② 着床(母子関係の成立)
③ 妊娠四ヶ月(ヒト概形の形成)
④ 妊娠六ヶ月半ば(二十二週、子宮外生活が可能)
⑤ 出生

「妊娠四ヶ月」は、それ以後の流産を法的に死産といい、それ以前の流産はヒトの死とはみなされない。わが国では、これ以外に死の概念を定義した法律はなく、法律上の死は生物死ではなく、社会死なのである。「妊娠六ヶ月半ば」は優生保護法上の人工妊娠中絶の可能限界(厚生次官通達)で、これ以後は母胎から独立して生存できるヒトとして認められる。さらに松浦らの文を引用すると、「確かに授精卵はヒトの始まりといえる。でも、人工授精後に不用になった凍結保存卵を廃棄するのを、殺人と非難する人は殆どあるまい。着床した胚子(胎児)を人工妊娠中絶することは殺人であると非難する人はあるが、中絶を、出生したヒトを殺すことと同列に論ずることはできない。

わが国に優生保護法があるのは子宮外生活が不可能な胎児の命を、それ以後の命と区別してとらえる社会的合意があることを示している」。これは、中絶（ある種の安楽死）を社会的合意で成り立っていることを意味している。また新技術発達から可能になった「先天性異常の出生前診断」に基ずく「選択的中絶」に就いて、倫理的な見地から検討し、親の生む、生まないの権利尊重、あるいは出生前治療という一方の利点に対し、他方は「弱者切捨て論」につながるとしている。医学の進歩した現代においては、この優生保護法を見直すべきとする意見がある。

「弱者切捨て論」

近年の延命治療の結果、脳死（脳幹を含む全脳機能の不可逆的喪失、恵迪創刊号参照）に限りなく近い状態、即ち大脳機能のみの不可逆的消滅の人が存在する。この様な人に対しても人の死とみなす意見がある。つまり人間の存在価値を知的認識力の有無で評価するために、社会的存在としての人間はもはや存在しないのだとする見方である。これは個体の死を、社会的死と同様に考えようとするもので、ある種の合理主義的、利己主義的死生観である。この論法は、幼児、重症奇形児、老人、精神障害者その他の社会生活に適応するのに困難な弱者の生命を無視することにつながる。この様な社会適応困難者を排除しようとする考え方は、近年における安楽死（反病苦死）の概念とは程遠い、身勝手な危険な思考であろう。（註八、唄　孝一）

七

「近年における安楽死」

日本に限らずキリスト教の影響の強い欧米においては、命は神聖で尊いもの、如何なる命も救わねばならない、又極力延命に努力をすべきこと、という原則的な教えの中にあった。近代医学は、かっては生かせなかった未熟児の生命をとりとめ、あるいは意識不明の植物人間もライフ・サポート・システムにより長期の生存を可能にした。しかしこのような単なる延命は、痛みと苦しみの臨死患者にとって、意識の不可逆的な喪失の患者にとって、果して善なる行為なのであろうか。

「It's over, Debbie.(これで済んだよ、デービー)」

この匿名の記事がJAMA(Journal of American Medical Association)に出たのは一九八八年一月だった。

婦人科の癌病棟に呼ばれて行ったレジデントが出会ったのは、卵巣癌の末期で、呼吸困難と激しい嘔吐に苦しむ二十才の痩せ衰えた黒髪のデービーであった。彼女はただ、「もうこんなことは止めましょうよ」と言うだけであった。これを真剣に捕らえたレジデントは、この死を前にして疲れきっている彼女に必要なのは、「REST　休息」だとしてモルヒネ二十mgを静注する。じきに彼女の苦痛は癒され、そして永遠の安息の世界に旅立ったのである。これを読んだ読者の反響は大きく、この

レジデントが、本人、家族、主治医の了解も得ていなかったことから、この処置に至る手続き上の問題を喚起し、あるいはこれはもう殺人行為であるとする批判が続出したのであった。(註九、林田　基)

更にショッキングなことには、一九九〇年六月、ジャック・ケヴォキアン医師(Jack Kevorkian)は、彼自身の考案した自殺幇助器を用い、アルツハイマー病の女性の患者を初めとして、次々と安楽死を望む不治の病の二〇人にも及ぶ患者に、つぎつぎと手を貸したのであった。当然彼は殺人罪に問われたが、州によっては自殺幇助を問う法律がなく、法的処分は困難であった。(後出)

これより遡って一九七八年十一月、サンフランシスコにおいて、安楽死国際会議が開催され、既に次のような議決を行っていた。

① 各人は、疾病が進行して死が不可避になった場合には、単に死への経過を延長させるに過ぎない医療措置を終結させる権利を有する。

② この権利は、口頭、文書、あるいは正当な代理人のいずれによる表明であるとを問わず、患者の医療措置の続否を規定する。

③ 参加国(八カ国)は、各国の医師及び医師会に臨死の末期の患者につき、これらの治療措置を終結せしむるような倫理規定ならびに指針を確立することを促進する。

このように国際的にも自己決定権に基ずく安楽死や尊厳死を、法的に認めようとする流れがみられるようになった。

同年十一月、日本に於ても、日本安楽死協会が安楽死法試案を作成したが、一方、翌月の十二月、「安楽死法制化を阻止する会」が設立された。医療現場での治療や看護の意欲を阻害し、患者や家族の闘病の気力を奪うばかりか、生命を絶対的に尊重しようとする人々の思いを減退させていると反対の意向を示した。

「安楽死の種類」

一. 純粋の安楽死：臨終の苦しみを緩和させるだけで、生命の短縮を全然伴わない場合。違法性はない。

二. 狭義の安楽死：苦痛緩和の目的で麻薬を与えるが、副作用としていくらかの生命の短縮をともなう。問題はあるが、認める可能性がある。

三. 不作為による安楽死：強心剤、水分補給の投与により延命させれるが、患者の家族の要請で投与を差し控える場合。法的には問題ないが、医師の倫理観による。

四. 本来の安楽死：患者の意志により、生命を断つことで苦痛から逃れさせる。

五. 不任意の安楽死：患者が希望しないのに生命を断つ。四. 五. とも処罰されうる。

一九八二年、米国に於て重症ダウン症候群と内臓異常児の両親が、裁判所の許可を得て安楽死させ、一九八三年には治療しても根治できない重症の脊柱破裂の女児の手術を両親が拒否し、病院がこれを受け入れた。これらに対し米司法省は病院を相手どって訴訟を起こした。このように不治の病や臨死の患者自身の、あるいは家族の切なる願いに拘らず、法的不備の中で、訴訟に巻き込まれた事例が多数でてきた。

「尊厳死」

一九七六年から、米国に於て患者の生前意志（リビング・ウィル）を尊重し、無駄な処置を行わずに自然死に導く尊厳死に関する法制化が始まった。

これは有名なカレン・クインラン事件に端を発するもので、一九八五年には、多くの州でリビング・ウィルを尊重した自然死法を制定するようになった。一九九〇年には、患者及びその家族の意志により、治療そして人工栄養、水分補給の打ち切りをも連邦最高裁判所が認めることとなった。これは患者の自己決定権を重視したものである。

「日本尊厳死協会」

確かに患者本人の自己決定権を尊重するといっても、突発的な発病（事故など）により意識不明に陥ることが多いので、家族や後見人の代行が可能とはいえ、健常なうちに異常事態に備えて、自分の意志（治療辞退、拒否など）を明かにしておくリビング・ウィルの運動が広まった。

日本尊厳死協会は、一九七六年に創設され、安らかに、人間らしく死ぬ権利を求める「尊厳死の宣言書」の登録・保管をすすめることによって、自己決定権を確立し、その社会的合意の形成を目指す団体である。この宣言書の一通は登録番号を付して協会で保管し、他の二通は本人、最親近者がそれぞれ所持する。必要が生じた際に医師に提示するものである。日本尊厳死協会北海道支部は、札幌市北区北七条西二丁目（山京ビル八〇一）にある。（註十）

参考までに日本における尊厳死の宣言書を転載しておく。

「尊厳死の宣言書」

私は、私の傷病が不治であり、且つ死が迫っている場合に備えて、私の家族、縁者、ならびに私の医療に携わっている方々に次の要望を宣言いたします。

この宣言書は、私の精神が健全な状態にある時に書いたものであります。

従って私の精神が健全な状態にある時に、私自身が破棄するか、または撤回する旨の文章を作成しない限り有効であります。

一．私の傷病が、現在の医学では不治の状態であり、既に死期が迫っていると診断された場合には、徒に死期を引き延ばすた

めの延命措置は一切お断り致します。
二、但しこの場合、私の苦痛を和らげる処置は最大限に実施して下さい。そのため、たとえば麻薬などの副作用で死ぬ時期が早まったとしても、一向にかまいません。
三、私が数カ月に渉って、いわゆる植物状態に陥った時は、一切の生命維持装置をとりやめて下さい。
以上、私の宣言による要望を忠実に果してくださった方々に深く感謝申し上げますとともに、その方々が私の要望に従って下さった行為一切の責任は私自身にあることを付記いたします

年　月　日　住所　署名　印

米国には、病態や状況をより詳細に記した書類様式もある。

「ヘムロック協会(Hemlock Society)」

これは一九八〇年、カルフォルニアに生まれた非利益団体で、不治の病と診断された人たちが、自分の選択で安楽死を遂げる権利があると主張するグループである。(このヘムロックとは毒人参から採った猛毒薬のことで、ソクラテスが獄中で服毒したといわれている。)一九九一年、この協会が出版した「Final Exit」(最終出口)という自殺解説書および案内書は、あっという間に売り切れて世間を驚かせ、ニュースとなって世界中に広まった。如何に多くの人々が病に苦しみ、そして安楽な死を望んでいるかを物語る。そして又健常人であっても、自分の人生の旅路の果てを秘かに案じているのだろう。

平成五年三月、厚生省の調査によると、国民の八〇%が尊厳死を希望し、一〇%が安楽死を望んでいるという。高齢化のすすんでいる日本では、年々老齢者の占める割合が増え、その文化構造も変化してくる。奈良は斑鳩の里に吉田寺という寺があり、多くの参詣人で賑わう。いわゆるポックリ寺である。本堂から聞こえてくる木魚の音は、年を追う毎に大きく鳴り響いてゆくに違いない。

「安楽死法案の成立」

こうした世論の流れの中で、一九八八年にはカリフォルニア州、一九九一年ワシントン州に於て、安楽死の合法化が計られたが、賛成四十六%、反対五十四%で否決されたのであった。しかしながら一九九四年、オランダにおける安楽死法案の成立に続いてオレゴン州でも、全米初の安楽死法案が住民投票の結果可決されたのである。これは末期患者の自発的安楽死の申し出に対し、医師の致死薬処方の許可というかたちである。だがしかし、これはすんなりと決まったものではなく、反対派(カトリック教会、オレゴン・ホスピス協会、州高齢者協会、薬剤師協会など)と、賛成派(ヘムロック協会、オレゴン死ぬ権利協会(The Oregon Right to Die Organization)、オレゴン・アメリカ市民自由連合など)との激しいキャンペーン合戦の結果、オレゴン住民は、医師による末期患者の自殺幇助を合法化

させたのであった。

オレゴン州の法案では、かつて否決されたカリフォルニア、ワシントン両州の法案にある医師の薬物注射などによる積極的な安楽死ではなく、医師は単に致死的薬物の処方をするだけで、その薬を飲むか否かはあくまでも患者の意志によるものである。患者は、余命半年以内と診断されたオレゴン州在住の成人に限られるが、主治医の診断に誤りが無いかを確認する立会い医が必要で、また患者の意志確認に就いても、口頭、書面、証人、猶予期間などすべてに厳格なチェック体制が置かれている。（註十一）しかし、ポートランド連邦地裁は、この安楽死法案が成立したのにも拘らず、直ちにその施行を差し止めてしまった。

一九九六年三月、サンフランシスコ連邦高裁は、自殺幇助を禁じるワシントン州法を違憲としたのに続き、安楽死の象徴的存在のケヴォキアン医師（前出）に無罪の評決を下した。そこでオレゴン州政府は、この違憲判決を支援材料に、差し止め停止を求めて提訴するという。更に本年四月二日、ニューヨーク連邦高裁も末期患者の「死ぬ権利」を容認し、医師の幇助行為をも合法とする判決を下した。（一九九六年三月十一日、四月四日、日本経済新聞）

このオレゴン州で可決された安楽死法案の基本的な考え方は、自分の最後は自分の責任において自らの意志で決める「患者の自己決定権」、すなわち末期患者の「死ぬ権利」を容認するものである。

では、救急外来における自殺者の援助は許されるか？

一般的には「許される」とされる。生命の尊重は、自殺を図った者の生命に対しても妥当するからである。しかも自殺を図った者が真に自らの自由意志によったのか、病的精神状態によったのかは外部からは明かではない。取りあえず生命救助の処置をなすべきで、強制的治療の許される唯一の場合と考えられる。

しかし癌末期の激しい痛みから逃れるために計った自殺者を助けて良いものか、問題は残る。（註十二）

日本においては：

一九九一年四月、東海大学付属病院に入院中の多発性骨髄腫の男性に、家族の強い要請を受けた医師が塩化カリウムを注射、死亡させていたことが発覚。医師は殺人罪で起訴されたが、弁護側は「安楽死に準ずる行為で、控訴権の乱用」として、控訴棄却、もしくは無罪を主張した。

日本中の医師に大きな問題を提起したこの東海大安楽死事件は、一九九五年三月二八日、横浜地方裁判所は被告に懲役二年、執行猶予二年の判決を下し、さらに終末期の医療に関しての新指針が示された。

即ち、生命、死に対する国民の認識が変化し、安楽死に就い

ても新思潮が生まれつつあると指摘して、「患者の自己決定権」に基ずき、「緊急避難」として医師による積極的安楽死が認められるとした。

具体的要件として：

①耐え難い肉体的苦痛がある。

②死期が迫っている。

③苦痛を除くための方法を尽くし、代替手段が無い。

④患者本人が安楽死を望む意志を明らかにしている。

これらの四要件の全てを満たすことが必要とした。

本件においては、①と④を満たしていないことから有罪とした。

更に「間接的安楽死」、「治療行為の中止」に就いても、本人意志は勿論、昏睡状態などを考慮して、家族からの本人意志の推定をも認めた。

この判決は、オランダと同じレベルで、オレゴン州法案（前述）よりはかなり踏み込んだ判断といえる。

最近のＡＢＣニュースによると、オランダでは、昨年の総死亡者の二％の二、六〇〇人が安楽死であったという。

積極的安楽死に就いては、日本医師会、日本学術会議などが否定的であり、間接的安楽死にしても、本人意志を家族からの推定でよしとした点は、状況にも依るが、本人が望まない死を迎える危険性がある。このように患者の意志を厳格に判断するためのチェック体制等の具体的マニュアルの作成が今後必要となろう。オレゴン州の法案にしても、患者の死期（半年以内）の正確な判断が重要で、複数の医師の診断であっても「早すぎた死」を迎えさせないという保証はない。

近年の高まる医療費が、患者に医療費節減のための自殺を強いるものではないかという声もある。

「倫理委員会と治療制限の決定」

このように末期的患者の治療制限や安楽死については、多くの倫理的、法的問題がある。マサチューセッツ総合病院では十五年前から 最善ケア委員会(Optimum Care Committee, OCC)を院内に設置し、主治医の要請で回復困難な重症患者の予後の判定や、それに伴う治療制限や中止の助言や提言を行っている。委員会のメンバーは看護婦、外科医、法律家でもある内科医と優れた精神科医の議長からなり、基本的には「患者にとって善の法則」に従い、患者にとって何をするのが最善かを考えるもので、最終的には、治療制限の倫理的、医学的解釈による提言を行うものである。（註十四、T.A.Brennan）

尊厳死や安楽死などを考慮する際には、家族や主治医群だけではなく、こうした高度の医学的知識と経験を持つ委員の助言が必要で、日本の総合病院、基幹病院などにもこのＯＣＣの設置が望まれる。

判決が示した医師による延命中止の要件

	患者の状態	本人の意志
治療行為の中止	死の回避が不可能	家族からの推定も可
間接的安楽死 苦痛除去のモルヒネ投与など	耐え難い肉体的苦痛がある。 死が回避不可能で死期が切迫。	家族からの推定も可
積極的安楽死（注射など）	（間接的安楽死の要件に加え）代替え手段が無い	本人の意志に限り、家族からの推定は認めない。

（註十三．　文、表：一九九五年三月二十八日　朝日新聞）

八

例年にない大雪の除雪に腰を痛めた中沢は、ごろりと横になってテレビを見ていた。寒風の吹きすさぶ日高の牧場に、人間であれば百才をとうに越したという「シンザン」という名の老馬が映し出されていた。日本競馬史上に燦然と輝く名馬であったが、怪我で引退した後も大切に飼われ、多くのファンがこの懐かしの名馬を見に訪れるという。馬券など一度も買ったこともない中沢だが、聞いたことのある名前であった。あれっ、たしか競馬馬は脚を怪我すると、すぐに安楽死させてしまうのではなかったか、と訝った。

北大獣医学部出身の佐々木犬猫病院の院長に電話を掛けた。「競馬馬が骨折すると、すぐに殺してしまうと聞いたけど…、体重も重いので、立ったままでは治療が難しく、寝たままでは食事も水も飲めず、可愛相なので、仕方なく安楽死させてしまうそうだが、本当？」「いやあ、ちゃんと治せるよ。殺してしまうのは経済的理由さ。治っても前のように早く走れないし、餌代が損なのさ」と事も無げに答えた。「シンザンは血統も良く素晴らしい戦績だったので、その後種馬として馬主を随分儲けさせたようだが、その用をなさなくなった後も、余りにも有名になり過ぎたので、ファンのために無理して生かしているんだ。あんなにヨボヨボになるまで生かされて、シンザンにしてもいい迷惑だよなあ」院長は端息なのか、息を引きずるように笑った。「なんだ、あのテレビのシンザンは絞り滓か？」「そうさ、

俺達と全く同じさ。そう思わない?本当に嫌になるよなあ」と院長はまた笑ったが、この乾いた笑いには、老いさらばえてなお生き続けることの悲しさを嘆ずる自嘲の響きがあった。

「ところで、ライオンの群れのことをプライド(pride)と言うらしいが、どうしてグループとか言わないんだ?」「なんだい、変なことを急に聞いたりして。そうだ。確かにプライドと言うが…、そのうち調べておくよ」と電話を切った。

佐々木院長は中沢の高校時代のクラスメイトで、ロシア文学をやると言って北大に入り、いつの間にか獣医になってしまった変わり者なのである。彼は大学時代に恵迪寮で育ち、ますます変わり者の度合を深めていったが、中沢にとっては、機会ある毎に人生の助言や示唆を与えてくれる掛替えのない友人なのである。

昔、彼から北半球のツンドラ地帯に住むレミング(タビネズミ)の話を聞いたことがある。このレミングは、何年おきかに猛烈に繁殖し、草地を喰い尽くし丸坊主にしてしまう。その様な時にはどのレミングも興奮して、アフリカ草原に大量発生したバッタと同じようになり、北へ北へと集団移動し始める。ついには海中に落込み、膨大な数の個体が死んでしまう。これは過剰人口による種の保存を計るための集団自殺だという。種ないし集団が維持されてゆくためには、その成員の一部が適当な時期に死んでくれることが必要なのである。あまり早く死んでも困るが、年をとった個体がいつまでも生き残っているのは困る。住み場や食物を無駄に消費して、若い世代の生存の妨げになるからである。そして、それにはいつ死んだら良いかという最適の時期がある筈で、これがグループ淘汰説でいう「死の戦略」の問題なのだそうである。なにやら身につまされるような寂しげな話ではある。

この犬猫病院の院長は、このグループ淘汰説では解釈できないインドのハヌマン・ラングールという猿や、ライオンの子殺しの話などを聞かせてくれた。あまりにも面白いので、問いつめると、京都大学動物学の有名な日高教授の本を種にしていると白状したのであった。(註. 十五. 日高敏隆:利己としての死)

教授によれば、集団全体として生き残ること、すなわち絶滅の危険を避けてより多くの次世代を残すことが適応なのであり、それは必ずしも個々の個体の生存を目指すものではない。繁殖によって次世代に直接的に寄与することもなく、子孫の保護・養育の間接的寄与もなく、単に生き続け資源を利用することは「不適応」とされる。進化の方向は集団が適応するものだとすれば、個体にとって最も不適応と思える「死」でさえも、集団にとって適応的に定まっているのかもしれない。(厳佐庸:生物の適応戦略)このような論法でいくと、個体の死は、基本的には「種にとって善」であるように仕組まれたものであるという。個体にとっては不利なようであるが、種の維持にとっては有利な社会システムをもつ種が生き残って繁栄し、進化が

その方向に興ってきたとする見方が「グループ淘汰説」なのである。簡単に言うと、貧しい土地で若い息子達の存続のために（利他的）、姥捨的な人工調節の能力のある集団の方が、そうでない集団より自然淘汰において有利であるということなのである。同類同志の殺し合いを抑制するメカニズムをもつ集団は、たえず殺し合いしている集団よりよく生き残るだろう。多くの動物の種は人口調節能力を備えており、決して同類同志の殺し合いはしないものだとされた。

ところがハヌマン・ラングールという猿やライオンなどでは、雄同志の熾烈な争い（決して殺しはしない）に勝ち、群れを乗っ取った新ボスは、群れの子供を殺しつくす。新ボスは、子供が殺された途端に発情する母親と交尾し、自分だけの遺伝子を残そうとする新しい王国を作るのだ。時が経ち、老いがみえるようになると、自分のコピーである子供達世代に生殖権を譲り渡し、身を退く。こうしてひたすら自分の遺伝子を永続させようとすることが包括適応度を高めることであり、身を退くことも、死ぬことも自分の遺伝子を残そうとすることであり、その意味では、利己的であると説く。雌も、母性愛をかなぐり捨てて、新しい環境で自己の遺伝子を残すことに専念するようになる。ここには、愛の基本型と思われる母の子に対する本能的なものは存在せず、単に利己的なものが支配するという。

確かに人間は、生と死の対比の中で、生命に崇高さと尊厳性を求めた。ここがライオンや猿と違うところなのだろう。イラクのシャニダール洞窟のネアンデルタール人の化石は、自活能力のない身体障害者の仲間の世話をし、また死者を花で囲み葬ったという。ヒトの祖先と思われるネアンデルタール人にして既に死後の世界への思念があったというべきであろう。（註十六、永井　博）

また、カナダのヘヤー・インデイアン(Hare Indian)は、猟の獲物が全く無い時でも、「守護霊」が「生きよ」といっている限り生への執着が強く、自分の腕に傷をつけ、流れ出る血を火にかけた鍋の中に落として、それを啜るというようなことまでして生き続ける。しかし、守護霊が「お前は死ね」と言ったら、あっさりと生への執着を捨て、周りの者に「私は死ぬ」と宣言して、薬や食物を断ち、二、三日後には死ぬという。また「良い死に顔」をして死んだ者の霊魂は、再びこの世に生まれるべく旅につく。だから良い死に顔で死ぬことは、死にゆく人の願いでもあり、見送る人の願いでもあるという。（註十七、原ひろ子）

九

安楽死や尊厳死のことを聞くために、「翌日、来る」と言った娘の婿さんは、いつまで経っても現われなかった。これらを説明するのは一向に構わないが、面倒な願い事をされてはかなわないなと心配していた中沢には、内心ほっとした思いでもあ

った。心タンポナーデによるショック状態から脱した樋口さんは、少し元気を取り戻したかのようにみえた。中沢の冗談に笑顔をみせ、「先生、これ、良かったらどうぞ」と言って、二か月前に完成させたチンチラ兎の複雑なジグソー・パズルを指さした。「残り少ない人生の時間を織り込んでいるみたい…」と婦長に言わせたあのジグソーパズルであった。哀しくそして重い重い贈り物のように思えた。

麻酔医による手厚い鎮痛処置のおかげで、樋口さんは全く痛みを訴えなかったが、肺野への転移が呼吸困難を次第に増加させていった。一月の末、樋口さんは昏睡に陥った。全く苦痛を訴えることもなく、静かな、安らかな最後であった。

丁度一年間のお付き合いだったなあと、中沢は死亡診断書を書きながら、あの複雑なジグソーパズルを完成させた時の彼の満足そうな顔や、あれやこれやを思い浮かべていた。どの症例においても、常に学ぶことが多く、今回も又、一人の患者を通して告知、尊厳死、安楽死等の問題をことのほか考えさせられたが、医師として、人間として、樋口さんに充分なことをして差し上げられたのかと反省する中沢であった。

病室では、患者さんとご家族のお別れの時間が過ぎて、看護婦さん達は心電図のモニター等の医療器具の取り片付けに忙しそうであった。

「婦長さん、樋口さんの最後の清拭は、私も手伝いますよ」と言った途端、入れ歯が口からはみ出した。中沢は、口をモゴモゴさせながら、またテレビの老ライオンを思い浮かべていた。

一度は群れ(pride)を引き連れ、子を生し、威勢を誇ったが、いつの間にか老いて歯を失い、群れから一人遠く離れてしまった老ライオン。ああ、そうか。群れにいるからこそ誇り(pride)なんだ。そうすると入れ歯は、ひょっとして旅の終わりの告知なのかもしれないと、ふと中沢は思った。

(この文中に出てくる症例は、総てフィクションで、実在ではないことをお断りしておく。1996,3,27)

参考資料

註一：下天：化天：化楽天：六欲天の第五。ここに生まれた者は、自ら楽しい境遇を作り楽しみ、八千年の寿命を保つ。広辞苑。

註二：笹子三津留：家族が癌にかかったとき、築地書館、一九九二年。

註三：キュブラー・ロス：命ある限り(To Live Until We Say Goodbye)，産業図書、一九八二年。

註四：病期分類：発生臓器により異なるが、通常T．N．M．分類が用いられる。T：腫瘍(tumor)の大きさ、深さ。N：リンパ節(node)転移の度合。M：遠隔臓器への転移(metastasis)の程度。

註五. 岡田清、木下健治：癌告知をめぐるトラブル、メデイカル朝日、六、五三、一九九五年.

註六. 季羽倭文子：がん告知以後、岩波新書305.

註七. 福原照明、松浦雄一郎：近代医療と生命倫理、広島医師会、一九九五年.

註八. 唄　孝：安楽死、医科学大辞典、講談社、1982.
（東京都立大学法学部教授）

註九. 林田　基：尊厳ある死を目指す、SCOPE,31,1992.

註十. 日本尊厳死協会北海道支部：TEL:FAX(011)736－0290
日本尊厳死協会：東京都文京区本郷二－二十九－一
TEL(03)3818-6563, FAX03-3818-6562.
会員になるためには会費を要する。年会費：三千円、終身会費：一〇万円。

註十一. 小沢直子：強調された患者の自己決定権の尊重、オレゴン州住民投票で可決された米国初の安楽死法案。メデイカル朝日、1995－1.
デンバー在住医療社会学者

註十二. 福原照明：広島県医師会会長、註七に同じ.

註十三. 一九九五年三月二十八日、朝日新聞、夕刊.

註十四. Troyen, A.Brennan:倫理委員会と治療制限の決定。Ethics Committees And Decisions to Limit Care, JAMA:1988;260,6:803.

註十五. 日高敏隆：利己としての死、弘文堂、一九八九年.

註十六. 永井　博：死の哲学、医科学大辞典、講談社.
（筑波大学哲学・思想学系教授）

註十七. 原ひろ子：ヘヤー・インデイアンとその世界、平凡社.



《現寮生座談会》

恵迪寮生の生活と意見

―コンクリートの中からの青春讃歌―



司会　今、皆さんに、自己紹介をしてもらいましたが、沖縄も含めて結構全国各地出身の恵迪寮生が、今日こうやって集ってくれました。われわれ同窓会は「恵迪」の発刊が途絶えて久しいので、雑誌「恵迪」を復刊しようと、去年恵迪寮同窓会誌「恵迪」としての創刊を実現し、喜んでいました。しかしさっき雑談していてわかったのですが、今も寮内で「恵迪」が発行されているということで、現寮生諸君には済まなかったナということになりますね。

同窓会誌「恵迪」創刊号ではOB十二人で座談会をやり、恵迪寮に育った人間が恵迪寮を通じて何を学んだか、現在の寮生に発信すべきものは発信しようと話合いました。今度は現寮生がOBに物申すことで座談会を開いて「恵迪」に載せようと考えたわけです。

恵迪寮は今、どうなっているのかをOBに知らせる意味でも、生活の状況――たとえば文部省に言わせれば全部個室なのだが実際はどうなのか、その背景にある寮生諸君の考え方哲学とでもいうべきもの、或いは委員会の構成や寮運営などの実態と考え方についてなど、ザックバランに話してほしいと思います。

伝統＝理念と形式

D君　恵迪寮の生活というのは、僕は生活形態ではとて

出席者

井藤智鈴（学部・学科・所属部屋）
兵野剛司（経済・経営・め組の女）
伊藤有（経済・経済・開識社）
勝矢直樹（文・文・寮歌普及委員会）
喜屋武幸容（法・法・開識社）
奥田愛（文・行動科学・開識社）
島津智子（農・266期執行委員会）
斎田綾（教養・文1・幼稚園）
田中康子（農・森林・開識社）
酒向章哲（農・森林・勝手にしやがれ）
小原崇（理・地域物理・楡陵社）
鯉沼潤吉（理・地質鉱物・楡陵社）
山田哲史（医・医・〝恵迪〟編集委員会）
武長康裕（工・情報系・開識社）
禰宜元慎太郎（農・畜・図書委員会）

司会

幸健一郎（工・合成化・ゴキュ・カツ）
高井宗宏（昭三十年入寮・同窓会現寮部会長）
（昭三十一年入寮・同窓会事務局次長）

日時　平成八年三月九日（土）

場所　KKR札幌（札幌市中央区北四条西六丁目）

も泥臭いと思うし泥臭い中で個性を出してつき合って行く。意見を発表するばかりでなく、交わしていく、そして個性を尊重しながら全体としてまとめて行くことだと思っています。入寮選考問題にしても答を探し続けているのだと思うし、生活のさまざまな局面で、或いは寮運営上の問題で、答を探し続けていくものだと思っています。

司会　昔は、入寮宣誓式があったのだが、今はどうなっていますか。

D君　入寮したら面接が行われます。面接の部屋を真っ暗にして、一人坐らせられて。宣誓式といわないが形式は昔の宣誓式でしょう。

B君　昔からの、伝統的な形式を守ったり、復活させたりしていますが、D君が言ったことは、恵迪の理念があってそれが或る形式になって現われる――その形式は理念は変らなくても変ることがあるという意味で、現状で例を言えば、新寮も十年過ぎて部屋のあり方にしても、個室でなければならないとか複数部屋でなければならないと規定するのはだめだと思うし、もっと自由に見直してみようという考えがあるのは当然だと思うわけです。

司会　現在、個室が三分の一、あとは同居部屋、大部屋と聞いているがそんなところでしょうか。ところで新入寮生は自分の住む部屋やどうやって決めるの？われわれのころは、寮の部屋は、部単位、サークル単位になっていて、新入生の方から自分のアタックもあるし、新入生へのの入りたい部屋を希望して決めたものだが。

K君　今も実態は昔と同じなのではないかなと思います。在寮生は部屋ごとに部屋紹介を行い新入生が選ぶようになっていて、どんなことをやっているグループの部屋なのかは、パンフレットで知らされます。もちろん個別に同郷とか高校の後輩とか、何らかの縁のある新入寮生を自分の部屋に誘うというようなことは今も昔も同じでしょう。

D君　現在は個室へ行きたいとか、複数部屋は勧誘活動もあり、自分でその中から選んで行くわけです。

司会　こうして聞いてみると昔とちっとも変ってないなアという感じがするが、入寮面接、これは少々威圧的だろうね。

B君　新入寮生の質問をきいて答えてやったりしますが、恵迪寮生としてお互い、しっかりやっていこう、と確認し合うわけです。こちらは威圧的ではなくても新入寮生にとっては緊張の時間には違いないと思います。

司会　現在、複数で生活する部屋つまり大部屋ということだが、どうなっているの。

K君　ブロックを部屋にしたりしています。一棟の各階が二ブロックになっています。一ブロック十人位。

司会　一ブロック一部屋で大体十人位ずつ、多いので十七人となると部屋替えなんか大変だろうね。

D君　そりゃ大変です。年二回部屋替えしますが、十人の部屋も十五人の部屋

もありとてもややこしい。六月と十二月の二回執行委員交替期ですが、十二月は新入生の分のアキが出来るよう寮を出ていく人を部屋ごと調整して計算するわけです。

伝統行事＝ストーム・寮祭・観楓会

司会　寮の行事としては、まず入寮コンパをやるでしょ。その前に寮歌指導なんかもやると思うのですが。

一同　（そのとおり）

D君　寮歌指導も入寮歓迎コンパもやりますが、ストームも伝統を受継いでやってます。

ストームで部屋まわりすると一晩じゅうかかって朝五時や六時になってしまう。

J君　いや、十二時間では済まなかったよ。ストームやらない寮生は少ない。ほとんどの寮生がやります。

C君　昔はどの位やったんですか。

司会　新入寮生歓迎会、寮祭もストームは欠かせなかったが、全寮行事でなくても何かにつけてストームをしていたようだ。六十室全部まわると五・六時間かかったと思いますよ。

C君　寮内で、一年目、二年目あたりで経験していない人がいると思います。

K君　今はストームは十二時以前にスタートして、ストームをかけたからには全室まわることになっているのでやたらに出来ません。どこの規則か知らないがとにかく全室まわる。これが礼儀なのでしょう。相当な覚悟がいります。

司会　寮祭は何日位やるの。

一同　（三～四週間です）

部屋デコは最後です。前夜祭、女装コンクール、仮装行列、運動会、そして恵迪座の演劇があります。恵迪座は最近では毎年上演され、寮祭の柱の一つになっています。三～四週間というのは少し長すぎるかな、とも思いますが。

D君O君　観楓会もやります。支笏湖か、定山渓でやります。どちらに行くにしても全員歩いて行きます。

司会　こりゃ凄い。支笏湖、定山渓への徒歩旅行は、われわれ以前の古い伝統で、まさに伝統を復活させてくれたわけですね。

観桜会はやっていますか。

O君　幔幕は張りませんがやっています。敷物を敷いて。花も見ますが、ストームもやります。ストームは戸外の方が気分がいいと思います。

D君　あとは冬のジャンプ大会ですが、これは昭和四十二年ごろ始まったようで、三十年も続くと伝統行事とでも言われるようになって来ますね。

B君　昔は仮装行列にしても部屋デコにしても市民が親しんでくれたと聞いていますが、今は市民が親しむというような関係ではありませんね。社会の発展の中で恵迪寮の行事は社会的には大きな位置ではなくなったのでしょう。

司会　われわれの頃は円山へ列を連ねて、太鼓たたいて出かけて行って帰りは四丁目で、当時は市電が交叉していたのだが、そこでストームやって電車をとめ

て。市民は嫌な顔もせず、遠まきに見物していて、市電の中から手を振る人もいたり、皆んな楽しく見ていてくれた。交通整理の警察官も、ストーム終るのを待っていて、良き時代だったのかも知れませんね。

G君　今は、クラクションの嵐の中で交通をストップさせてストームをする、といった感じです。四十年で、こんなに変るものなのかしらと思います。

司会　われわれOBで外でストームやろうか、と言ったことがあるのだが、ヨレヨレでミットモナイからやめようということになったことがあります。ストームは若者のもの、青春の意気溢るゝ思いの象徴ですよ。

一同　（OBの人にストームやってほしい――）

活躍する委員会

司会　今、寮の委員会の構成はどうなっていますか。

G君　寮務・炊務、会計の三委員会があり、それぞれ六名の委員ですから、合計十八名ということになります。

司会　現在の恵迪寮には食堂はないわけだが、炊務委員会は何をやってるんですか。

J君　（ちょっと憤然として）毎晩委員会の食事を作り、委員会全体の活動を支えています。それに「スペシャル」を全寮生向けに作って提供しているわけで、食堂がなくても仕事はあります。

F君　炊務は結構大変ですよ。

D君　会計や炊務は夜も常駐しているし、郵便の処理やアルバイトの紹介など沢山仕事があります。

N君　会計も大変で主な徴収業務は部屋代三千円、自治会費千円、光熱費が四、五千円で、合計八千円から九千円位が一人当たりの毎月の金額です。

司会　高いとか、安いとか言われますか。

D君　自治会費千円は断っても、部屋団と負担区分の分は払ってもらわないと困るのですが、全部払わない人が二、三十人います。部屋代と光熱費はそのまゝ納めてしまう金で寮の自主運営に関係ない費用負担なのに、理解をしていないのでしょう。部屋代だって一人一日アルバイトしたら払える金額なのですが。

司会　われわれの頃は金がなくて払えないのがいたが、今は違うと思います。滞納して寮を出た人もいるでしょう。

B君　払わないで出てしまった人が問題なのです。電話したり、督促したり、ひどい人は実家さえ不明で徴収のしようもありません。中にはオレは負担区分反対だからというのがいたり。反対でもいいから払ってくれというのですが。

司会　昔、懲罰委員会というのがあって滞納した寮生への対処をしたものです。

M君　入退寮の決定権が寮生にないので、滞納、未払いに対する懲罰は寮生に権限がありません。負担区分滞納は当局の問題ではないかと思います。

司会　寮生大会で「こういう場合は退

寮せよ」と決めたらどうですか。そのほか委員会の活動はどうですか。

D君　文化活動もあります。士幌村のロッジの運営です。飲酒事故対策委員会では、懲罰ではなく事故防止のための活動をしています。

寮生大会は滅多に開かれません。代議員会が開催されます。検討すべき議題が出たら部屋会議を開き、その都度代議員を決めて代議員会に参加します。代議員を任期を決めて選出しておくという方法ではありません。今やっている方法の方が合理的だと思います。

寮歌の伝承

司会　話題をかえて寮歌の方に移りましょうか。今年の寮歌は決まりましたか。

C君　明日、曲の投票が行われます。歌詩の方は去年のうちに決まっています。応募は結構ありまして歌詩は五篇の中から選ばれました。曲は四曲出ています。

寮歌は毎年、作られて来ましたが、残念な事に去年は途切れました。今年作りますので伝統は続いていると思って下さい。新寮になってから一回だけとばしてしまったわけで残念です。

司会　入寮したら全寮生に呼びかけて寮歌指導をしているのですか。

D君　していますが、呼びかけても、義務として強制していませんので、寮歌を知らない人も多くはありませんが、いるわけです。

寮歌をうたうのは「酒をのもうか」といってのみたい人がバラバラと集まって来て酒をのむ、というのに似ています。寮歌をうたいたい人が好きな寮歌をうたいますが、「有名」な寮歌が中心になります。

司会　うたわない人というのは何人ぐらいなの。

G君　数字では言えませんが、個室の人は寮歌はウットウシイという人もいて、概して個室の人の方が寮歌を避ける人が多いと思います。

司会　寮祭とか入寮コンパとかの行事でうたう寮歌は決まっているの。

M君　結構たくさんうたいますよ。必ずこれをうたわなければいけない、なんて決めているわけじゃありません。いろいろな寮歌。また寮歌じゃないが「札幌農学校校歌」や「瓔洛みがく」は大抵のときにうたいますよ。コンパをやれば魔神の呪」なんかが愛唱歌みたいです。

司会　こうして話をきくと、寮の行事では寮歌をうたい、寮歌は作られ続けており、伝統は守られている、ということになりますね。

O君　寮歌祭は年に二回、新入生歓迎のとき、それから寮祭に開かれているわけです。

M君　寮歌というのは聞くよりも自分でうたうと感情がこもって来るものです。

司会　さっき言っていた大正六年の「魔神の呪い」は私も好きな寮歌です。自治の精神などしみじみとします。ところで昭和三十二年度の「花綵乱の」まで

で、寮を出たあとの寮歌は知らないですね。新しい寮歌をしばしば聞くという機会がないからだと思う。三十年代からのいい寮歌もあるでしょうね。

一同　（平成二年「我楡陵に」はいい。人気があります）

D君　昭和六十年の「沈黙の杜に」も昭和五十四年の「うす紅の」も人気があります。

自治＝大学交渉・入鉾・学生と先生

司会　寮歌の話はこの辺で終るとして、自治の問題に入りたいと思います。

執行部の継承性がないのではないかとOBから指摘されていますが、自治というのは自治の内容が継承されないといけないと思うのだが。

N君　たとえば入寮鉾考など運動としてつながって継続するものがないのでそう思われるのかも知れません。

司会　同窓会誌「恵迪」創刊号の座談会で言われているのは、寮の自治と集団生活は欠くことの出来ないものだという確信のもとに、当局にも、二つの部屋を一つにするのはいいじゃないかと認めてもらっても執行部が代わると元に戻ってしまう、というようでは自治の継承も何もなくなるという危機感なんです。学習部屋・寝室・居室の三つを一つにすることが物理的に可能で、そうしたいなら、確認したことを後からホゴにしたりするのではなく、継承し発展させることが大事だと思いますよ。

D君　文書をとり交していないのじゃないかな。

司会　文書で、と言うけれど、「この事は持ち帰らないと決められない」と言って、その場で文書にならなかったんですよ。

N君　あの時は交換条件のように大学から留学生などのスペースがほしいので、もう一棟明け渡してほしいという要求があり寮生の方が合意しなかったのだと思います。

司会　全棟ということではないが個室の壁を取り払って共同部屋にするのは認めるよ、というところまで大学が譲ったのに寮生側がこれに応えなかったというのは、矢張りまずいと思いますよ。

N君　矢張り今委員会がこれを引継ぐことを確認しなければならないでしょうね。

J君　学校当局も代がかわったら引継がれていないことだってあり、寮生だけの問題ではありません。

司会　J君のいうとおりだと思いますよ。当局も学生部長が代ったら、「そのことは知らん」とか問題もあります。当局に対し厳しく求めるものがあろうが、諸君も引継ぎをきちんとしてやってほしいものです。

一同　（うなずく）

司会　ところで大学との交渉は集団交渉じゃないとやらない、代表交渉はやらないと言っていませんか。

J君　それは違います。代表交渉もやっています。むしろ日常的には代表交渉になります。

D君　執行部しか代表交渉は出来ません。決裂した後の交渉は全体交渉ですが、執行部交渉は頻繁にやっています。

B君　日常的には代表交渉が中心です。むしろ、OBの方と恵迪寮にかかわる日常的な問題での交流がないので、寮生のやっていることが良く見えないということもあるのじゃないですか。集団交渉なんて、そうやたらにやれるものではありません。「大きな事件」の時に集団交渉になるのです。

司会　執行委員会が責任を持って事に当っているということを聞いて安心しました。

新入生に対する恵迪寮の案内、募集はどのようにやってますか。

F君　寮の案内は、大学が新入生に発送する書類と一緒に送ってもらっています。銓考は育英会方式といって家庭の経済問題優先になっています。

大学の案内と寮生の案内と、寮について異った視点での紹介になりますが、異っているものを同封した方がいいと大学でも認めてくれているわけです。

D君　大学当局のパンフレットには寮生活のことで質問があれば寮に問い合わせてくれ、と書かれているんです。

司会　入寮銓考権の問題なのですが、これは寮の基本的権利と思いますがどうでしょう。

J君　国の財産ですから、その使用者を国が決めるというのも道理だし、寮生活をする者を寮生が決めるというのも道理でしょう。我々は、「大学が募集しなさい。募集した結果は、われわれが認める。或いは、第一次募集は大学が六十名ほどの余裕を残して募集し、寮生が銓考委員会で決める」、といったことを大学に示していったのです。大学だって、我々だって、ノータッチというわけにはいきませんから。

K君　合格発表の直後、線引きの場に立会います。経済優先の銓考です。

司会　われわれの頃は、本当に困っている人、つまり経済尺度で三分の一ぐらい。あとの三分の一は寮に合った者、寮向きの者でやっていたが。

K君　それをやると恣意的だと言われます。主観的判断が強く働くから、そう言われても反論できません。

司会　寮生と大学当局の間の不信感をどうしたら解決できるのでしょう。

D君　当局には妥協点を見出す姿勢などないと思います。学生は一人前ではないとバカにしている節があります。

N君　僕はお互いが知らなさすぎると思います。たとえば学内にいる恵迪寮OBの先生ともっと交流し、知り合い、話合いたい。先生の方も寮生の方も、そういうことを積極的にやろうと考えたら、事情は大分変って来ると思います。

D君　OBでも先生として職務上の立場があり「私は何々委員だから」といったように自分個人と職分の二面があります。

幸さんが学生部長に対して激しい怒りをぶつけたら学生部長の顔色は変りますが、学生の言うことには動じません。OBが何千人いても、当のわれわれは学生

で先生が職分として学生と相反するとき抜きさしならないものがあるんです。

司会　言っていることはもっともだが、規則は曲げられないが運用で実質化することは出来る、ということはママあるわけです。

D君　日常的な交渉の場は、大方運用問題でやっています。

恵迪寮＝「きれいか」か「汚い」か

司会　ところで寮の中だが、物凄く汚い。靴をぬいで上るのに抵抗感がある。共用部分は掃除をさせればいいんだと思いますが。

N君O君　共用部分も生活の場です。あれでいいと思っているんだが、いけないかなあ。

司会　靴をぬいで入るべきところが、靴をぬいで足をおろすのに抵抗を感ずるようでは困るんじゃないかな。

D君　どこかのおばさんがワックスかけたばかりなのに土足で上ったので「靴、ぬいで」といったら「汚い」と言う。そういう言い方はアタマに来る。

N君　汚いから自分たちできれいにしようということでみんなでワックスかけたりやっているのです。これは「きれい」「汚い」の見方の問題ですね。

B君　少し戻るようですが――、今までの話で自治も寮の伝統も理念としてどう継続していくかという事もあるし、寮生が自分たちの足元を見つめて行こうということも重要な意味を持って出ているし、大学当局とも一致点を探り、やっていこうという意識も出ていると思います。

司会　ぜひ、そうあってほしいと思います。クラーク先生もBoys Be Gentlman!と言われたが、自治とは、まさにBe Gentlman!により貫かれるものだと思います。

B君　OBの方と話すると、すぐ大きな話になってしまうんだが、僕たちは寮にまつわる日常のこまかいことの問題に頭がいくが、OBの人たちと話をすると僕たちも構えてしまうんです。入寮問題は大きな問題だし良い方向へ努力を続けるべきだと思います。

男子と同じ・家族のように
＝女子寮の生活

司会　さて、話を変えましょう。女子寮生が恵迪寮に入って一年半経ち、我々にとっては青天の霹靂（へきれき）だけれど、女子学生ご当人の恵迪寮生としての生活と意見を聞かせて下さい。

I君　はじめから自分で女子だと思っていないから、わからないんです。ただ、前に女子寮にいて、女子寮って部屋にこもったりして交流が少いから寮にいる意味がとても希薄だと思ったけど、恵迪寮はすごく明るい解放感があって、これが寮生活、って感じです。集団生活がいい。女子寮は殆んど一人部屋。恵迪寮は好き放題に意見を言って、それを受けとめてくれる人がいるという感じの寮、ということです。









G君　最初の頃お互いわからなくてうまくいかない事もあったが、最近は男子がパンツ一枚でブラブラしているのを見ても何とも思わない。悩みとかも話合えるし、人の関係が泥臭そうなところがいいのかな。暮らしている者にとってはいい所だと思っています。

司会　男女差別なく、寮生同士、よく議論しますか。

一同　（そのとうりです）

D君　心の悩みといったようなことじゃなく、寮の運営のことでいつも話合い、議論しています。僕らの感覚では、女子学生を入れるとか入れないとか、男でなくても困っているんだから入ってもらおうという判断の結果ですから、何か特別なことが起きたわけじゃありません。

司会　女子寮生から執行部に出ている人は何人ですか。

G君　今期は二人です。前期は三人。

司会　生甲斐もってやっていますか。

F君　まア、勉強になりますしね。

司会　何を担当しているの。

F君　会計です。

G君　私は寮務。何かやりたいと思ったの。

司会　同じ寮で生活するというのは、お互いにハダカになることだが、男子の方で、女性がいるから少しはカッコよくしなければとか、そんなとりつくろいはありませんか。

D君　ないんじゃないのかな――

C君　僕は結構気にしている。新入生として入ったら三ヵ月後に女子が入ると聞いて、すごくいやだった。最初のころ細かい事で問題もあったし、女子寮生反対というわけじゃないが、男女の違いからか、まだ馴れていないからか、女子がいなかったらなアと思うことあります。

司会　少しカッコイイこと言っても、皆が本質を知っているのが寮だから「お前、何、言ってんの」なんていうことになってしまうんだろうね。

C君　寮歌など男子の心を男子としてうたっているのだが、女子のその心がよくわかるのかな。そこを知りたいですね。

L君　これから女子の歌も出来てくるんじゃないですか。

O君　「二人の恵迪」なんてのも。

I君　私、女の子と思ってない。男子といっしょ。マスラオ。これ、個人差だと思います。

司会　今、女子寮生は二十六名でしたね。どういう生活なんですか。

A君　私の部屋は女子だけです。

D君　俺のところは女子が一人入っている。

司会　同室というのは、われわれには理解出来ないんだが――

D君　同室という場合ですが、大抵女の子二人位。勉強部屋はいっしょ。寝室は別というのが多いんです。俺の部屋は女子一人。寝室では川の字で寝てます。

C君　何の不思議もありません。家族みたいなもので、男のキョウダイもいれば、女のキョウダイもいるという感じなのです。

司会　女子学生は良く勉強する、恵迪寮生はよく講義をさぼる、というのがわれわれの認識だが、女子の寮生はどうですか。

一同　（講義に行かないのも行くのも、男子と同じ程度じゃありませんか）

J君　理学部に行ってますが、出て来ない女子もいます。昔は女子が大学へ来るのは大変で、家族のプレッシャーもあったと思いますが、今はそんなこともありません。自分の判断で行動することに男女の差はないと思います。

O君　大体、女子は要領いいよ。

司会　寮が最近きれいになったという評価を聞くが、女子寮生の存在と関係ありますか。

N君　寮に入ったとき「汚い」と思い、自分できれいにしようと思いましたよ。

D君　人数が多いから、すぐ汚れるわけです。

A君　私の部屋はきれいです。

O君　きれい好きがいるときれいになります。きれい好きが一人できれいにしてるわけじゃありませんが。

D君　だけど、共同部屋は汚い。

N君　それは女子学生と関係ないよ。

司会　はじめて恵迪寮に入ったとき、汚い、と思いましたか。

I君　そりゃあ、そうよ。

D君　大きなゴミ袋を壁においてボンボン投げ込んだりしてーー

司会　間借りしている友達のところへ行って、きれいだと思いますか。

一同　きたなーい。

司会　寮外の人と寮生と目立って違うところは、どんなところだと思いましたか。

N君　外にいる人は自分で起きて、チャンと大学に来るでしょ。寮ってところは共同生活で得るところも大きいが、甘えてしまうところもあります。

司会　個人生活の場はきれいにしようとするが、集団で生活すると自分の部屋はきれいにして共同部分は汚いまま。共同部分もきれいにしてほしいね。

男女の寮生が「男のキョウダイもいれば女のキョウダイもいる。家族みたいに」というのはとてもいい。とにかく、どうなるんだろうと、われわれは気を揉んだものです。

Be Gentlemen!

さて、共同生活の良い面もあれば、一般に寮生はルーズだということが聞える。今や恵迪寮生は全学生の四パーセントにすぎないというが、北大の中で北大の精神的風土を守り続ける集団が恵迪寮なのだから誇りを持ってほしいと思います。同時に、やはりBe Gentlmanを学ばなければいけないと思います。

今、寮に食堂はありませんが、われわれの時代、食堂へ着物で入るとき着流しでは許されなかったものです。四人テーブルで、最初に着席した者は四人目が席に着いたら四人の椀にズッペをサービスし、揃って「いただきます」を言い、最後の者が箸を置くと、また揃って「ごちそうさま」と挨拶をして席を立つ、という美風があったが、こういう仕来りは必ず個人の礼節を高めるものですよ。こうした礼儀正しさは恵迪寮生の評価を高めたと思います。

C君　「彼は凄い」と言われても、たとえばそれが折目正しい姿を言われているにしても「恵迪の彼」を凄い、と言っているわけじゃありませんが、そんな評価に関係なく今の寮には今の寮としての礼儀正しさがあります。

素晴らしいと思うのは、誰かが出かける時は「行ってらっしゃい」と必ず言うし、帰って来たら「お帰りなさい」と必ず言います。これが恵迪寮の礼儀だ、なんて意識はありません。家族がお互いにやっていることを自然に習慣化したものだと思います。まして外からの評価を期待してやっているわけでもありません。

司会　それは素晴らしい事だと思いますね。先輩が後から入って来た寮生に、この寮の礼儀はこうだ、といって強制的な躾をするのじゃなくて「家族がやっているように」というのが素晴らしいと思います。良き習慣を自然のうちに作り上げていくということでしょう。さっきの「自治」の話ではないが、礼儀正しさ、

という点でも、ぜひBe Gentlmanの精神を学んでほしいと思っています。

D君　四百人も住んでいるわけですから、よその部屋へ入る時に「入っていいですか」と言うのは当たり前で、「行っていらっしゃい」「お帰りなさい」と同じように社会生活や家庭生活で良識的な慣習を寮でもやるのはごく自然だと思います。そうしなけりゃ、これだけの集団が生活できっこないです。

司会　恵迪寮は、生れ育ちもさまざま、生活の体験、生活の価値尺度もさまざま、出身地も当然違う。年齢、入学年次も、それは一定の幅の中であっても、違う。そういう若者たちが共同して生活するわけだから、雑種生活ともいえると思います。この生活の中から、相互に体と心をぶっけ合って、人間として成長して行く、特にバイタリティのある人間の形成に役立っていると思います。

食堂なくても自炊＝培われる連帯感

旧寮時代は食事も寮の食堂でいっしょだったから、たとえは良くないが、昔の軍隊では、「同じ釜の飯を喰った仲間」という連帯意識が強かったというが、それと同じようなもので、全生活が共同ということで、恵迪寮生の連帯感も培われたと思います。

今は、残念ながら食堂はありませんが、この点どう思いますか。

K君　全員が一堂に会して食事ができるという食堂はないけれど、だからといって連帯感が昔より稀薄になる条件がこれだ、というわけではないと思います。

C君D君　食堂がない代わりに自分たちが交替で自分たちでエッセンを作ることをやっています。食堂がなくても炊務があり、委員会の連中が昼夜、仕事をするので彼らの夜食を作ったり、週に一回は、「スペシャル」といいますが、栄養満点とはいかないにしても、結構いける物を作って、実費同然で安く提供していたりしています。

部屋ごとに自分たちで作ることも、当番決めて、材料費集めて、それは当番の腕の見せどころです。うまい、とか栄養ありそう、とか、評価がついてまわり、結構楽しくやっています。

寮の食堂があって炊夫を雇って作るメシとは別な素晴らしさがあると思います。

司会　寮生活とは「寝食を共にする」ことであり、食を共にすることはとても重要な事だと思います。今の話で、「食堂があって炊夫が作るメシ」と別の意味のものを、現在の寮生活は持っているということですが、われわれOBの方は食堂兼集会所を持ちたいものだとずっと考えていました。食堂兼集会所を要求する運動でも起こしたらどうですか。

C君　食堂自体はいりませんし、炊夫さんもいりません。

N君　「同じ釜の飯」と言いますが自分たちの手で作り、コミュニケーションとか友情とかが培われていく、嫌いなものを食えるようにしてやろう、などという気持ちも働きます。「食事」という面

では満足しています。

ほしいのは広い集会室です。全寮的な大コンパをする広い集会室、それに大コンパを賄える大きい調理設備があればいいなと思います。

C君　大きな調理場は別として、自分たちが食事を作ることを覚え、コミュニケーションが深くなり、お互いの絆みたいなものが強くなっていく、そういう実感が身にしみてあります。

問題は今は何やるにしても集る場所がない。玄関ホールでは二百人集まったらギシギシで机やテーブル入れたら百人でもギリギリ。これじゃどうしようもありません。どんなことがあっても、最低三百人以上は入れる多目的ホールが必要です。

この大集落に集会所を！

司会　どんな集落でも、集会所がなければ集落とはいえない、集落の機能のない「複数家屋群」みたいなものです。寮だってそうです。人が集って話合ったり、行事をしたり、交流をする、そういう場がないというのは集団であって集団ではないことになります。

四百人もいれば大集落です。君らの集落の集会所を作る運動を君らもやろうじゃないですか。OBもいっしょに考え、応援しますよ。

諸君が、集会所がない、食堂がない、はじめは全部個室だった、という条件の中で、一部の大部屋への転換をすすめ、炊夫のメシより自分たちの手で作るメシをと誇らしく言い、集会所のない寮で苦労と工夫をして寮生活を守っている、寮祭も寮歌も、恵迪寮の伝統は諸君の手で守り続けられている。こんな確信を与えてくれた今日の座談会でした。恵迪寮同窓会誌「恵迪」第二号のために集ってくれて、率直な意見を聞かせてくれて本当にありがとう。



編集を終えて

▼当初の目標から約半年の遅れで、ようやく「恵迪」第二号が世に出るようになった。この半年の狂いは偏に編集委員長たる私の責に帰するものと痛感している。年の暮れには今の調子での原稿の集まり具合ではどうなる事かと気を揉んだが、その後、バタバタと玉稿が到達して四月に至り、本の体裁にするための各稿の構成に着手、創刊号と同様、事務局長の執拗なまでの追い込みと、佐藤印刷さんの奮励努力により今日を迎えたわけである。本号は、多くの玉稿を掲載しながらも、しかし物足りなさを最後まで克服出来ずに世に送る事となった。

本号には、どうしてもほしかった〝クラーク精神〟〝開拓者の心〟〝恵迪魂〟と表現されるようなテーマを掲げた骨太のものがなかったことである。編集委員会では、その必要性が熱っぽく論議されたが、結果的には原稿依頼の的を絞り切れず、成り行きのまゝになってしまった。

読者諸兄にとって、その欠陥がさほど気にならないとすれば、札幌農学校に関わる幾つかの論文と、周辺を飾った多彩な作品群に依るものである。

しかしながら、本誌は「寮歌」を一方の柱に据えようと企図し、ご覧の通り澤山の「寮歌」に関わる寄稿が盛られ目標の一端を達成した。創刊号に原稿を提供しなかった私も、これでお役ご免となるのだからと、一篇の雑文を掲載させてもらった。私の一篇はともかく、寮歌や寮生活に想いを還す同窓生諸兄の絶えることのない青春への回帰の情が「恵迪寮」に収斂していく様を見る思いであった。

原稿が思いのほか集まった結果、一人で何篇か出された折角のものを一部、掲載を割愛したり、戦中の恵迪寮宿直教官の毎日の記録「寮育日誌」の掲載をすすめられながら、別の出版の機会に譲るとしたり、やりくりしても字数をつめざるを得ず、ご覧のような紙面となった。掲載を見送られた出稿者には、お許しを乞

会誌「恵迪」
編集委員会
（　）内は入寮年次・昭和

委員長　河原　克美（二十六年）
委　員　富永　厳（二十五年）
委　員　白井　俊三（二十七年）
委　員　髙橋　邦臣（二十八年）
委　員　鈴木　勝男（二十九年）
委　員　高橋　陽一（三十年）
委　員　湯浅　亮（三十二年）
幹　事　井口　光雄（二十八年）

う次第である。

いずれも素晴しい原稿であったが明らかな誤字、脱字、文章上の不整合は、編集委員会で手を入れた。そのため執筆者の意志に沿わなくなった事があったら申し訳ないが、互いに多忙な者同士の寄り合い編集委員会なので、努力の痕跡を認め、お許しいただくよう、切に願うものである。

〝瓔珞みがく石狩の……〟と、高唱しつつ円山での観桜会に向かった、あの季節も過ぎて、短いがそれ故に貴重な想い出を創って来た札幌の夏も近い。本誌を手にして迎える夏は、また格別だろうと思う。創刊号に続く本誌の編集委員諸兄と事務局長の労に感謝し、第三号の編集委員会が、より水準の高い「恵迪」を実現されるよう期待してこの座から降りる次第である。

河原　克美（二十六年入寮）

▼二十年程前、「アルバム北大百年」という写真集が刊行されたが、そのなかに「昭和二十年、北大専門部学徒の出陣」という説明がついた一枚がある（一五三頁）。

農学部らしい建物を背景に学生服・ゲートル、そして銃をかついだ学生たちが四列縦隊で行進している写真だ。季節は春のようである。

学徒出陣、といえば誰しも神宮外苑陸上競技場で行われた、雨降りしきるなかの学生行進の場面を思い出されるであろう。「学徒出陣壮行会」という名の悲愴な学生パレードに参加したのは大学生約三万人、スタンドを埋めた中学高校生約六万人ともいう。この時集まったのは東京都内の学生たちが中心だった。

北大の学生がその行進に参加していたかどうかはさだかではない。

札幌文庫No.14「昭和20年の記録」にはこの年の十一月二十八日、大通り聖恩碑前広場（西五丁目）で「出陣学徒壮行会」が行われた…とあるが、北大の歴史（創基八十年史・百年史）にはその記述がなく年表にも記載がない。

それなら、昭和二十年春の「専門部学生の出陣」とはなにか。「きけわだつみのこえ」の東大では戦後いち早く出征、戦没した学生のために慰霊祭を行い、南原　繁総長が荘重な「追悼の辞」を捧げている。五十年後の今も、戦没学生の手記の発掘刊行の努力が続けられている。

わが北大の場合、繰上げ卒業で学外に去った学生については、何の追跡調査もされていない。何人の学生が戦場に赴き、何人の学生が戦死したのか、という調査も記録もない。

もちろん戦没学生の追悼慰霊の行事は行われたという話をきいたことがない。

これはことし一二〇年を迎えるという北大の歴史のなかで大きな空白というべきだろう。

ただ、そういうテーマを心に抱いたまま、私は恵迪第2号の原稿にまとめるに至らず、今回は断念せざるを得なかった…。

富永　巌（二十五年入寮）

▼創刊号より二号発行に到るまでの原稿あつめに苦労するのが、世の習いだが、「恵迪」第二号は、編集委員それぞれの持ち味で、この壁を突破し、難なく二号発刊となった。とはいえ、やはり委員長の編集方針によって、各界に声をかけたのが効を奏したものと思う。

また、創刊号を読んで、ながく沈潜していたわが青春の恵迪寮の生活を、鮮明に浮かび上がらせたといえるのかもしれない。ともかく、整理に苦労するほどの原稿を嬉しく思う。この永続を希う。

昨年の阪神大震災は、恵迪寮同窓会が一つのより処となったようで、その点でも「恵迪」が少しでも役立つならば、編集委員の一人として苦労した甲斐がある。校正をしながら忘れかけていた青春の気慨が、触発されたことを感謝している。

白井　俊三（二十七年入寮）

▼旧寮生諸兄が全国各地、海外からも送って来た原稿を読み続け、楽しき日々だった。原稿を読みながら「ああ時代が変わったな」と感じたことがある。原稿用紙に書かれた手書きよりも、ワープロ利用のプリント原稿が半数を超えている。前回は三割ほどだった。フロッピー同封のケースも出ており、この一年間の職場、家庭でのワープロ、パソコンの普及ぶりがよくうかがえた。編集、印刷担当が読み難い文字に頭をひねることは少なくなった。半面、筆者の個性を示す手書き、筆跡が残る原稿が減ったのは惜しい気もする。

もう一つ、古い世代になったかと痛感したのは、文章の年代表記である。昭和、平成で回想する諸兄が多数を占めるが、西暦表記を自然と感じる時代が着実に増えている。だが昭和一ケタ世代の私自身、西暦年だとすんなり時代が頭に浮かばない。同様の諸兄もかなりいるのではと思い、原稿にあった西暦年には、なるべく（昭和何年）の形で併記した。

鈴木　勝男（二十九年入寮）

▼創刊号以来これで二度の編集のお手伝いをした。編集の作業をしていて楽しさの一つは多くのナマの原稿に接することである。書き直したり、打ち直したりしたその行間から執筆者の恵迪寮への熱い想いが聞こえてくる感があり、その気持ちの深さに、ただただ強く打たれるのである。作業をしながら何度も熱いものを感じた。

今回は懐古談の他、今日的かつ国際的なテーマについても内容の濃い原稿が多かった。本誌の今後の道筋が見えてくるように思える。恵迪子は昔も今も常に人の世の迪を恵ねる崇高な姿勢を持ち続けていることに改めて新鮮な刺激を受けた。願はくは、本誌が広く読まれんことを。

高橋　陽一（三十年入寮）

▼創刊号、第二号の二度の編集に幹事役として関わった。幹事役とは雑誌が予定通り発刊されるためのお目付役である。何が何でも正月には同窓の仲間たちに届

けようと熱くなった創刊号に比べると、第二号はどうももう一つ力が入らない。大陸的大人風の河原委員長の影響もあってか、つい尻たたき役をさぼってしまった。発刊半年おくれの責任の大半は私が負うべきだろう。

企画もの、歴史ものでは創刊号に一歩ゆづるとして、読みごたえのあるもの、味のあるもの、さすが充実している。単なる同窓会の雑誌を超える大きさが本誌にある。恵迪ＯＢばかりでなく、北大に何らかの縁のある方には是非読んでいただけたらと思う。

五月に入って、グラビアの企画もあったので、待ちかねたように何度か北大に足を運んだ。上旬に中央ローンの桜が咲き始めてから学内の樹木が若葉で埋まるまで二週間とかからなかった。北国の春はおそいが、来だしたら速い。五月三十日の今日は、気温も一気に三十度近くにも昇り、もはや初夏の気配だ。

ウィーク・デーの北大は、学内への車の乗り入れが厳重にチェックされるなどちょっと近付き難い。しかし週末ともなると広い構内は札幌市民の散策の場となり、中央ローンのあたりは家族づれの市民や学生たちが入り交じり、明るい歓声であふれている。〝大学院大学〟へと高度化を図る北大ではあるが、せめて週末ぐらいは、かつての親しみ易いまちの大学の姿をいつまでも残していてほしいと願っている。

井口　光雄（二十八年入寮）



恵　迪　－第二号－
領価　壱千円
平成八年六月二十日発行
発行者／恵迪寮同窓会
札幌市中央区南大通り西九丁目
南大通ビル
伊東法律会計事務所　気付
（TEL）〇一一－二七一－二四七五
（FAX）〇一一－二八一－五八〇九
編集デザイン／（株）現代ビューロー
印刷所／佐藤印刷株式会社

北の豊かな暮らしを創造する

RALSE

Rising（上昇する、大きい）
Affluent（豊かな）
Life（生活）
Service（奉仕、提案）の言葉の頭文字をとった社名です。

（31年 横山　清 社長）
（31年 千場　一正 福社長）
（27年 小寺　義彦 監査役）



4月恵庭市にも（一物三価）をOPEN

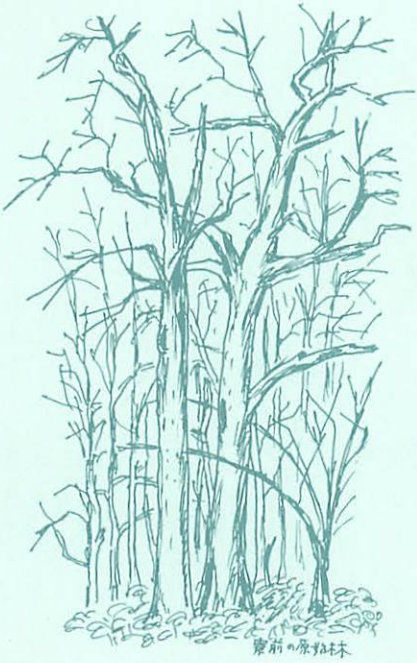
株式会社 ラルズ

ラルズグループ

■ラルズプラザ
■ラルズストア
■ラルズマート
■フレッティ
■ビッグハウス

関連会社

株式会社道東ラルズ
株式会社イワイ
株式会社エルディ
有限会社ライフポート



発　行

恵迪寮同窓会

（頒価　1,000円）